

は し が き

この報告書は、北海道の委託により、当協会内に設置された厚岸道立自然公園調査委員会が行った調査結果を取りまとめたものである。

厚岸道立自然公園は、釧路市の東方、厚岸から霧多布にかけての一带を占め、海岸線にそって発達する海岸段丘とそれに介在する湿原によって特徴づけられている。面積21,000 haにおよぶ公園区域内には、霧多布をはじめとする大小の湿原群、海岸段丘の植生、茶内のシロエゾマツ及びイチイ林、厚岸湖の塩湿地植生、ゼニガタアザラン、コシジロウミツバメ及びエトピリカの繁殖地、床潭のヒブナ生息地などがあり、すぐれた自然的特色を持つ自然公園である。今回の調査は、今後における厚岸道立自然公園の保護と適正な利用に資するために、公園域とその周辺域の自然環境の現況等について調査したものである。

この調査にあたっては、多くの関係各位、関係機関の御協力をいただいた。ここに心から謝意を表するとともに、この報告書が厚岸道立自然公園の保護と利用に貢献することを期待する次第である。

昭和61年3月

社団法人 北海道自然保護協会

目 次

I 調査の概要	1
II 地形・地質	2
第1章 研究小史	2
1. 地形	2
2. 地質	2
第2章 調査方法	6
第3章 調査結果及び考察	7
第1節 地形	7
1. 概況	7
2. 本地域の地形特徴	8
3. 地区別の地形各論	8
第2節 地質	12
1. 概況	12
2. 地層区分と岩質	13
3. 地質構造	13
4. 本地域の地質特徴	13
5. 特徴的な地質各論	14
III 植物	22
第1章 調査にあたって	22
第2章 高等植物研究小史	22
1. 植生	22
2. 植物相	26
第3章 調査の概要と調査方法	29
1. 調査地域	29
2. 調査日程と調査経路	30
3. 調査方法	31
第4章 調査結果及び考察	33
第1節 植生調査	33
1. 森林植生	33
2. 海岸植生	67
3. 湿原植生	71
4. 塩湿地植生	89
5. 考察	90
第2節 現存植生図	97
第3節 高等植物相	105

厚岸道立自然公園の高等植物目録	106
IV 動物	129
第1章 哺乳類	129
第1節 研究小史	129
第2節 調査地点及び調査方法	129
1. 聞き取り調査	130
2. 痕跡及び目視調査	130
3. トラップによる調査	130
第3節 調査結果及び考察	131
1. 翼手目	131
2. 食虫目	132
3. 嚙嚙目	133
4. 兎目	135
5. 食肉目	135
6. 海獣類	136
7. 偶蹄目	138
8. 考察	138
第4節 厚岸道立自然公園の哺乳類目録	140
第2章 鳥類	142
第1節 研究小史	142
第2節 調査方法及び調査地点	142
第3節 調査結果及び考察	143
1. 主な調査地の鳥相	143
2. 特定種の生息状況	150
第4節 厚岸道立自然公園の鳥類目録	157
第3章 昆虫類	163
第1節 研究小史	163
第2節 調査方法及び調査地点	164
第3節 調査結果及び考察	165
1. 調査の結果	165
2. 考察	176
第4節 厚岸道立自然公園の昆虫目録	177
V 自然環境保全上の所見	197
第1章 地形・地質	197
1. 地形・地質上の貴重な現象と地域	197
2. 環境保全について	198
第2章 植物	199

1. 注目すべき植物群落	199
2. 注目すべき植物	202
第3章 動物	205
第1節 哺乳類	205
第2節 鳥類	207
第3節 昆虫類	208
第4章 自然公園への提言	209

I 調査の概要

1. 調査の目的

指定年次が古いことなどから、自然環境に係る基礎データが不足している厚岸道立自然公園について、当該地域の動植物等自然環境の現況調査及び既存資料の収集等を総合的に実施し、今後における当該公園の保護と適正な利用に資することを目的とする。

2. 対象地域

厚岸道立自然公園区域及びその周辺地域

3. 調査の期間

昭和60年5月24日～昭和61年3月20日

4. 調査の実施・分担

調査にあたっては、(社)北海道自然保護協会内に次の分野の調査員をもって構成する厚岸道立自然公園調査委員会を設置して、調査を実施した。報告書の取りまとめは、各分野について、地形・地質は岡崎由夫、植物は辻井達一、長谷川榮、新庄久志、動物の哺乳類は近藤憲久、鳥類は橋本正雄、昆虫類は飯島一雄が、それぞれ分担している。

厚岸道立自然公園調査委員会

地形・地質	岡崎 由夫	北海道教育大学釧路分校教授
植 物	辻井 達一	北海道大学農学部附属植物園園長
	長谷川 榮	北海道大学農学部研究生
	新庄 久志	釧路市博物館学芸員
動 物	近藤 憲久	根室市教育委員会学芸員
	橋本 正雄	釧路市博物館学芸員
	飯島 一雄	釧路市博物館嘱託

Ⅱ 地形・地質

岡崎 由夫

第1章 研究小史

1. 地 形

厚岸道立自然公園地域は、平坦な台地が南の太平洋に面する海岸地帯である。

断崖が連なり、厚岸湾などの湾入と尻羽岬などの岬の突出を繰り返えし島を配する、屈曲の多い岩石海岸を主体とする。陸地では平坦な台地—海岸段丘—が展開するが、その中に霧多布泥炭地や厚岸湖、散布沼などの低地や沈水地も横たわる。

地形、湖沼を主体とする調査は、湖沼については、厚岸湖のカキ島（吉井1919）とカキ島（吉田1958, 1967）の調査がある。元田（1950）は厚岸湖と床潭泥炭沼、火散布、藻散布両沼について、既往の調査をまとめている。

本自然公園地域の地形そのものについては、湊（1956）による厚岸地域についての報告がある。湊はこの地域は海食されて隆起した台地で、典型的な海食準平原であり、隆起が不完全なところが厚岸湖や湿地になったとしている。その後、岡崎（1959, 1960）はこの出入りの多い海岸線の形成は、硬軟岩層の分布とその選択的な侵食によるものとしている。また海岸沿いの分水界を明らかにして、これは海岸段丘の形成後の隆起によって生じたものとみなしている。更に岡崎（1978, 1981, 1982, 1984）は釧路市立博物館による「道東海岸線総合調査」の過程で、公園地域を含む道東地方の海岸地形の特性について報告している。すなわち、その特性は①旧釧路川以西は平滑海岸であり、②同川から以東の海岸は西海岸より突出し、屈曲と断崖が続く岩石海岸で、③分水界が海近くの海岸沿いに形成され、このため大川が発達できなかったと述べ、また④漁業との関連についても述べている。このほか大黒島（岡崎1981）、霧多布泥炭地付近（岡崎1982）などについても、地形発達史的な考察を試みている。

2. 地 質

本道立自然公園の地域の地質は堆積岩地帯で、厚岸湾以西の西部では釧路炭田の東部を占めており、石炭を含む地層群・浦幌層群（新生代・古第三紀）を主体に、その下位に根室層群が発達する。根室層群は中生代・白亜紀—古第三紀の海成層で、釧路地方の最古の基盤岩層であり、主に厚岸湾から霧多布にかけての東部に広く分布・露出する。

このほか、霧多布泥炭地附近には、最新の沖積層（新生代・第四紀）がまとまって分布する。

この地域の地質学的な調査研究は、厚岸湾以西地が釧路炭田の一部として、大正時代に門倉（1917, 1918）によってはじめて調査されている。門倉は第三紀とした含石炭地層（浦幌層群）と下位の非含炭層（根室層群）を層位的に始めて分離し、下位を「白亜紀層」とした。

しかし「白亜紀層」からアンモナイトやイノセラムスを発見して白亜紀と確認したのは、大正末期のことである。鈴木（1923）は厚岸町ビンナイでアンモナイトを発見して、はじめて地質時代を確立させ

た。

その後、佐々(1940)は本地域を含む釧路炭田全域の地質を総括した。佐々は含炭地層を6層に区分して浦幌統とし、その地質時代を新第三紀・中新世とみなした。この下位層は白亜紀層としたが、浦幌統とは不整合関係にあることを明らかにしている。

佐々(1953)は次いで、炭田地域の地質図(10万分の1)を発表した。佐々はここで含炭地層の浦幌統を浦幌層群、その時代を古第三紀・漸新世と改めている。本公園地域の浦幌層群については、その下部3地層—別保層、春採(夾炭)層及び天寧層—のみが分布している。その地質構造は釧路市—尻羽岬を結ぶ線を軸に、西に沈む半ドーム構造をなし、緩傾斜で、多くの断層で縦横に切られた地塊状を呈し、浦幌層群が根室層群の中に孤立的に分布することを明らかにした。根室層群の名は、ここで前の白亜紀層から始めて用い、前年に発表した同層群の層序区分を示した。

根室層群についての調査研究は、炭田構成の浦幌層群よりかなり遅れた。佐々・林(1952)は本公園地域内の老若舞—尻羽岬で、はじめてその層序を確立した。その層序は最下位の門静層から上位に仙鳳趾層、汐見層、老若舞層および最上位の知方学層の5地層である(表1-1)。

厚岸湾以東を含むこの公園地域全域の地質について、全容が明らかになったのは、以下の一連の5万分の1地質図幅の作製のための調査からである。

河合正虎(1956)「昆布森」図幅 地質調査所

小山内熙ほか(1961)「厚岸」図幅 北海道開発庁

長尾捨一(1963)「床潭」図幅 北海道立地下資源調査所

岡崎由夫・長浜春夫(1965)「尾幌」図幅 北海道開発庁

長尾捨一ほか(1966)「霧多布」図幅 北海道開発庁

これら一連の図幅調査の結果、厚岸湾から霧多布にかけての地質空白地域は埋まり、また根室層群についての知見は飛躍的に進んだ。

これら図幅調査では、浦幌、根室両層群の層序区分は、佐々(1952, 1953)の区分に従っていたが、新しい層序区分も試みられ、また新知見が明らかにされた。

「昆布森」図幅では、浦幌層群の雄別層を上下に2分し、また仙鳳趾の天寧層に海水—汽水—淡水生貝化石を発見し、砂岩脈の産状を詳しく述べている。

「厚岸」図幅では、根室層群の門静層の下位に太田村層を設定し、同層群のスランプ構造(層間習曲)が厚岸層に発達することを明らかにしている。「尾幌」図幅では、根室層群太田村層の下位に、更に最下位層として阿歴内層を置いた。

「霧多布」図幅では、根室層群中部の厚岸層の再区分(上, 中, 下部層)と新しく「幌戸層」を設定した。また浦幌層群・天寧層が散布海岸に分布し、炭田の東限が更に東に延びたことを示した。

地質時代については、「図幅」時代にはいずれも浦幌層群を古第三紀・漸新世、根室層群を白亜紀末期とした。しかしこれより前、浅野(1960, 1962)は有孔虫化石から、浦幌層群の時代をより古い始新世とし、根室層群ではその上部・厚岸(汐見)層とその上位を、第三紀初期の暁新世とし、下位層の白亜紀から整合的に続いているとした。

浦幌層群の地質時代については、その後植物・貝化石から漸新世とされ、現在この時代に定着している。しかし根室層群の時代についてはゆれ動いてきた。

表1-1 根室層群の層序と対比表

地質時代			地層群	佐々々 (1940, 53) 釧路炭田	河合 (1956) 昆布森図幅	岡崎・長浜 (1965) 尾幌図幅	長尾 (1963) 床潭図幅	小山内ほか (1961) 厚岸図幅	長尾ほか (1966) 霧多布図幅	松本 (1970) 釧根地方	君波 (1978) 釧根地方	本地域の 分布			
新 生 代	古 漸 新 世	浦 幌 層 群	天寧層	天寧礫岩層	天寧層				天寧層			○			
			春採層	春採夾炭層	春採層								○		
			別保層	別保礫岩層	別保層								○		
	第 三 紀	晚 新 世	根 室 層 群	去来牛層	去来牛 礫岩層		去来牛 礫岩層			霧 多 布 層	N 5 チンベ層	霧 多 布 層			
				知方学層	知方学砂岩 泥岩層		鯨浜砂岩 頁岩層			鯨浜層					
				老者舞層	老者舞 礫岩層		チンベ 礫岩層	チンベ層							
				汐見層	汐見砂岩 泥岩層	汐見層	厚岸互層	厚岸層	厚岸層	厚岸層	上部 中部 下部	N 4 厚岸層	床潭層 厚岸層	上部 中部 下部	○
				仙鳳趾層	仙鳳趾 泥岩層	仙鳳趾層	上部 下部	尾幌川層	幌戸層			N 3 仙鳳趾層	浜中層 尾幌川層		○
				門静層	門静互層	門静層		門静層	カリカン層 門静層			N 2 門静層	門静層		
							太田村層	太田村層	太田村層			N 1 太田村層	太田村層		
中 生 代	白 亜 紀				阿歴内層				N 0 ノッカマップ層	ノッカマップ層					

吉田(1961)は大型化石のイノセラムス、アンモナイトが、中部の厚岸(汐見)層を上限として産出することから、浅野と同じ見解をとっている。吉田(1958)はこれまで稀産であったアンモナイトが、浜中町ポニ幌戸の厚岸層から多産することを報告し、松本・吉田(1979)はこれを *Gaudryceras hama-nakense* の新種として報告している。

松本(1970)は、根室層群の下大半(N0-N3, 阿歴内, 太田村, 門静, 仙鳳趾の各層)は白亜紀末のカンパニアン-マストリヒシアンとし、上部層(チンベ・老者舞層以上)を第三紀・暁新世とみなし、中部の厚岸(汐見)層(N4)を白亜紀か、あるいは厚岸層上半部から暁新世とする可能性もあるとし、更に証拠が必要であると述べている(表1-1)。

自然公園地域の20万分の1及び50万分の1地質図幅は、1975年から山口、佐藤らによって編集され、「図幅」調査時代以後の情報が盛りこまれ、地質調査所から公表された。

山口昇一・佐藤博之(1975)「根室」図幅(20万分の1) 地質調査所

佐藤博之・山口昇一(1976)「釧路」図幅(同上) 同上

山口昇一・対馬坤六・佐藤博之(1978)「釧路」図幅(50万分の1) 地質調査所

寒川 旭・山口昇一(1985)活構造図「釧路図幅」(50万分の1) 地質調査所

これら図幅では、地質そのものについては、ほとんど変わらなかった。その地質時代では、浦幌層群を従来どうり漸新世とし、根室層群の時代は厚岸(汐見)層内で下位を白亜紀、上位を第三紀・暁新世とした。

君波(1975 a, b, 1976, 1978 a, b)は根室層群の地質について、厚岸、霧多布などで調査を進め、その結果、その地質層序を新しく8地層に区分(表1-1)することを提唱した。更に先の地質時代については、松本などの見解をとって白亜紀-古第三紀・暁新世とみなした。

富田(1983 a, b)は 公園地域の西端の十町瀬の浦幌層群から1968年に発見された口蓋歯化石(図3-8)をクシロムカシバク *Colodon kushiroensis* と同定した。これは釧路炭田ではもちろん、日本でも初めての哺乳類化石である。

第2章 調査方法

本自然公園地域の大部分は、これまで既に地形・地質の調査を行ってきたところである。今回は道立自然公園としての観点から、地形・地質についての調査のため、全域を踏査した。また、これまでの未調査の地点や特異な地形・地質の地域・地点については、特に日程を割いた。

調査日程

9月16日～9月19日の4日間及び9月22日～23日の2日間、計6日間

調査地域

- (1) 釧路町キトウシ(来止臥), 十町瀬, 跡永賀, 老老舞の海岸地域
- (2) 老老舞, 尻羽岬, 古番屋, 仙鳳趾の海岸
- (3) 厚岸町門筋, 真竜, 大別, 糸魚沢, 厚岸湖の北岸・神岩, 金田崎の厚岸湖岸地域
- (4) 厚岸町本町, パラサン岬, アイカップ岬, アイニンカップ崎及び床潭, 末広の海岸地域
- (5) 厚岸町末広, チンベノ鼻, 鯨浜, 浜中町散布, 霧多布の海岸及び湖沼地域
- (6) 浜中町霧多布付近及び榊町の海岸及び泥炭地付近

第3章 調査結果及び考察

第1節 地 形

1. 概 況

厚岸道立自然公園地域は太平洋に面する海岸を主体とする。この海岸は釧路市の旧釧路川河口から西方の十勝に達する平滑な砂浜海岸に対して、全体が海側に大きく張り出しており、海食の断崖絶壁を連ねる雄大で、荒々しい岩石海岸であり、根室半島まで続く。

この海岸は厚岸湾を境に、その西部の海岸線はやや直線状に東西に走るが、同湾から東の霧多布にかけては俄かに出入りを多くして、地形の様相を一変させる。

東部の海岸地域は、はじめ根室・浦幌両層群の地層が堆積し、陸地として広がっていた。これが海食と沈降で海底に没して波食され、また堆積物を薄くおとしたあと、第四紀の数十万年前に隆起し、平坦な海岸段丘（根室面）の台地となったものである。現在低いところは、その後海食によって削られ、海水が浸水して海湾や湖となり、また泥炭地・湿地ができたのである。

台地は他に類をみない典型的な海食準平原様の地形を呈している。海岸や島を遠望すれば、表面の平坦さがこれをよく示している。

この海岸の地質は、礫岩を主に粗粒の砂岩の堅硬な岩層で高い海食崖をつくって、海波に立ちほだかる。内部が軟かい泥岩質の地帯では、堅い岩層の海岸の一部を破った海水が、内部の泥岩地帯に浸水し、そこを削って現在のような複雑で出入りの多い、特色ある地形を形成したものである。

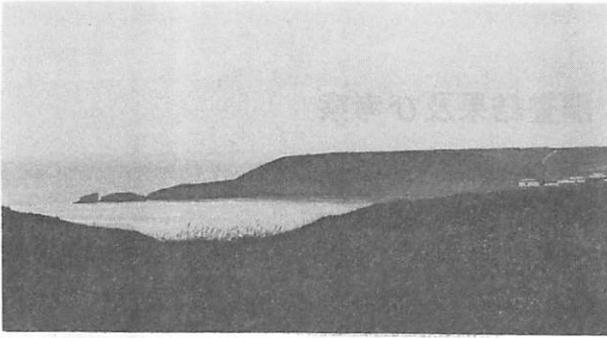
侵食を免れた島（霧多布）と海岸には、珍しい扇状の砂州ができ、また海岸の軟岩地では、渦巻き状の湾や弓なりの平滑な海岸を形成している。

本公園地域の陸地は、いわゆる「釧根原野」もしくは「釧根台地」と呼ばれる広大な平坦な台地・海岸段丘（根室面）であり、標高60—170 m、多くは100 m内外の高度を保つ、海食準平原様の地形を呈する。この台地は海にそのまま迫り、高い断崖で海と接している。

東部の散布から霧多布にかけての海岸では、この台地を削った一段低い海岸段丘が発達する。この低い段丘の高度は60 m以下、50 m内外（T2）である。ケンボキ島、霧多布島などはこの段丘で、藻散布沼の南の海岸でも、琵琶瀬展望台から高低2段の段丘がよく認められる（図3—5）。

更に、より低い海岸段丘は霧多布島の湯沸部落の南の岬に認められる。島の50 m段丘（T2）に対して15—20 mの高度の低い段丘（T3）である（図3—1）。

本自然公園地域の海岸地域の他の特徴は、西端のキトゥン（来止臥）から尻羽岬、東の散布までの海岸沿いの台地が、内陸より高まっており、ここに分水界を走らせていることである。このためここには大きな河川ができていない。公園地域では外洋の太平洋に直接流入する河川はいずれもきわめて小さいものばかりである。比較的大きい別寒辺牛川、尾幌川などは外洋ではなく、内陸に入った厚岸湖に注入している（図3—9）。



←図3-1 2段の海岸段丘(T2とT3)
(浜中町霧多布湯沸海岸)

この海岸線は、地形的にも地質的にも東方の根室半島に連続しており、更に海を隔てた色丹、歯舞諸島にも連なり、国後、エトロフ島は阿寒、知床半島に連なる。南北両地帯は古い地質時代の地盤地層が、第三紀の時代から隆起しているところである。北では火山帯をのせる高い山地をつくり、南の海岸線では隆起して分水界をつくったものである。この南北両隆起帯にはさまれた内陸の中間地域は、むしろ沈降地域であり、ここに東流する標津、西別などの大きな河川や風蓮湖が発達している。

また、本公園地域内の厚岸湖、散布両沼や霧多布泥炭地などの低地は、上述の内陸の沈降の動きに合せたものとみることができる。

2. 本地域の地形特徴

公園地域における地形の特徴は、上述のようにいくつかみることができる。1つは厚岸湾以東の出入りと屈曲の多い海岸で、湾入水域一湾、湖沼と突出する岬、島の対照的な変化である。第2は荒削りの高い断崖絶壁とその中に美しい孤状の砂浜があり、トンボロと陸繋島をつくる。第3は高い台地に囲まれた低い大小の湖沼群と泥炭地の広がりである。第4は海岸から内陸地や島の海食準平原様の平坦台地と海岸沿いの分水界である。更に東部の低い段丘の分布などである。

3. 地区別の地形各論

a) 西部(キトウシー尻羽岬)

厚岸湾以西のこの海岸はやや単調で、ほぼ東西に直線的に約20kmのびて、海食の断崖を連ね、典型的な岩石海岸を形成している。

この海岸で特徴づけるのは、荒波をさえぎり、高くそそり立つ断崖と、それが切れ目なく連続することである。他は岩礁の特異な形を描く奇岩で、この海岸の単調さを僅かに破っている。

(a) 海食崖

海食崖は高さ20m以上、多くは50-60mに達し、特に尻羽岬の南岸では最も高く120mに及び、壮観である。断崖は下の海岸から見あげると、岩肌全面が迫って圧倒され、海岸の台地上からは雄大な荒々しい海岸線が望まれ、真下をのぞくと青い海に引き込まれる深淵を思わせる。

(b) 岩礁

岩礁は散在するが、いずれも海岸の近くにある。これらは高さ10-20mで、その形から名前がつけられている。塔状(プエマのローソク岩)、円錐(三角)状(キトウシー十町瀬の立岩、十町瀬のタ



←図3-2 ローソク岩
(釧路町冬窓床)(以前は先端も太く
右の岩の上にもローソク型岩礁があっ
た)



←図3-3 釧路町十町瀬の海岸と岩礁
(タコ岩)

コ岩、トド岩など)、方角状(尻羽岬の帆かけ岩)などである(図3-2, 3)。

b) 東部(厚岸湾から霧多布)

東部は海岸を北に後退させたあと、向きをやや北東に変えるが、西部海岸とは一転して屈曲する海岸と変わる。断崖や砂浜もあり、近くに島を配し、大小の湖沼や湿原・泥炭地が展開して変化をみせる。立体的であり、平面的には雄壮な自然美を描き、厚岸道立自然公園の中核をなしているといえよう。

(a) 海岸—海食崖と砂浜

この海岸は約60kmで、厚岸湾の東岸から岩肌をみせる高さ数10mの海食崖が散布まで続く。ここからは琵琶瀬、浜中両湾の砂浜に変わり、霧多布(島)では再びそのまわりを断崖がとり囲む。

この海岸には厚岸湾東のバラサン岬、アイカップ岬、アイニンカップ崎があり、外洋に面してはチンベノ鼻、散布のアイヌ岬、霧多布の湯沸岬、アゼチ岬などがあり、それぞれ景勝地をなしている。

砂浜は霧多布をかなめとする美しい扇形海岸を描く。

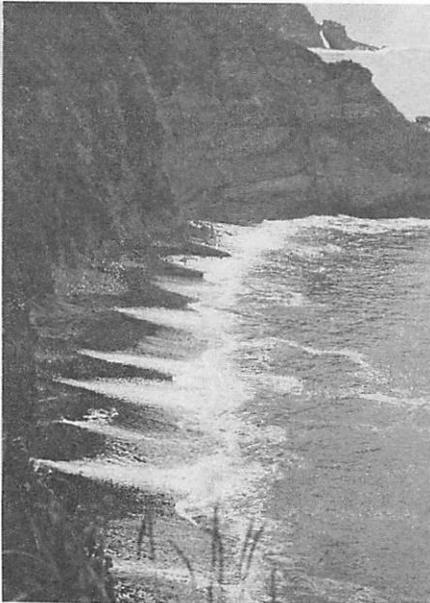
霧多布市街の東の台地は、むかしは対岸の陸地とは海で分けられていた島であった。これがあとで

琵琶瀬、浜中両湾岸を形成した砂が、両湾岸が交差するところで、三角状に堆積して砂州をつくって島とつないだものである。両者地を結ぶこの砂州がトンボロ（陸繋砂州）であり、霧多布島は陸繋島となった。このトンボロは道内では函館と並ぶ珍しい海岸地形である（図3-5）。

(b) 島と岩礁

この海岸には島や岩礁が多く、より変化を与え強く印象づける。島には厚岸湾口の大黒島、小島、霧多布には霧多布島をはじめケンボキ島、小島、ゴメ島がある。比較的大きい大黒、霧多布、ケンボキなどの島は高い海崖でとり巻かれるが、対岸の台地と同様な高度や平坦さを示して、これらが海食によって陸地から分離されたことを示している。

霧多布島は高度50mほどの平坦な菱形の島で、東西に細長い岬をもつ。灯台の西の断崖下の岸辺には、珍しい鋸（のこぎり）歯状のカスブリップル（尖角状さざ波）地形がみられる（図3-4）。



←図3-4 カスブリップル（海岸地形）
（浜中町霧多布東海岸）

岩礁は多いが、塔状型（散布の立岩、ローソク岩、霧多布のローソク岩＝現在崩壊）、方角型（霧多布の帆掛岩、黒岩、丸一浜の岩など）のほか、チンペノ鼻から西に見える双見岩や渡散布の2つの窓岩など特異な岩姿を呼かべて興趣を添える。

(c) 湖沼

この海岸には、厚岸湖をはじめ火散布、藻散布両沼の塩湖が横たわる。このほか小さい床潭沼がある。

厚岸湖は北から別寒辺牛川が注ぎ、西の狭まい水道で厚岸湾につながる。湖周26km、面積31.8km²、最深11mで、周囲は低湿地と台地に囲まれる。湖内には牡蠣（カキ）島があるが、弁天島（東西200m、幅100m）を最大に、干潮時に40、満潮では13を数える（吉田1958）。これらカキ島は中央西側に東西方向に分布するが、これは西からの海水の流入と、北からの別寒辺牛川の流れとが衝突した部分に、カキの繁殖に適した浅瀬ができたためとみられている（湊1956）。カキ島は表面がカキが主体で、下位にはアサリ、オオガイなどの貝もみられる。

これらカキ島には、天然記念物に指定の「厚岸湖牡蛎島の植物群落」があり、また湖岸低湿地にはアッケソウ（サンゴ草）も僅かに分布する。このほか湖北岸には北海道指定史跡「厚岸神居岩岩跡及び堅穴群」がある。

なお、別寒辺牛川河口の左岸には湿原が広がり、霧多布泥炭地とともにこの地域の特色ある景観を形成している。

火散布沼、藻散布沼は1kmほどそれぞれ離れている塩湖で、両沼とも周囲を台地に囲まれ、沼の東、南部から狭まい水路で海に通じ、満潮で海水が逆流入する。

その形状と位置から、両沼があるここが沢であったとき、沈降して海水の浸水を許し、おぼれ谷をつくってできたものである。

火散布沼はほぼ南北に3.5kmほどのび、くびれた形の中で、数個の細長い湾入部をもつ。面積は約3.5ha、水深は3m以下である。藻散布沼は小さく0.6haで、南西にのびて長さ1.5km、幅0.5kmである。

床潭沼はアイニカップ崎の近くにあり、南は海に開く海跡湖である。面積0.09haの小さい淡水湖で、ここは道指定の天然記念物の緋鮎生息地として知られる。

(d) 霧多布泥炭地（図3-5）

この泥炭地は西、南、北の三方は台地に囲まれ、東は開けて浜中、琵琶瀬両湾に面する。泥炭地は南北に長く9km、東西幅は3-4kmで面積は3,200haで、高度は3m以下の低い平地であり、表面には厚さ1-1.5mの泥炭がおおっている。

泥炭地の表面地形は南部と北部では異なる。北半部は南北性を示す川と大小30の湖沼の水域が、7-8列に並んで配列する。これに対し南半部では、琵琶瀬川が河口で4つに分かれ、そのうち南側の一番、二番両川は東西性さえ示す。

北半部がみせる水域の平行配列は、湿原下の古い砂丘列の上でできた、泥炭地であることを推定させる。霧多布泥炭地の地は、台地が海で削られて海水が浸水したあと、僅かに隆起して低い海岸陸地となり、ここに砂丘を次々に形成したところである。その後ここが沈降して砂丘列の上をおおって湿原化したものと思われる。

南半部はここが湿原化するとき、より深く沈んだものであり、南北で異なった特色ある湿原景観をもたらしたものとみられる（岡崎1982）。

本泥炭地には「霧多布泥炭形成植物群落」として知られる天然記念物の指定地が、その北部にある。

湿原・泥炭地は霧多布のほか、別寒辺牛川下流の左岸、河口から大別付近に広がる。別寒辺牛川は本自然公園地域では最大の河川で厚岸湖に注ぐ。霧多布がミズゴケ主体の高層湿原が多いのに対し、ここはヨシ、スゲの低層湿原で好対照の景観をみせる。

この別寒辺牛川河口付近には「オーベツ」貝塚と二股貝塚が知られる（河野1924）。これら貝塚はカキを主体とするが、厚岸湖の生成過程とカキ島形成との関連を明らかにする点で注目される。

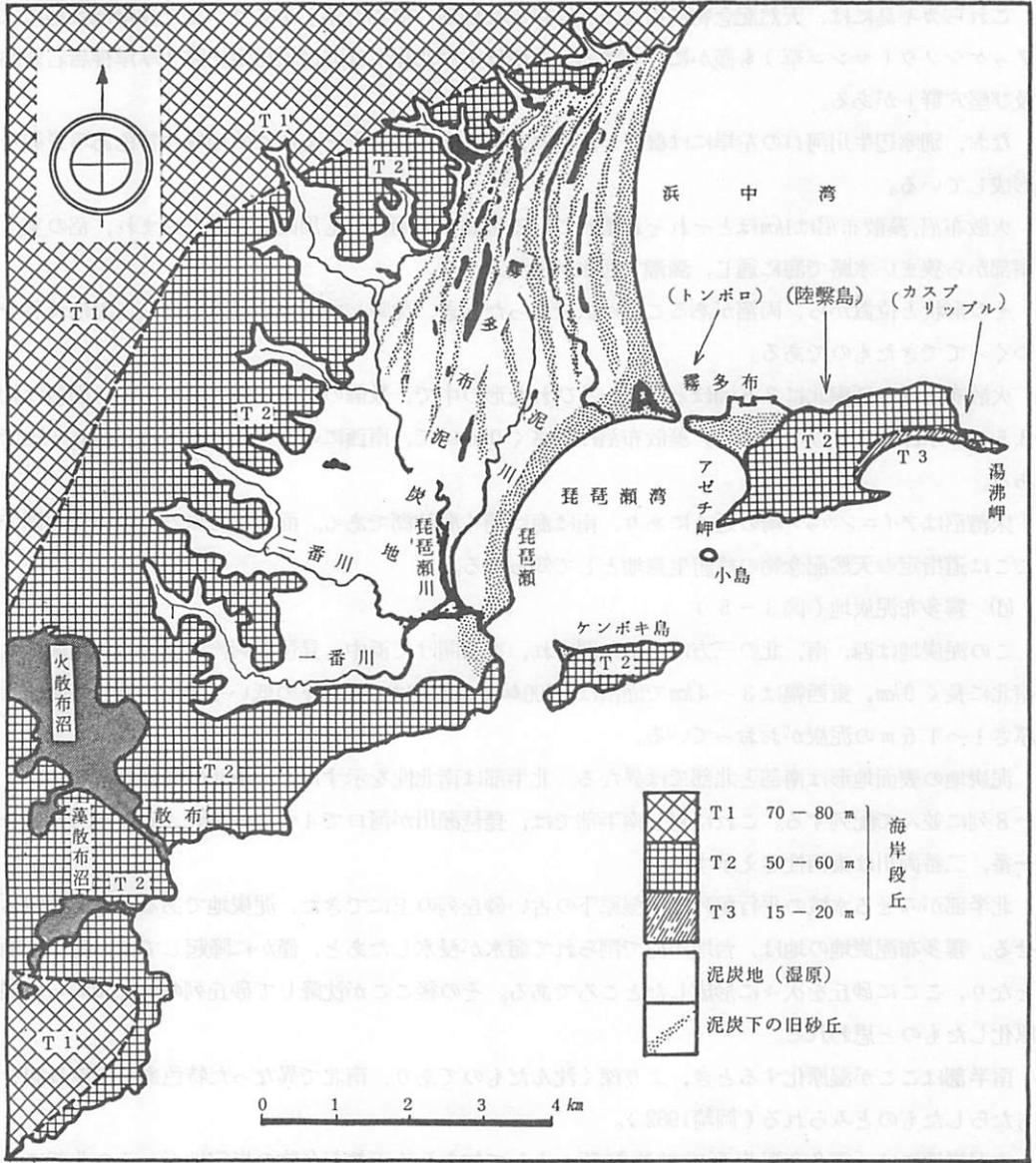


図3-5 霧多布泥炭地付近の地形

第2節 地 質

1. 概 況

本公園地域の地質はすべて堆積岩であり、最下位は基盤である根室層群（白亜紀—古第三紀）であり、その上はこれを不整合におおう含炭の浦幌層群（古第三紀）がある。これら兩層群はともに堅い岩盤地層である。このうち根室層群は厚岸湾から東部を、浦幌層群は西部をそれぞれ主分布とする。

霧多布泥炭地は沖積層（第四紀）から構成されるが、この地層は最も新しい地質時代の堆積物で、未凝固の軟かいものである。

2. 地層区分と岩質

a) 地層区分

根室層群は岩相から表示（表1-1）のように8地層に区分される。本地域ではそのうち門静層とそれ以下の下部地層を除いた、仙鳳趾（尾幌川）層以上の5層が広く分布する。

浦幌層群は数層以上に区分されるが、この地域では下部の3地層—最下位の別保層、春採層及び天寧層—（表1-1）に限られ、ほとんど西部海岸に露出し、釧路炭田の東域をなしている。

b) 岩質

根室層群のうち礫岩を主体とする地層は、チンベ（老若舞）層とそれ以上の地層である。泥質岩主体層は仙鳳趾（尾幌川）層で、厚岸（汐見）層は砂岩と泥岩の互層である。礫岩層は堅硬で、風化や海食に強く抵抗し、その分布地では高い崖、海岸では断崖をつくり、造崖層をなしている。泥岩主体の仙鳳趾層などの地層は、風化や流水の侵食と海食に弱い地層で、地形的には高さを低くし、海岸では後退し湾入や平滑な海岸線を描く。

浦幌層群は炭田構成層で、そのうち春採層に石炭を数層はさみ、厚さ1 m内外の1炭層が稜行の対象になる。明治30年代後半から昭和30年代まで、この海岸には小規模な炭礦が数か所あって、採炭していた。

別保層及び天寧層は礫岩主体の地層で、その堅硬な岩質から造崖層をなし、海食には強く抵抗し、断崖をつくり、突出する。

3. 地質構造

根室、浦幌両層群はともにほぼ東西性の走向で、南へ南西へ5～20度、10度内外でゆるく傾斜している。断層はよく発達して、両層群を縦横にブロック状に切断して地層の配列を乱し、また反覆再露出をさせている。浦幌層群が飛び地状に孤立的に分布するのは、このような断層の発達による。

4. 本地域の地質特徴

自然公園地域における地質的な特徴はいくつかあげることができる。まず地形との関連で、硬軟の岩質をもつ地層の配列で、出入りの多い変化ある海岸地形を生み出していることである。砂岩脈は本地域の特徴で、それ自体でのまとまった分布は、道内では他に例をみない（図3-6、9）。大規模なスランプ構造（図3-7）は根室層群の中にみられるもので、道内でも珍しい地質現象である。

根室層群そのものは、地質時代が白亜紀末から第三紀初期にかけて、連続して堆積した海成層として、世界的に例のない、日本で唯一の露出、分布地として注目される。

浦幌層群からの哺乳類（口蓋・歯）化石、クシロムカンバクの産出は、日本でははじめての貴重なものである（図3-8）。

尻羽岬では、天寧層から貝化石を多く産しており、海水生貝は炭田形成上、重要な資料を提供し、また本公園地域では珪化木とともに唯一の化石観察地をなしている。

5. 特徴的な地質各論

a) 海岸地形と地質

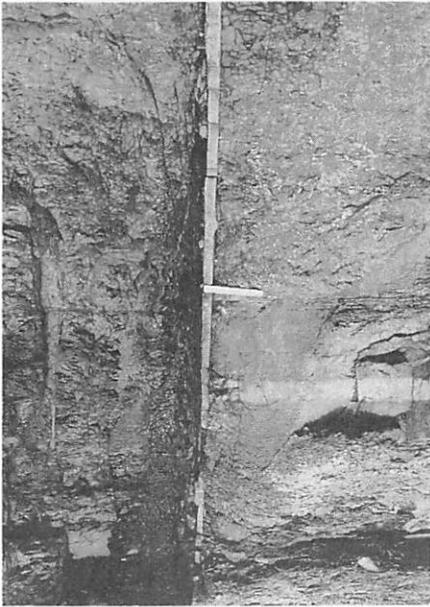
本公園地域の海岸線の出入りは地質、特に地層・岩石の岩質と密接に関係する。海岸の岬、島（厚岸町小島を除く）、岩礁などはすべて堅硬な礫岩（チンペ層、天寧層）からできている。これに対し陸地側に後退し、平滑な海岸のところは、海食に弱い泥岩（仙鳳趾層と厚岸・霧多布両層中の泥質岩層）の露出地である。厚岸湾西岸や床潭、末広の砂浜がこれであり、浜中・琵琶瀬湾岸は最も軟かい沖積層である。西部の直線の海岸は、礫岩の天寧層と老若舞（チンペ）層がほぼ連続して露出し、厚岸湾以東のように、泥岩を介在していない。このことが単調海岸を形成した原因である。海岸線の出入りが、岩質に応じた姿態を呈し、地質が地形によく反映していることを教える、教科書的なところである。

b) 砂岩脈

本公園地域の厚岸湾以西の西部海岸には、砂岩脈が25本余露出している（河合1956）。砂岩脈は釧路市の海岸から連続して分布するが、本地域ではキトウシから汐見にかけてみられる。特にソムテキ（初無敵）から汐見には集中し、14本が露出している（表3-1、図3-6）。

表3-1 厚岸道立自然公園西部（厚岸湾以西）海岸の砂岩脈

露 出 位 置	走 向	傾 斜	厚 さ cm	備 考
キトウシ海岸	N 20° E	88° W	35	
	N 15° E	83° W	153	
	N 20° W	70° W	0-0.5	
	N 25° E	88° W	17-22	
十町瀬海岸	N 35° E	75° E	52	
	N32-35°E	83-87°W	13-60	
跡 永 賀	N 30° W	88° W	55	
プ ュ モ イ (冬 窓 床)	N 35° E	90°	3	
	N 33° E	90°	1.5	
ソムテキ(初無敵) 汐 見 海 岸	N 30° E	80° W	57	3本に分岐
	N 5° E	85° W	1.7	
	N 25° E	83° W	35	
	N 20° W	65° W	2.5	
	N 35° E	90°	5	
	N 10° W	88° W	15	
	2本に分岐	N 20° W	88° W	2.8-3.5
		N 10° W	87° W	4.6
		N 13° W	88° W	0-1.0
		N 10° W	85° E	30-43
N 12° W		85° E	15	
N 15° W		85° E	15-20	
N 12° W		83° E	8	
N 25° E		70° W	2-7	
仙鳳趾南方	N 45° E	60° S	3-4	
	不 明		200±	



←図 3-6 砂岩脈
(釧路町冬窓床海岸)(砂岩脈は幅 5~3 cm)

砂岩脈はそれ自体極めて少ない地質現象である上、まとまって分布する地は北海道内でも例がなく、珍しい地質現象とみなされるものである。

砂岩脈はほぼ東西に走る海岸に対し、ほぼ直交する形の南北性の走向で、垂直ないしこれに近い急角度で板状に地層を貫いている。砂岩脈は灰一帯緑灰色を呈する幅 1~60cm の、細一粗粒の砂岩からなる。粒度は脈幅を増すにつれて粗粒化し、幅が小さいと細粒で均質な傾向になる。岩脈は膨縮は少なく、連続性に富み(釧路市太平洋炭礦の坑内外で、幅 4.4 m の砂岩脈は数 cm の延長が知られている)、まわりの地層より概して堅く、突出していることが多い。

砂岩脈の形成については、地殻変動に際して地層に生じた亀裂や断層に、上位の未凝固の砂が充填したものとみられる(永瀧1952, 河合1956, 岡崎1958, 長浜1961)。砂岩脈や各地層の中の鉱物組織や火成岩岩片の研究によると、砂岩脈に砂を供給した地層は、浦幌層群上部舌辛層下部とみなされている(中添1961)。

その生成の時代については、上述のような諸点から、浦幌層群の堆積後の地殻変動の所産と考えることができる。

c) スランプ構造(層間褶曲)

根室層群・厚岸層には厚さ 10 数 m 以上にわたる大規模なスランプ構造(層間褶曲または異常堆積)がみられる(図 3-7)。

この構造は砂岩と泥岩の互層の厚い地層に現われる。未一半凝固の砂、泥の堆積物が海底の斜面に沿ってすべり下った、海底地すべりがつুক্তといわれる。地層の褶曲に似た複雑で異常な堆積物の示す構造で、層間褶曲または異常堆積ともいわれる。

このような大規模なものは、道内でもきわめて珍しい地質現象といえる。本公園地域では厚岸町市街地やバラサン岬-アイカッ崎の海岸崖に露出する。後者地のは陸地での観察はむずかしい。厚岸町市街地の露頭はまとまって数か所がある。これらの多くは落石、崩落防止のため金網をかけて



←図3-7 スランプ構造(層間褶曲)
(厚岸町梅香町, 現在はセメントで
おおわれている)

いるが、近く寄れば観察に耐える。

d) 中生代-新生代にわたる根室層群

根室層群は中生代・白亜紀から新生代・第三紀にかけて連続的に累重した、海成の地層群として注目されるものである。世界的には白亜紀の地層と第三紀の地層とは不連続(不整合)で接し、このように両紀にわたって連続した地層の存在は知られていない。

根室層群は長く中生代・白亜紀末期の時代とされていた。この時代を特定する大型化石(表3-3)は、最下位のノッカマツ層から厚岸層までの地層からイノセラムス、アンモナイトを産し、最上位のチンベ(老若舞)層以上からは産出していない。表示のイノセラムス、アンモナイトの大型化石群は、中生代・白亜紀末(アストリシアン)の地質時代に相当することは疑いないこととされている。

表3-2 根室層群産のアンモナイト, イノセラムス, 有孔虫化石表※

地 層	*アンモナイト	#イノセラムス	○有孔虫
N 5 チンベ(老若舞)層			
N 4 厚 岸(汐見)層	○ <i>Globrotalia pseudobulloides</i> , <i>Globigerina triloculinoides</i> , <i>Globigerinoides dawbjergensis</i> * <i>Gaudryceras hamanakensis</i> , <i>Puzosia</i> sp., <i>Pachydiscus subcompressus obsoletus</i> , <i>Vertebrites aff. kayei</i> , <i>Neodesmoceras</i> sp., <i>Anagaudryceras</i> sp., # <i>Inoceramus aff. hetonaianus</i>		
N 3 仙鳳趾(尾幌川)層	* <i>Neodesmoceras obsoletum</i> , <i>Zelandites varuna japonica</i> , <i>Anagaudryceras</i> sp., <i>Pachydiscus</i> ? sp.,		
N 2 門 静 層	* <i>Pachydiscus</i> cf. <i>subcompressus</i> # <i>Inoceramus kushiroensis</i> , <i>In. shikotanensis</i> , <i>In.(naumani)</i> ? <i>In.(ezoensis)</i> ?		
N 1 太 田 村 層	# <i>Inoceramus shikotanensis</i>		
N 0 ノ ッ カ マ ツ 層	# <i>Inoceramus schmidtii</i> , <i>In. cf. shikotanensis</i>		

※河合(1956), 吉田(1958), 小山内ほか(1961), 岡崎・長浜(1965), 長尾ほか(1966), 松本(1970, 1979)による

ところが、厚岸層の上部層から新生代・第三紀の晩新生を示す浮遊性の有孔虫の *Globorotalia pseudobulloides*, *Globigerina triloculinoides*, *Globigerinoides daubjergensis* が産する（浅野1960, 1962）（表3-2）。

同層群の大型化石の産出層位と第三紀型の有孔虫化石の層準から、松本（1970）は厚岸層はスランブ構造があるため、アンモナイト、イノセラムスを下位層から二次的にとり込んだと仮定して、同層と下位の仙鳳趾層の境を白亜紀、第三紀の境とする1つの考えを示した。もう1つは、厚岸層の中部をもってその境とする、と2つの可能性を述べている。君波（1978 a, b）は後者の見解をとっている。

いずれにしても、根室層群は白亜紀・第三紀が連続して累重する地層群として、日本、世界の地質学会から注目される好露頭が、本地域にあることは重要である。

e) クシロムカンバク（化石）

本公園地域の西部、釧路町十町瀬の天寧層からクシロムカンバク化石（上口蓋・歯）が産して注目される。本種は哺乳類、奇蹄目、ヘラレテス科バク上科の *Colodon* 属の新種で *Colodon kushiroensis* である（富田1983 a, b）（図3-8）。

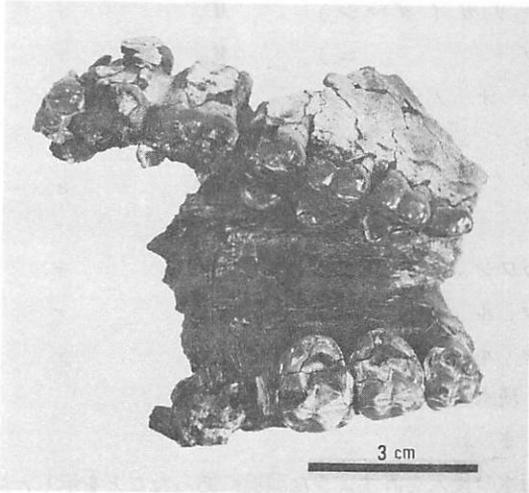


図3-8 クシロムカンバク化石
（釧路町十町瀬，天寧層産）

日本の古第三系では陸生の哺乳類化石はきわめて少ない（4か所10点）。また *Colodon* 属の産出はまったく知られていない。わが国唯一の産出地である。この種の化石は北アメリカの古第三紀層（始新世後期または漸新世前期）に産し、地質学的な関係や古生物地理を検討する上で重要な化石種となるものである。

この化石標本は原標本が国立科学博物館にあり、そのレプリカは釧路市立博物館と北海道教育大学釧路分校地学教室にそれぞれ保管されている。

f) 尻羽岬の珪化木

珪化木は「木石」ともいわれ、庭石や盆石として鑑賞される。珪化木は天寧層にしばしば産するが、尻羽岬付近の天寧層には特に多量に産する。

珪化木は木幹が礫砂とともに堆積したものが、その後木材質が珪酸によって置換され、木幹が石化したものである。

尻羽岬では、珪化木の大きさは直径5〜30cm、長さは50cmから2m余、多くは1〜1.5mである。

色は表面は白色を呈し、内部に入るに従って灰色から褐灰—黒褐色を示す。

尻羽岬は北海道内でも有数の産地といえよう。

g) 尻羽岬の貝化石

浦幌層群、天寧層は釧路炭田全域に分布し、ときには炭層をはさみ、また上述の陸生哺乳類化石を産し、全層は淡水域に堆積した淡水成層とみなされるものである。

尻羽岬の天寧層は厚さが130 mにわたるが、礫岩を主体に薄い砂岩、泥岩層がはさまる。泥岩中には表示(表3-3)のような汽水生のシジミを主に海水、淡水生の貝化石を多く含んでいる。

表3-3 尻羽岬の天寧層産の動物化石

名	前	生息地	産状
<i>Chlamys</i> sp.	(カミオニシキ)	M	r
<i>Venericardia</i> cfr. <i>compressa</i> YOKOYAMA	(フミガイ)	M	r
<i>Lucina</i> sp.	(カブラツキガイ)	M	r
<i>Turritella</i> sp.	(キリガイダマシ)	M	r
<i>Linthia yessoensis</i> MINATO	(ウニ)	M	r
<i>Mya kushiroensis</i> NAGAO & INOUE	(オオノガイ)	B-M	r
<i>Ostrea eorivularis</i> OYAMA	(カキ)	B	c
<i>Corbicula sitakaraensis</i> SUZUKI	(シジミ)	B-F	a
<i>Unio uryensis</i> SUZUKI	(イシガイ)	F	r
<i>Margaritifera perdahurica</i> YOKOYAMA	(カワシユンジュガイ)	F	r
<i>Cipangopaludina mabutii</i> SUZUKI	(マルタニシ)	F	r
<i>C. ishikariensis</i> SUZUKI	(マルタニシ)	F	r

M:海水性 B:汽水性 F:淡水性

a:多産 c:ふつう r:まれ

これら貝化石の産状は、釧路炭田が東部から海水の侵入を許すような環境にあったことを示し、炭田の形成史上注目される。また、ここは公園地域第一の貝化石の多産地であり、来訪者の観察の場として好適である。

引用文献

- 1) 浅野 清(1960) 日本の第三系と浮遊性有孔虫化石 有孔虫 No.11 PP.64-67
- 2) 浅野 清(1962) 有孔虫化石群からみた日本の古第三系 東北大学理学部地質学古生物学教室 研究邦文報告 57号
- 3) 門倉 三能(1917) 釧路国釧路炭田調査地質調査所報告 64号 農商務省
- 4) 門倉 三能(1918) 釧路国釧路炭田調査報文 鉱物調査報告 25号 農商務省
- 5) 河合 正虎(1956) 5万分の1地質図幅「昆布森」及び同説明書 地質調査所
- 6) K. KIMINAMI (1975) Sedimentology of the Nemuro Group (Part 2) 地質学雑誌 81巻 PP.215-232

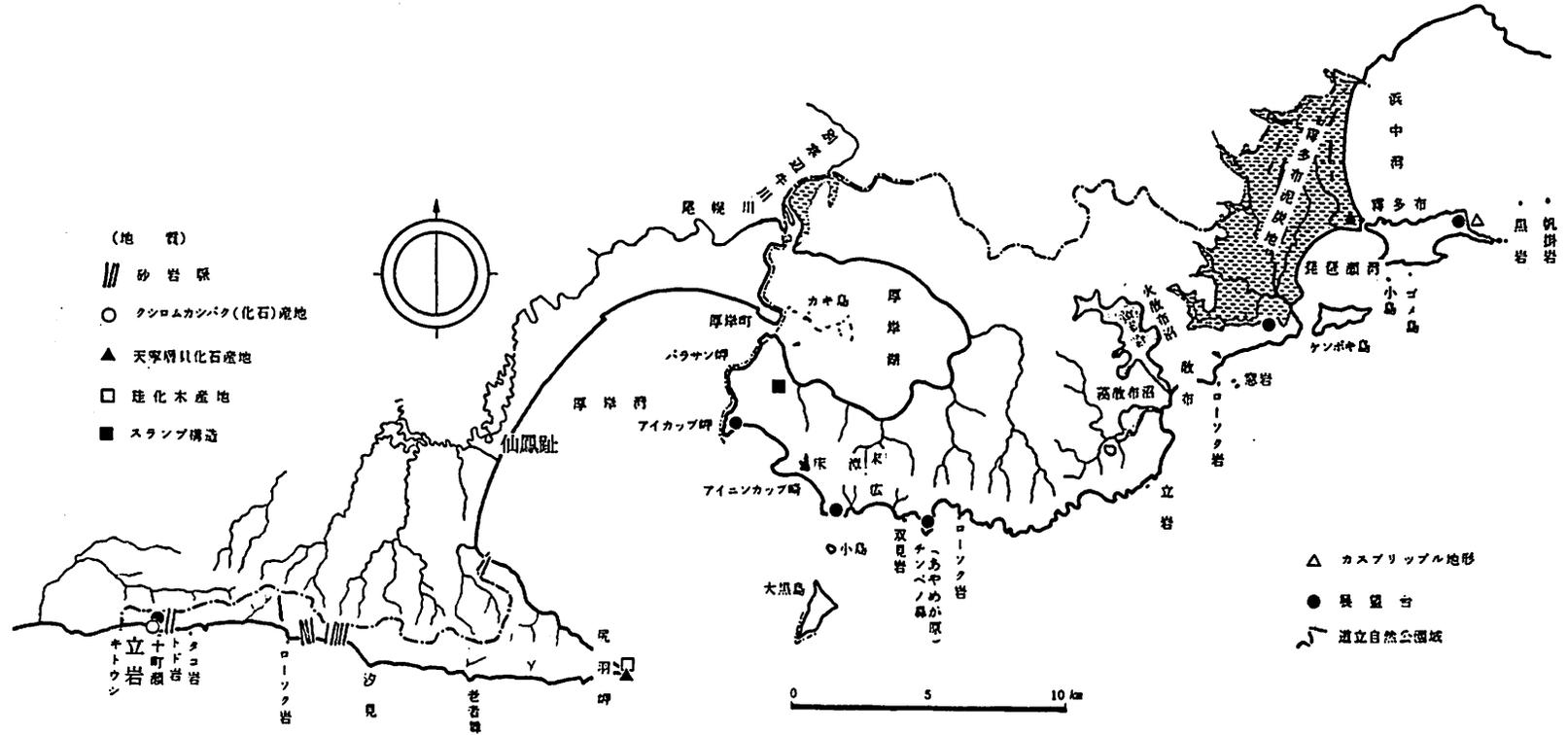


図 3-9 厚岸道立自然公園の地形・地質現象など

- 7) 君波 和雄(1975) 根室層群の堆積学的研究(その3)―下部厚岸部層の堆積作用について―同上81巻 PP. 773-782
- 8) 君波 和雄(1976) 根室層群の堆積学的研究(その4)―下部厚岸部層から中部厚岸部層にかけての後背地の変化について―同上 82巻 PP.773-782
- 9) 君波 和雄(1978) 根室層群の層序の再検討 地球科学 32巻3号 PP.120-132
- 10) 君波 和雄ほか(1978) 北海道の白亜系―エゾ層群と根室層群― 地団研専報 21号 PP.111-126
- 11) 河野 常吉(1924) 厚岸町の史蹟「オーベツ」の貝塚 北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書 PP.197-199 北海道庁
- 12) 松本 達郎(1970) 中生界の地質年代 科学 40巻 PP. 218-255
- 13) T. MATSUMOTO & S. YOSHIDA (1979) A New Gaudryceratid Ammonite from Eastern Hokkaido (Studies of Cretaceous Ammonites from Hokkaido and Saghalien XXXVI) 日本古生物学会報告・記事 New series 114 PP.65-76
- 14) 湊 正雄(1956) 厚岸道立公園―地形と地質― 道立公園 PP.45-46 観光北海道社
- 15) 元田 茂(1950) 厚岸湖―北海道湖沼誌― 水産孵化場試験報告 5巻1号 PP.63-66
- 16) 元田 茂(1950) 床潭泥炭沼・火散布沼及藻散布沼―北海道湖沼誌― 同上 5巻1号 PP.66-68
- 17) 長尾 捨一(1963) 5万分の1地質図幅「床潭」及び同説明書 北海道立地下資源調査所
- 18) 長尾 捨一ほか(1966) 5万分の1地質図幅「霧多布」及び同説明書 北海道開発庁
- 19) 中添 亮(1961) 釧路市附近に発達する砂岩脈について 釧路博物館報 117号 PP.131-132
- 20) 長浜 春夫(1961) 5万分の1地質図幅「釧路」及び同説明書 北海道開発庁
- 21) 永渕 正叙(1952) 釧路地区における砂岩脈 炭礦技術 17巻12号 PP.13-15
- 22) 岡崎 由夫・杉山 伸一(1958) 釧路地方の水成岩脈(サンドストーンダイク) 釧路博物館報 79号 PP.26-27
- 23) 岡崎 由夫(1959) 釧路市以東の海岸線の発達史とそれに基づく沖積世以降の地盤運動 同上 90 PP.95-102
- 24) 岡崎 由夫(1960) 釧路平原とその周辺の地形発達史 地理学評論 33巻9号 PP.16-27
- 25) 岡崎 由夫・長浜 春夫(1965) 5万分の1地質図幅「尾幌」及び同説明書 北海道開発庁
- 26) 岡崎 由夫ほか(1971) 釧路市付近と釧路から根室へ 地質ニュース 203号 PP.25-39
- 27) 岡崎 由夫(1978) 道東海岸の地形と十勝海岸湖沼 釧路市立郷土博物館紀要 5輯 PP.1-10
- 28) 岡崎 由夫ほか(1979) 釧路村名勝天然記念物指定候補物件調査報告書―地形・地質調査報告 PP.1-11 釧路村教育委員会
- 29) 岡崎 由夫ほか(1981) 大黒島及びその周辺の科学調査報告書 PP.1-2, PP.47-48 釧路市立郷土博物館, 道東海岸線総合調査団
- 30) 岡崎 由夫ほか(1982) 霧多布湿原及びその周辺の科学調査報告書 PP.3-8 同上
- 31) 岡崎 由夫(1984) 道東海岸の地形・地質及び産業 道東海岸線総合調査報告書 PP.5-26 釧路市立博物館

- 32) 小山内 熙ほか(1961) 5万分の1地質図幅「厚岸」及び同説明書 北海道開発庁
- 33) 寒川 旭・山口 昇一(1985) 活構造図「釧路」50万分の1 地質調査所
- 34) 佐々 保雄(1940) 釧路炭田に於ける第三系の層序とこれに関する従来の諸説(上), (下)
北海道石炭鉱業会報 307号 PP.1-9, 308号 PP.20-43
- 35) 佐々 保雄・林 一郎(1952) 釧路炭田東部に於ける白亜系の層序と先第三系変動の様式(要旨)地質学雑誌 8号 682号 P.292
- 36) 佐々 保雄(1953) 釧路炭田-北海道炭田誌-第2号及び10万分の1地質図 PP.12-72 日本石炭協会北海道支部
- 37) 佐藤 博之・山口 昇一(1976) 20万分の1地質図 「釧路」 地質調査所
- 38) 鈴木 達夫(1923) 釧路炭田地方に於けるアンモナイトの発見(要旨) 地質学雑誌 30巻 353号 P.97
- 39) 富田 幸光(1983) 釧路町産古第三紀バク類化石 釧路市立博物館報 279号 PP.3-6
- 40) Y. TOMITA (1983) A New Helatetid Tapiroid (Perissodactyla, Mammalia) from the Paleogene of Hokkaido, Japan and the Age of the Urahoro Group, Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, Series C (Geology and Paleontology), vo 1. 9, No. 4, PP.151-163
- 41) 山口 昇一・佐藤 博之(1975) 20万分の1地質図幅「根室」 地質調査所
- 42) 山口 昇一ほか(1978) 50万分の1地質図幅「釧路」 地質調査所
- 43) 吉井 義次(1919) 厚岸湖の牡蛎島 史蹟名勝天然記念物調査報告 4号 PP.19-24
- 44) 吉田 三郎(1958) 北海道の白亜系よりアンモナイトを多産す(要旨) 地質学雑誌 64巻 751号 P.206
- 45) 吉田 三郎(1958) 厚岸湖のカキ島について 釧路市立郷土博物館報 80号 PP.32-34
- 46) S. YOSHIDA (1961) The Cretaceous - Tertiary boundary in eastern Hokkaido, Japan 北海道学芸大学紀要 12巻 PP.14-38
- 47) 吉田 三郎(1967) 北海道釧路支庁産化石及び現生カキ礁について 山形大学紀要(自然科学) 6巻 4号 PP.481-493

Ⅲ 植 物

辻井達一・長谷川 榮・新庄久志

第1章 調査にあたって

本調査の対象となった厚岸道立自然公園は、気候的にはもっとも冷涼な条件を持つ。すなわちこの地域は、冬の気温も低い、夏にも海霧の影響を強く受けて、低い日照と気温とが特徴的である。

また地形的には、きわだった海岸段丘の発達をみるところで、その断崖と段丘面とにそれぞれ特徴的な植生の成立を見、ことにダケカンバ林とトドマツ林との広い分布がいちじるしい。森林を欠くところには海岸草原がよく展開する。

植生のもうひとつの特徴は湿原である。霧多布湿原を代表とする湿原は海岸段丘と並んでこの自然公園の景観の主要素となっているもので、個々のスケールではやや釧路、サロベツなどの湿原に劣るとしても、それぞれに地形上の、あるいは植生上の特徴が備わっている。なかでも原始性の強いこと、荒らされていないことは特徴として大きい。

古くから開けていた割に交通の便が必ずしも良くないことが、この公園の自然を守ってきたともいえるだろう。しかし、現在では道路整備も進み、利用率の高まりも十分期待されるようになった。原始性の高さに撞ける人々も増加するであろう。そうした要求に対処するためにも、自然公園の特徴を維持し、かつ、強調するような施策が必要である。先にも述べたようなこの自然の特徴を損なうことなくその機能を発揮させるためには、まずその自然の構成とメカニズムとを把握することが大切である。そしてそのデータの上に立って、公園の経営計画が考えられるべきであろう。

また、自然の移り変わりに対して、調査は恒常的に行われることが望ましい。少なくとも定期的なチェックが行われるべきであろう。主要な植生と植物については個々にその対策を示したが、全体の利用と保全に関する管理計画の樹立が望まれる。

第2章 高等植物研究小史

1. 植 生

厚岸道立自然公園地域は、森林植生帯上から、黒松内低地帯以北・以東の全域とシュミット線以南の南樺太、宮部線以西の千島を含む汎針広混交林帯に位置している（館脇，1956・57）。この森林帯は、冷温帯から亜寒帯への移行帯と位置づけられるが、本地域はとくに亜寒帯に近い地域である。

本地域の植生として、古くから注目され、研究の対象となったのは、厚岸牡蛎島および厚岸湖岸、霧多布湿原、厚岸海岸地域の森林・草原である。

厚岸牡蛎島の植物群落をはじめて報告したのは吉井（1919）である。吉井は厚岸牡蛎島の植物群落として、渉海部のアマモ群落、潮汐部位にある腐泥上のウミミドリ群落、シバナ群落、アッケシソウ群落、海

水からの影響から免れ、安定した土壌上のハマニシク群落、ハマナス、ハマエンドウなどを混生する海浜群落を認め、その遷移と関連づけている。三好(1938)は同島の植生について報告し、ハチジョウナ、ハマシオン、ホソバノハマアカザなどの植物を追加した。

館脇・中山(1939)は、厚岸牡蛎島に属する6つの小島について詳細な植物生態学的研究を行なった。その結果、牡蛎島で確認された高等植物は19科48種におよび、植物群落としては、ハマナスーハマオグルマ基群叢、シバナーウミドリ基群叢、ハマシオンーエゾノドジョウツナギ基群叢が記録された。

その後辻井(1956)は再度牡蛎島の調査を行ない、館脇・中山が予想した植物群落の推移の方向とは異なり、逆の方向の推移を指していることを明らかにした。現在では牡蛎島は水没し、天然記念物に指定されてはいるものの、その実態は存在しない。

一方厚岸湖周辺のアッケシソウについては、辻井(1954)がその分布状態を明らかにした。その結果厚岸湖岸周辺では、アッケシソウ群落とヨシ群落の発達は相互に反比例すること、アッケシソウの所生地は概ね汀線から20mの間にあり、5-10m間に最も大きく、大群落の形成もこの間に見られること、アッケシソウの随伴種は主に、シバナとハマシオンであるが、そのうちシバナは、塩湿地植生の先駆植物として出現することが多いことなどが認められた。さらに、アッケシソウは牡蛎島からはほとんど姿を消したが、厚岸湖岸のイクラウシ湿地およびポント湿地に代表的な群落が生じており、北岸のアッケシソウは半自然植生のものであり、南岸のものは自然植生と半自然植生のものであるとしている。

伊藤(1963)は、北海道東部の塩湿地植物群落の調査を行ない、欧亜の塩湿地植物群落と比較検討を行なうとともに、北海道東部で普通に記録される塩湿地植物14種について分類学的な検討を加えている。この結果、群落分布の上では、オホーツク海側ではアッケシソウ群落(原論文では、群落単位として *isocias*, *isocion*, *socias*, *associes* を用いているが、ここでは単に群落と記す)が先駆群落で、シバナはまれであるのに対し、野付海峡ー太平洋側ではシバナ群落が先駆群落で、アッケシソウは先駆群落とはならず、小群落を形成していること、オホーツク海側ではウミドリ群落、チシマドジョウツナギ群落が優勢であるが、野付海峡ー太平洋側ではヒメウシオスゲ群落が優勢であり、種類分布ではオホーツク海側に分布を限定するものは見られないが、野付海峡ー太平洋側に分布を限定するものとしては、エゾハコベとハマシオンがある。さらに北海道東部塩湿地にみられる植物群落更行過程については、海水域のアマモ群落より、陸上域ではオホーツク海側でアッケシソウ群落、野付海峡ー太平洋側でシバナ群落の先駆群落に至る。それ以降の更行過程は両地域ともほとんど同じで、沼沢群落と接するときは、直接または間接にヨシ群落に至り、海岸砂浜植物群落と接するときは、チシマドジョウツナギ群落あるいはヒメウシオスゲ群落を経て、ヤマアワ群落やウシノケグサーナガハグサ群落またはハマナス群落に至るものとした。

霧多布湿原は1922年(大正11年)10月12日、中央域約8km²が「霧多布泥炭形成植物群落」として国の天然記念物に指定された。これにさがけて吉井・工藤(1926)は、「北海道琵琶瀬並に静狩泥炭地調査」を実施し、「琵琶瀬泥炭地の最も著しき点は、水ごけの構成せる丘塊が羅列すること之なり。一中略一欧州に於いても稀に見るものなり。一中略一学術上貴重なる泥炭地と云ふを得べし。」として、湿原中央域約200町歩の保存を提起している。

その後、霧多布湿原についての報文は少ないが、田中(1956, 1957)は、「霧多布の天然記念物、泥炭形成植物群落」において、霧多布泥炭地の概要、および泥炭形成植物群落の特徴について紹介してい

る。さらに田中(1959)は、「北海道東部湿原の群落学的研究(第二報)」を報告し、霧多布湿原植物群落のミズゴケブルトの構造、および群落組成について報告している。

霧多布湿原の中央域を、ほぼ東西に道道琵琶瀬・茶内停車場線が走っており、その環境調査が実施された。その中で辻井(1984)は、道道に沿って北側、南側におおの約600mの範囲で調査を行ない、ハンノキ林、ヌマガヤ群落、ヨシーヌマガヤ群落、ワタスゲ群落、ヤチヤナギ群落、ヨシーミカズキグサ群落、ミツガシワ群落を記載して、詳細な植生図を作成している。

また、釧路市立博物館が実施した道東海岸線総合調査において、新庄(1982)が霧多布湿原の北西端に位置する若山沼周辺の湿原植生について報告している。

海岸地域の植生については、北海道とくに道東地域の開発と密接な関連のある防霧林に関して、多方面の研究者により組織された防霧林研究会によって、基礎的・応用的研究が1950年から1953年にかけての4年間にわたって行なわれた(北海道林務部, 1951, 1953, 1954. 北大低温科学研究所, 1952)。その中で館脇らは海霧の影響を受ける森林植生を明らかにするために、i)厚岸町アイカッパ岬, ii)厚岸町チンベから鯨浜付近の海岸台地, iii)浜中村(現在浜中町)榊町海岸丘陵, iv)大黒島, v)浜中村茶内の道有林, vi)防霧林帯の樹姿について調査を行なった。i)~iii)の結果として(館脇ら, 1953, 1954), 外洋に面する森林としては、ミヤマハンノキ林、ダケカンバ林、ミズナラ林があり、このうち外洋に面する場所に限られるのはミヤマハンノキ林であること、樹高は漸高型をなし、前線帯では樹高10mに達しないが、台地上では18mくらいにはなるものの20mを越すものは稀であること、草原植生は、エゾミヤコザサまたはアイヌミヤコザサを主体とするもの、イワノガリヤスを主体とするもの、特別主要素のないものの3型に分けることができ、林床植生と草原植生は放牧の影響を強く受けている場合が多く、牛馬の不食草であるヤマブキシヨウマ・ヒオウギアヤメ・エゾメタカラコウの3種が代表的な種類となっていることを明かにした。

館脇(1953c)は、防霧林での群落調査の際のミヤマハンノキ・ダケカンバ・ミズナラの樹形の観察から、防霧林帯の樹形について、i)上幹伏臥型, ii)横臥型, iii)短直幹型, iv)下部分枝型, v)浅傘型の5型を認めるとともに、北海道東部太平洋面防霧林の前線における樹姿は、一般に風衝地帯のそれと同じで、上幹伏臥型、横臥型を呈し、主軸の方向は海霧襲来期の常風に従っているが、短直幹型や下部分枝型は海岸に近い高木林の中に見られることを明かにした。

松井(1953, 1954)は、海霧地帯の林業の経営価値と土地利用区分の資料として、防霧指数を推定するとともに、海霧林帯の各種林分の構造を明らかにし、植栽林をも含めて収穫予想表を算出している。

さらに高橋ら(1954)は、厚岸林務署管内の太平洋に面するトドマツ・カラマツ植栽林(約30年生)の成績を調査して、前線では樹冠が傘状となり、樹高生長は停止しているが、トドマツでは前線から100~500m, カラマツでは200m以上で生育はほぼ良好となっていること、前線ではトドマツは樹齢20年以降、カラマツは樹齢10年以上で樹高生長が衰えることを明かにした。

本公園地域には大黒島、小島、霧多布、嶮暮岬等の島々が含まれており、大黒島はコシジロウミツバメの繁殖地として天然記念物に指定されている。館脇(1953b)は、前述の防霧林の調査の際に大黒島の植生調査を行っており、同島の植生の概況として、森林は東面の沢沿いにあるのみで、ダケカンバ林によって代表され、断崖上は草原、または笹原をなし、ごく狭い部分にキタヨシ群落があることを明かにし、さらにダケカンバ林で帯状区調査を行なうとともに、あわせて植物目録を示している。

その後新庄(1981)は、大黒島の調査を行ない、樹林はダケカンバークヤマハンノキ林が谷沿いにおおむねに残り、大半が草原となっていること、草原では谷斜面下部のアキタブキーオオヨモギ群落、斜面中復から台地上部にかけてオオヨモギイワノガリヤス群落、台地の最上部、尾根部分の平坦域にエゾミヤコザサイワノガリヤス群落、これに接してススキイワノガリヤス群落となっていること、海蝕崖のわずかなテラスにキリンソウユキワリコザクラ群落が分布していること、さらにオオヨモギイワノガリヤス群落は、大黒島を繁殖地とするコシジロウミツバメの営巣地の分布域と重なっていることを明らかにするとともに、詳細な現存植生図を作成している。

さらに新庄(1984)は、エリモ岬からノサップ岬にかけての道東海岸線の調査結果に基づいて、針葉樹林、広葉樹林、針広混交林、ササ植生、海浜植生、海岸段丘・海蝕崖植生、沼沢地植生、湿原植生、塩湿地植生など多様な植生が展開している道東海岸線の植生の特徴を明らかにしている。なお前述した大黒島(新庄, 1981)、若山沼周辺(新庄, 1982)の調査は、この一部をなしている。

一方内陸部の森林についてみると、古畑(1936)は、森林の更新上よりオンコの取り扱いを論ずる前提として、何故オンコの生育に適するや、今後如何なる方向に推移しつつありやという問題を検討している。前者については、陽光の問題が第一義で、トドマツ林下では被陰に強いオンコのみが良好な生育をなし、オンコ中層林を発達させ、この傾向は平坦地で強いこと、夏期の濃霧は陽光の不足をもたらし、同様な影響を与えること、温度についても、当地方では一般に冬期温暖なのは丘陵地帯のトドマツ林下で、オンコの生育には丘陵地帯のトドマツ林下が最適であろうと考えた。オンコ林の推移については、必ず上層にトドマツを必要として、局部的にオンコのみを純林を見るが、上層のトドマツ林がなんらかの原因により消失した結果と考えた。さらに以上の特性をふまえて、このような森林の伐採方法を提案している。

館脇・田下(1937)は、厚岸林務署34林班、42林班においてランコ林の群落学的研究を行ない、茶内ランコ林は高距50~100 mの沢頭の平坦地に林立し、トドマツ林中に1~5 haの団林をなし、ランコは中層木で、ランコ林内にはランコの稚苗をほとんど見だし得ず、トドマツ林中の終局的特殊団林と位置づけられること、下生植物としてはササ類を欠如し、シラネワラビとオンダがもっとも多く、群落型はランコ-シラネワラビ-オンダ群叢で、下草要素は多年生の好腐植性陰地植物が優勢であることを明らかにした。さらに館脇(1953a)は、防霧林帯の海洋に面した森林と比較するために、稜線背後の茶内道有林で針葉樹林が典型的に発達したところで、前述したオンコ林とともに、トドマツ林の帯状区調査を行なっている。

帯広営林局は、道東地方の林地造成の根幹として、別寒辺牛川の上流約10 kmの位置にパイロットフォレストを計画し、カラマツ造林が1954年(昭和29年)に開始された。その後1974・75年にパイロットフォレストの環境変遷に関する調査・研究が行なわれた(帯広営林局, 1975)。このなかで館脇・五十嵐(1975)は、カラマツ造林地、カラマツ造林を行わずに保存されてきた二次林、トドマツ天然林において群落学的な調査を実施し、さらに、造成事業着手直後の1955年と1973年に撮影された空中写真により、林相図を作成している。それによると、植栽前の林地の状況は、丘陵地帯では二次林あるいはエゾヤマハギ、エゾミヤコザサを主とする草原が主であったようである。また遠藤(1975)は、森林造成による水資源かん養機能の変化を間接的に解析し、カラマツ造林地と再生林との間には透水速度と浸透能の差異は明かではないが、隣接した牧草地の値はきわめて低くなっていること、調査時点では、自然放

置の再生林とカラマツ造林地との差異はないが、継続的な観察が必要であると述べている。なお10年後（1965年）に再度調査が行なわれているが、まだ公表にはいたっていない。

館脇・辻井（1956）は、北海道とくに東部北海道を中心に、牧野として利用されている植生の植物学的な研究を行なっている。自然牧野と牧草原の各タイプについて、その構成を明らかにするとともに、推移とその利用についても言及している。

本地域とその周辺を含めた植生の概況をまとめたものとして、環境庁は自然環境保全基礎調査の一環として、学術上重要なもの、保護を必要とするものを特定植物群落として選定し、その生育状態を調査し（1980）、それらの分布域を示している（1981a）。本公園地域では、「尻羽岬・昆布森海岸台地植生」、「茶内オンコ林」、「キリタツプ湿原植物群落」が選定されている。また現存植生図としては、200,000分の1（1975・76）および50,000分の1（1981b）が作成されている。

文化庁による天然記念物緊急調査の結果（1981）として、200,000分の1植生図とともに、天然記念物である「厚岸牡蛎島の植物群落」、「霧多布泥炭形成植物群落」、「大黒島海鳥繁殖地」、「厚岸床潭沼の緋蛸生息地」と、学術上価値の高い植物群落および生物の所在地として、「昆布森海岸段丘」「鯨浜・チンペ海岸草原」、「霧多布湿原」、「茶内道有林」をあげ、その分布域を図示している。

伊藤ら（1982）は、ランドサット画像に基づいた600,000分の1の北海道全体の植生図を作成し、さらにその結果にもとづいて、伊藤（1982）は北海道の植生を概説している。

2. 植 物 相

厚岸道立自然公園地域は植物区系学的には、日華区系、南樺太・南千島・北海道区に包含されている（北村ら，1957）。南樺太・南千島・北海道区は、石狩低地帯以北、以東の北海道全域と、北はシュミット線、東は宮部線までの区域である。本地域の植物相の特徴として、樺太あるいは千島とのむすびつきが深く、植物の分布経路を反映している点があげられる。樺太との関連はコハマギク型の分布として、沿岸の岩地や岩崖地に生育しているコハマギク・トモンリソウが好例である。千島との関連はカラクサキンポウゲ型分布として、オホーツク海沿いの北見から釧路にかけての湿原に生ずるカラクサキンポウゲ・ハナタネツケバナ・エゾネコノメソウ・サカイツツジがあげられる（伊藤，1981）。

本地域にタイプロカリティをもつ植物は、チャナイザサ（*Sasa ishiharae* Tatewaki）があげられる。チャナイザサは、館脇操が1936年に茶内で発見し、北海道庁林業試験場長林学博士石原供三氏を記念して命名したものである（MIYABE and TATEWAKI, 1937. 館脇，1940）。このチャナイザサは、一見ケザサ（*Sasamorpha mollis* Nakai）に似ているが、葉鞘の肩毛を有し、葉の幅狭く、質の薄いもので、スズタケ属（*Sasamorpha*）とササ属（*Sasa*）の中間的な形質をもっている。現在では、ササ属のナンブスズ節（Sect. *Lasioderma* Nakai）に属するオモエザサ（*Sasa pubiculmis* Makino）の異名としてあつかわれている（鈴木，1978. 北村・村田，1979）。

本地域に由来する植物として、アッケシソウ（*Salicornia europaea* L.）があげられる。アッケシソウは、最初の発見地厚岸に因って、“厚岸草”という和名が宮部金吾によって与えられた（牧野，1913）。その後本種は各地で見いだされ、北海道では厚岸湖の他、小向沼、志文内沼、佐呂間湖、能取湖、藻琴沼付近、野付崎、風蓮湖、温根沼、琵琶瀬で分布が確認されている（伊藤，1963）。

合田（1981）は、1973年に霧多布の中間湿原でスヤマアザミ（*Saussurea duiensis* Fr. Schm.）を

採集している。このスヤアザミは樺太に分布する(菅野, 1980 b)が, 本邦では初確認である。またハナタネツケバナ (*Cardamine pratensis* L.)は, 樺太から大陸にかけて広く分布しているが(菅原, 1980 a), 本邦では霧多布湿原ではじめて確認され, その後海沸湖畔, 釧路湿原でも発見されている。この2種はいずれもカラクサキンボウゲ型の分布を示している樺太とのむすびつきの強い種である。

厚岸道立自然公園地域全域でのまとまった植物相の解明は行なわれていない。合田(1981)は, 釧路地方での長年の調査研究にもとづいて, 「釧路地方の植物総説」をまとめた。釧路地方に分布する植物約1,200種類をあげ, 分布状況をも含めて説明するとともに, 32地区での分布一覧表をまとめている。さらに釧路地方の帰化植物, 貴重植物にも言及している。分布一覧表に示された32地区のうち, 本公園地域に含まれるのは, 霧多布地区, 昆布森地区, 浜中地区, 厚岸地区, 幌一ソソ地区である。

引用文献

- 文化庁. 1981. 天然記念物緊急調査, 植生図・主要動植物地図. 1 北海道(釧路・根室支庁)〔(財)国土地理協会〕.
- 遠藤泰造. 1975. 水資源かん養機能. 「パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷」(帯広営林局): 65-73.
- 合田勇太郎. 1981. 釧路地方の植物総説.
- 古畑要司. 1936. 厚岸地方に於けるオンコに就て. 北海道林業会報, 34: 463-470, 534-538.
- 北大低温科学研究所. 1952. 防霧林に関する研究(昭和26年度)第2輯.
- 北海道林務部. 1951. 防霧林に関する研究(昭和25年度)第1輯.
- 北海道林務部. 1953. 防霧林に関する研究(昭和27年度)第3輯.
- 北海道林務部. 1954. 防霧林に関する研究(昭和28年度)第4輯.
- 伊藤浩司. 1963. 北海道東部塩湿地植物群落の研究. 北大植物園紀要, 1: 1-101+Pl. 12.
- 伊藤浩司. 1981. 北海道の高山植物と山草. 誠文堂新光社.
- 伊藤浩司. 1982. 北海道植生概説(北海道植生図資料).
- 伊藤浩司・清水雅男・古賀真綱. 1982. 北海道植生図.
- 環境庁. 1975・76. 自然環境保全調査報告書(基礎調査), 北海道(釧路・根室支庁).
- 環境庁. 1980. 日本の重要な植物群落(第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書), 北海道版.
- 環境庁. 1981 a. 動植物分布図(第2回自然環境保全基礎調査), 北海道(釧路・根室).
- 環境庁. 1981 b. 現存植生図(第2回自然環境保全基礎調査), 北海道(昆布森・床潭・厚岸).
- 北村四郎・村田 源. 1979. 原色日本植物図鑑 木本編Ⅱ. 保育社.
- 北村四郎・村田 源・堀 勝. 1957. 原色日本植物図鑑 草本編〔1〕合弁花類. 保育社.
- 牧野富太郎. 1913. 伊予ニ於テあつけしそうノ発見. 植物学雑誌, 27: 577.
- 松井善喜. 1953. 海霧地帯の森林の実態とその構成と生長について. 「防霧林に関する研究(昭和27年度)第3輯」(北海道林務部): 228-269.
- 松井善喜. 1954. 海霧地帯の森林の実態とその構成と生長について. 「防霧林に関する研究(昭和28年度)第4輯」(北海道林務部): 205-246.

- MIYABE, K. and TATEWAKI, M. 1937. Contributions to the flora of northern Japan IX. Transactions of the Sapporo Natural History Society, 15: 41-51.
- 三好 学. 1938. 厚岸湖牡蛎島の植物群落. 天然記念物調査報告, 植物之部 18: 74-75.
- 帯広営林局. 1975. パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷. 217 pp.
- 新庄久志. 1981. 大黒島の植生. 「大黒島及びその周辺の科学調査報告書」(釧路市立郷土博物館道東海岸線総合調査団): 4-10.
- 新庄久志. 1982. 若山沼周辺の植生. 「霧多布湿原及びその周辺の科学調査報告書」(釧路市立郷土博物館道東海岸線総合調査団): 11-16.
- 新庄久志. 1984. 道東海岸線の植生. 「道東海岸線総合調査報告書」(釧路市立郷土博物館): 47-86.
- 菅原繁蔵. 1980 a. 樺太植物誌 第三巻.
- 菅原繁蔵. 1980 b. 樺太植物誌 第四巻.
- 鈴木貞雄. 1978. 日本産タケ科植物総目録. 学研.
- 田中瑞穂. 1956. 霧多布の天然記念物泥炭形成植物群落(其の一). 釧路市立郷土博物館新聞, 60: 94-96.
- 田中瑞穂. 1957. 霧多布の天然記念物泥炭形成植物群落(其の二). 釧路市立郷土博物館新聞, 61: 100-103.
- 田中瑞穂. 1959. 北海道東部湿原の群落学的研究(第Ⅱ報), 霧多布湿原植物群落の構造. 北海道学芸大学紀要(第二部), 10: 112-125.
- 高樋 勇・中野 実・山本 肇. 1954. 海霧地帯のトドマツ・カラマツ植栽林の生育について. 「防霧林に関する研究(昭和28年度)第4輯」(北海道林務部): 247-282.
- 館脇 操. 北海道笹類の分類. 北海道林業会報, 38: 4-9, 45-53, 81-88, 125-134, 181-191, 241-253.
- 館脇 操. 1953 a. 茶内道有林の植生. 北方林業, 52: 5-11.
- 館脇 操. 1953 b. 大黒島の植生. 樹氷, 3(6): 8-14.
- 館脇 操. 1953 c. 防霧林帯の樹型. 植物生態学会報, 2: 162-169.
- 館脇 操. 1956・57. 汎針広混交林帯. 北方林業, 80: 8-11, 82: 7-9, 85: 10-13, 87: 8-10, 92: 12-15, 95: 17-23.
- 館脇 操・五十嵐恒夫. 1975. 植生. 「パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷」(帯広営林局): 75-105.
- 館脇 操・中野 実・山本 肇. 1953. 防霧林の植生. 「防霧林に関する研究(昭和27年度)第3輯」(北海道林務部): 182-227.
- 館脇 操・中野 実・山本 肇. 1954. 防霧林の植生. 「防霧林に関する研究(昭和28年度)第4輯」(北海道林務部): 167-204.
- 館脇 操・田下英治. 1937. ランコ林の群落学的研究. 生態学研究, 3: 279-294.
- 館脇 操・辻井達一. 1956. 北海道牧野の植物学的研究. 北海道開発局局長官房開発調査課. 106 pp.
- 館脇 操・山中敏夫. 1939. 牡蛎島の植物群落学的研究. 生態学研究, 5: 1-18.
- 辻井達一. 1954. 釧路厚岸湖畔アッケシソウの生態(第一報)-北海道塩湿地植物群落の研究(1). 植物

辻井達一. 1956. 牡蛎島の植物群落—北海道塩湿地植物群落の研究(2). 日本生態学会誌, 6: 120-124.

辻井達一. 1984. 植物. 「琵琶瀬茶内(停)線環境調査」(北海道釧路土木現業所): 11-46.

吉井義次. 1919. 厚岸牡蛎島の植物群落. 史蹟天念記念物調査報告, 植物之部 4: 19-24.

吉井義次・工藤裕舜. 1926. 北海道琵琶瀬並に静符泥炭地調査報告. 天然記念物調査報告, 植物之部第五輯: 25-29.

第3章 調査の概要と調査方法

1. 調査地域

調査の対象となった地域は厚岸道立自然公園全域で、総面積は21,523 haである。その地域は 200,000 分の 1 地勢図「釧路」「根室」、50,000 分の 1 地形図「昆布森」「厚岸」「床潭」「霧多布」に含まれている。今回の調査では、便宜上図 3-1 に示すように、昆布森地区、厚岸地区、霧多布地区の 3 地区に分けた。

昆布森地区は公園地域の西側で、厚岸地区・霧多布地区とは厚岸湾によって隔てられている。公園地域は道道尾幌・昆布森・釧路線の南側および東側で、大半が海岸地域である。また中央部を除き、釧路営林署管内の国有林となっている。

厚岸地区は公園地域の中央部で、厚岸市街から火散布にかけての一带と、北側の別寒辺牛川までの丘陵地で、海岸地域と内陸部の丘陵地および厚岸湖・火散布沼・藻散布沼などの周辺の湿原を含んでいる。海岸段丘および丘陵地は、ほぼ全域が厚岸林務署管内の道有林で、「茶内道有林」として有名である。離島としては、大黒島・小島を含んでいる。

霧多布地区は本公園地域の東側で、天然記念物に指定されている「霧多布泥炭形成植物群落」を中

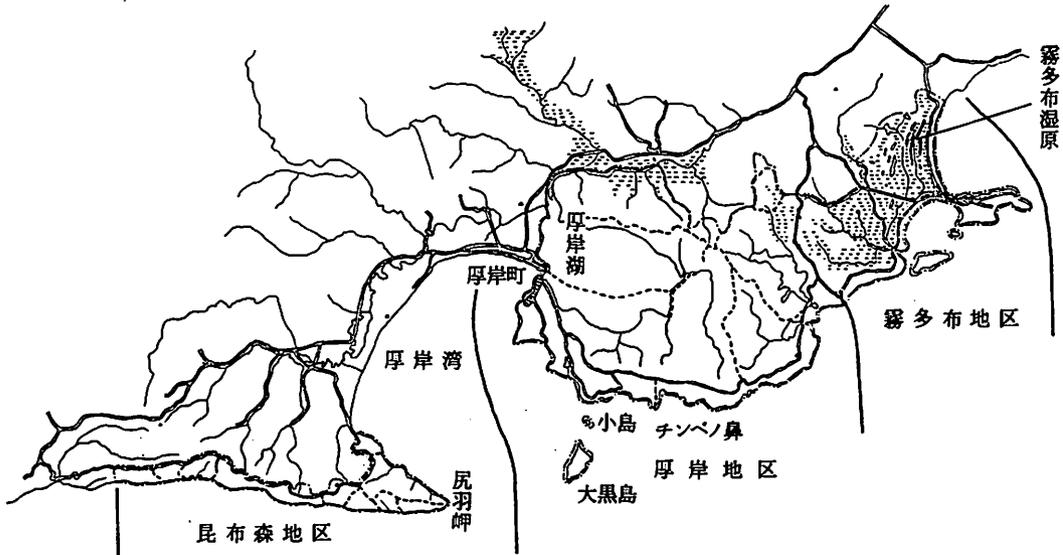


図 3-1 地域区分と調査経路 破線は調査経路を示す

心とする霧多布湿原が大半を占め、周辺の丘陵地、霧多布・嶮暮峠等の島々を含んでいる。

2. 調査日程と調査経路

調査日程は表3-1に示すとおりである。1985年6月15日～11月2日までの期間中、6月15日～17日には全域の踏査、9月1日～8日には昆布森地区・厚岸地区で海岸草原・森林の調査および厚岸湖岸の湿原・塩湿地の調査を行なった。

また霧多布については、6月24日～11月2日の期間に、5回にわたって調査を行なった。調査経路は図3-1に示すとおりである。

表3-1 調査日程

6月15日	札幌→釧路
6月16日	釧路→昆布森→厚岸→茶内→霧多布湿原→浜中
6月17日	浜中→茶内→チンベ→厚岸→尾幌→釧路→札幌
9月1日	札幌→釧路
9月2日	釧路→昆布森→尻羽岬→厚岸
9月3日	厚岸→床潭→チンベ→茶内道有林→厚岸
9月4日	厚岸→茶内道有林→厚岸湖東岸→厚岸
9月5日	厚岸→十町瀬→跡永賀→尻羽岬→厚岸
9月6日	厚岸→茶内道有林→厚岸
9月7日	厚岸→トキタイ川流域→茶内道有林→道道沿い→厚岸
9月8日	厚岸→札幌
6月24日	霧多布湿原 予察
7月22日	霧多布湿原 若山沼調査
8月5日	霧多布湿原 ヌマガヤ湿原調査
10月30日	霧多布湿原 ミズゴケ湿原調査
11月2日	霧多布湿原 ハンノキ林調査

なお調査にあたっては、以下に示す調査支援者の協力により、調査を支障なく終了することができた。

本公園地域のうち、昆布森地区は釧路営林署、厚岸地区は厚岸林務署の管内が大半で、釧路営林署および厚岸林務署の各位には、入林や調査の際にいろいろと便宜を与えられた。とくに厚岸林務署広畑清氏には、調査・宿泊に関して手を煩わした。

また釧路市立博物館の各位には、調査および取りまとめに際して各種の便宜を与えられた。

釧路教育局社会教育係千田 朗氏、厚岸町教育委員会文化財保護係長小林吉男氏には天然記念物の現状変更の許可、現地調査についての御助言をいただいた。とくに小林吉男氏には、厚岸湖東岸の塩湿地の調査にあたって、ボートにより現地を案内していただいた。

研究小史の作成にあたっては、北海道大学環境科学研究科伊藤浩司教授に有益な御助言をいただ

き、また農学部林学科五十嵐恒夫助教授には資料をお貸し頂いた。

以上の諸氏に対して、心からの謝意を表する。

また委託業務の処理にあたっては、北海道自然保護協会事務局長片岡秀郎氏に深くお礼申し上げる。

調査員 辻井達一（北海道大学農学部 助教授）
長谷川 榮（北海道大学農学部 研究生）
新庄久志（釧路市立博物館 学芸員）

調査支援者 現地調査

溝口岳男（北海道大学農学部 大学院生）
吉住琢二（北海道大学農学部 大学院生）
松田 弥（北海道大学農学部 研究生）
新庄佳子（釧路市立博物館友の会会員）
渡辺千春（釧路勤労者山岳会）

目録整理

小泉 豊

3. 調査方法

植物の調査は、大きく植生調査と植物相調査に分けられる。植生調査は、植物群落の組成と構造を解明しようとするもので、今回は方形区調査と帯状区調査によって行なった。さらに植物群落の分布を明らかにするために、現存植生図を作成した。

また本公園地域の植物相を把握するために、植物相調査を行なった。

以下各調査の方法について述べる。

(1) 方形区調査 (Quadrat method)

方形区調査の対象となったのは、草本類が優占する群落で、具体的には、海岸草原および湿原・塩湿地等である。調査区としては、群落内の典型的な部分に方形区を設定した。方形区の大きさは群落高により、 $(1 \times 1) m^2 \sim (5 \times 5) m^2$ とした。各方形区において、群落高・全体の植被率を測定し、ついで全出現種について種名と優占度・群度 (BRAUN - BLANQUET, 1964) を記録した。さらに調査地の傾斜・方位あるいは周辺の植生等も記録した。

優占度 (Dominancy) は、調査区におけるある種の被覆の割合 (被度) と個体数を組み合わせた群落の測度で、群落構成種の量を示し、優占性の尺度となる。優占度は以下の6段階で示される。

- 5 : 被度が $3/4$ 以上で、個体数は任意
- 4 : 被度が $1/2 \sim 3/4$ で、個体数は任意
- 3 : 被度が $1/4 \sim 1/2$ で、個体数は任意
- 2 : 非常に多数 (被度が $1/10$ 以下)、あるいは被度が $1/10 \sim 1/4$ (個体数は任意)
- 1 : 多数であるが被度は低い、あるいは少数であるが被度はやや高い
- +

群度 (Sociability) は、ある種の調査区内での分布の状態を示す測度で、集合状態により以下の5

段階で示される。

- 5 : 大群生する
- 4 : 大きな斑状または芝状に生育する
- 3 : 小斑状に生育する
- 2 : 叢状または株状に生育する
- 1 : 単生する

方形区調査の結果は、組成表としてまとめた。組成表では、調査区の面積・方位・傾斜・群落高・植被率・出現種数とともに、出現種の優占度・群度を併記して示した。

とくに塩湿地植生では、アッケシソウの分布状態を明らかにするために、 (5×5) m^2 の方形区を設定して、分布図を作成した。

(2) 带状区調査 (Belt transect method)

带状区調査は長い带状の調査区により行なうものである。带状区には2種類あり、その1つは植生の連続的な変化あるいは群落の広がり把握することを目的として、全植生にわたって設定する带状区(全植生带状区)で、他は一定の単位群落を代表するように設定する带状区(単位群落带状区)である。今回の調査では、複雑な構造をもった森林群落において、後者の目的で带状区調査を行なった。带状区の大きさは幅5mとし、長さは林相により25~30mとした。森林群落は階層構造をもっているもので、全体を高さにより、2m以上の木本層と2m未満の草本層に区分した。木本層では、樹高2m以上の全木本類を対象に種名・带状区内の位置・樹高・胸高直径・枝張りを測定した。さらに樹形をスケッチして、樹冠投影図および側面図を作成した。樹高2m未満の木本類および草本類は林床植生として、带状区を (5×5) m^2 の小方形区に区切り、各小方形区で、全体の植被率・出現種の種名と優占度・群度を測定・記録した。なお優占度・群度の基準は、方形区調査と同様である。さらに調査地の方位と傾斜・周辺の植生等も記録した。

带状区調査の結果は、樹高階別本数表・胸高直径階別本数表・林床植生一覧表としてまとめた。このうち、胸高直径階別本数表には、胸高断面積合計〔Basal area: BA (m^2/ha)〕と相対優占度〔Relative dominancy: RD (%)〕を示した。胸高断面積合計は、高さ1.3mの部位で測定した胸高直径から求めた断面積を合計したもので、木本類の存在量の尺度となる。また相対優占度は、带状区内の全胸高断面積に占める各種の割合で、木本類の優占性を測る尺度として示した。林床植生一覧表では、带状区を5mごとに区切った各小方形区での植被率と出現種数とともに、各出現種の優占度・群度を示した。また各出現種の带状区内での分布を明らかにするために、出現頻度 (Frequency: F) を示した。出現頻度は、ある種の出現した小方形区の割合を示し、以下の5段階に区分した。

- V : 80%以上の出現頻度
- IV : 60~80%の出現頻度
- III : 40~60%の出現頻度
- II : 20~40%の出現頻度
- I : 20%未満の出現頻度

さらに、森林群落の階層構造と樹木の分散様式を明らかにするために、樹冠投影図および側面図を示した。

(3) 現存植生図の作成

現存植生図は、ある地域の現在の植生の空間的な配列を図示したものである。現存植生図の作成範囲は、厚岸道立自然公園地域全域とし、縮尺は50,000分の1とした。さらに霧多布湿原については、別に縮尺25,000分の1の詳細な現存植生図を作成した。まず現地での調査と既存の試料により群落の区分を決定した。その上で、各群落の広がりを図示した。既存の資料としては、空中写真のほか、環境庁作成の200,000分の1現存植生図（環境庁、1975・76）「釧路・根室」および50,000分の1現存植生図（環境庁、1981）「昆布森」、「厚岸」、「床潭」、厚岸林務署・釧路営林署作成の事業図等を参考とした。

(4) 高等植物相調査

植物相を明らかにするためには、植物の全生育期間にわたって、詳細な調査を必要とするが、今回の調査は短期間であったので、植生調査の際に確認できた種を記録した。現地で種名を決定できなかったものについては、採集して持ち帰り、腊葉標本により同定した。さらに調査の不備を補うために、既存の文献を整理して、高等植物目録を作成した。

引用文献

- BRAUN - BLANQUET. J. 1964. Pflanzensozioologie. Springer-Verlag, Wien. (鈴木時夫訳.
1971. 植物社会学. 朝倉書店)
環境庁. 1975・76. 自然環境保全調査報告書(基礎調査)北海道(釧路・根室支庁).
環境庁. 1981. 現存植生図(第2回自然環境保全基礎調査), 北海道(昆布森・厚岸・床潭).

第4章 調査結果及び考察

第1節 植生調査

植生調査の結果は、相観上の相違から、森林植生・海岸草原植生・湿原植生・塩湿地植生に分けて述べる。

なお、霧多布湿原については新庄が、他は長谷川が調査・とりまとめを行なった。

1. 森林植生

森林植生の調査は、带状区法によって行なった。今回設定した带状区は10で、昆布森地区3(Belt 1~3)、厚岸地区7(Belt 4~10)である。さらに参考として、館脇ら(1953, 1954)が防霧林研究の一環として、厚岸地区の海岸地域で行なった調査の結果から、5带状区の例を合わせて示す。今回設定した带状区の位置を図4-1に示す。

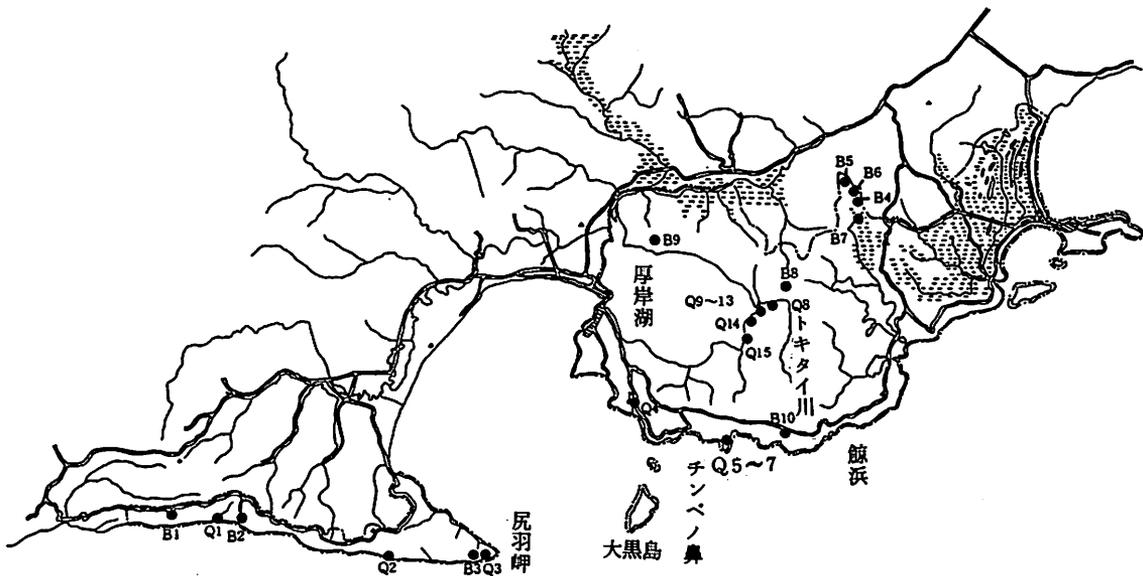


図 4-1 調査地位置図

Bは帯状区調査，Qは方形区調査を示す。

なお，霧多布湿原での調査地の位置は，図 4-17に示す。

a. Belt 1 (5×25) m² トドマツ・ダケカンパーシラネワラビ群落〔図 4-2，表 4-1, 2, 3〕

Belt 1 を設定したのは，釧路営林署昆布森担当区 11 林班ち小班である。道道尾幌・昆布森・釧路線の南側で，十町瀬への林道を約 30m はいった地点である。海岸線から約 500 m 離れ，標高 140 m で，地形は海岸段丘上の海に向いた緩やかな斜面である。周辺の林相は針広混交林であるが，Belt 1 を設定した箇所は，針葉樹の多い部分である。

高木類の出現種はトドマツ・ダケカンバの 2 種で，本数ではトドマツが 91% と大半を占めている。しかし相対優占度ではトドマツの 66% に対して，ダケカンバが 34% とダケカンバの比率が高くなっている。これは帯状区内でもっとも大きな個体はダケカンバの胸高直径 73 cm，樹高 20 m であり，トドマツの中に大径木のダケカンバが散生している結果である。樹高の分布をみると，15~17 m 階と 5 m 以下の個体が多く，5 m 以下の個体はすべてトドマツであった。

林床植生では，植被率が 80% とやや低く，シラネワラビが優占しているが，区間によってはスズタケ・ツタウルシ・ゴンゲンスゲが多くなっている。

本帯状区を設定した林分は，針広混交林で，トドマツとダケカンバが混生している。昆布森地区は道道の南側一帯で，現在は針葉樹が少なくなっているが，針広混交林はトドマツとダケカンバからなる林分が多い。

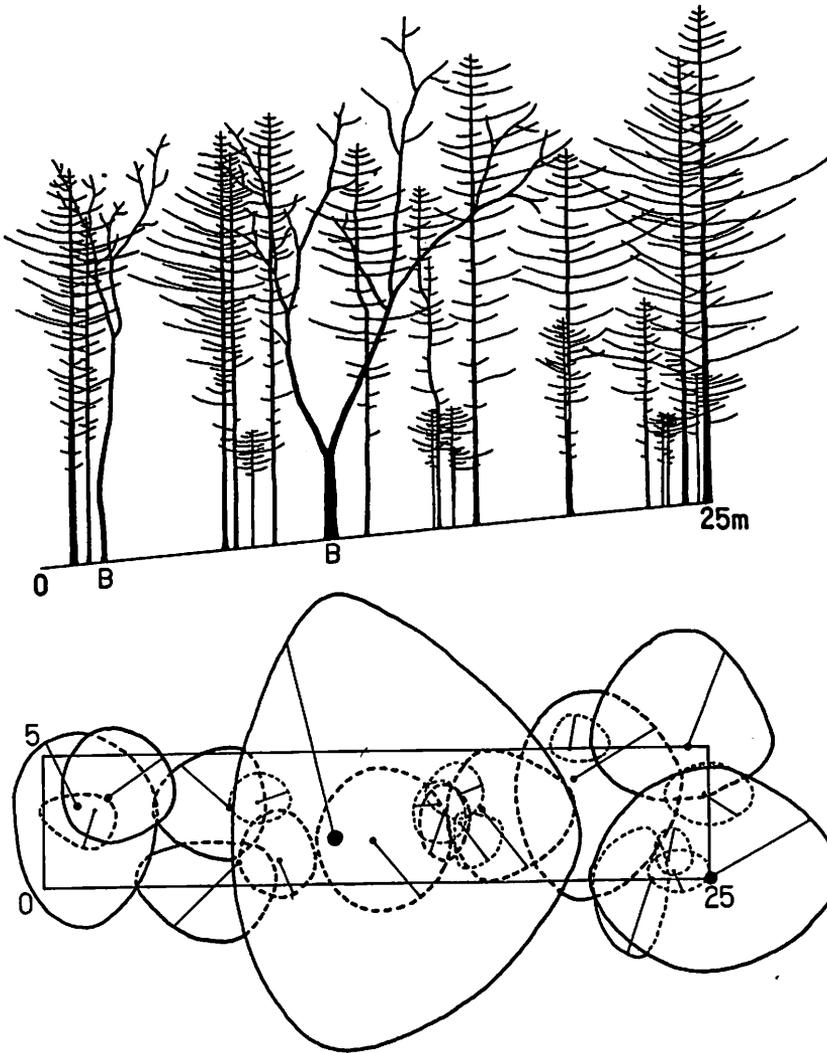


図4-2 Belt 1 (5×25) m² トドマツ・ダケカンバ・シラネワラビ群落

表4-1 Belt 1 樹高階別本数表

H (m)	3	4	5	7	8	13	14	15	16	17	18	19	20	Total
Species	4	5	6	8	9	14	15	16	17	18	19	20	21	
トドマツ	3	3	1	1	1	1	1	3	3	1	1	1	·	20
ダケカンバ (B)	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	1	2
Total	3	3	1	1	1	2	1	3	3	1	1	1	1	22

表 4-2 Belt 1 胸高直径階別本数表

Species	DBH (cm)														Total	BA (m ² /ha)	RD (%)
	4	6	8	10	12	14	18	24	28	30	32	36	46	72			
トドマツ	2	4	1	1	1	•	1	2	3	2	1	1	1	•	20	68.19	66.2
ダケカンバ	•	•	•	•	•	1	•	•	•	•	•	•	•	1	2	34.88	33.8
Total	2	4	1	1	1	1	1	2	3	2	1	1	1	1	22	103.07	100.0

表 4-3 Belt 1 林床植生

Species	Distance (m)					F
	0	5	10	15	20	
	}	}	}	}	}	
	5	10	15	20	25	
アオダモ	1・1	1・1	1・1	+	+	V
トドマツ	+	+	+	+	+	V
イチイ	+	+	+	+	+	V
ナナカマド	+	•	+	+	+	IV
エゾイタヤ	+	+	+	•	•	III
ミヤマザクラ	•	+	•	+	•	II
ヤマモミジ	+	•	•	•	•	I
ヒロハノツリバナ	+	+	+	•	+	IV
ノリウツギ	+	•	+	•	+	III
オガラシナ	+	•	+	•	•	II
トガスグリ	+	•	•	•	+	II
ツタウルシ	2・2	3・3	2・2	2・2	+	V
チョウセンゴミシ	+	1・1	+	1・1	+	V
ミヤマタタビ	+	•	•	+	+	III
ツルアジサイ	+	•	•	+	1・1	III
スズタケ	1・1	2・2	2・2	1・1	3・3	V
ゴンゲンズゲ	1・2	1・2	1・2	2・3	3・3	V
フッキソウ	+	1・1	1・1	2・2	1・1	V
チンマアザミ	+	+	+	•	+	IV
マイズレソウ	+	+	+	+	•	IV
ヤブニンジン	+	+	•	+	+	IV
レンブクソウ	•	+	+2	+2	•	III
クルマバソウ	•	+	•	+	+	III
ミヤマスミレ	+	•	+	•	1・1	III
アカミノレイヨウジョウマ	•	•	+	+	+	III
エンレイソウsp.	•	+	+	•	+	III
コガネギク	•	•	+	+	•	II
ミミコウモリ	•	•	+	+	•	II
ノブキ	+	+	•	•	•	II
オオアマドコロ	+	•	•	•	•	I
オオナウド	•	•	•	+	•	I
タツノヒゲ	•	•	•	•	1・1	I
オオウバユリ	•	•	•	+	•	I
シラネワラビ	4・4	2・2	4・4	4・4	2・2	V
オンダ	+	+	1・1	1・1	1・1	V
ミヤマワラビ	•	•	+	+	+	III
ホソバノトウゲシバ	•	•	•	+2	•	I
ホソイノデ	•	•	+	•	•	I
藓苔類	+2	•	1・2	1・2	1・2	IV
植被率 (%)	80	80	80	80	80	
出現種数	25	21	26	27	25	

b. Belt 2 (5×25) m² ミズナラーエゾミヤコザサ群落〔図4-3, 表4-4, 5, 6〕

本帯状区を設定したのは、跡永賀の集落背後の民有林である。標高40mで、海岸線から約400mしか離れていない。海に向かってのびた狭い尾根の末端部に位置し、直接海からの風にさらされ、もっとも海側に成立している森林である。

Belt 2での出現種は、ミズナラ・エゾノバッコヤナギの2種のみである。本数ではミズナラが88%と大半を占めている。側面図(図4-3)で明らかなように顕著な風衝樹形を示しており、樹高は最大でも6mで、低木林となっている。立木密度は2,000本/haでそれほど高くないが、ミズナラでは多幹型を示しているものが多く、樹幹の密度についてみると5,600本/haと高くなっている。胸高断面積合計は8.78 m²/haと小さい。これは株立ちについては、そのうちもっとも直径の大きな樹幹のみを対象として計測している結果もあるが、胸高直径の最大はミズナラの13cmと小さく、小径木からなっている結果である。

林床植生では、エゾミヤコザサがいずれの区間とも優占度5で優占しており、完全に林床を覆っている。ほかにチャンバスゲ・ヒカゲスゲ・ヤマハギ・オオヨモギなどが多い。また、ヒオウギアヤメ・ツリガネニンジン・トウゲブキなどが出現し、海岸草原と類似した種構成となっている。

本帯状区を設定した林分はミズナラ海岸林で、昆布森地区では海岸線にもっとも近い位置に成立しており、著しい風衝樹形を示している。集落に近い民有林であることから、伐採により成立した萌芽二次林と思われる。

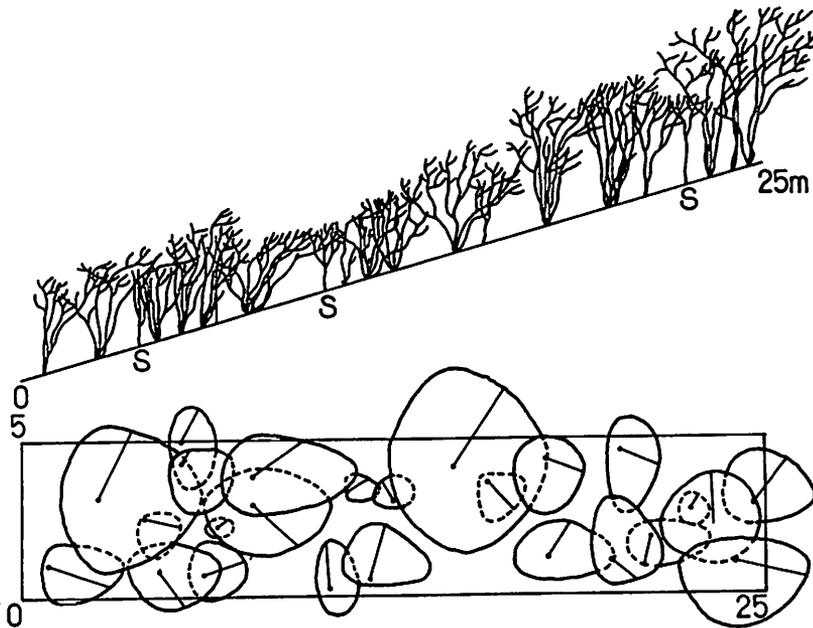


図4-3 Belt 2 (5×25) m² ミズナラーエゾミヤコザサ群落

表4-4 Belt 2 林床植生

Species	Distance (m)					F
	0 5	5 10	10 15	15 20	20 25	
ミズナラ	+	.	+	+	.	III
ダケカンパ	+	.	+	.	.	II
アオダモ	.	.	+	.	+	II
エゾイタヤ	.	.	+	.	.	I
ウダイカンパ	.	.	.	+	.	I
ヤマギ	1.1	1.1	2.2	1.1	1.1	V
ノリウツギ	+	+	+	.	.	III
ツタウルシ	.	+	+	+	+	IV
ヤマブドウ	.	+	.	.	.	I
イヌツルウメモドキ	+	I
エゾミヤコザサ	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	V
チャシバ	3.3	3.3	2.2	2.2	2.2	V
ヒカゲスゲ	+2	1.2	+	1.2	+2	V
オオヨモギ	+	+	1.1	1.1	+	V
ナガボノシロワレモコウ	1.1	+	+	+	1.1	V
ヒオウギアヤメ	+	+	+	+	1.1	V
チンマアザミ	+	+	+	+	+	V
オオヤマフスマ	+	+	+	+	+	V
マイズルソウ	+	+	+	+	+	V
コガネギク	+	+	+	+	+	V
ツリガネニンジン	+	+	+	+	+	V
ヤマブキシヨウマ	+	+	+	+	+	V
イワノガリヤス	+	.	+	+	+	IV
ゼンテイカ	.	+	.	+	+	III
エゾノヨロイグサ	.	+	.	+	+	III
トウケブキ	.	+	+	.	+	III
ナンテンギ	.	+	.	.	+	II
アキカラマツ	.	+	+	.	.	II
ミヤマスマ	.	.	+	+	.	II
エゾノシジウド	+	I
オオイタドリ	+	I
タチギボウシ	.	.	+	.	.	I
マルバトウキ	.	.	+	.	.	I
ヤマハコ	.	.	.	+	.	I
ノギリソウ	.	.	.	+	.	I
エゾオオサクラソウ	+	I
ヘビノネゴザ	+	+	+	+	.	IV
ミヤマワラビ	.	+	+	.	.	II
植被率 (%)	90	90	90	90	90	
出現種類	20	23	28	23	22	

表4-5 Belt 2 樹高階別本数表

H (m)	2	3	4	5	Total
Species	3	4	5	6	
ミズナラ	8	6	7	1	22
エゾノバッコヤナギ(S)	3	.	.	.	3
Total	11	6	7	1	25

表4-6 Belt 2 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	2	4	6	8	10	12	Total	BA (m^2/ha)	RD (%)
Species	4	6	8	10	12	14			
ミズナラ	1	3	8	5	3	2	22	8.52	97.1
エゾノバッコヤナギ	1	2	3	0.26	2.9
Total	2	5	8	5	3	2	25	8.78	100.0

c. Belt 3 (5×30) m^2 ダケカンバーエゾミヤコザサ群落〔図4-4, 表4-7, 8, 9〕

本帯状区を設定したのは、尻羽岬の先端部で、釧路営林署尾幌担当区7林班は小班である。周辺の林相は、壮齡のダケカンバ林が多く、トドマツ等の樹下植栽がなされている箇所も多い。帯状区を設定した林分は、周辺よりも大径木が多く、樹下植栽の行なわれていない部分である。

Belt 3 での出現種はダケカンバ・ミズナラの2種のみで、立木密度は600本/haと低く、本数ではダケカンバが78%を占めている。樹高の最大はダケカンバの12mであるのに対して、胸高直径の最大はミズナラの44cmと大きく、樹高に対する胸高直径の値が大きくなっている。側面図(図4-4)から、枝下高が低く、短直幹型(館脇, 1953)の樹形を呈していることがわかる。胸高断面積合計は42.17 m^2/ha と大きくなっている。

林床植生では、エゾミヤコザサが優占度5で完全に林床を覆っている。他にツタウルシ・ヒゴクサ・ミミコウモリなどが出現するが、出現種の種数は11種以下と少なく、エゾミヤコザサ以外の出現種の優占度は、いずれも1以下である。

本帯状区を設定した林分は、ダケカンバーエゾミヤコザサ群落で、尻羽岬周辺に広く分布している。全般的には直径は細いものの、密度の高い林分が多い。

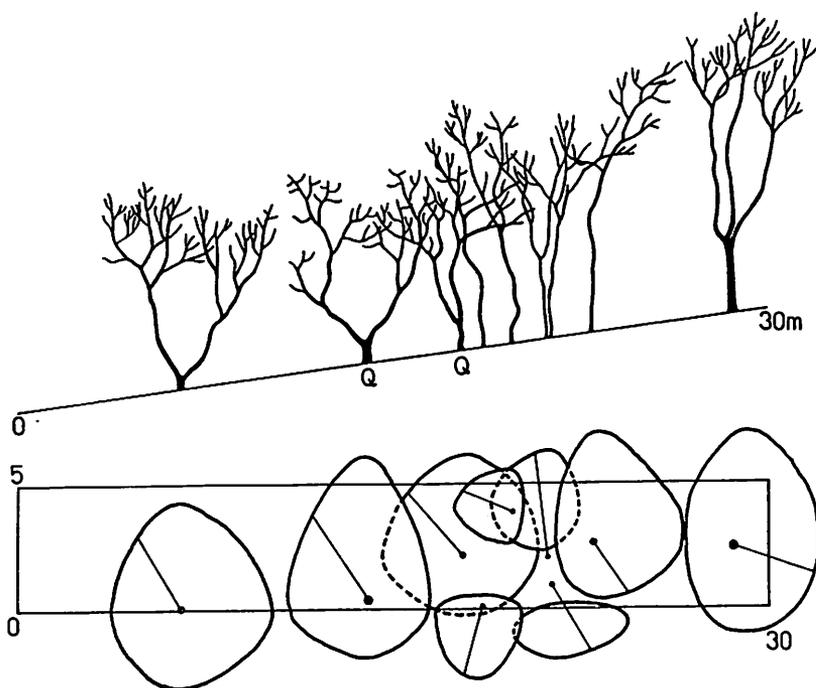


図4-4 Belt 3 (5×30) m² ダケカンパーエゾミヤコザサ群落

表4-7 Belt 3 樹高階別本数表

H (m)	7	8	9	10	11	12	Total
Species	8	9	10	11	12	13	
ダケカンバ	·	2	2	1	1	1	7
ミズナラ (Q)	1	1	·	·	·	·	2
Total	1	3	2	1	1	1	9

表4-8 Belt 3 胸高直径階別本数表

Species	DBH (cm)												Total	BA (m ² /ha)	RD (%)
	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	40	44			
ダケカンバ	1	·	1	·	1	1	·	1	·	1	1	·	7	26.68	63.3
ミズナラ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	2	15.49	36.7
Total	1	·	1	·	1	1	·	1	·	2	1	1	9	42.17	100.0

表4-9 Belt 3 林床植生

Species	Distance (m)					F
	0	5	10	15	20	
	5	10	15	20	25	
ツタウルシ	1・1	・	・	+	1・1	Ⅲ
イヌツルウメモドキ	・	+	+	+	・	Ⅲ
ミヤコザサ	5・5	5・5	5・5	5・5	5・5	V
ミミコウモリ	+	1・1	1・1	+	1・1	V
ヒゴクサ	1・2	+	1・1	+	+	V
バイケイソウ	+	+	+	+	+	V
アキタブキ	+	+	+	1・1	・	Ⅳ
エゾイラクサ	・	・	+	1・1	+	Ⅲ
イワノガリヤス	+	・	+2	・	+	Ⅲ
オオヨモギ	+	・	+	・	・	Ⅱ
エゾイチゴ	・	+	・	・	+	Ⅱ
ヤマブキシヨウマ	+	・	・	・	・	I
ヒメゴヨウイチゴ	+	・	・	・	・	I
チシマアザミ	+	・	・	・	・	I
オオハナウド	・	+	・	・	・	I
オククルマムグラ	・	・	・	+	・	I
オオバノヤエムグラ	・	・	・	・	+	I
クサノテツ	・	1・1	+	・	・	Ⅱ
シラネワラビ	・	+	・	・	1・1	Ⅱ
植被率 (%)	90	90	90	90	90	
出現種数	11	10	10	9	10	

d. Belt 4 (5×30) m² トドマツ・シロエゾマツ・エゾミヤコザサ群落 (図4-5, 表4-10, 11, 12)

Belt 4 は、道有林厚岸経営区42林班のシロエゾマツ保護林に設定した。地形的には北ノ沢の源頭部で、ほぼ平坦である。

本帯状区での出現種はトドマツ・シロエゾマツ・オヒヨウ・シナノキ・キハダの5種である。このうちトドマツが本数で43%と最も多い。相対優占度ではトドマツが51%, シロエゾマツが26%で、針葉樹の合計は77%と大きくなっている。階層構造の上ではトドマツが全体にわたって分布するのに対して、シロエゾマツは樹高27mと高い個体のみからなっている。胸高断面積合計は134.51 m³/haと大きい。

林床植生では、ミヤコザサが優占度3~5と優占しているが、ほかにオンダ・シラネワラビ・フッキソウ・ゴンゲンスゲなども多くみられる。

本帯状区を設定した林分は、道有林の丘陵部で広い面積を占めている針広混交林のうち、針葉樹の多い部分である。針葉樹ではトドマツを主体にエゾマツ、まれにシロエゾマツが混生し、広葉樹ではシナノキ・ミズナラ・エゾイタヤ・ハリギリなどが混生し、林床ではシダ類あるいはササ類が優占している。なおシロエゾマツは過去に相当量伐採されており、現在では保護林とその周辺にわずかに残っているのみであるという(竹下, 1979)。

シロエゾマツ保護林の現況は(厚岸林務署1983年調), 面積 17.60 ha, シロエゾマツの本数 446 本, 平均胸高直径48cm, 蓄積は 808 m³で、他の樹種も含めると 7,570 本, 5,631 m³ (320 m³/ha) となって

いる。

表4-10 Belt 4 林床植生

Species	Distance (m)						F
	0 5	5 10	10 15	15 20	20 25	25 30	
アオダモ	+	+	+	+	+	+	V
トドマツ	+	.	.	+	.	.	II
ナナカマド	+	.	.	.	+	.	II
シウリザクラ	.	.	.	+	.	+	II
イチイ	.	+	I
ヤマモミジ	.	.	.	+	.	.	I
エゾマツ	.	.	.	+	.	.	I
エゾスグリ	+	+	.	+	.	+	IV
オガラハナ	.	.	.	+	+	.	II
エゾニワトコ	.	+	+	.	.	.	II
ツタウルシ	+	1.1	1.1	2.2	1.1	+	V
ミヤマタタビ	+	.	.	+	+	.	III
ヤマブドウ	+	+	II
ツルアジサイ	.	+	I
エゾミヤコザサ	5.5	4.4	3.3	3.3	4.4	5.5	V
フッキソウ	1.1	1.1	3.3	1.1	1.1	1.1	V
ゴンゲンソウ	1.2	+2	1.2	1.2	2.2	1.2	V
マイズルソウ	+	+	+	.	+	+	V
ヒメゴヨウイチゴ	+	+	+	+	+	.	V
ムカゴイラクサ	+	+	+	+	.	.	IV
レンブクソウ	.	.	+	+	+	.	III
コミヤマカタバミ	.	.	+	.	+	+	III
チシマアザミ	+	.	+	.	.	.	II
エゾトリカブト	.	.	.	+	+	.	II
アカミノルイヨウショウマ	.	.	.	+	+	.	II
ミミコウモリ	+	+	II
バイケイソウ	+	I
ミヤマスマ	.	.	+	.	.	.	I
タツノヒゲ	.	.	+	.	.	.	I
エゾイラクサ	+	.	I
ミヤマタニタデ	+	.	I
エゾアスマ	+	.	I
オンダ	2.2	1.1	1.1	2.2	1.1	1.1	V
シラネワラビ	+	2.2	1.1	2.2	2.2	2.2	V
ミヤマワラビ	.	+	+	+	.	.	III
ヤマドリゼンマイ	.	+	I
ホソバノトウゲシバ	.	+	I
ホソイノデ	.	.	+	.	.	.	I
藓苔類	.	.	+2	.	+2	+2	III
植被率 (%)	90	90	90	90	90	90	
出現種数	17	18	19	20	21	13	

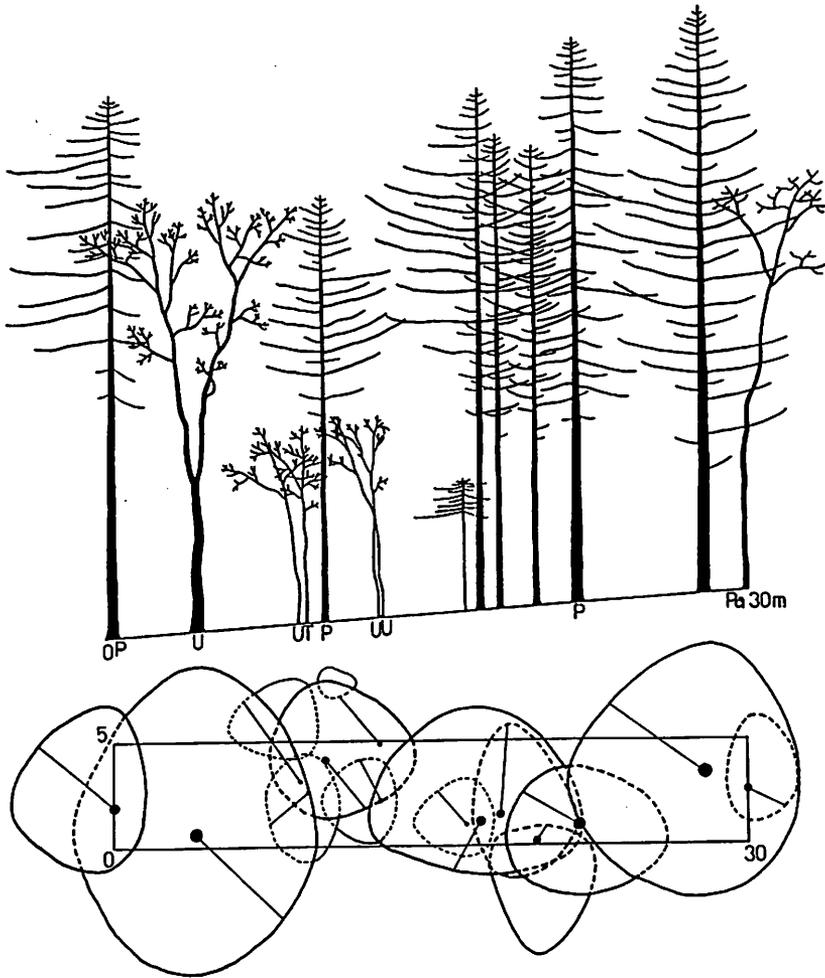


図4-5 Belt 4 (5×30) m² トドマツ・シロエゾマツ-エゾミマコザサ群落

表4-11 Belt 4 樹高階別本数表

H (m)	6	8	9	20	21	22	23	25	27	28	Total
Species	7	9	10	21	22	23	24	26	28	29	
トドマツ	1	.	.	1	.	1	1	1	.	1	6
シロエゾマツ (P)	2	.	2
オヒョウ (U)	.	1	2	.	1	4
キンダ (Pa)	1	1
シナノキ (T)	.	.	1	1
Total	1	1	3	1	1	1	1	1	2	2	14

表4-12 Belt 4 胸高直径階別本数表

Species	DBH (cm)										Total	BA (m^2/ha)	RD (%)
	6 8	8 10	10 12	34 36	36 38	40 42	52 54	58 60	66 68	74 76			
トドマツ	·	·	1	·	1	2	1	·	·	1	6	67.90	50.5
シロエゾマツ	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	2	35.21	26.1
オヒョウ	1	·	2	·	·	·	·	·	1	·	4	25.02	18.6
キンダ	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	1	6.05	4.5
シナノキ	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	1	0.33	0.3
Total	1	1	3	1	1	2	1	2	1	1	14	134.51	100.0

e. Belt 5 (5×30) m^2 アカエゾマツスゲ類-藓苔類群落 (図4-6, 表4-13, 14, 15)

Belt 5 を設定したのは、道有林厚岸経営区31班のアカエゾマツ保護林である。帯状区は、このアカエゾマツ保護林の中央部に設定した。地形的には沢の源流部で、ほぼ平坦である。

本帯状区での出現種は、アカエゾマツ・トドマツの2種で、アカエゾマツが本数で72%を占めている。樹高の分布をみると、トドマツは樹高の最大が5mで、下層のみにみられるのに対して、アカエゾマツは最大23.5mと高く、上層とともに下層でもみられる。胸高直径の分布も樹高の分布と同様に、アカエゾマツが大きく、相対優占度も99%と高くなっている。

林床植生では、全体の植被率が100%と高く、藓苔類・地衣類の植被率も50~80%と高くなっている。維管束植物では、カブスゲがいずれの区間とも優占しており、他にミズバショウが多い。林床植生の分布状態は、アカエゾマツの根元付近が50cm前後もり上がって小丘状をなし、この小丘部は藓苔類に覆われている。一方小丘の間の平坦な低地部分は、カブスゲ・ミズバショウなどの湿生植物が覆っており、滞水していた。

Belt 5 を設定した林分は、湿原系のアカエゾマツ林で、アカエゾマツスゲ類-藓苔類群落となっている。厚岸道立自然公園地域においては、本保護林以外でアカエゾマツ林の存在は確認できなかった。アカエゾマツスゲ類-藓苔類群落が沢の中央部を占め、その周辺では、上層林冠はアカエゾマツに占められてはいるものの、ササ類の侵入が多く、さらにその外周部では、周辺で広くみられる針広混交林となっており、帯状構造が認められる。また南西側は、小面積のハンノキ林と接している。

アカエゾマツ保護林の現況は(厚岸林務署1983年調)、面積4.96ha、ほぼアカエゾマツのみからなり本数228本、平均胸高直径32cm、蓄積は702 m^3 (142 m^3/ha)となっている。

表4-13 Belt 5 樹高階別本数表

Species	H (m)											Total
	2 3	3 4	4 5	5 6	6 7	10 11	13 14	15 16	18 19	22 23	23 24	
アカエゾマツ	·	2	1	2	1(1)	1	1	1	1	1	1	13(1)
トドマツ (A)	2	1	1	1	·	·	·	·	·	·	·	5
Total	2	3	2	3	1(1)	1	1	1	1	1	1	18(1)

表4-14 Belt 5 胸高直径階別本数表

Species	DBH (cm)													Total	BA (m^2/ha)	RD (%)
	2	4	6	8	10	12	16	20	28	36	40	44	50			
アカエゾマツ	·	2	1	2	1	·(1)	1	1	1	1	1	1	1	13(1)	48.94	98.8
トドマツ	2	1	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5	0.60	1.2
Total	2	3	3	2	1	1(1)	1	1	1	1	1	1	1	18(1)	49.54	100.0

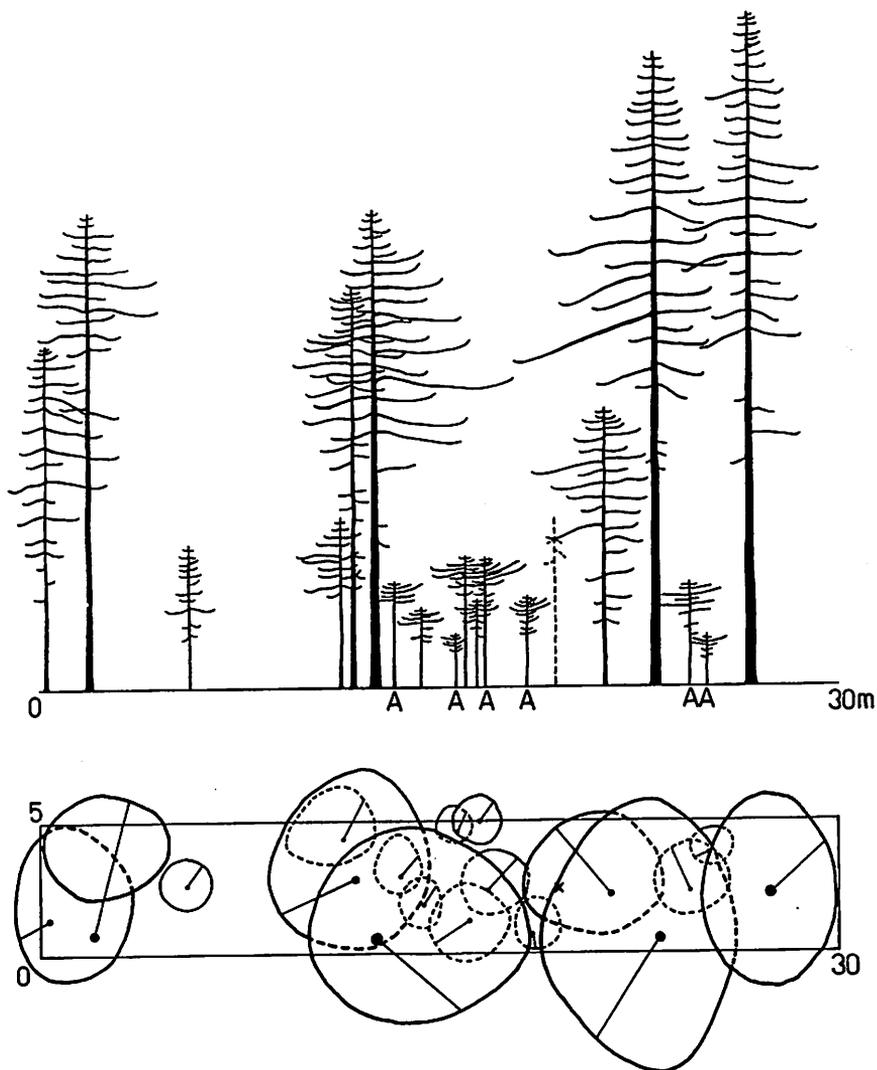


図4-6 Belt 5 (5×30) m^2 アカエゾマツ-スゲ類-藓苔類群落

表4-15 Belt 5 林床植生

Species	Distance (m)						F
	0 5	5 10	10 15	15 20	20 25	25 30	
アカエゾマツ	+	1.1	+	+	+	+	V
ナナカマド	+	+	+	+	+	·	IV
アオダモ	+	+	·	+	+	·	IV
ダケカンバ	+	+	+	·	·	·	III
トドマツ	+	+	+	·	·	·	III
ミズナラ	+	·	·	·	·	·	I
イチイ	+	·	·	·	·	·	I
オガラシナ	·	+	+	+	·	+	IV
ツタウルシ	+	+	+	+	·	+	V
ツルアジサイ	·	1.1	·	·	·	·	I
エゾミヤコザサ	·	·	1.2	+	·	·	II
カブスゲ	4.4	3.3	3.3	5.5	5.5	5.5	V
ミスシヨウ	2.2	1.1	1.1	1.1	1.1	+	V
イワノガリヤス	1.1	+	·	·	·	·	II
マイズルソウ	+	·	·	+	·	·	II
シノウイチャクソウ	+	+	·	·	·	·	II
コガネギク	+	·	·	·	·	·	I
チンマアザミ	+	·	·	·	·	·	I
モウセンゴケ	+	·	·	·	·	·	I
コミヤマカタバミ	·	+	·	·	·	·	I
ヒメゴウイチゴ	·	·	+	·	·	·	I
ヤマドリゼンマイ	+	·	·	·	·	+	II
ミズゴケ類	2.3	1.2	1.2	2.2	1.2	1.2	V
蘚苔類	4.4	3.3	4.4	4.4	3.3	3.3	V
植被率(%) 維管束植物	60	60	50	80	80	80	
蘚苔類	80	50	60	70	60	60	
Total	100	100	100	100	100	100	
出現種数	17	13	10	8	5	6	

蘚苔類は、ミズゴケ類とそれ以外の蘚苔類に分けて優占度・群度を示した。

f. Belt 6 (5×30)m² トドマツ-イチイ-エゾミヤコザサ群落(図4-7, 表4-16, 17, 18)

Belt 6 を設定した林分は、道有林厚岸経営区42林班のイチイ保護林に指定されている。地形的には、北ノ沢の源頭部で、ほぼ平坦となっている。前述したシロエゾマツ保護林とは近い位置にある。

本帯状区での出現種は、イチイ・トドマツ・オヒヨウの3種で、このうち本数ではイチイが64%と最も多い。樹高の分布ではトドマツの最大が23mであるのに対して、イチイは14mと低く、トドマツの上層林冠の下層にイチイが分布している。相対優占度では、イチイが57%と優占しているものの、トドマツも43%と高い値を示している。

林床植生では、全区間をとおしてみると、エゾミヤコザサが優占している。しかし、区間によってはシラネワラビ・オンダが多くなり、シダ類が優占するようになり、ほかにゴンゲンスゲが多い。

本帯状区は、上層林冠をトドマツが構成し、中層をイチイが占めるトドマツ-イチイ-ミヤコザサ群落といえる。周辺は針広混交林で、保護林として残された結果、イチイが現在も多く、部分的には上層のトドマツを欠き、イチイ純林といえる部分もある。舘脇・田下(1937)の調査結果では、林床ではシ

ダ類が優占していたが、今回の結果ではシダ類も多いもののエゾミヤコザサが優占しており、林床が明るくなり、周辺からエゾミヤコザサの侵入してきた結果であろう。

イチイ保護林の現況は(厚岸林務署1983年調)、面積1.76ha、イチイは本数280本、平均胸高直径30cmで、蓄積は86m³(49m³/ha)となっている。

表4-16 Belt 6 林床植生

Distance (m)	0	5	10	15	20	25	F
	5	10	15	20	25	30	
アオダモ	+	+	+	+	+	+	V
ナナカマド	+	+	+	·	1·1	2·2	V
シウリザクラ	+	+	·	+	·	·	Ⅲ
イチイ	·	+	+	+	·	·	Ⅲ
オオヤマザクラ	+	·	+	·	·	·	Ⅱ
ハリギリ	·	+	·	·	·	+	Ⅱ
シナノキ	·	+	·	·	·	·	I
トドマツ	·	+	·	·	·	·	I
カツラ	·	·	+	·	·	·	I
エゾイタヤ	·	·	·	·	+	·	I
エゾスグリ	·	·	+	·	·	+	Ⅱ
ヒロハノツリバナ	·	+	·	·	·	·	I
ツルアジサイ	+	1·1	+	+	·	+	V
ミヤマタタビ	+	+	+	+	·	·	Ⅳ
ツタウルシ	·	+	+	+	·	+	Ⅳ
イヌツルウメモドキ	·	+	·	·	+	·	Ⅱ
エゾイチゴ	·	·	+	·	·	·	I
エゾミヤコザサ	2·2	3·3	4·4	4·4	5·5	4·4	V
ゴンゲンスゲ	2·2	2·3	1·2	1·1	1·1	+	V
フッキソウ	+	+	+	+	1·1	1·1	V
オククルマムグラ	·	+	1·1	+	+	+	V
ミヤマタニタデ	+	+	+	+	+	+2	V
ヒメゴヨウイチゴ	+	+	+	+	·	+	V
コミヤマカタバミ	+	+	+	+	+	+	V
ミミコウモリ	+	·	·	·	+	+	Ⅲ
エンレイソウ sp.	+	·	·	+	·	+	Ⅲ
レンブクソウ	·	·	+	·	+	·	Ⅱ
ミヤマムグラ	·	·	+	+	·	·	Ⅱ
クルマバソウ	·	·	·	·	+	+	Ⅱ
ムカゴイラクサ	·	·	+	·	·	·	I
エゾフスマ	·	·	+	·	·	·	I
ミヤマスマレ	·	·	+	·	·	·	I
アカミノレイヨウシヨウマ	·	·	·	+	·	·	I
ヤブニンジン	·	·	·	·	+	·	I
シラネワラビ	3·3	3·3	3·3	3·3	3·3	2·2	V
オンダ	3·3	1·1	+	1·1	1·1	2·2	V
ホソバノトウゲシバ	·	·	+	+	+	+	Ⅳ
ホソイノデ	·	·	+	·	·	·	I
ミヤマシケンダ	·	·	+	·	·	·	I
イワガネゼンマイ	·	·	·	·	·	+	I
蘚苔類	·	+2	·	+	+	+2	Ⅳ
植被率 (%)	80	80	80	80	90	90	
出現種数	16	22	27	20	18	21	

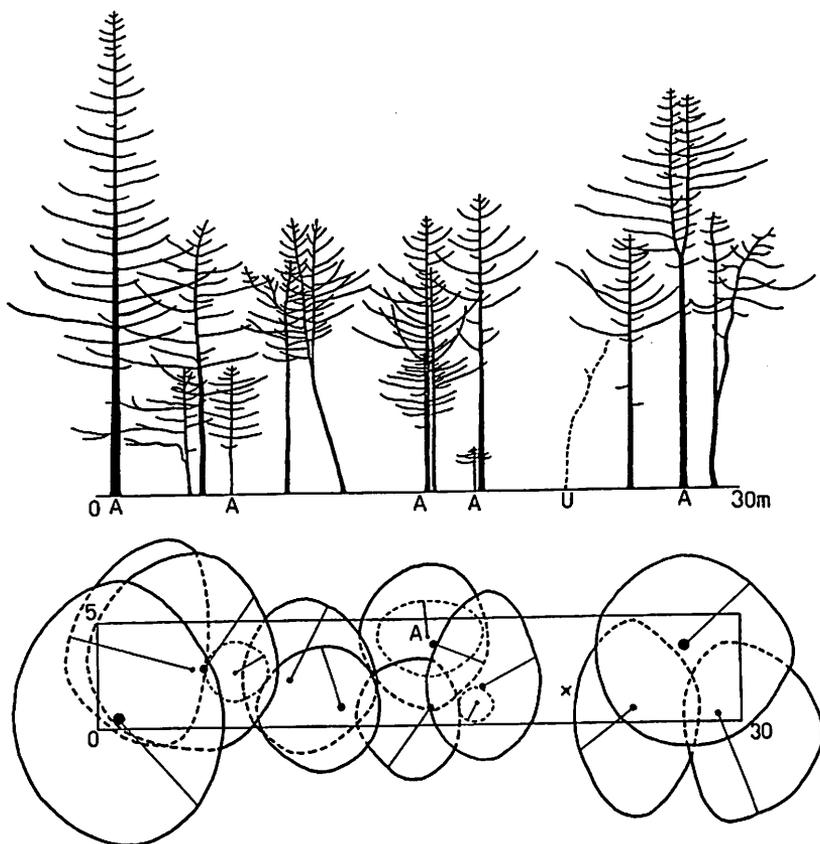


図4-7 Belt 6 (5×30) m² トドマツ-イチイ-エゾミヤコザサ群落

表4-17 Belt 6 樹高階別本数表

H (m)	2	6	7	10	11	12	13	14	19	23	Total
Species	3	7	8	11	12	13	14	15	20	24	
イチイ	·	1	·	1	1	1	4	1	·	·	9
トドマツ (A)	1	2	·	·	·	·	·	·	1	1	5
オヒョウ (U)	·	·	·(1)	·	·	·	·	·	·	·	·(1)
Total	1	3	·(1)	1	1	1	4	1	1	1	14(1)

表4-18 Belt 6 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	2	6	12	20	28	30	32	36	38	48	64	Total	BA (m ² /ha)	RD (%)
Species	4	8	14	22	30	32	34	38	40	50	66			
イチイ	·	·	·	1	1	3	2	1	1	·	·	9	46.96	56.4
トドマツ	1	1	1	·	·	·	·	·	·	1	1	5	35.86	43.3
オヒョウ	·	·	·	·	·(1)	·	·	·	·	·	·	·(1)		
Total	1	1	1	1	1(1)	3	2	1	2	1	1	14(1)	82.82	100.0

g. Belt 7 (5 × 30) m² ヤチダモ-アキタブキ群落〔図4-8, 表4-19, 20, 21〕

本帯状区を設定した林分は、道有林厚岸経営区42林班である。地形的には、北ノ沢の上流部の谷底部で、ほぼ平坦である。

Belt 7 での出現種はヤチダモ・ケヤマハンノキ・カツラ・エゾイタヤの4種で、このうちヤチダモが67%を占めている。樹高の分布をみると、樹高22m以上の個体はいずれもヤチダモで、他の樹種よりぬきんでて高くなっており、樹高14~17mの中層に他の樹種が分布している。相対優占度では、ヤチダモが61%ともっとも高い。

林床植生では、植被率が70~80%と低く、アキタブキが優占しており、他にキツリフネ・ムカゴイラクサも多く出現している。

Belt 7 を設定した林分は、ヤチダモ-アキタブキ群落とみなせる。沢の下流部ではハンノキ林となっている。林床植生は、つぎに述べるハンノキ林とはまったく異なる。また立地は泥炭地ではなく、上流からの土砂の堆積した部分である。厚岸林務署管内においては、かつては沢ぞいにヤチダモ林が発達していたといわれている。しかし、現在はほとんど伐採されて、発達したヤチダモ林は認められない。Belt 7 を設定した林分においても面積が小さく、造林地と接しており、また中層にケヤマハンノキ・カツラ・エゾイタヤがみられることから、人為の影響を受けているものと考えられる。

表4-19 Belt 7 樹高階別本数表

H (m)	3	5	14	15	16	22	23	24	25	Total
Species	4	6	15	16	17	23	24	25	26	
ヤチダモ	1	1	·	·	·	1	1	1	1	6
ケヤマハンノキ (A)	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1
カツラ (C)	·	·	1	·	·	·	·	·	·	1
エゾイタヤ (Am)	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1
Total	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9

表4-20 Belt 7 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	2	4	28	36	40	44	48	Total	BA	RD
Species	4	6	30	38	42	46	50		(m ² /ha)	(%)
ヤチダモ	1	1	·	2	1	·	1	6	34.48	60.9
ケヤマハンノキ	·	·	·	·	·	1	·	1	10.60	18.8
カツラ	·	·	·	1	·	·	·	1	7.16	12.6
エゾイタヤ	·	·	1	·	·	·	·	1	4.40	7.7
Total	1	1	1	3	1	1	1	9	56.64	100.0

表4-21 Belt 7 林床植生

Distance (m)	0	5	10	15	20	25	F
	5	10	15	20	25	30	
エゾニワトコ	・	・	・	1・1	1	+	II
ハンドイ	+	・	・	・	・	・	I
マユミ	・	・	・	・	・	+	I
エゾスグリ	・	・	・	・	・	+	I
アキタブキ	4・4	4・4	4・4	3・3	3・3	2・2	V
キツリフネ	1・1	1・1	2・2	2・2	3・3	3・3	V
ムカゴイラクサ	2・2	2・2	2・2	2・2	1・1	2・2	V
エゾイラクサ	1・1	+	1・1	+	+	1・1	V
ナガミノツルキケマン	+	+	+	+	1・1	・	V
ヨブスマソウ	+	+	+	+	+	+	V
フッキソウ	+	+	+	+	+	+	V
コンロンソウ	+	+	+	+	+	・	V
タツノヒゲ	1・2	+	+	・	・	・	III
オオハナウド	+	+	・	・	・	+	III
チシマアザミ	・	+	+	・	・	・	III
オオアマドコロ	・	・	+	・	+	+	III
ミズシショウ	+	+	・	・	・	・	II
ミヤマニガウリ	+	・	・	+	・	・	II
コガネギク	・	・	+	+	・	・	II
オククルマムグラ	・	・	+	+	・	・	II
ミミコウモリ	・	・	+	+	・	・	II
アオスゲ	・	・	1・2	・	・	・	I
エゾトリカブト	・	+	・	・	・	・	I
オオウハユリ	・	・	+	・	・	・	I
ウマノミツバ	・	・	+	・	・	・	I
オニシモツケ	・	・	+	・	・	・	I
ミゾソバ	・	・	+	・	・	・	I
ハンゴンソウ	・	・	・	・	・	+	I
オンダ	・	+	1・1	+	+	1・1	V
ミヤマンケシダ	・	・	+	+	+	+	IV
ミゾシダ	・	・	+	+	・	・	II
シラネワラビ	・	・	・	+	+	・	II
藓苔類	+	+	+	+	・	・	IV
植被率 (%)	70	70	80	70	70	70	
出現種数	14	15	23	19	12	14	

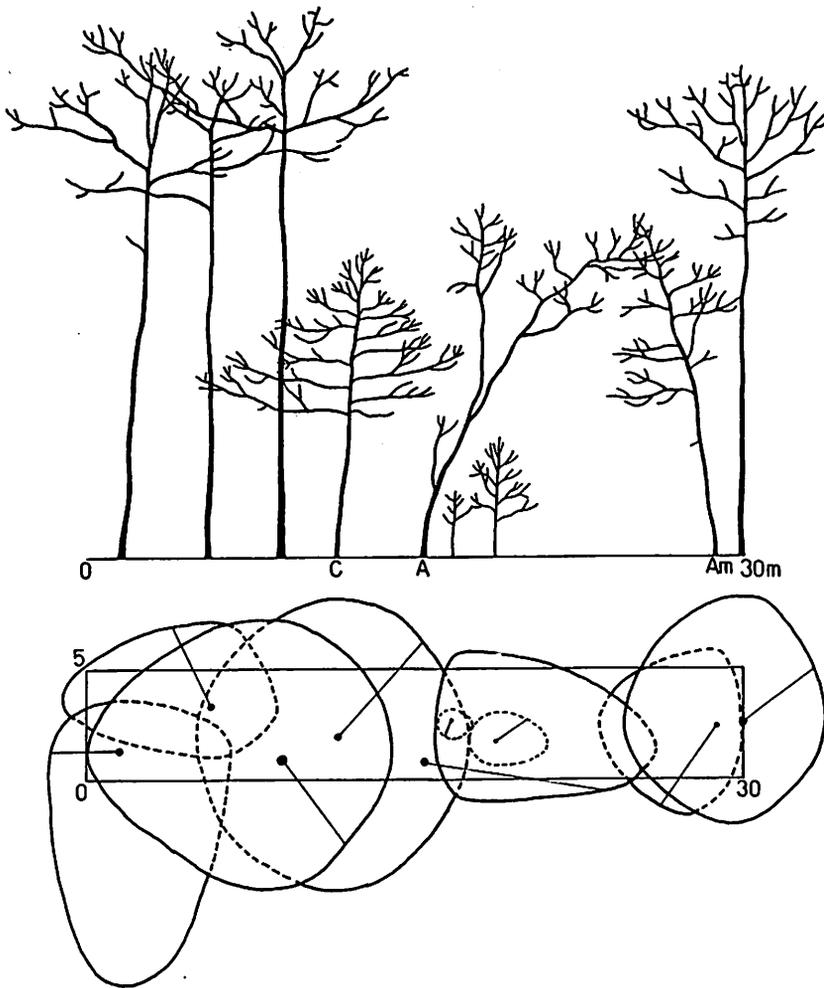


図4-8 Belt 7 (5×30) m² ヤチダモ-アキタブキ群落

h. Belt 8 (5×25) m² ハンノキーヨシ群落〔図4-9, 表4-22, 23, 24〕

Belt 8 は、厚岸湖東岸のトキタイ川下流域に広がる湿地帯に設定した。

出現種はハンノキのみで、立木密度は 1,360 本/ha である。ハンノキの樹高の最大は 13 m で、樹高 12 ~ 14 m に全体の 53% が集中的に分布しており、一層林としての相観を呈している。

林床植生では、絶対的な優占種はなく、ヨシ・カブスゲ・ニッコウシダ・エゾメシダがともに優占している。

ハンノキ林は、厚岸湖周辺だけでなく、霧多布湿原や火散布沼・藻散布沼周辺の湿原に広く認められる。帯状区を設定した林分は、樹高 13 m 前後で、比較的高いものであるが、湿原の中央部に向かうとともに樹高を減じ、樹高 2 m 程度のハンノキの疎林も広くみられる。

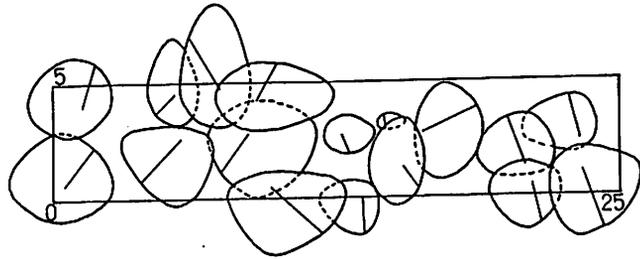
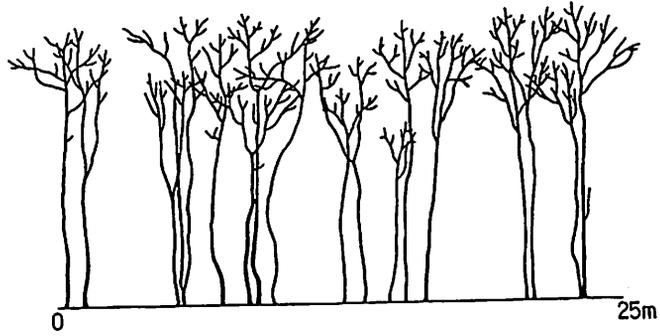


図4-9 Belt 8 (5×25) m² ハンノキ-ヨシ群落

表4-22 Belt 8 樹高階別本数表

H (m)	8	9	10	11	12	13	Total
Species	9	10	11	12	13	14	
ハンノキ	1	1	3	3	5	4	17

表4-23 Belt 8 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	10	12	14	16	18	20	22	Total	BA (m ² /ha)	RD (%)
Species	12	14	16	18	20	22	24			
ハンノキ	1	0	6	4	1	2	3	17	33.13	100.0

表4-24 Belt 8 林床植生

Distance (m)	0	5	10	15	20	F
Species	5	10	15	20	25	
ヤチダモ	+	+	+	·	·	Ⅲ
ハンノキ	·	1·1	·	·	·	I
ホザキンモツケ	2·2	1·1	·	2·2	1·1	Ⅳ
カラコギカエデ	·	·	·	·	+	I
ツタウルシ	+	·	·	+	·	Ⅱ
ヨシ	3·3	2·2	2·2	3·3	2·2	V
カブスゲ	3·3	3·3	2·2	2·2	3·3	V
イワノガリヤス	1·1	+	1·1	1·1	1·1	V
コガネギク	+	+	1·1	+	+	V
エゾシロネ	+	+	+	+	+	V
ツリフネソウ	+	+	+	+	+	V
クサレダマ	+	+	+	+	+	V
ハンゴンソウ	+	+	+	+	+	V
ヒメナミキ	+	+	+	·	+	Ⅳ
エゾイヌゴマ	+	·	+	+	+	Ⅳ
アキカラマツ	·	+	+	+	+	Ⅳ
オオヤマアスマ	+	·	·	+	+	Ⅲ
エゾゴマナ	+	+	·	+	·	Ⅲ
ヒメゴヨウイチゴ	+	+	·	·	·	Ⅱ
ナガボノシロワレモコウ	·	+	·	·	+	Ⅱ
エゾイチゴ	+	·	·	·	+	Ⅱ
エンコウソウ	·	·	·	+	+	Ⅱ
ホソバノヨツバムグラ	·	·	·	+	+	Ⅱ
ミゾソバ	+	·	·	·	·	I
ドクゼリ	·	+	·	·	·	I
アキノウナギツカミ	·	·	·	+	·	I
ヒメシロネ	·	·	·	+	·	I
ニッコウシダ	2·2	1·1	3·3	1·1	3·3	V
エゾメシダ	3·3	2·2	3·3	2·2	2·2	V
コウヤワラビ	+	+	+	+	+	V
ミズドクサ	+	1·1	1·1	·	1·1	Ⅳ
ヒメシダ	+	+	·	+	1·1	Ⅳ
ヤマドリゼンマイ	·	1·1	1·1	2·2	·	Ⅲ
スキナ	·	+	+	+	·	Ⅲ
藓苔類	1·2	1·2	+	2·2	1·2	V
植被率 (%)	90	90	90	90	80	
出現種数	24	25	19	25	24	

i. Belt 9 (5×30)m² トドマツ・シナノキ-シダ類群落 [図4-10, 表4-25, 26, 27]

本帯状区を設定した林分は、道有林厚岸経営区20林班で、厚岸湖の北岸である。周辺の林分は針広混交林であるが、最近伐採され、傾斜20〜30°の急斜面に残された林分である。

Belt 9 での出現種はトドマツ・シナノキ・ハリギリ・イチイ・アオダモ・ナナカマドの6種である。本数の上ではアオダモが56%と半分以上を占め、ついでナナカマドが21%と多い。一方相対優占度をみると、20%以上を占めているのはトドマツ・シナノキ・ハリギリの3種で、このうちトドマツが40%ともっとも高い値を示している。樹高の分布では、もっとも本数の多いアオダモはいずれも樹高8 m以下

で、樹高20m以上の個体はトドマツ・シナノキ・ハリギリからなっている。

林床植生では、単一の優占種は存在せず、オンダ・シラネワラビ・ツタウルシ・ゴンゲンスゲがともに優占している。

Belt 9 を設定した林分は、トドマツとシナノキ・ハリギリなどからなる針広混交林である。茶内道有林では、針広混交林が丘陵地を広く覆っており、その一例である。

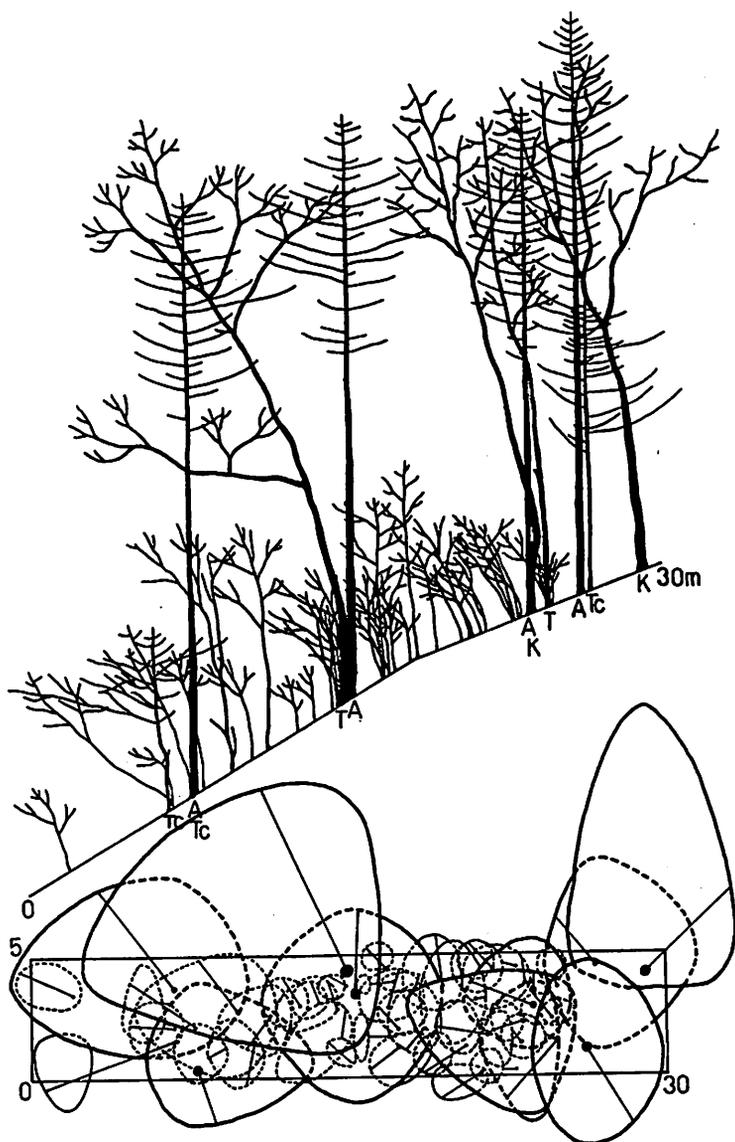


図4-10 Belt 9 (5×30) m² トドマツ・シナノキ・オンダ類群落

表4-25 Belt 9 林床植生

Species	Distance (m)						F
	0 5	5 10	10 15	15 20	20 25	25 30	
アオダモ	+	+	+	1・1	+	1・1	V
イチイ	+	・	+	+	+	+	V
エゾイタヤ	+	・	+	+	・	+	IV
ヤマモミジ	・	・	+	+	+	+	IV
シナノキ	・	・	+	+	+	・	III
トドマツ	・	+	・	・	・	+	II
ナナカマド	・	+	・	・	・	・	I
シウリザクラ	・	・	+	・	・	・	I
サワシバ	・	・	・	+	・	・	I
オガラシナ	+	+	1・1	+	+	・	V
ノリウツギ	・	+	1・1	・	・	+	III
ツタウルシ	2・2	2・2	3・3	3・3	3・3	3・3	V
ツルアジサイ	+	1・1	+	+	+	+	V
ミヤマタタビ	・	1・1	1・1	+	+	・	IV
チョウセンゴミシ	・	・	・	+	2・2	1・1	III
イヌツルウメモドキ	+	+	・	+	・	・	II
ゴンゲンスゲ	1・2	1・2	1・2	2・3	2・2	1・2	V
ヤマブキシヨウマ	1・1	+	1・1	2・2	1・1	・	V
マイズルソウ	1・1	1・1	+	+	1・1	・	V
ヒメゴヨウイチゴ	+	・	+	+	1・1	+	V
サラシナショウマ	+	+	+	+	+	+	V
コミヤマカタバミ	+	・	+	+	+	+	V
エゾトリカブト	+	+	+	+	+	・	V
エゾクロクモソウ	1・1	1・1	+	・	+	・	IV
ミヤマタニタデ	+	・	・	+	・	+	III
ムカゴイラクサ	+	+	・	・	+	・	III
ミヤマムグラ	+	+	+	・	・	・	III
ミヤマスマ	・	+	+	+	・	・	III
オオアマドコロ	・	・	+	・	+	+	III
ヒメイチナゲ	・	・	・	+	+	+	III
ミミコウモリ	+	+	・	・	・	・	II
エゾフスマ	+	+	・	・	・	・	II
コンロンソウ	+	+	・	・	・	・	II
キツリフネ	+	・	+	・	・	・	II
エゾオオサクラソウ	+	・	+	・	・	・	II
ミヤマハンショウヅル	・	・	・	・	+	+	II
アキカラマツ	+	・	・	・	・	・	I
オオハナウド	+	・	・	・	・	・	I
タツノヒゲ	・	+	・	・	・	・	I
タカネフタバラン	・	+	・	・	・	・	I
エンレイソウ sp.	・	・	・	・	+	・	I
オンダ	3・3	2・2	2・2	1・1	1・1	+	V
シラネワラビ	1・1	3・3	1・1	2・2	1・1	2・2	V
ミヤマワラビ	+	・	・	+	+	+	IV
ホソバノトウゲシバ	・	+	+	・	+	+	IV
クジャクンダ	+	+	+	・	・	・	III
ミヤマケンダ	+	+	+	・	・	・	III
ヘビノネゴザ	+	+	・	・	・	・	II
ジュウモンジシダ	+	・	+	・	・	・	II
ホソイノデ	+	・	・	・	・	・	I
ホソバシケンダ	+	・	・	・	・	・	I
ヒメスギラン	・	+	・	・	・	・	I
藓苔類	1・2	・	1・2	・	+2	+	IV
地衣類	+2	・	+	・	・	・	II
植被率 (%)	60	50	70	60	60	40	
出現種数	35	30	32	25	27	27	

表4-26 Belt 9 樹高階別本数表

H (m)	2	3	4	5	6	7	8	9	12	20	21	22	24	25	Total
Species	3	4	5	6	7	8	9	10	13	21	22	23	25	26	
トドマツ (A)	1	.	2	1	4
シナノキ (T)	1	.	.	1	.	2
ハリギリ (K)	2	.	.	2
イチイ (Tc)	2	.	.	1	3
アオダモ	7	9	6	3	1	.	1	27
ナナカマド	1	3	2	1	.	1	1	1	10
Total	8	12	8	4	1	3	2	1	1	1	1	2	3	1	48

表4-27 Belt 9 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	0	2	4	6	8	10	12	20	24	34	36	40	42	46	60	Total	BA (m^2/ha)	RD (%)
Species	2	4	6	8	10	12	14	22	26	36	38	42	44	48	62			
トドマツ	1	.	2	1	.	.	4	32.83	39.8
シナノキ	1	1	2	21.78	26.4
ハリギリ	1	.	.	1	.	2	18.34	22.2
イチイ	1	1	1	3	6.33	7.7
アオダモ	3	13	8	2	.	1	27	2.08	2.5
ナナカマド	.	5	2	1	2	10	1.16	1.4
Total	3	18	10	3	2	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	48	82.52	100.0

j. Belt 10 (5×30)m² ミズナラーエゾミヤコザサ群落〔図4-11, 表4-28, 29, 30〕

Belt 10を設定した林分は、道有林厚岸経営区5林班、海岸線から約500mはなれた標高100mの台地上で、道道厚岸・浜中線の南側である。

出現種はミズナラ・ダケカンバ・アオダモの3種で、本数ではミズナラが80%と大半を占めている。また相対優占度では、ミズナラが90%となっている。樹高の最大はダケカンバの13.5mと低いが、樹高12m前後の個体が多く、9m未満の個体はアオダモの1個体のみである。胸高断面積合計は41.10 m²/haで、樹高のわりには大きくなっている。樹形は図4-11でみられるように、短直幹型(館脇, 1953)を示している。

林床植生では、いずれの区間ともエゾミヤコザサが優占度5で、完全に林床を覆っている。他の出現種は比較的少ないが、シラネワラビ・ヤマドリゼンマイ・オンダなどのシダ類がやや多い。

Belt 10を設定した林分は、ミズナラーエゾミヤコザサ群落で、比較的海岸線近くにあり、ダケカンバと同様な位置にある。厚岸地区では、道道の南側において、ダケカンバ林ほどではないが、広くみられる林分である。

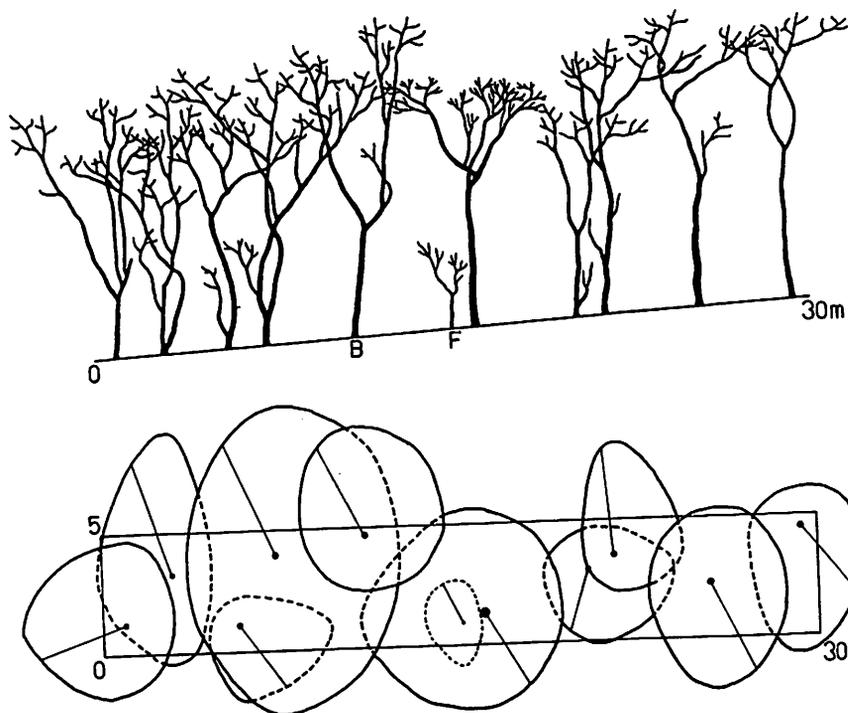


図4-11 Belt 10 (5×30) m² ミズナラ-エゾミヤコザサ群落

表4-28 Belt 10 樹高階別本数表

H (m)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	Total
Species	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
ミズナラ	1	2	2	4	.	9
ダケカンバ (B)	1	1
アオダモ (F)	1	1
Total	1	1	2	2	4	1	11

表4-29 Belt 10 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	4	20	22	24	26	28	30	38	Total	BA (m ² /ha)	RD (%)
Species	6	22	24	26	28	30	32	40			
ミズナラ	.	1	1	1	3	.	2	1	9	37.15	90.4
ダケカンバ	1	.	.	.	1	3.82	9.3
アオダモ	1	1	0.13	0.3
Total	1	1	1	1	4	.	2	1	11	41.10	100.0

表4-30 Belt 10 林床植生

Distance (m)	0	5	10	15	20	25	F
	5	10	15	20	25	30	
エゾイタヤ	+	I
アオダモ	.	.	+	.	.	.	I
ツタウルン	+	+	1.1	1.1	1.1	1.1	V
イヌツルウメモドキ	+	+	+	1.1	.	.	IV
チョウセンゴミシ	.	.	.	+	+	+	III
ミヤママタタビ	+	I
エゾミヤコザサ	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	V
イワノガリヤス	+	1.1	1.1	1.1	1.1	+	V
バイケイソウ	+	+	+	+	+	+	V
キンミズヒキ	+	+	+	+	+	+	V
ヤブニンジン	+	+	+	+	+	+	V
ヤマブキショウマ	+	+	+	+	+	+	V
ヒメゴヨウイチゴ	+	+	+	+	.	+	V
ミミコウモリ	+	+	+	.	+	+	V
アキカラマツ	.	.	1.1	+	+	+	IV
ヒゴクサ	.	+	.	+	1.1	.	III
チンマアザミ	+	+	+	.	.	.	III
エゾノタチツボスミレ	.	.	+	.	+	.	II
エゾイチゴ	+	I
エゾクサイチゴ	.	+	I
コガネキク	.	.	+	.	.	.	I
ツマトリソウ	+	.	I
エゾオオサクラソウ	+	I
シラネウラボ	2.2	2.2	2.2	2.2	1.1	2.2	V
ヤマドリゼンマイ	1.1	2.2	+	1.1	2.2	1.1	V
オンダ	.	.	+	.	2.2	1.1	III
ヘビノネゴザ	1.1	.	.	+	.	.	II
エゾメシダ	+	I
ミヤマノキノブ	.	.	+	.	.	.	I
植被率 (%)	90	90	90	90	90	90	
出現種数	16	15	19	15	16	17	

k. Belt IIb (45×5) m² ミヤマハンノキ林〔図4-12, 表4-31, 32〕(館脇ら, 1953)

以下館脇ら(1953, 1954)が, 厚岸地区で行なった防霧林の調査結果の一部を引用する。

本帯状区を設定したのは厚岸事業区5林班で, チンペの東方台地の草原から稜線にかけて存在するミヤマハンノキ林で, もっとも海側に位置している。

林木はミヤマハンノキのみからなり, 海側の部分では密度が低く, 樹高も1 m程度と低いが, 帯状区の終点付近では樹高5 mに達している。ミヤマハンノキは多幹型をなしており, 胸高直径は2~4 cmであるが, 高さ0.3 mの位置での株径は最大で90 cmに達し, 1株あたりの本数は1~13本となっていた。

林床植生の植被率は低く, チンマヤマブキショウマが多く, 放牧の影響を強く受けている。

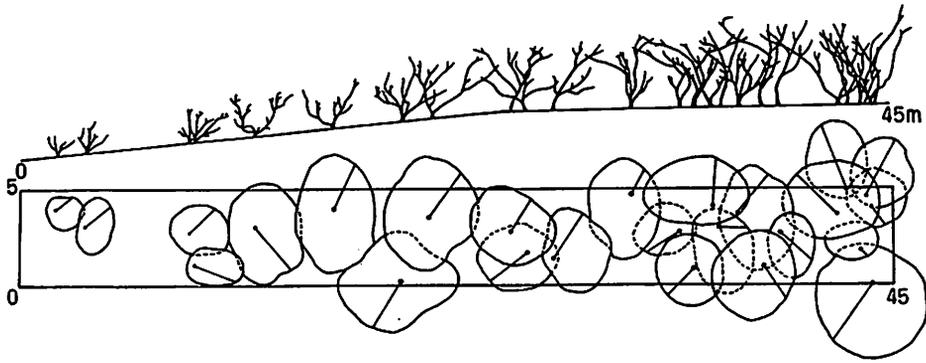


図4-12 Belt II b (45×5)m² ミヤマハンノキ林

表4-31 Belt II b 林床植生

Distance (m)	0	5	10	15	20	25	30	35	40
Species	5	10	15	20	25	30	35	40	45
アイヌミヤコザサ	2	1	1	1	+	·	1	·	·
チンマヤマブキシヨウマ	1	2	2	2	+	1	1	2	2
エゾクサイチゴ	+	+	·	+	1	1	+	·	·
キンミズヒキ	+	·	+	+	1	·	1	+	·
オオハコ	+	·	·	·	+	+	+	+	1
ヒオウキアヤメ	+	·	+	·	+	·	+	·	+
シロワレモコウ	1	1	+	·	·	+	·	·	·
ハマフウロ	1	1	+	·	·	·	·	+	·
ヒメシダ	+	·	·	+	·	·	·	+	·
オオウシノケグサ	+	+	·	·	·	·	·	·	·
ヤマハハコ	+	+	·	·	·	·	·	·	·
ハンゴンソウ	·	+	·	·	·	1	·	·	+
アイスキンボウゲ	·	+	·	·	·	·	·	·	+
オオダイコンソウ	·	+	·	·	·	·	·	·	·
ホソバクサフジ	·	+	·	·	·	·	·	·	·
ウマノミツバ	·	·	+	·	+	·	·	+	·
コウヤワラビ	·	·	+	·	·	+	·	·	·
オトギリソウ	·	·	+	·	·	·	·	·	·
カラフトダイコンソウ	·	·	·	+	1	·	·	+	+
メシダ	·	·	·	1	·	·	·	1	1
エゾヨモギ	·	·	·	+	·	·	+	·	·
ナガバサ	·	·	·	·	1	+	+	1	2
クルマムグラ	·	·	·	·	·	1	·	·	·
イワノガリヤス	·	·	·	·	·	1	·	·	·
エゾシロネ	·	·	·	·	·	·	·	+	·
シロツメクサ	·	·	·	·	·	·	·	·	1
ヒメジョオン	·	·	·	·	·	·	·	·	+
マイズルソウ	·	·	·	·	·	·	·	·	+
エゾウツボグサ	·	·	·	·	·	·	·	·	+
ヤマキツネノボタン	·	·	·	·	·	·	·	·	+

表4-32 Belt IIb 樹高階別本数表

H (m)	1	2	3	4	Total
Species	2	3	4	5	
ミヤマハシノキ	1	8	9	7	25

1. Belt IIIa (80×5) m² ミズナラ林〔図4-13, 表4-33, 34〕(館脇ら, 1953)

本帯状区は、浜中町榊町の北方で、海に面した丘陵の末端部に設定した。

林木の出現種はミズナラ・ダケカンバの2種で、本数ではミズナラが95%と大半を占めている。帯状区の起点付近では樹高1~2mと低く風衝樹形を示すが、終点付近では10m以上に達している。

林床植生は過放牧のためササ類が減退し、後にチモシーを粗放的に播種したため、チモシーの他、ノブキ・アイヌミヤコザサ・ツリガネニンジンなどが多く、過放牧の指標植物や不食草がみられた。

表4-33 Belt IIIa 樹高階別本数表

H (m)	0	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	Total
Species	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ミズナラ	3	2	8	3	7	5	6	1	1	1	·	37
ダケカンバ (B)	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	2
Total	3	2	8	3	7	5	6	1	1	1	2	39

表4-34 Belt IIIa 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	32	Total
Species	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	34	
ミズナラ	4	3	2	5	4	7	2	4	3	2	1	·	·	37
ダケカンバ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	2
Total	4	3	2	5	4	7	2	4	3	2	1	1	1	39

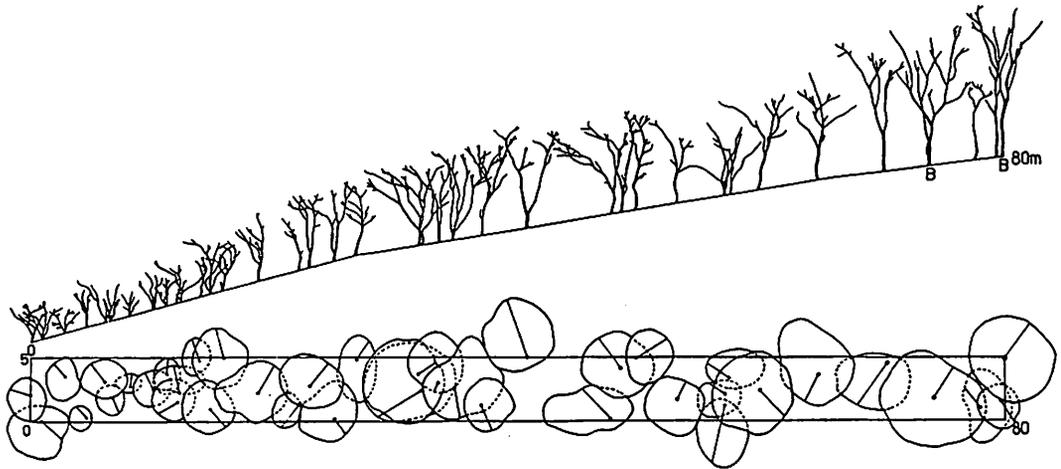


図4-13 Belt III a (80×5) m² ミズナラ林

m. Belt II d (45×5) m² ダケカンバ林〔図4-14, 表4-35, 36, 37〕(館脇ら, 1953)

本帯状区は、厚岸事業区47林班、鯨浜東方台地の風衝型のダケカンバ林に設定した。

林木ではダケカンバが優勢で、ミズナラ・ケヤマハンノキなどを混生している。樹高は海側で3 mであるが、終点付近では10 m以上となっている。樹形は風衝型を示し、ダケカンバでは比較的通直であるが、混生するミズナラでは風衝型を顕著に示している。

林床ではアイヌミヤコザサがもっとも多いものの、放牧の影響で減少し、被度は平均1に達せず、チシマヤマブキシヨウマ・ノブキなどの不食草が繁茂している。

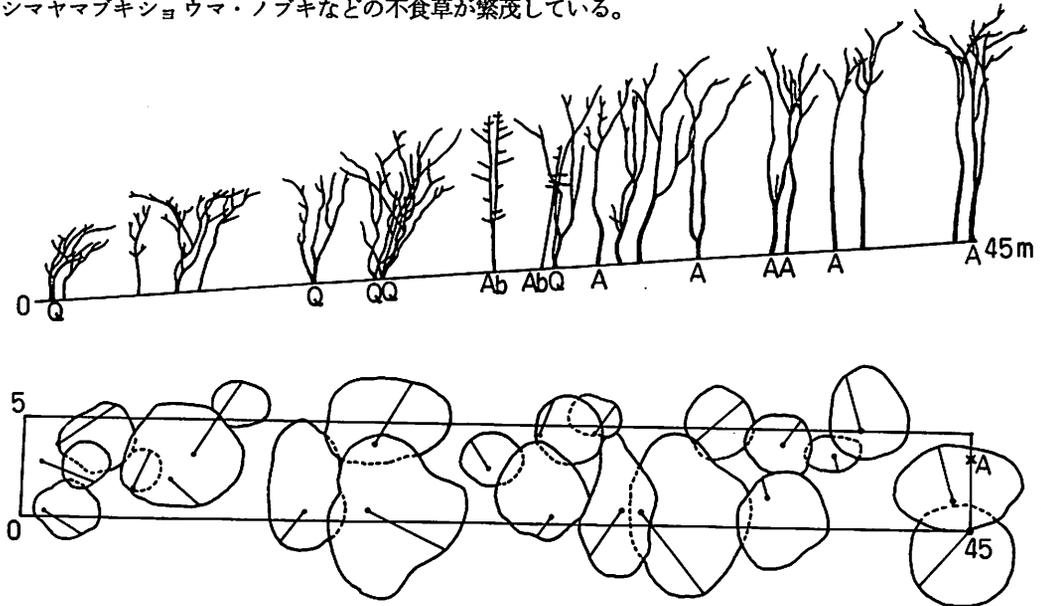


図4-14 Belt II d (45×5) m² ダケカンバ林

表4-35 Belt Id 林床植生

Species	Distance (m)									
	0 }	5 }	10 }	15 }	20 }	25 }	30 }	35 }	40 }	45 }
キンミズヒキ	+	+	1	·	·	·	·	1	1	
オオブキ	+	1	1	2	·	·	·	+	·	
オオダイコンソウ	+	·	+	+	+	·	2	·	·	
チンマヤブキンヨウマ	+	2	·	·	2	·	·	·	+	
オオハコ	+	·	+	+	·	·	+	·	·	
シロツメクサ	1	+	·	·	·	·	·	·	·	
ヤマヌカボ	+	·	·	+	·	·	·	·	·	
エゾウツボグサ	4	·	·	·	·	·	·	·	·	
ヒメイ	+	·	·	·	·	·	·	·	·	
アイヌタチツボスミレ	+	·	·	·	·	·	·	·	·	
オオウシノケグサ	+	·	·	·	·	·	·	·	·	
エゾクサイチゴ	·	1	+	+	1	+	+	2	+	
アイヌミヤコザサ	·	1	2	·	1	·	2	1	1	
ナガハグサ	·	2	1	·	1	1	·	·	·	
チンマアザミ	·	+	+	+	·	·	·	·	·	
アイヌキンボウゲ	·	+	+	·	·	·	·	·	·	
クルマユリ	·	+	·	·	+	·	·	·	·	
メシダ	·	1	·	·	·	·	·	·	·	
マルバトウキ	·	+	·	·	·	·	·	·	·	
シオガマギク	·	+	·	·	·	·	·	·	·	
エゾタカラコウ	·	+	·	·	·	·	·	·	·	
シロワレモコウ	·	+	·	·	·	·	·	·	·	
マイズレソウ	·	+	·	·	·	·	·	·	·	
ミミコウモリ	·	·	+	+	·	2	+	+	3	
ノブキ	·	·	+	+	2	+	+	1	·	
イワノガリヤス	·	·	+	+	+	1	·	·	1	
ウラゲヨブスマソウ	·	·	+	·	·	1	·	·	+	
イブキヌカボ	·	·	+	·	·	·	+	+	·	
シラネワラビ	·	·	2	·	·	·	·	·	·	
ウマノミツバ	·	·	+	·	·	·	·	·	·	
ツタウルシ	·	·	·	+	·	·	·	·	·	
ヒメゴヨウイチゴ	·	·	·	·	·	+	+	+	·	
タツノヒゲ	·	·	·	·	·	1	·	1	·	
キツリフネ	·	·	·	·	·	+	·	+	·	
ナガシラミ	·	·	·	·	·	+	·	+	·	
エゾイラクサ	·	·	·	·	·	+	·	·	·	
エゾニワトコ	·	·	·	·	·	·	2	·	·	
ヒゴクサ	·	·	·	·	·	·	+	·	·	
エゾボウフウ	·	·	·	·	·	·	+	·	·	
ヤマキツネノボタン	·	·	·	·	·	·	·	+	·	
オンダ	·	·	·	·	·	·	·	+	·	
ミヤマワラビ	·	·	·	·	·	·	·	·	+	

表4-36 Belt II d 樹高階別本数表

H (m)	3	4	5	6	7	8	9	10	11	Total
Species	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ダケカンバ	·	2	2	·	·	·	·	2	3	9
ケヤマハシノキ (A)	·	·	·	·	·	·	2	3	·(1)	5(1)
ミズナラ (Q)	2	·	·	1	2	·	1	·	·	6
トドマツ (Ab)	·	·	·	·	1	1	·	·	·	2
Total	2	2	2	1	3	1	3	5	3(1)	22(1)

表4-37 Belt II d 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	8	12	14	16	18	20	28	30	32	34	Total
Species	10	14	16	18	20	22	30	32	34	36	
ダケカンバ	2	1	1	·	·	3	·	1	·	1	9
ケヤマハシノキ	·	1	2	·	2	·(1)	·	·	·	·	5(1)
ミズナラ	·	·	2	1	·	2	1	·	·	·	6
トドマツ	·	·	·	·	·	1	·	·	1	·	2
Total	2	2	5	1	2	6(1)	1	1	1	1	22(1)

n. Belt II (20×5)m² ダケカンバ・トドマツ林〔図4-15, 表4-38, 39, 40〕(館脇ら, 1954)

本帯状区は, Belt II dと同じ厚岸事業区47林班で, 鯨浜の東方約2 kmの海岸台地上にみられるダケカンバ林のうち, トドマツの多い部分である。なお原論文ではトドマツ林とされているが, ダケカンバが量的に多いことから, ダケカンバ・トドマツ林の例として引用した。

林木の出現種はダケカンバ・トドマツの2種で, 本数ではダケカンバが59%とやや多くなっている。胸高直径では両種に差はないが, 樹高ではダケカンバが15 m前後の上層をしめ, トドマツは13 m以下の中層に分布している。

林床では, マイズルソウが比較的多く, イワノガリヤス・アイヌミヤコザサなどがみられる。

表4-38 Belt II i 樹高階別本数表

H (m)	10	11	12	13	14	15	16	17	Total
Species	11	12	13	14	15	16	17	18	
トドマツ	3	1	4	1	·	·	·	·	9
ダケカンバ	·	·	1	2	4	4	5	1	17
Total	3	1	5	3	4	4	5	1	26

表4-39 Belt II i 胸高直径階別本数表

Species	DBH (m)												Total
	16 { 18	18 { 20	20 { 22	22 { 24	24 { 26	26 { 28	28 { 30	30 { 32	32 { 34	34 { 36	36 { 38	38 { 40	
トドマツ	·	1	1	1	3	1	2	·	·	·	·	·	9
ダケカンバ	3	·	1	4	3	1	2	2	·	·	·	1	17
Total	3	1	2	5	6	2	4	2	·	·	·	1	26

表4-40 Belt II i 林床植生

Species	区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
マイズレソウ		2	2	2	2	2	2	1	2	2	1
イワノガリヤス		2	1	3	2	·	·	·	·	+	2
オオダイコンソウ		+	·	·	·	·	·	·	·	·	·
ヤマブキショウマ		+	·	·	·	·	·	·	·	·	·
アイヌミヤコザサ		1	+	+	+	·	·	1	+	2	·
シラネウラボ		+	1	·	·	+	·	·	+	+	+
ミミコウモリ		+	1	1	1	·	1	·	·	+	+
アキノキリンソウ		+	+	·	·	·	+	·	·	·	·
ナガノグサ		+	·	+	·	+	+	+	·	·	+
ヒメゴヨウイチゴ		+	·	+	·	·	·	1	1	·	1
シラオイハコバ		+	+	·	+	·	·	+	·	·	·
チンマアザミ		·	+	·	·	·	·	·	·	+	·
エゾボウフウ		·	·	·	+	·	+	·	·	·	·
キンミズヒキ		·	·	+	+	·	+	·	·	·	·
センノキ		·	·	·	+	·	·	·	·	·	·
ナナカマド		·	·	·	+	·	·	+	·	·	·
ゴンゲンスゲ		·	·	·	+	+	+	·	·	+	+
コミヤマカタバミ		·	·	·	·	3	2	·	·	·	·
トドマツ		·	·	·	·	·	+	2	1	+	·
センボンヤリ		·	·	·	·	·	+	·	·	·	·
ウマノミツバ		·	·	·	·	·	+	·	·	·	·
コヌカグサ		·	·	·	·	·	+	·	·	·	·
ナガシラミ		·	·	·	·	·	·	+	+	·	+
ノブキ		·	·	·	·	·	·	+	+	·	·
マルバトウキ		·	·	·	·	·	·	·	+	·	·
ダケカンバ		·	·	·	·	·	·	·	+	·	·
エゾクサイチゴ		·	·	·	·	·	·	·	+	+	+
ホソバノトウゲシバ		·	·	·	·	·	·	·	+	·	·
エゾヤマカモジグサ		·	·	·	·	·	·	·	+	·	+

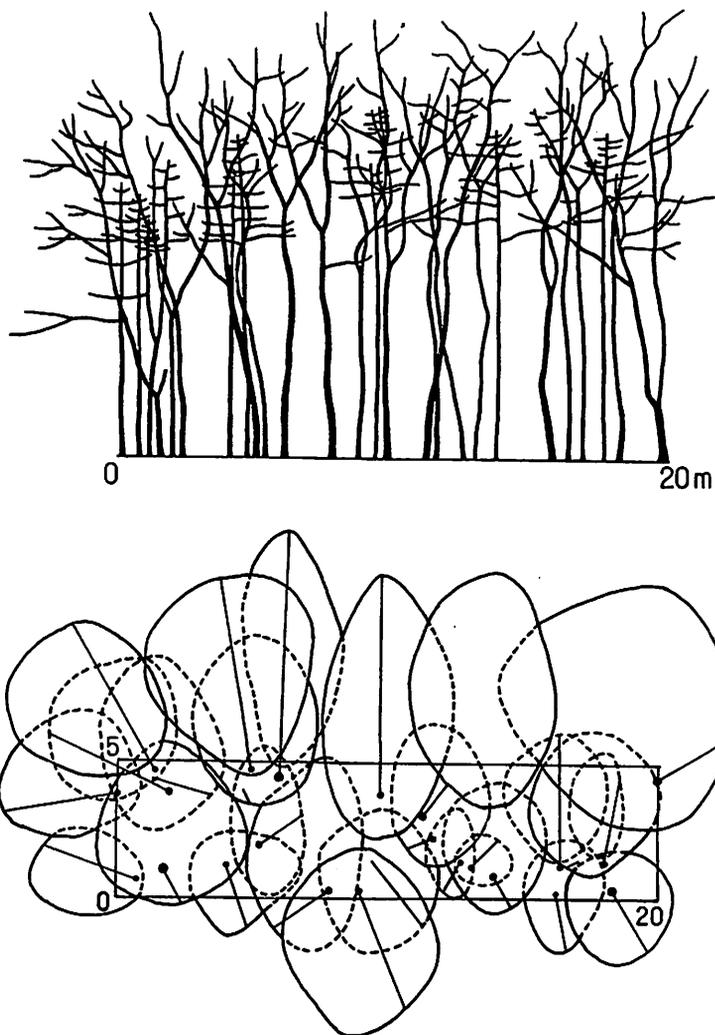


図4-15 Belt II (20×5)m² ダケカンバ・トドマツ林

o. Belt IIj (25×5)m² トドマツ林〔図4-16, 表4-41, 42, 43〕(館脇ら, 1954)

本帯状区は鯨浜東方で, 前述のBelt II と近接している。

林木の出現種はトドマツとダケカンバで, 本数ではトドマツが63%と多く, また樹高・胸高直径の分布でもトドマツのほうが大きく, トドマツ林とみなせる。林縁部に位置するため, 海からの影響が大きく, 樹高は帯状区の25mの間で7mから16mに変化している。

林床では, シラネワラビが多く, ほかにマイズルソウ・アイヌミヤコザサ・イワノガリヤスなどがみられる。

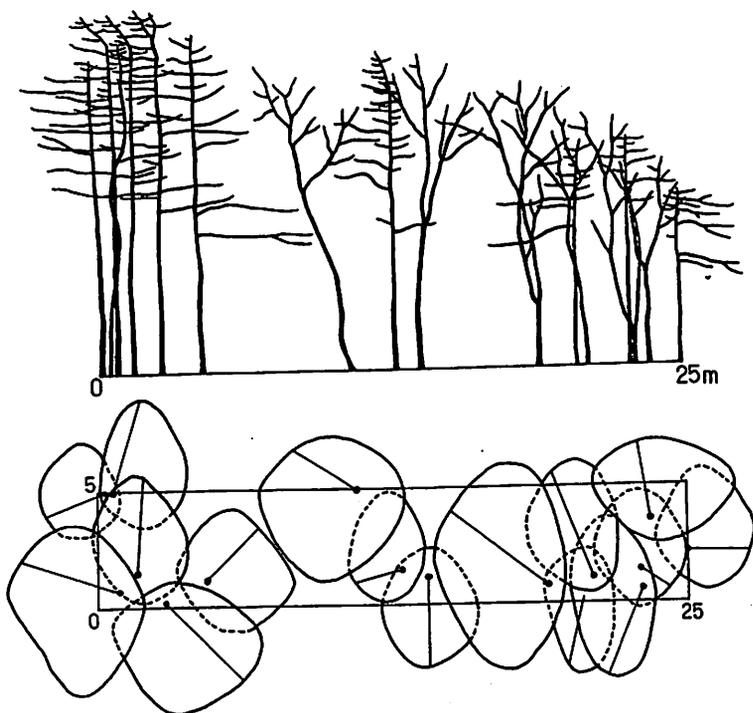


図4-16 Belt II j (25×5) m² トドマツ林

表4-41 Belt II j 樹高階別本数表

H (m)	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	Total
Species	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
トドマツ	1	·	1	1	·	·	·	3	1	3	10
ダケカンバ	·	·	1	·	2	1	2	·	·	·	6
Total	1	·	2	1	2	1	2	3	1	3	16

表4-42 Belt II j 胸高直径階別本数表

DBH (cm)	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	46	Total
Species	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	48	
トドマツ	·	·	1	1	·	1	2	·	1	3	1	10
ダケカンバ	1	1	·	3	·	1	·	·	·	·	·	6
Total	1	1	1	4	·	2	2	·	1	3	1	16

表4-43 Belt IIj 林床植生

Species	区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
アスヒカズラ		2	2	2	+	+	+	+	+	2	+	+	+
アイヌミヤコザサ		2	2	1	・	+	・	・	+	・	+	+	・
イワノガリヤス		+	+	+	+	+	2	2	+	1	+	・	・
コヌカグサ		+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
ナガハグサ		+	+	・	・	・	+	+	・	・	・	・	+
アキノキリンソウ		+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
シラネウラボ		+	・	3	4	2	3	3	4	1	3	3	4
ツタウルシ		+	・	+	・	・	・	+	+	+	+	・	+
トドマツ		+	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・
エゾクサイチゴ		+	・	+	・	+	・	・	・	・	・	+	・
ミミコウモリ		・	1	+	1	1	+	+	2	1	・	・	+
スゲ		・	+	・	・	・	・	+	・	・	・	+	・
コミヤマカタバミ		・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
アイヌキンボウゲ		・	+	・	・	・	・	+	・	・	・	+	・
アオダモ		・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
ウマノミツバ		・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
キンミズヒキ		・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	+	・
ヒメゴヨウイチゴ		・	・	+	・	+	・	+	・	+	+	2	2
ツルアジサイ		・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	+
エゾボウフウ		・	・	・	+	・	・	+	+	・	・	・	+
チシマアザミ		・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・
エゾヒョウタンボク		・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・
オンド		・	・	・	・	2	・	1	・	・	2	・	1
ノブキ		・	・	・	・	+	+	・	・	・	+	・	・
ナガジラミ		・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・
バイケイソウ		・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・
シラオイハコベ		・	・	・	・	・	・	+	+	・	・	・	・
ヤマブキシヨウマ		・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・
イブキヌカボ		・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	+	・
ノリウツギ		・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・
オオダイコンソウ		・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・
ルイヨウシヨウマ		・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・
コキンソウ		・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・
ナナカマド		・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・
ミヤマタニタデ		・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+

2. 海岸植生

海岸植生は、海岸地域の草原の総称で、海岸地形に対応して、砂丘植生、海岸断崖植生、海岸草原からなっている。各調査区の位置を図4-1に示す。

(1) 砂丘植生

本公園地域では、地形の関係から砂丘の発達はまれで、浜中湾・琵琶瀬湾に面して低い砂丘が存在するものの、防潮堤があるために、砂丘植生の発達は悪い。表4-44に示したのは、厚岸湖岸の汀線付近に分布する高さ1m前後の帯状に堆積した砂上にみられたハマニシク群落である。ハマニシクが優占し、ヤマアワ・ホソバハマアカザ・エゾオグルマなどがみられた。

表 4-44 ハマニンニク群落

方形区番号	14
方形区面積 (m ²)	2×2
傾斜 (°)	0
群落高 (m)	1.1
植被率 (%)	80
出現種数	6
ハマニンニク	4・4
ヤマアワ	2・2
エゾオグルマ	+
ホソバハマアカザ	+
ヨシ	+
シロザ	+
調査地	厚岸湖岸

(2) 海岸断崖植生

本公園地域の海岸地形の特徴として、海蝕崖の発達していることがあげられる。海岸断崖植生は、このような海蝕崖にみられる植生で、今回は調査できなかった。そこで大黒島の調査例(新庄, 1981)を示すと、海蝕崖は不安定で、ほとんど無植被であるが、わずかなテラスや海岸草原が海蝕崖に接する先端部を縁どるように植生がみられ、表4-45に示すように、キリンソウ・ユキワリコザクラのほか、ハマハタザオ・マルバトウキ・シコタンタンボボなどからなるキリンソウ・ユキワリコザクラ群落がみられる。

表 4-45 キリンソウ・ユキワリコザクラ群落 (新庄, 1981)

方形区番号	1	2
海拔 (m)	10	10
傾斜方位	E	E
傾斜角度 (°)	68	60
出現種数	8	9
キリンソウ	2・3	1・2
ユキワリコザクラ	1・2	1・1
イワノガリヤス	1・2	1・2
ハマハタザオ	1・2	1・2
マルバトウキ	1・2	1・1
ヤマガラシ	1・2	1・2
シコタンタンボボ	+	+
オオナウド	1・2	・
エゾオオバコ	・	+
オオツメクサ	・	+
調査地	大黒島	

(3) 海岸草原

海岸草原は海岸段丘上に広がっている。今回の調査による海岸草原の組成を表4-46に示す。多くの場合エゾミヤコザサが優占し、ナガボノシロワレモコウ・オオヨモギ・ツリガネニンジン・ハマフウロ・ヒオウギアヤメ・センダイハギ・ノコギリソウなどがみられる(Q-1, 2, 5, 6)。場所によ

ってはイワノガリヤスが優占することもある(Q-7)。Q-3は尻羽岬の駐車場付近で、エゾミヤコザサは出現せず、カワラスゲのほかコヌカグサ・オオアワガエリ・オオヨモギなどがみられ、人為による影響を受けている結果であろう。

表4-46 海岸草原

方形区番号	1	2	3	5	6	7
調査地	P	O	S	T	T	T
方形区面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	5×5	5×5	5×5
標高 (m)	10	10	120	90	90	90
方位	SE	S	—	—	—	—
傾斜 (°)	40	22	0	0	0	0
群落高 (m)	0.8	1.0	1.0	0.8	0.5	0.8
植被率 (%)	90	90	90	90	90	90
出現種数	25	17	20	28	31	30
エゾミヤコザサ	4・4	4・4	・	3・3	4・4	1・1
ナガボノシロワレモコウ	1・1	+	1・1	1・1	1・1	1・1
オオヨモギ	1・1	1・1	+	1・1	1・1	2・2
ツリガネニンジン	+	+	1・1	+	+	+
ハマフウロ	+	+	1・1	+	1・1	1・1
ヒオウギアヤメ	・	1・1	1・1	2・2	1・1	+
センダイハギ	・	+	+	+	+	+
マルバトウキ	・	・	1・1	・	+	1・1
イワノガリヤス	・	・	・	+	1・1	4・4
ネムロスゲ	3・3	・	・	・	・	・
ハマニンニク	1・1	・	・	・	・	・
ヤマハハコ	+	+	・	+	+	・
ハマオトコヨモギ	+	+	・	・	・	・
エゾノカワラマツバ	+	+	・	・	・	+
コガネキク	+	・	・	・	・	+
トウケブキ	+	・	1・1	・	+	・
ノコギリソウ	+	+	1・1	+	+	・
ヤマブキシヨウマ	+	・	・	・	1・1	+
クサフジ	+	・	+	+	+	・
アキタブキ	+	+	・	・	+	・
オオカサモチ	+	+	・	・	・	+
ススキ	・	2・2	・	・	・	・
オオハナウド	・	1・1	・	・	・	・
ミノガワソウ	・	1・1	1・1	・	・	・
チシマアザミ	・	+	・	・	・	+
カワラスゲ	・	・	3・3	・	・	・
コヌカグサ	・	・	2・2	・	・	・
オオアワガエリ	・	・	1・2	3・3	1・1	・
エゾキンボウゲ	・	・	+	+	・	・
エゾクサイチゴ	・	・	+	・	+	1・1
セイヨウタンポポ	・	・	+	・	+	・
ウスバヤブマメ	・	・	+	+	・	・
ハクサンチドリ	・	・	+	・	+	・
ムラサキツメクサ	・	・	・	1・1	・	・
ノブキ	・	・	・	1・1	2・2	・
ワラビ	・	・	・	1・1	1・1	・
キンミズヒキ	・	・	・	1・1	+	1・1
アキカラムツ	・	・	・	+	1・1	+
クルマナ	・	・	・	+	+	・
イワヨモギ	・	・	・	+	2・2	1・1
エゾノシシウド	+	・	・	+	・	・
ナガハグサ	・	・	・	・	2・2	2・2
オオダイコンソウ	・	・	・	・	+	+
オニシモツケ	・	・	・	・	・	1・1

P：浦雲泊，O：老若舞，
S：尻羽岬，T：チンベ

ゼンテイカ 1(+), ホタルサイ
コ 1(+), キジムシロ 1(+),
キリンソウ 1(+), ナワシロイ
チゴ 1(+), ヒロハウシノケダ
サ 1(+), ナンテンハギ 1(+),
オミナエシ 3(+), オトギリソウ
5(+), シロツメクサ 5(+), オ
オバコ 5(+), ダイコンソウ
5(+), ウマノミツバ 5(+), セ
イヨウノコギリソウ 5(+), エ
ゾトリカブト 6(+), キツ
ネノボタン 6(+), エゾノヨロ
イグサ 6(+), オオヤマフスマ
6(+), イヌツルウメモドキ 7
(+), オオバノヤエムグラ 7(+),
アマノウ 7(+), オオバタチツ
ボスミレ 7(+), マユミ 7(+),
コウゾリナ 7(+), ルイヨウシ
ヨウマ 7(+), エゾノレンソウ
7(+), ハマムギ 7(+)

かつて本地域、とくに厚岸地区の海岸草原および森林一帯では、牛馬の放牧が盛んに行なわれていた。館脇ら(1954)がチンベの海岸草原で行なった带状区調査の結果の一部を表4-47に示す。その結果では、ヒオウギアヤメ・エゾオタカラコウ・ヤマブキシヨウマが出現頻度・被度とも高くなっていた。今回の調査区のうちQ-5はチンベの展望台近くで、現在観光の目的で放牧が行なわれている箇所、放牧の影響がもっとも大きい部分であるが、エゾミヤコザサやオオアワガエリが多く、ヒオウギアヤメがやや多いものの、現在の放牧の影響はかつてに比較すると小さくなっている。

表4-47 チンベアヤメ草原原植物群落 (館脇, 1954)

植物名	区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均被度	頻度(%)
ヒオウギアヤメ		3	3	2	3	3	2	2	2	3	3	2.6	100
エゾオタカラコウ		2	2	2	2	2	+	2	2	2	1	1.6	100
ヤマブキシヨウマ		·	1	2	·	1	+	3	2	2	2	1.3	80
ナガハグサ		+	·	+	+	·	+	·	+	+	·	+	60
キンミズヒキ		+	+	·	·	+	+	+	·	+	·	+	60
センダイハギ		+	·	+	+	1	+	+	·	+	1	+	80
シロワレモコウ		+	·	+	·	·	·	+	·	+	+	+	50
ミツバツチグリ		+	·	·	·	·	·	·	·	·	·	+	10
エゾトリカブト		+	+	·	·	·	·	+	·	·	·	+	30
ハマフウロ		+	1	·	+	+	+	+	1	+	·	+	80
アキカラマツ		+	·	·	+	·	·	·	·	+	·	+	30
タンポポ科類		+	·	+	·	·	·	·	+	·	·	+	30
オオダイコンソウ		+	+	+	+	+	+	·	+	+	·	+	80
エゾボウフウ		+	·	·	·	·	·	·	·	·	·	+	10
アイヌキンボウゲ		·	+	+	+	·	+	+	+	+	+	+	80
チンマカニツリ		+	+	·	·	·	·	·	·	·	·	+	20
オオウシノケダサ		·	+	·	·	·	·	·	·	·	·	+	10
ケクサフジ		·	·	+	·	·	+	·	·	·	·	+	20
ヒロハヤマハハコ		·	·	+	+	+	·	·	·	·	+	+	40
ノブキ		·	·	+	+	+	·	·	+	+	·	+	50
ヤマスカボ		·	·	+	·	·	+	·	·	·	·	+	20
マイズルソウ		·	·	+	·	·	·	+	+	+	+	+	50
オオバコ		·	·	+	·	+	·	·	·	+	·	+	30
ツリガネニンジン		·	·	+	+	·	+	+	+	+	+	+	70
エゾレンリソウ		·	·	+	+	·	·	+	+	·	·	+	40
エゾクサイチゴ		·	·	+	·	+	·	+	+	·	·	+	40
エゾウツボグサ		·	·	·	·	·	·	+	·	+	+	+	30
シロツメクサ		·	·	·	·	+	·	+	·	·	·	+	20
マルハシケスミレ		·	·	·	·	+	·	·	·	·	·	+	10
ヤブマメ		·	·	·	·	·	+	·	·	·	·	+	10
エゾヤマカモジグサ		·	·	·	·	·	·	·	·	·	+	+	10
スズメノヒエ		·	·	·	·	·	·	·	·	·	+	+	10
エゾオオバコ		·	·	·	·	·	·	·	·	·	+	+	10

第1带状区 (20×4) m², 方位E-W

3. 湿原植生

本公園地域の植生を特徴づけるものとして、霧多布湿原があげられる。以下に霧多布湿原での方形区調査の結果について示す。調査区の位置を図4-17に示す。

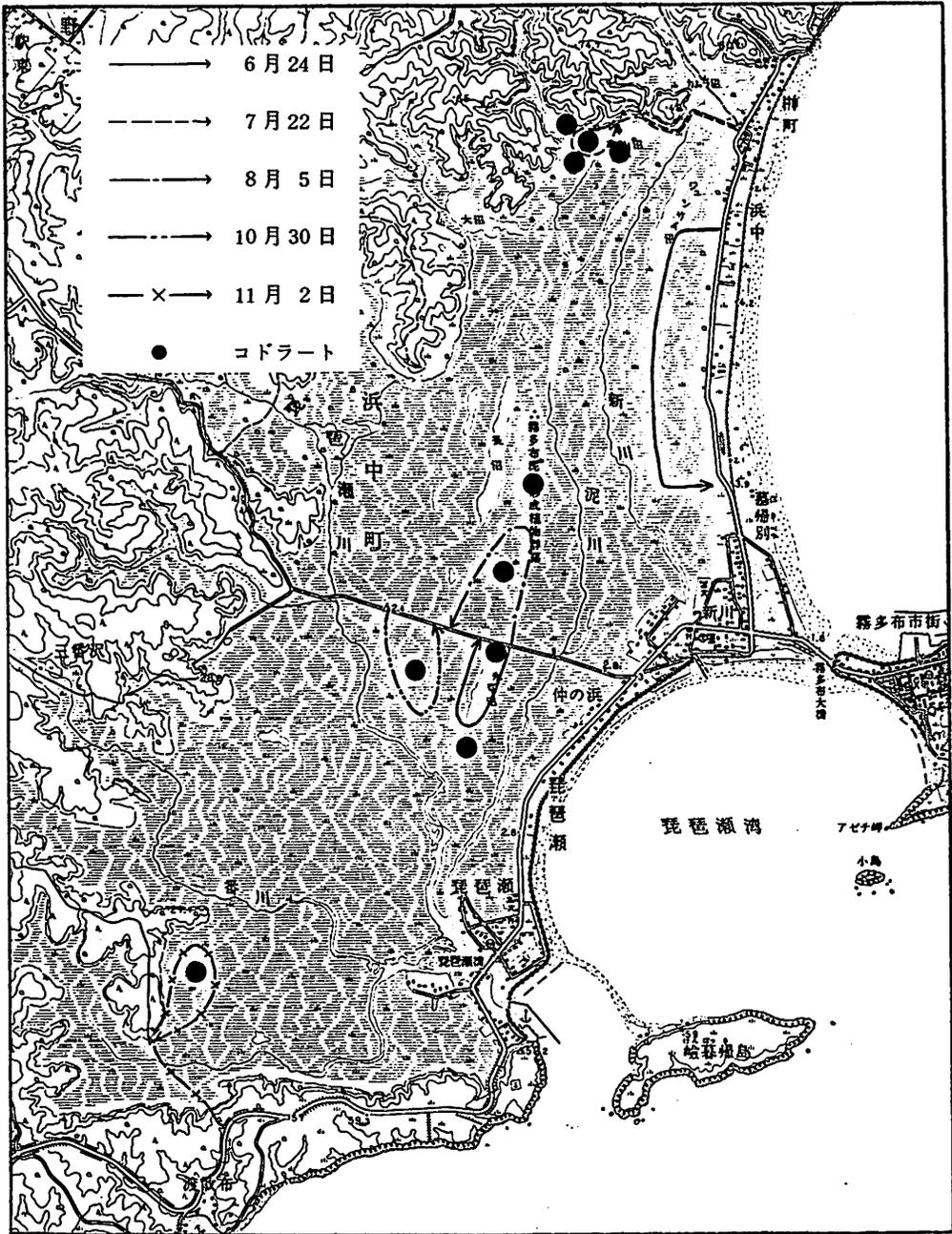


図4-17 霧多布湿原調査地位置図

(1) ワタスゲーヤチャヤナギ群落 (1)

本群落は、ミズゴケのブルト（丘堆）が最もよく発達している。北半部では河川や池沼にはさまれた帯状の立地に分布し、南半部では河川に囲まれた湿原域に、ブランケット状に点在する。

ミズゴケのブルトはイボミズゴケを主体として形成されている。他にチャミズゴケ、ムラサキミズゴケをまじえる。ブルトの規模は、高さ30~40cm、径150~200cmである。

ブルトは十字状に発達し、互いに連続してテーブル状の大きなブルトを形成する。

ブルトの頂部はヤチャヤナギ、イソツツジ、ガンコウランが群生し、ワタスゲーが叢生する。周辺部はヒメジャクナゲ、ホロムイソゲが占め、他にヌマガヤ、アキノキリンソウ、ナガボノシロワレモコウが比較的高い頻度で登場する。ツルコケモモは、これらの下生えといった状態で密生する。

高さが50~60cmに達するブルトの頂部には、しばしばチャミズゴケも登場し、スギゴケ類も群生して、固くしまったブルトを形成する。また、一部にはハナゴケ類も出現する。

表4-48 ワタスゲーヤチャヤナギ群落 (1)

整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
調査番号	11	14	16	19	12	10	13	18	17	15
標高 (m)	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
草本層高 (cm)	20	30	20	30	30	30	20	30	20	30
草本層植被率 (%)	70	60	60	60	70	70	60	60	60	60
調査面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	11	13	15	13	13	14	14	15	14	13
ワタスゲー	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2
ヤチャヤナギ	+・1	1・1	1・1	1・1	1・1	+・1	1・1	+・1	1・1	2・2
ヌマガヤ	1・2	2・2	3・2	2・2	1・2	3・1	2・2	2・2	3・2	2・2
ツルコケモモ	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	3・2	2・2	2・2	2・2	2・2
ホロムイソゲ	1・1	1・2	1・1	+・1	1・2	3・2	1・2	+・1	+・1	+・1
アキノキリンソウ	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1
ナガボノシロワレモコウ	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1	+・1
イソツツジ	1・1	2・2	2・2	2・2	1・1	・	2・2	2・2	2・2	2・2
ガンコウラン	2・1	2・2	2・2	1・1	・	2・2	2・2	2・2	2・2	3・2
ヒメジャクナゲ	・	+・1	+・1	+・1	+・1	1・1	・	・	・	・
ノリウツギ	・	・	・	・	1・1	+・1	+・1	+・1	・	・
ヨシ	・	・	・	・	・	・	+・1	+・1	+・1	+・1
エゾゼンテイカ	・	・	+・1	・	・	・	・	+・1	+・1	・
サワキキョウ	・	・	・	・	・	・	・	+・1	・	・
イボミズゴケ	5・5	2・2	3・3	4・4	5・5	5・5	5・5	4・4	4・4	2・2
スギゴケ類	・	2・2	2・2	2・2	2・2	1・1	3・3	・	2・2	2・2
ムラサキミズゴケ	3・3	・	・	2・2	2・2	2・2	・	2・2	・	・
チャミズゴケ	・	3・3	4・4	・	・	3・3	・	・	・	3・3
ハナゴケ類	・	・	2・2	・	・	・	2・2	・	2・2	・

付) 出現種数19種

(2) ワタスゲーヤチャヤナギ群落 (2)

ミズゴケのブルトが発達していく過程でみとめる群落である。イボミズゴケを主体とするブルトは、ワタスゲーの叢株をとりこむといった様相で形成されている。高さ20~30cm、径30~40cmと小マット状である。

ブルトは、ツルコケモモを下生えとするが、ガンコウラン、ヒメジャクナゲはほとんどみとめない。ヤチャナギ、イソツツジなどは散生する程度で、密度は低い。他にアキノキリンソウ、ナガボノシロワレモコウをとめない、ヌマガヤが優占してくる。

ブルト間には池塘状の凹地が点在するが、ワタスゲの叢株や、それをおおうイボミズゴケなどによってうめられつつある。

表 4-49 ワタスゲ-ヤチャナギ群落 (2)

整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
調査番号	25	29	24	27	28	26	22	23	20	21
標高 (m)	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
草本層高 (cm)	40	40	40	40	30	30	30	30	30	30
草本層植被率 (%)	60	80	70	80	60	60	70	70	70	60
調査面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	10	9	10	10	11	14	13	13	10	12
ワタスゲ	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2
ヤチャナギ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	+1	1・1	1・1
ヌマガヤ	2・2	3・3	2・2	2・2	3・3	3・3	2・2	2・2	3・3	2・3
ツルコケモモ	3・3	2・2	3・3	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	3・3	3・3
アキノキリンソウ	+1	+1	+1	+1	.	+1	+1	+1	+1	+1
ナガボノシロワレモコウ	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1
イソツツジ	1・1	1・1	.	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	.	+1
ガンコウラン	.	.	2・2
ヨシ	.	.	.	+1	+1	+1
ノリウツギ	+1	+1	+1	.	.
エゾゼンテイカ	+1	+1	+1
タチギボウシ	+1	+1	+1	.	.	+1
ススキ	+1	+1	+1	.	.	.
サワキキョウ	+1	.	.
イボミズゴケ	3・3	4・4	3・3	4・4	3・3	4・4	3・3	4・4	2・2	2・2
スキゴケ類	.	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	1・1	2・2	2・2	2・2
コケ類	2・2	.	2・2	.	1・2	2・2	1・1	1・2	1・2	1・2

付) 出現種数17種

(3) ノリウツギ-イソツツジ群落

ミズゴケのブルトが発達する湿原域で、しばしばノリウツギが優占する立地がある。

ワタスゲの叢株が発達し、ブルトの頂部にはハナゴケ類をともなったスキゴケ類が密生している。

本群落の特徴は、ノリウツギに加えて、クロミノウグイスカグラ、イソツツジ、ハンノキの低木などが登場し、低木層を形成する組成である。

ワタスゲ-ヤチャナギ群落の立地環境が、地下水位の変動などで変化し、その結果、周辺からノリウツギ、ハンノキ、イワノガリヤスなどが侵入してきたものと考えられる。

表 4-50 ノリウツギ-イソツツジ群落

整理番号	1	2	3	4	5
調査番号	4	5	6	3	2
標高 (m)	2	2	2	2	2
低木層高 (cm)	40	100	110	70	70
低木層植被率 (%)	25	30	40	20	30
草本層高 (cm)	30	60	40	60	30
草本層植被率 (%)	80	50	80	40	60
調査面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	10	12	12	12	12
ノリウツギ	2・2	3・2	1・2	2・2	2・2
ハンノキ	+	・	1・1	1・1	1・1
イソツツジ	4・2	4・2	4・3	3・2	3・3
ワタスゲ	4・2	4・2	4・2	3・2	4・2
クロミノウグイスカグラ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1
ナガボノシロワレモコウ	1・1	1・1	1・1	1・1	+
イワノガリヤス	・	1・2	1・1	1・2	1・1
ヌマガヤ	・	+	1・1	1・1	1・1
ツルコケモモ	1・1	1・1	・	2・1	1・1
ヒメシダ	+	+	1・2	・	+
タチキボウソ	・	・	+	+	・
ヤマドリゼンマイ	・	3・2	・	・	・
ノナシヨウブ	・	・	・	・	1・2
イボミズゴケ	2・2	3・2	3・2	2・2	・
スギゴケ類	2・2	3・2	3・2	2・2	3・3

付) 出現種数15種

(4) ヌマガヤ-ヨシ群落 (1)

本群落は、ワタスゲ-ヤチヤナギ群落の周辺域を占める。性状がやや低層湿原に傾いた立地で、景観としてはヌマガヤ、ヨシが優占し、その下生えに密生するヤチスゲが、本群落の特徴である。

ミズゴケの発達は非常に貧弱で、高さ30cm以下、径100cm内外である。ブルトは小パッチ状を呈して点在し、ブルト間の凹地にはハリミズゴケ、オオミズゴケなどをみとめる。

ブルト上はツルコケモモ、ホロムイスゲがやや密であるが、ヤチヤナギ、イソツツジ、アキノキリンソウ、ナガボノシロワレモコウなどの密度は低い。周辺にはノリウツギとともに、ハンノキの萌芽株も散在する。

表 4-51 スマガヤーヨシ群落 (1)

整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
調査番号	40	44	46	47	45	49	43	48	41	42
標高 (m)	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
草本層高 (cm)	50	50	60	60	50	50	60	60	60	60
草本層植被率 (%)	80	80	90	90	80	80	80	80	90	90
調査面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	9	13	12	15	13	13	14	14	12	9
ヌマガヤ	2・1	1・2	1・2	1・2	1・2	1・2	1・2	1・2	1・2	1・2
ヨシ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1
ヤチスゲ	4・2	2・2	2・2	・	2・2	2・2	2・2	2・2	3・3	3・3
ツルコケモモ	1・1	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	1・2	1・1	2・2
ホロムイスゲ	・	2・2	2・2	2・2	2・2	1・2	2・2	2・2	・	・
ヤチヤナギ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1
アキノキリンソウ	・	＋1	＋1	＋1	＋1	＋1	＋1	＋1	＋1	＋1
ナガボノシロワレモコウ	・	＋1	＋1	＋1	・	＋1	＋1	・	＋1	＋1
イソツツジ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	＋1	1・1	1・1	・
ヒメシダ	・	・	・	＋1	＋1	＋1	＋1	＋1	・	・
チシマウスバスマシレ	・	・	・	・	・	・	＋1	＋1	＋1	＋1
ススキ	・	1・2	・	・	・	＋2	・	1・2	・	・
ノリツツギ	・	・	・	＋1	＋1	・	・	＋1	・	・
ワタスゲ	・	・	1・2	1・2	・	・	1・2	・	・	・
ヤマドリゼノマイ	・	・	・	・	1・2	・	・	1・2	・	・
タチキボウシ	・	＋1	・	・	・	・	・	・	・	・
モウセンゴケ	・	・	・	＋1	・	・	・	・	・	・
イボミズゴケ	3・3	3・2	3・3	3・3	3・3	3・3	3・3	3・3	2・2	3・3
スキゴケ類	1・1	・	1・1	1・1	・	1・1	1・2	・	1・1	・
チャミズゴケ	・	2・2	・	2・2	・	・	・	・	・	・
ハリミズゴケ	2・2	・	・	・	・	・	・	・	2・2	・
ムラサキミズゴケ	・	・	・	・	2・2	・	・	・	・	・

付) 出現種数22種

(5) スマガヤーヨシ群落 (2)

ワタスゲーヤチヤナギ群落に接する湿原域にみとめる群落である。

景観としてはヌマガヤ、ヨシが優占するが、これらの密度が低くなる立地には、イボミズゴケを主体とするブルトが発達している。ブルトはワタスゲの叢株を中心として形成したもので、高さ20~30cm、径100cm以下と小型である。他に、ミズゴケ生育立地を中心にツルコケモモ、ホロムイスゲ、アキノキリンソウ、ナガボノシロワレモコウ、イソツツジなどをともなう。

表 4-52 スマガヤーヨシ群落 (2)

整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
調査番号	37	38	36	31	32	33	39	30	34	35
標高 (m)	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
草本層高 (cm)	40	40	30	40	40	30	40	30	30	30
草本層植被率 (%)	60	60	60	70	70	60	60	70	60	60
調査面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	10	8	10	12	11	13	12	12	11	13
スマガヤ	2・2	2・2	3・3	2・2	3・3	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2
ヨシ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1
ホロムイソゲ	2・2	1・2	1・1	2・2	2・2	2・2	1・2	2・2	2・2	1・1
ワタソゲ	2・2	2・2	1・2	2・2	2・2	2・2	2・2	1・2	2・2	2・2
ツルコケモモ	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	+	3・3	2・2	2・2
ヤチヤナギ	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1	1・1
アキノキリンソウ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ナガボノシロワレモコウ	+	.	+	+	+	+	+	+	+	1・1
イソツツジ	.	.	.	1・1	1・1	1・1	+	1・1	1・1	1・1
ノリウツギ	1・1	+	+
ミズドクサ	.	.	+	.	.	+
モウセンゴケ	+	.	.	.	+
ススキ	+
ミズオトギリ	+	.	.	.
サワキキョウ	+	.	.	.
イボミズゴケ	4・3	3・3	3・3	4・4	3・3	3・3	4・3	3・3	4・3	4・4
ムラサキミズゴケ	.	.	.	3・3	.	2・2	.	2・2	.	.
スギゴケ類	.	.	.	2・2	2・2
チャミズゴケ	3・3

付) 出現種数19種

(6) ハンノキーヨシーイワノガリヤス群落

河川の自然堤防地、および河川上流域に分布する。ハンノキの樹高は6~10m、樹幹直径10~20cmが中心である。林相は疎林状で、林冠もそれほど密集しない。

丘陵地に近い立地では、ヤチダモを加えて、ハルニレ、ヒロハノキハダ、シラカンバ、エゾノバッコヤナギ、エゾノコリンゴなども混生する。

林床は、ホザキンモツケが叢生して低木層を形成し、他にノリウツギ、エゾニワトコ、マユミ、クロミノウグイスカグラなどがまじる。

草本層はヨシ、イワノガリヤスが優占し、ヤマドリゼンマイが叢株を作る。水位の高い立地ではヤナギトラノオ、ミズドクサ、コウヤワラビ、エゾシロネなどを混生し、水位が低い立地ではエゾミヤコザサ、ミミコウモリ、バイケイソウが登場する。また、ヒラギシソゲ、カブソゲなどの叢株群も高い頻度で見とめられる。

ハンノキ林の大半は、樹幹が数本林立する萌芽更新林である。樹幹の肥大生長は、平均年輪厚1.5~2.0mm/年で、霧多布周辺の湿地林における事例と大差はない。しかし、ミズゴケ泥炭地のハンノキは、ブッシュ状を呈する低木林で、平均年輪厚は1.0mm/年以下である。

表 4-53 ハンノキーヨシーイワイガリヤス群落

整理番号	1	2	3	4
調査番号	71	72	61	62
標高 (m)	2.5	2.5	2	2
高木層高 (cm)	600	600	450	700
高木層植被率 (%)	40	20	30	60
低木層高 (cm)	160	150	200	200
低木層植被率 (%)	40	30	10	30
草本層高 (cm)	140	160	120	70
草本層植被率 (%)	70	70	40	80
調査面積 (m ²)	5×5	5×5	5×5	5×5
出現種数	26	28	29	24
ハンノキ	1・2	1・2	1・1	1・1
ヤチダモ	1・1	1・1	.	.
ノリウツギ	1・1	1・2	1・1	1・1
ホザキンモツケ	1・2	1・1	1・2	2・2
ヨシ	3・1	2・1	2・1	1・2
イワノガリヤス	3・2	2・1	3・2	3・1
ヤマドリゼンマイ	1・2	1・2	1・2	1・2
エゾゼンテイカ	1・2	1・2	1・2	1・1
カラマツソウ	＋1	1・1	1・1	1・1
サワキキョウ	1・1	1・1	1・1	1・1
タチキボウソウ	1・1	1・1	＋1	＋1
ナガボノシロワレモコウ	＋1	1・1	1・1	＋1
マイヅルソウ	1・1	1・1	1・1	1・1
ヒメシダ	＋1	＋1	＋1	＋1
ヘビノネゴザ	1・2	＋2	.	1・2
ヤナギトラノオ	＋1	1・1	.	＋1
コウヤワラビ	＋1	＋1	.	＋1
ミズドクサ	1・1	1・1	.	.
エゾシロネ	＋1	＋1	.	.
ワタスゲ	1・2	1・2	1・2	.
クロミノウグイスカグラ	1・1	1・2	＋1	.
ヒオウキアヤメ	.	1・2	＋1	.
オオバタチツボスミレ	.	＋1	＋1	.
ヒラギンスゲ	.	2・2	1・2	1・2
ミミコウモリ	.	＋1	＋1	1・1
エゾミヤコザサ	.	.	2・2	4・2
バイケイソウ	.	.	1・1	1・1
アキノキリンソウ	.	.	＋1	1・1

付) ドクゼリ 4(+・1)、オオアマドコロ 3(+・1)、
 ツマトリソウ 3(+・1)、ススキ 3(1・2)
 エブリンドウ 3(+・1)、ミツバツチグリ 3(+・1)
 チシマアザミ 3(+・1)、クシロハナシノブ 3(+・1)
 クサソテツ 4(1・2)、オオヨモギ 4(1・1)
 ツボスミレ 4(+・1)、アカネムグラ 1(+・1)
 エンコウソウ 1(+・1)、スズラン 1(+・1)
 ツタウルシ 1(+・1)、イソツツジ 1(+・1)
 ヤチヤナギ 2(1・1)、ハンゴンソウ 2(1・1)
 エゾイチゴ 2(+・1)
 出現種数 47種

(7) ホザキンモツケーヒラギンスゲ群落

早春の融雪期、および降雨後に冠水する沢地には、スゲ類叢株の密集団が分布する。主体をなすのはヒラギンスゲであるが、他にカブスゲ、オオアセスゲなども混生する。

叢株の高さは平均30~40cm、最大50~60cmに達する。径は30~40cmである。

これらの立地は、大半が牛馬の放牧地になっているので、叢株間は踏み固められ、より沈降している。ヨシ、イワノガリヤス、クサヨシなどが占める。

叢株上にはホザキンモツケが叢生する事例が多い。他に、ノリウツギ、クロミノウグイスカグラなど

の低木が散生し、ヤマドリゼンマイ、ヘビノネゴザなどが群生する。

ホザキシモツケがやや薄くなる叢株上には、出現種数が多い。組成は、立地によって二つのパターンにわけられる。

より湿潤な立地では、ミズドクサ、クシロハナシノブ、オニシモツケ、ドクゼリ、エンコウソウ、ミゾソバなどが出現する。

やや乾いた立地では、ワタスゲ、ヒオウギアヤメ、エゾゼンテイカ、マイヅルソウ、エゾリンドウ、ミミコウモリ、ヒメイチゲなどが登場する。

表 4-54 ホザキシモツケ-ヒラギシスゲ群落

整理番号	1	2	3	4	5	6
調査番号	12	11	91	92	81	82
標高 (m)	3	3	2.5	2.5	2.5	2.5
低木層高 (cm)	200	200	110	110	160	250
低木層植被率 (%)	30	30	40	30	10	10
草本層高 (cm)	100	70	50	50	70	80
草本層植被率 (%)	70	80	40	40	70	60
調査面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	15	17	28	24	22	21
ホザキシモツケ	1・2	1・2	3・2	2・2	1・2	1・2
ノリウツギ	1・1	1・2	・	・	1・2	1・1
ヒラギシスゲ	4・2	4・2	3・2	3・2	2・2	2・2
ヤマドリゼンマイ	3・2	・	1・2	1・2	2・2	2・2
ヘビノネゴザ	+・2	+・2	+・2	+・2	+・2	・
エゾオオヤマハコベ	+・1	+・1	1・1	1・1	+・1	・
ヨシ	・	2・1	2・1	1・1	1・1	・
イワノガリヤス	・	・	1・1	1・1	1・1	1・1
ナガボノワレモコウ	・	・	+・1	+・1	1・1	1・1
ヤナギトラノオ	+・1	・	・	+・1	1・1	1・1
オオヤマフスマ	・	・	・	+・1	+・1	1・1
ヒメシダ	・	+・1	+・1	・	1・1	1・1
コガネグク	・	1・1	・	・	1・1	1・1
ヤラメスゲ	・	・	・	+・2	・	1・1
サワキキョウ	・	・	+・1	・	・	+・1
コウヤワラビ	+・1	+・1	+・1	+・1	・	・
ミズドクサ	+・1	1・1	1・1	+・1	・	・
クシロハナシノブ	1・1	+・1	+・1	+・1	・	・
オニシモツケ	+・1	+・1	1・1	+・1	・	・
ドクゼリ	+・1	1・1	+・1	+・1	・	・
エンコウソウ	1・1	・	+・1	+・1	・	・
ハンゴンソウ	・	+・1	+・1	+・1	・	・
クサヨシ	+・1	2・1	・	・	・	・
オオヨモギ	・	・	+・1	+・1	・	・
オオツメクサ	・	+・1	+・1	・	・	・
カラマツソウ	・	・	+・1	+・1	・	・
エゾノレンリソウ	・	・	1・1	1・1	・	・
エゾネコノメソウ	・	・	+・1	+・1	・	・
ミゾソバ	・	・	+・1	+・1	・	・
ワタスゲ	・	・	・	・	4・2	4・2
ヒオウギアヤメ	・	・	・	・	1・2	1・2
エゾゼンテイカ	・	・	・	・	1・2	1・2
クロミノウグイスカグラ	・	・	・	・	1・1	1・1
マイヅルソウ	・	・	・	・	1・1	1・1
エゾリンドウ	・	・	・	・	+・1	+・1
ミミコウモリ	・	・	・	・	+・1	1・1
ヒメイチゲ	・	・	・	・	+・1	+・1

付) クサソテツ 2(1・2)、ミツハシクイソウ 1(+・1)
 コンロンソウ 3(+・1)、キンミズヒキ 3(+・1)
 アカネムグラ 3(+・1)、ヨブスマソウ 3(+・1)
 エゾキンボウゲ 3(+・1)、エゾトリカブト 4(+・1)
 タチギボウシ 5(+・1)、クロユリ 6(+・1)
 出現種数 47種

(8) ミツガシワーミズドクサ群落

湿原内に点在する池沼には、挺水・沈水・浮葉植物群がみとめられる。本群落は、これら池沼群の沿岸湿地に分布する。

ミツガシワ、ミズドクサ、クロバナロウゲなどが群生し、根を網目状に密集させて、ハング状にせりだした池沼岸を形成している。他にドクゼリ、ヤナギトラノオ、サワギキョウなどをともなう。

水際にはネムロコウホネ、タヌキモ、ヒメカイウなどが登場する。これらの背後は、やや隆起した自然堤防地状の立地で、ヤラメスゲ、ヨシ、イワノガリヤスが帯状に群生する。池沼岸から遠ざかるにつれて、エゾシロネ、エゾノレンリソウ、アカネムグラなどが混生してくる。

本群落が占める立地にハナタネツケバナ、カラクサキンボウゲが自生している。

沈水・浮葉植物としてみとめるものは、ネムロコウホネに加えて、エゾヒツジグサ、ヒシ、ジュンサイ、オヒルムシロ、バイカモ、タヌキモ、ホザキノフサモ、マツモ、リュウノヒゲモ、セキショウモなどである。

表4-55 ミツガシワーミズドクサ群落

整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8
調査番号	41	42	51	52	32	31	22	21
標高 (m)	2	2	2	2	2.5	2.5	2.5	2.5
草本層高 (cm)	90	90	150	160	90	80	70	80
草本層植被率 (%)	40	30	80	50	90	90	70	80
調査面積 (m ²)	3×3	3×3	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2	2×2
出現種数	5	9	9	10	8	9	10	8
ミツガシワ	3・2	3・1	1・1	1・1	+	1・1	3・1	3・1
ミズドクサ	2・1	2・1	+	1・1	3・1	3・1	4・1	4・1
ドクゼリ	・	1・1	+	+	1・1	1・1	+	1・1
ツルスゲ	・	1・2	3・2	3・2	・	・	3・2	2・1
ヤナギトラノオ	・	+	+	+	+	1・1	+	+
サワギキョウ	・	・	1・1	+	+	1・1	+	1・1
ヨシ	・	・	3・2	3・2	1・1	1・1	1・1	・
ヤラメスゲ	・	・	1・1	1・1	5・2	5・2	1・1	・
イワノガリヤス	・	・	4・2	4・2	・	・	・	・
エゾシロネ	・	・	・	+	+	+	・	・
エゾノレンリソウ	・	・	・	・	・	1・2	1・1	1・1
アカネムグラ	・	・	・	・	・	・	1・1	+
ネムロコウホネ	1・1	1・1	・	・	・	・	・	・
タヌキモ	+	+	・	・	・	・	・	・
クロバナロウゲ	1・1	1・1	・	・	・	・	・	・
ヒメカイウ	・	+	・	・	・	・	・	・

付) 出現種数16種

(9) ヨシ・イワノガリヤス・スゲ類群落

霧多布湿原では、河川の流域および丘陵の湾入する沢地に本群落が分布している。霧多布以外では、厚岸湖あるいは火散布沼・藻散布沼・床潭沼周辺の湿原は、ほぼ全域が本群落となっている。

床潭沼周辺と厚岸湖岸トキタイ川下流の結果では、表4-56に示すように、ヨシ・イワノガリヤスが優占するヨシ・イワノガリヤス・スゲ類群落となっている。ほかに、ミゾソバ・ナガバツメクサ・ツルスゲ・ヒメシダなどがみられる。

表 4-56 ヨシ-イワノガリヤス-スゲ類群落

方形区番号	4	8
調査地	To	A
方形区面積 (m ²)	5×5	5×5
傾斜 (°)	0	0
群落高 (m)	1.8	1.5
植被率 (%)	80	90
出現種数	13	8
ヨシ	4・4	4・4
イワノガリヤス	3・3	3・3
ナガシメクサ	1・2	・
ミゾソバ	1・1	1・1
ツルスゲ	1・2	・
ヒメシダ	1・1	・
サワキギョウ	+	・
ヒメナミキソウ	+	・
エゾイヌゴマ	+	・
ヤナギトラノオ	+	・
キツリフネ	+	・
ホソバノヨツバムグラ	+	・
ミズ	+	・
ヤマアワ	・	1・1
ハチジョウナ	・	+
エゾムギ	・	+
エゾノレンリソウ	・	+
アキノウナギツカミ	・	+

To: 床潭, A: 厚岸湖岸

(10) 霧多布湿原中央部の植生

霧多布湿原中央部の植生について、道道琵琶瀬-茶内線の周辺を中心とした調査資料がある。道道琵琶瀬-茶内線は霧多布湿原のほぼ中央部を、北西-南東にかけて横断するもので、湿原の代表的な植生とその配列を観察するのにきわめてよい条件を備えている。

従って、この道路周辺の植生は湿原植生の代表的な断面とすることができよう。ここではハンノキ林、ヌマガヤ群落、ヨシ-ヌマガヤ群落、ワタスゲ群落、ヤチヤナギ群落、ヨシ群落、ミカヅキグサ群落および水中のミツガンワ群落が区別された。(この資料は北海道釧路土木現業所によって行われた調査によるもので、調査ととりまとめには今回の調査を担当した辻井も加わっている)

区分された群落に基づいて、植生図が作成された。ここでは先に述べた群落が凡例のように番号をもって示されている(図4-18)。



凡 例

- | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|
| ① ハンノキ林 | ② ヌマガヤ群落 | ③ ヨシヌマガヤ群落 | ④ ワタスゲ群落 |
| ⑤ ヤチヤナギ群落 | ⑥ ヨシ群落 | ⑦ ミカズキグサ群落 | ⑧ ミツガシワ群落 |
| ⑨ 路傍雑草群落 | ● 方形区調査地点 | | |

図 4 - 18 霧多布湿原中央部の植生

2) スマガヤ群落

スマガヤはハンノキ林，ヨシ群落を除くとほとんど全域に分布しており，このうち，本種の優占している区域をスマガヤ群落として区分した。本群落は，調査地域の中央部に広く分布しており，西側の上流側はモザイク状になっている。本種は中間湿原に生育する代表的な植物であるが，この観点からみると本地域は，中間湿原としての性格が強いところと言える。一方，スマガヤの下層には，高層湿原の代表的な植物であるミズゴケのブルトの発達している箇所とほとんどみられない箇所があり，これらの差違は主として水分環境によるところが大きく，既設道路の周辺はほとんどミズゴケはみられなくなっている。ミズゴケの発達している箇所は既設道路より上流側に多くみられ，下流側は全体に少く路線近辺はほとんど成立していない。また，ミズゴケのブルトに成立するイソツツジ，ツルコケモモ，モウセンゴケについても同様上流側が多く下流側が少い傾向にある。

本群落に出現する種は，上記のほかワタスゲ，ヤチヤナギ，ナガボノシロワレモコウ，コガネギクの常在度が高く，ノリウツギ，モウセンゴケ，ツルコケモモ，イソツツジ，ヨシなども比較的頻繁にみられる。

表4-58 スマガヤ群落

調査地点番号	4	5	7	9	11	19	23	24	25	26	32	34	37	40	44	45	67	68	74	75	常在度
サワギキョウ											1・1		+	+	+	+					Ⅱ
イヌシギク																	1・2				Ⅱ
ナガボノシロワレモコウ	1・1	2・2	+	1・1	1・2	1・1	1・1	1・1	1・1	1・2	+	1・2	+	2・2	1・1	1・1			+		2・2
スゲ sp.	3・3										2・2	2・2					4・4	1・1			1・1
ミズオトギリ																					Ⅱ
イワノガリヤス		2・2				1・2									1・1	1・1					+
ススキ																					Ⅱ
ヤチヤナギ	2・2	2・2	2・3	1・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	2・2	1・2	1・2	2・2	2・2	2・2	2・2	1・1	2・2	2・2	2・2	2・2
ヨシ											1・1	1・2		1・2	1・1	1・1	1・1	1・1			Ⅱ
コガネギク	+	+			+	+	+	+	+	+	+	+	+	1・1	+	1・1					+
タチキボウシ					1・1	+	1・1						1・1								+
ヒメシダ		1・2																			Ⅱ
スマガヤ	4・4	5・4	5・4	5・4	4・4	4・4	5・4	5・4	5・4	4・4	3・3	4・4	5・4	3・3	3・3	3・3	4・4	5・4	3・3	3・3	4・4
ワタスゲ	2・2	2・2	3・3	3・3	3・3	3・3	2・2	1・2	2・2	3・3	2・2	2・2	3・3	1・1	1・1	+	2・2	2・2	2・2	3・3	Ⅱ
ノリウツギ	+										1・1										1・1
イソツツジ	+		+	+	1・1	+				+	1・2	+	1・1	+	+						Ⅱ
モウセンゴケ	+			1・1	1・1	1・1	+			+	+	1・2	1・1	+					+	1・1	Ⅱ
ツルコケモモ	1・1		+	+	1・1	1・1				+	+	1・1	1・1	+	1・1						Ⅱ
ヤマドリゼンマイ	+																				Ⅱ
ミズゴケ				2・3	3・4	3・3	2・3	1・2	2・3	1・2	3・3	3・3	2・3	2・3	+	+	1・2	1・2			Ⅱ
ミカヅキグサ				1・2	1・1						1・1	1・2	2・3								1・1
クロミノウグイスカグラ																					Ⅱ
ガンコウラン										+											Ⅱ
ケウスバシメ																					Ⅱ
ニッコウシダ											+										Ⅱ
ハンノキ								2・2													Ⅱ
エゾゼンタイカ						+															Ⅱ
ミズトサ																					Ⅱ
コケ類									+	+				+	+						Ⅱ
エゾノリュウキンカ																					Ⅱ
ハマイ																					Ⅱ
イヌイ																					Ⅱ
ノハナジロウブ																					Ⅱ
アキカラムフ																					Ⅱ
エゾイヌゴマ																					Ⅱ
オオロモギ																					Ⅱ
ヒメツクナゲ																					+

3) ヨシーヌマガヤ群落

本群落はヨシ、ヌマガヤの優占する箇所を区分したもので、下層にはヤチャナギ、ミズゴケの優占しているところもある。分布域は主として既設道路の上流側で、下流域は泥川周辺に分布している程度である。ヌマガヤ群落に比較しミズゴケ、ヤチャナギ、イソツツジ、モウセンゴケ、ツルコケモモの常在度、被度が高く、ヌマガヤ群落よりはやや高層湿原としての性格が強いものと思われる。したがって、既設道路より下流側は地下水位の移動が妨げられているため乾燥化傾向になり、ミズゴケの衰退とこれに伴いイソツツジ、モウセンゴケ、ツルコケモモが衰退し、高層湿原の性格が失なわれていっているものと思われる。とくに、下流側に成立する本群落には調査点No.3にみられるように、ミズゴケはほとんどみられず、上流側との水分環境の相違があらわれていることがうかがえる。

本群落に出現する種は、ヤチャナギ、ミズゴケ、ワタスケが被度、常在度とも高く、ナガボノシロワレモコウ、コガネギク、ノリウツギ、イソツツジ、モウセンゴケ、ツルコケモモ、ススキなどの常在度が高い。

表4-59 ヨシーヌマガヤ群落

調査地点番号 種名	3	10	12	14	15	16	17	20	30	33	35	36	41	47	48	常在度
サワギキ ^{ヨウ} ウ								+	+							I
イヌスキナ		+		+		1.1	1.2	2.2								IV
ナガボノシロワレモコウ	1.1	1.2	1.2	1.1	1.1	1.1		+	+	1.1	1.2	1.1	1.2	1.1	1.1	V
スゲ sp.				2.2	2.2	3.3		3.3	3.3	2.2	2.2	1.1	2.2	1.1	2.2	IV
イワノガリヤス			+										+			II
ススキ				+	+	1.1	1.1	2.2	+	+	+	+		1.1	2.2	IV
ヤチャナギ	2.3	1.2	2.2	3.3	2.2	3.3	2.2	3.3	2.2	3.3	2.2	3.3	2.3	2.3	2.2	V
ヨシ	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	2.2	2.2	3.3	3.3	3.3	3.3	4.4	3.3	3.3	2.2	V
コガネギク		1.1	1.1	+	1.1	1.1	1.1	+	1.1	1.1	+	1.1	1.1	+	+	V
タチキボウシ			+	+			2.2	+			1.1	+				IV
ヒメシダ	+														1.1	+
ヌマガヤ	3.3	4.4	3.3	3.3	4.4	5.4	3.3	3.3	5.4	3.3	3.4	3.4	3.4	3.3	2.2	I
ワタスケ	1.1	3.3	3.3		+	1.1	2.2			2.2	1.1	+	2.2		1.1	IV
ノリウツギ	1.2	1.1	1.1		+	+	1.1	+	1.1	1.2		1.1	1.1	1.1	+	V
イソツツジ	+	1.1	+	1.1	1.1	1.1	2.2	+	+	1.1	1.1	+	1.1	1.1	1.1	V
ホザキシソツケ	+															I
モウセンゴケ			1.1	1.1	1.1	+	1.1	1.1		+	1.1	1.1		+	1.1	IV
ツルコケモモ		1.1	+	+	1.1	1.1	1.1				1.1		1.1	+	+	IV
ヤマドリゼンマイ		+		+	1.1	1.1	1.1			+			+		+	IV
ミズゴケ		3.4	2.3	2.3	3.4	4.4	5.4	1.2	2.2	2.3	3.3	3.3	4.4	2.2	2.3	V
ミカヅキグサ					1.1	+						+				II
クロミノウグイスカグラ									+	1.1	+			1.1	+	II
ケウスバスマイレ			+				+						+	+	+	II
ニッコウシダ					1.1	1.1			1.1	1.1				+		II
ハンノキ				1.1	1.1	1.1			2.2							II
エゾゼンテイカ					+		+									I
コケ類											+		+		+	I
イ SP.													+			I
ヒメシロネ															+	I
コツマトリソウ														+		I

4) ワタスゲ群落

本群落は、主としてワタスゲの優占する箇所を区分したものであるが、ヤチヤナギ、ヌマガヤ、ミズゴケの優占する箇所も一部含まれるなど、顕著な優占種はみられない。ワタスゲはヌマガヤ、ヤチヤナギと同じように調査地域一帯に分布しており、本種が優占する箇所は中間湿原としての性格が強い。分布域としては、下流側に比較的まとまっており、上流側は団状に一部点在している程度である。しかし、群落構造上、下流側はミズゴケが少く、上流側はやや多く、このため下流側は乾燥化傾向を呈しており、ここにも既設道路による水分環境の影響があらわれているようである。したがって本群落は、№43に典型的にみられるように人為により乾燥化が進行しミズゴケが後退し、そこへワタスゲをはじめとした中間湿原に代表される植物が侵入して成立したことも考えられる。

本群落に出現する種は、ヤチヤナギ、ヌマガヤ、ミズゴケが被度、常在度とも高く、サワギキョウ、ヨシ、モウセンゴケの常在度が高い。

表4-60 ワタスゲ群落

種名	調査地点番号							常在度
	8	18	39	43	54	55	73	
サワギキョウ			+	+	+	+	+	Ⅳ
イヌスギナ			1.1					Ⅰ
ナガボノシロワレモコウ	1.1	1.2		+				Ⅲ
エゾシロネ				+	+			Ⅱ
スゲ sp.			2.2	+	1.2	1.2	+	Ⅳ
ミズオトギリ				+				Ⅰ
イワノガリヤス			1.2	1.1				Ⅱ
ススキ				+			+	Ⅱ
ヤチヤナギ	1.2	2.2	2.2	1.1	2.3	1.2	1.2	Ⅴ
ヨシ	1.1	1.1	+	1.1		+	+	Ⅴ
コガネギク	1.1	1.1	1.1	+	1.1			Ⅳ
タチギボウシ	+	2.2	+	+			+	Ⅳ
ヌマガヤ	3.3	2.2		2.2	2.2	1.2	2.1	Ⅴ
ワタスゲ	4.4	4.4	4.4	3.3	2.2	2.2	2.2	Ⅴ
ノリウツギ	+	1.1	1.1	+				Ⅲ
イソツツジ	1.2	+	+					Ⅲ
モウセンゴケ	+	1.1	+		1.2	1.2	1.2	Ⅴ
ツルコケモモ	+	1.1	+		1.2	+		Ⅳ
ヤマドリゼンマイ	+							Ⅰ
ミズゴケ	1.2	4.4	2.3		2.2	2.2	2.2	Ⅴ
ミカヅキグサ		1.2	2.2				1.2	Ⅲ
クロミノウグイスカグラ			+					Ⅰ
ガンコウラン			+					Ⅰ
ハンノキ		+						Ⅰ
ヒメジャクナゲ		1.2					+	Ⅱ
ハマイ				2.2				Ⅰ
ヒオウギアヤメ				+				Ⅰ
コツマトリソウ							+	Ⅰ
サギスゲ						+	+	Ⅱ
ヤチスゲ						1.2		Ⅰ
ヤナギトラノオ						+		Ⅰ

5) ヤチヤナギ群落

本群落は、ヤチヤナギの優占する箇所を区分したものであるが、ヤチヤナギのほかに、調査地域一帯に広く分布するヨシ、ヌマガヤをはじめワタスゲ、ミズゴケなどが高い被度で混生しており、他の群落同様顕著な優占種はみられない。ヤチヤナギは本湿原帯に分布する主要構成植物の1つであるが、とくに既設道路下流側に優占しているところがある。調査点№13, 38, 53の人為の著しいところは、他の個体より高くなっており、水分環境、水質等による影響があらわれているようである。その他は草高10cm内外で、ミズゴケブルト及びその周辺に成立していることが多い。このように、分布域からみると、人為の影響の受けていると思われる箇所に成立していることから、高層もしくは中間湿原が後退しここにヤチヤナギが侵入してきたこともうかがわれる。

本群落に出現する種は、ヤチヤナギのほかにヨシ、ヌマガヤが常在度、被度とも高くワタスゲ、ミズゴケは部分的に被度の高くなっているところがある。また、ナガボノシロワレモコウ、コガネギク、ツルコケモモ、コツマトリソウなどの常在度も比較的高い。

表 4-61 ヤチヤナギ群落

調査地点番号	2	13	38	42	52	53	56	57	58	59	60	61	63	64	65	66	69	70	72	常在度	
種名																					
サワギキョウ	1-2	+		+			+								+	+		+		II	
イヌギキナ		1-1		+																	I
ナガボノシロワレモコウ	2-2	2-2	1-2	1-2	+	1-1	+	+	+	+	+	+		+	1-1		+	+	+	V	
スゲ sp.	2-2	3-3	1-1	3-3	3-3	1-2	1-1	1-1	2-2	+	2-2	2-2	2-2	+	1-1	2-2	2-2	2-2	1-2	VI	
ミズオトギリ				+	+															II	
イワノガリヤス	1-2		+	1-1	1-2	+			1-2	1-2				1-2						II	
ススキ	+			1-1					1-2				+						1-2	II	
ヤチヤナギ	3-3	4-4	3-3	3-3	3-4	3-4	3-3	4-4	3-4	2-2	3-3	3-3	2-2	4-5	3-3	2-2	2-2	3-3	3-3	V	
ヨシ	1-2	3-3	1-1	1-1	1-1		+	1-2	2-3	2-3	2-2	1-1	1-1	2-3	+		2-2	2-3	2-3	V	
コガネギク	1-1	2-2	+	+		1-1	1-1	+	+		1-1	1-1	+	+	+			+	+	IV	
タチキボウシ	1-1			+												1-1	+	+		III	
ヒオウギアヤメ	+				+														1-1	III	
ヒメシロネ	+			1-1					1-2	1-2		1-1	+	+						III	
エゾノサワアザミ	+								1-2	1-2		1-1	+	+						III	
ヌマガヤ	3-3	2-2	3-3	2-2	2-3	2-2	2-3	2-2	2-2	1-2	1-1	1-2	+	+	3-3	1-2	1-2	1-2	+	V	
ワタスゲ	1-1		1-1		1-2	+	2-2	1-2	1-2			2-2			2-3	1-2	+	+	+	IV	
ノリウツギ		3-3	1-2	+		+		1-2		2-2	1-2		1-2					+	+	IV	
イソツツジ			1-2					1-2			1-2	2-2	2-2				+	+	+	III	
モウセンゴケ				1-1			+	+	+			+					+	+	1-1	IV	
ツルコケモモ			1-2		1-2	2-2	1-2	+	1-2		1-2		1-2	+	+		+	+	+	IV	
ヤマドリゼンマイ			+								2-3									III	
ミズゴケ	2-3	3-4	2-2	1-2	3-3	1-2	3-3	3-3		2-2	1-2	1-2	+	1-2	2-2	2-2				IV	
ミカズキグサ				1-1			+					+				+				III	
クロミノウグイスカグラ				+				+	+	1-2			2-2	2-2	1-2					III	
ガンコウラン			+									2-2								III	
ケウスバスマイレ												+								III	
ニッコウシダ	1-2									2-3	3-4		2-2	1-2						III	
ハンノキ										3-3		+								III	
エゾナミキソウ										+										III	
ミズドクサ					1-1															III	
エゾノリュウキンカ				+																III	
ヒメシロネ									1-1			+								III	
コツマトリソウ							+	+	+		+	+	+	+	+					IV	
エゾヘビイチゴ					1-2															III	
サビスゲ																			+	III	
ヤチスゲ																	+	1-2		III	
ヤナギトラノオ														+						III	
ミツバオウレン													+							III	

6) ヨシ群落

本群落は、河川沿いで、他より一段低いところに成立するヨシの優占箇所を区分したものである。分布域の大半は琵琶瀬川沿いで、このうち既設道路周辺はオオヨモギが侵入し、排水等により乾燥化してきている。また、一部泥川沿いにも小面積ながらみられる。ヨシは低層湿原の代表的な植物で水中にも生育するが、地形的に低みに当る琵琶瀬川沿いは湿原の水が集ってくるところでもあり、低層湿原としての性格の強い地域である。河川に最も近いNo31の調査地点ではヨシ、スゲ類が圧倒的に優占する典型的なタイプであるのに対し、No46、49のように離れると、ヤチヤナギ、ヌマガヤ、ワタスゲ、ミズゴケなどの中間～高層湿原に代表される種が混生してきている。

表 4 - 62 ヨシ群落

種 名	調査地点番号		
	31	46	49
サワギキョウ		1・2	+
イヌスキナ			1・1
ナガボノシロワレモコウ		+	10・2
エゾシロネ		+	+
スゲ sp.	5・4	1・1	1・1
イワノガリヤス	1・2		1・1
ヤチヤナギ		2・3	1・1
ヨ シ	4・4	4・4	4・4
ヒメシダ		+	+
ヌマガヤ			2・2
ワタスゲ			+
ミズゴケ		1・1	
クロミノウグイスカグラ			+
ハンノキ		1・1	
ハンゴンソウ			+
アカネムグラ	+		
イネ科 sp.	1・1		
エゾナミキソウ	+	+	+
エゾミソハギ	+		
エゾノレンリソウ	+		
ハチジョウナ	+		
エゾイヌゴマ	+		
ヒオウギアヤメ		+	
ヒメシロネ		+	+
ミツガシワ		1・1	
ホソバノヨツバムグラ		+	+
エゾトリカブト			+
アキノキリンソウ			+

7) ミカヅキグサ群落

ミカヅキグサは、調査地域一帯にみられるミズゴケベルト間の凹地の湛水地に生育していることが多く、一部湿原中央部の低み及び池沼付近の地下水位の高いところに面積的には少いが比較的まとまって成立している箇所を本群落に区分したものである。調査点数が1点であるため、群落構造からみた位置付けは困難であるが、陸化に伴い高層湿原への移行の一段階である群落とも考えられる。

表 4-63 ミカヅキグサ群落

調査地点番号		22
種 名		
ミカヅキグサ	4・4	
ヨ シ	2・2	
スゲ sp.	2・2	
ヤチヤナギ	1・2	
ミズオトギリ	1・2	
ミズゴケ	1・2	
ミツガシワ	1・1	
ヌマガヤ	1・1	
サワギキョウ	+	
ミズドクサ	+	
イヌスギナ	+	
イワノガリヤス	+	
アキノキリンソウ	+	
モウモンゴケ	+	
ノリウツギ	+	

8) ミツガシワ群落

ミツガシワは浅水中に生育する水生植物で、池沼の浅い箇所及び泥川沿いの停滞水域にわずかに成立しているところをミツガシワ群落として区分したものである。ミツガシワは湿原(泥炭)形成の初期にみられる群落で、池沼等の周囲から侵入し水面を被覆していき、これに伴いヨシ、スゲ、ヤチヤナギに置き換るが、調査地域ではワタスゲなどのスゲ類、ヌマガヤなどが混生してきており、かなり陸化が進行しているところである。

表 4-64 ミツガシワ群落

調査地点番号		1	6
種 名			
ミツガシワ	4・4	4・4	
サワギキョウ	1・1		
イヌスギナ	2・2		
ドクゼリ	1・1	+	
クロバナロウゲ	+		
ナガボノシロワレモコウ	+		
ワタスゲ	2・2		
スゲ sp.	1・1	3・3	
ヌマガヤ	1・1		
ヨ シ		+	
ヤチヤナギ		+	
ミズオトギリ		+	

4. 塩湿地植生

塩湿地植生として、厚岸湖岸トキタイ川河口付近に表4-65に示す6調査区(Q-9~13, 15)を設定した。ウミドリ群落、ヒメウシオスゲ・シバナ群落、アッケシソウ群落が認められた。アッケシソウの分布状態を明らかにするために、 (5×5) m²の方形区を2箇所を設定した。図4-19のうち、Q-9はアッケシソウが優占する箇所、Q-10はヒメウシオスゲ・シバナが優占する箇所である。さらに各方形区内に (1×1) m²の小方形区a, bを設けて、優占度・群度およびアッケシソウの高さを測定した。

アッケシソウ群落とヒメウシオスゲ・シバナ群落は純度が高く、その境界は明瞭である。アッケシソウ群落はいずれも小面積で、Q-9はトキタイ川河口左岸地域でアッケシソウ群落として面積の広い箇所であり、一般的にはQ-10のように、小面積である。アッケシソウの高さをみると、ヒメウシオスゲなどと混生する時よりも、アッケシソウ群落でのほうが高い傾向が認められた。分布状態は、ヒメウシオスゲ・シバナ群落の間隙の裸地の部分に、アッケシソウが分布している。この分布は微地形と対応しているようで、微高地ではヒメウシオスゲ・シバナが優勢で、アッケシソウは微低地の裸地状の部分に分布する傾向が認められた。

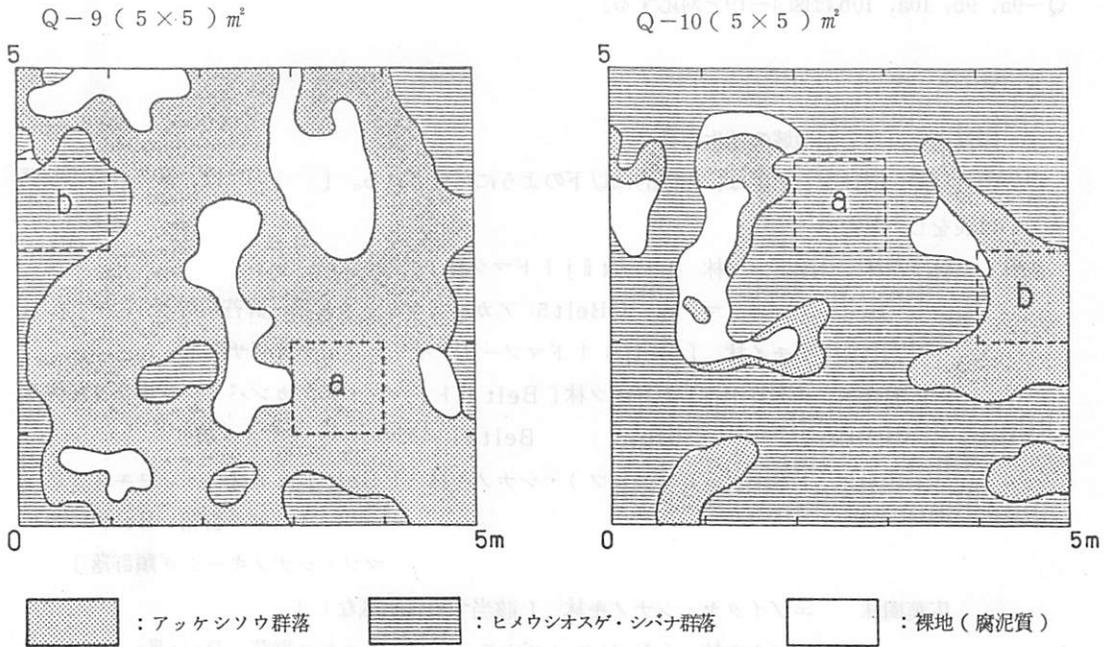


図4-19 アッケシソウ群落とヒメウシオスゲ・シバナ群落の分布
 Q-9はアッケシソウ群落の面積が広い箇所、Q-10は平均的な箇所に設定した。
 各方形区内の小方形区a, b (1×1) m²の組成は、表4-65に示す。

表 4 - 65 塩湿地植生

群落名	A		B				C	
	13	12	11	15	9b	10a	9a	10b
方形区番号	13	12	11	15	9b	10a	9a	10b
方形区面積 (m ²)	2×2	2×2	2×2	2×2	1×1	1×1	1×1	1×1
群落高 (m)	0.1	0.3	0.4	0.5	0.25	0.25	0.15	0.2
植被率 (%)	80	90	90	90	80	90	60	60
出現種数	2	5	3	2	5	3	3	4
ウミミドリ	5・5	・	・	・	・	・	・	・
シバナ	3・3	2・2	・	2・3	4・4	3・3	+	1・1
ヒメウシオスゲ	・	3・3	5・5	5・5	4・4	4・4	・	1・1
アッケシソウ	・	・	・	・	1・1	+	4・4	4・4
エゾツルキンバイ	・	4・4	・	・	+	・	・	・
チンマドジョウツナギ	・	+	・	・	+	・	+	+
ウラギク	・	+	+	・	・	・	・	・
ハマアカザ	・	・	+	・	・	・	・	・
アッケシソウの高さ (cm)					10	8	15	20

調査地 厚岸湖岸トキタイ川河口

群落名 A: ウミミドリ群落, B: ヒメウシオスゲ・シバナ群落, C: アッケシソウ群落

Q-9a, 9b, 10a, 10b は図4-19と対応する。

5. 考 察

(1) 厚岸道立自然公園地域の植生の構造

厚岸道立自然公園地域の植生は、相観的に以下のように区分される。〔 〕内には、該当する帯状区あるいは表をしめした。

- 森林 針葉樹林 トドマツ林 [Belt II j トドマツ林]
 アカエゾマツ林 [Belt 5 アカエゾマツスゲ類-藓苔類群落]
 イチイ林 [Belt 6 トドマツ-イチイ-エゾミヤコザサ群落]
- 針広混交林 ダケカンバ・トドマツ林 [Belt 1 トドマツ・ダケカンパーシラネワラビ群落, Belt II i ダケカンバ・トドマツ林]
 トドマツ・(エゾマツ)・シナノキ林 [Belt 4 トドマツ・シロエゾマツ-エゾミヤコザサ群落, Belt 9 トドマツ・シナノキ-シダ類群落]
- 広葉樹林 エゾイタヤ・シナノキ林 [該当する帯状区なし]
 ミズナラ林 [Belt 2 ミズナラ-エゾミヤコザサ群落, Belt III a ミズナラ林, Belt 10 ミズナラ-エゾミヤコザサ群落]
 ダケカンバ林 [Belt 3 ダケカンパーエゾミヤコザサ群落, Belt II d ダケカンバ林]
 ミヤマハンノキ林 [Belt II b ミヤマハンノキ林]
 ヤチダモ林 [Belt 7 ヤチダモ-アキタブキ群落]
 ハンノキ林 [Belt 8 ハンノキ-ヨシ群落]

- 草原植生 砂丘植生 [表 4 - 44]
 海岸断崖植生 [表 4 - 45]
 海岸草原植生 [表 4 - 46 および 47]
 湿原植生 [表 4 - 48 ~ 64]
 塩湿地植生 [表 4 - 65]

本地域の標高差は昆布森地区で 205 m、厚岸地区・霧多布地区で 121 m と小さいため、垂直分布のような植生の構造は認められない。しかし、海霧地帯という特異な地域であること、海岸地域・低湿地を含んでいることから、立地の相違による植生の帯状構造が認められる。そこで、前述した相観による植生の区分を、立地に基づいて区分してみる。まず、調査地域は、地形的に台地部と低地部の 2 つに分けられる。台地部と低地部での植生の配列は、以下のとおりである。

〈 台地部 〉

植 生	立 地
(砂丘植生)	—— 汀線付近
海岸断崖植生	—— 海蝕崖
海岸草原	<div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; width: 60px; height: 60px; display: inline-block;"></div> 海岸台地
ミヤマハンノキ林 ミズナラ林	
ダケカンバ林	
ダケカンバ・トドマツ林	
トドマツ・(エゾマツ) ・シナノキ林	<div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; width: 60px; height: 20px; display: inline-block;"></div> 内陸部丘陵
トドマツ林 イチイ林 エゾイタヤ・シナノキ林	

〈 低地部 〉

植 生	立 地
アマモ群落	—— 海水域
ウミミドリ群落	<div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; width: 60px; height: 20px; display: inline-block;"></div> 塩湿地
ヒメウシオスゲ・シバナ群落 アッケシソウ群落	
ヨシ・イワノガリヤスースゲ類群落	<div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; width: 60px; height: 20px; display: inline-block;"></div> 湿地
ハンノキ林 アカエゾマツ林	
ヤチダモ林	—— 溪畔
台地部の森林	—— 台地

台地部についてみると、この典型的な例はチンベから鯨浜にかけての一带で認められる。汀線付近は平地が狭く、ハマニシク群落等の砂丘植生の成立する立地はほとんどなく、小面積に分布するにすぎない。その背後は高い段丘となっている。この段丘は上部白亜紀の根室層群あるいは古第三紀の浦幌層群からなり、急な海蝕崖で海と接している。この海蝕崖は不安定で、植被を欠く部分が多いが、小群状

に海岸断崖植生が分布しており、大黒島ではキリンソウ・ユキワリコザクラ群落となっている。

海蝕崖の上部から段丘上の平坦地にかけては、海岸草原が広がっている。海岸草原は多くの場合エゾミヤコザサ群落で、部分的にイワノガリヤス群落となることもある。この海岸草原は古くから牛馬の放牧の影響を受けており、そのような箇所ではササ類は後退し、不食草のヤマブキシヨウマ・ヒオウギアヤメ・トウゲブキなどが多くなっている。しかし、現在は牛馬の放牧は少なくなりササ類が回復しつつある。そのため、あやめが原では観光の目的でヒオウギアヤメなどを維持するために、放牧を行なっている。

森林のうちもっとも海側の前線には、ミヤマハンノキの低木林が分布している。一般的には小面積で、台地の末端部から斜面に認められる。ミヤマハンノキ林は高い段丘が発達するチンベから鯨浜にかけての帯でよく発達しているが、厚岸地区の床潭や散布、あるいは昆布森地区等では、台地の斜面にも森林が成立しており、このような場所では、風衝樹形を示すミズナラ低木林となっている場合が多い。

その背後はダケカンバ林となり、高木林である。ほぼダケカンバの純林で、林床はエゾミヤコザサが優占している。北海道での海岸地域のダケカンバ林の分布は、本地域に限定され、とくに厚岸地区では良く発達しているが、昆布森地区では、東端の尻羽岬付近で典型的な林分がみられる以外、少なくなっている。なお部分的にはミズナラ高木林となっていることもある。

道道厚岸・浜中線がとおっている稜線部付近からは、ダケカンバ林にはトドマツが混生するようになり、ダケカンバ・トドマツ林となる。部分的にはトドマツが多くなり、トドマツ林となっている。このダケカンバ・トドマツ林とトドマツ林は、海に面した台地上に広く認められる。針葉樹としてはエゾマツ・イチイはほとんど出現せず、広葉樹としては亜寒帯性落葉広葉樹であるダケカンバから構成されている。このダケカンバ・トドマツ林は海に近い部分に分布が限定されており、海岸性の針広混交林といえる。

内陸部にゆくと、針広混交林が丘陵の全域を広く占めているが、前述した海岸性の針広混交林とは非常に異なっている。すなわち構成樹種においては、トドマツのほかエゾマツ・イチイの混生をみる。さらに大きな相違は広葉樹で、ダケカンバは見られるものの、シナノキ・ミズナラ・ハリギリ・ナナカマド・ケヤマハンノキ等と多くの冷温帯性広葉樹からなっており、トドマツ・(エゾマツ)・シナノキ林としてまとめられる。前述した海岸性針広混交林に対して、内陸性針広混交林と言える。これらの樹種によって構成される針広混交林は、北海道では広く認められるいわゆる下部針広混交林である。またこの内陸性針広混交林の階層構造は、最大樹高は25m以上に達しているとともに、いろいろな大きさの個体からなり、階層構造が複雑である。この点では、海岸性針広混交林は樹高が15m程度と低いとともに、階層構造も単純で、一層林あるいはダケカンバが上層林冠を占め、トドマツが中層に分布するという形の二層林となる場合が多いのと対照的である。内陸性針広混交林の中では、部分的に針葉樹林となっている。さらに中層でイチイが優占する林分あるいは上層木を欠き、イチイ純林といえる林分も認められる。また、シロエゾマツが混生する場合もあるが、かつて存在していたシロエゾマツ大径木の多くは伐採され、現在はシロエゾマツ保護林以外ではほとんどみられなくなっている。

一方、広葉樹の混生が多くなり、広葉樹林であるエゾイタヤ・シナノキ林となっている場合もある。針広混交林と接する場合には、針葉樹を含む場合が多いが、厚岸市街地周辺などの人家の周辺では、ほとんど針葉樹を含まず、エゾイタヤが優占する広葉樹林がみられ、これらは、人為の伐採による二次林であろう。さらに昆布森地区では、道道尾幌・昆布森・釧路線沿いにはケヤマハンノキ二次林が広くみられる。

本公園地域を特徴づける植生として、霧多布湿原があげられる。霧多布湿原については次項で述べることとして、本項では厚岸湖東岸を例として、低地部での植生の配列について述べる。厚岸湖はかん水湖で、塩素量は別寒辺牛川河口をのぞけば15.5～16.1 g/lで(山田, 1984)、海水のそれが19 g/l前後であるのと比較すると、塩分濃度が高い。そのため浅く、泥質の海水域ではアマモ群落のみられる。流域についてみると、トキタイ川河口では泥質の場合と砂質の場合とがある。前者の場合では、ウミミドリ群落となっているのに対して、後者ではハマニシク群落となるが、帯状にわずかにみられるだけである。これら汀線にもっとも近い群落の背後は、いずれもヒメウシオスゲ・シバナ群落、アッケシソウ群落となっている。トキタイ川および東梅川河口付近での観察では、ヒメウシオスゲ・シバナ群落が塩湿地植生の大半を占めており、アッケシソウ群落は、図4-19で明らかなようにヒメウシオスゲ・シバナ群落の空所の腐泥上に小さな群落をつくっている。以上の塩湿地植生は、内陸側でヨシイワノガリヤススゲ類群落と直接接しており、湿原周辺の丘陵までの間は低層湿原となっている。湿原内の各所にはハンノキ林が分布しているが、密度がきわめて疎で、樹高2 m以下のものから、樹高10 m以上となり、密度の高いものまで多様である。丘陵に入り込んでいる沢は、標高差が小さいため一般に広く、幅も小さく、ハンノキ林となっている場合が多い。沢の奥の部分では傾斜がややあり、沖積土が堆積し、河畔林としてのヤチダモ林が分布している。アカエゾマツ林は、保護林として指定されている林分が調査を行なったが、群落としては他に認められなかった。

(2) 霧多布湿原

霧多布湿原は、北-西-南の三方を丘陵に囲まれ、東は浜中湾、琵琶瀬湾に開いている。南北幅約9 km、東西幅3～4 km、面積約3,000 ha、海拔3 m以下の弓型をした低湿地地帯である。

湿原の大部分はミズゴケ泥炭地で、泥炭の厚さは0.7～2.6 m(吉井・工藤, 1926)である。

湿原の北半分には、旧砂丘列に起因する(岡崎, 1982)新川、泥川が平行して南走し、同様に泥沼、小長沼、ジュンサイ沼など、帯状の池沼も並列している。しかし南半部は、琵琶瀬川、二番川、一番川が樹枝状に広がっている(岡崎, 1982)。

湿原の大半はミズゴケ泥炭地を基盤とするヌマガヤヨシ群落でおおわれ、そのうち、河川の自然堤防地や池沼に囲まれた湿原域は、高層湿原に傾斜したワタスゲヤチヤナギ群落がしめている。この立地には、霧多布湿原を特徴づけるミズゴケのブルトが発達している。

河川の流域はヨシイワノガリヤススゲ類群落がしめている。本群落は、北半部では丘陵地に湾入する沢地を中心に分布し、南半部では琵琶瀬川、二番川、一番川の下流域を占め、河口付近で塩湿地植物群落と混在している。

湿地林はハンノキ林が主体である。河川沿いの自然堤防地、および丘陵地に湾入する沢地を占めている。

ハンノキはミズゴケ泥炭地にも散生するが、その場合には樹高3～4 mの小型な樹林にとどまる。

河川上流域の沢地には、高さ30～40 cmに隆起したスゲ類叢株の密集団が認められる。

点在する池沼にはミツガシワ、ミズドクサなどの挺水植物群、およびタヌキモ、ネムロコウホネ、エヒツジグサ、ジュンサイなどの沈水・浮葉植物群が占めている。

(3) 厚岸地区と昆布森地区の植生の比較

厚岸地区では、ミヤマハンノキ林-ダケカンバ林-ダケカンバ・トドマツ林あるいはトドマツ林といふ帯状構造が顕著に発達しているが、昆布森地区ではミヤマハンノキ林は分布するものの、面積が小さ

く、あまり発達せず、海側林縁ではミズナラの風衝林となることが多い。ダケカンバ林についても尻羽岬周辺でよく発達しているが、一般に発達は悪い。針広混交林も同様に、厚岸地区では海岸性の針広混交林であるダケカンバ・トドマツ林が広い面積にみられるが、昆布森地区では、内陸性の針広混交林であるトドマツ・(エゾマツ)・シナノキ林の面積が広く、海岸線に近い位置にも出現している。また海岸草原についても、両地域での発達の程度が異なる。このような植生、とくに森林植生の相違については、いくつかの原因が考えられる。

地形的にみると、両地区とも段丘であるが、厚岸地区では海蝕崖は非常に急で、段丘面が平坦であるのに対して、昆布森地区では傾斜は相対的に緩やかで、段丘面も平坦地が少なく、地形は複雑である。結果的に、森林はより標高が低く、海岸線に近い位置から成立している。渡辺(1985)は、ミヤマハンノキ林やダケカンバ林は亜寒帯性落葉広葉樹林で、それを決定する要因は、本地域特有の海霧の影響による生育期間の寒冷多湿な条件であると述べており、両地区での地形の相違にもなって、海霧の影響の異なることが推定される。

また人間の影響も無視できないであろう。すなわち、昆布森地区では、海岸線に人家が多いのに対して、厚岸地区では地形的な制約により人家は少ない。そのため人間による影響、とくに伐採の影響は両地区で異なり、昆布森地区でより強く伐採を受けていたであろう。その結果は、萌芽能力の高い樹種の増加、林床がササ類に覆われていることからくる種子による更新の困難性から、ミズナラの増加、ダケカンバあるいはトドマツの減少をもたらしたと考えることができる。一方厚岸地区では、放牧の影響が強く、森林に対する影響は相対的に小さかったことが予想される。

ここでスズタケ [*Sasamorpha borealis* (Hack.) Nakai] の分布についてふれる。今回の調査では、トドマツ・ダケカンバ林 (Belt 1) の林床でスズタケが出現している。スズタケは昆布森地区の浦雲泊に下る途中でも広葉樹林の林床に認められた。豊岡ら(1983)によると、スズタケは昆布森地区に分布することになっている。また館脇・三角(1957)によれば、スズタケ(原論文ではエゾスズタケ *Sasamorpha purpurascens* Nakai としている)は、主として太平洋沿岸に分布が限定され、その東限を西和田とするとともに、落石でトドマツ-エゾスズタケ基群叢を記載している。今回の調査では、厚岸地区では海岸地域でスズタケを確認できず、このスズタケの分布も、両地区での立地の相異を反映しているものと思われる。

(4) 海霧地帯の森林

防霧林は日本特有の保安林の一形式で、日本の中でも釧路以東の海岸線にそって設定されている。釧路を中心とする海霧は太平洋の黒潮と親潮とが接することから発生し、季節的には春から夏にかけてもっとも強くかかる。そのため、防霧林の効果を解明することを目的に、防霧林の基礎的調査が行なわれた(北海道林務部, 1951, 1953, 1954. 北大低温科学研究所, 1952)。

海霧地帯の森林の特徴として、海側からミヤマハンノキ林-ダケカンバ林-ダケカンバ・トドマツ林あるいはトドマツ林という帯状構造が発達している点あげられる。この帯状構造は、森林の垂直分布での亜高山帯から高山帯にかけての構造と一見類似している。しかし、針葉樹としてハイマツ、エゾマツを見ないこと、森林の前面の海岸草原の構成種は、高山帯のそれとは異なることなどから、垂直分布とは異質なものと見える。渡辺(1985)は、ダケカンバ林、ミヤマハンノキ林は亜寒帯性落葉広葉樹林で、寒冷多湿な気候条件下に成立するものと考えて

いる。本地域特有の海霧は、生育期間の低温と多湿をもたらし、垂直分布を決定する主な要因と考えられる強風とそれに伴う乾燥とはかなり異なっている。このタイプの森林は、北海道の平地では、本地域に限定されるが、千島列島からの連続的な分布の末端とみることができ、千島列島を含めて検討する必要があるであろう。

(5) 茶内道有林の森林

厚岸地区の丘陵地は茶内道有林といわれ、針広混交林が広く覆い、部分的には針葉樹林となっている。本地域から根室にかけての一带は、道内でも針葉樹の優勢な地域であり、前述したように海岸地域のミヤマハンノキ林・ダケカンバ林が千島からの分布の末端と位置づけられることから、亜寒帯に近い位置にあることがわかる。

茶内道有林には、イチイ林、シロエゾマツ林、アカエゾマツ林が保護林に指定されている。またこれらは厚岸道立自然公園のうちでも、第1種特別地域に指定されている。さらに環境庁による自然環境保全基礎調査の特定群落（環境庁、1980）として、「茶内オンコ林」が選定されており、文化庁による天然記念物緊急調査（文化庁、1981）の結果、学術上価値の高い植物群落および生物の所在地として「茶内道有林」があげられている。

イチイ（オンコ）は分布域が広く、普遍的にみられるものの、イチイ林というかたちで純度の高い場合は少ない。茶内の他、上尾幌（井上、1941）、屈斜路（館脇、1952）、焼尻島（斉藤・豊田、1975）にまとまったイチイ林がみられる。いずれも中層をイチイが占めているが、上層林冠は、道東地方ではトドマツあるいはトドマツに広葉樹を混生しているが、焼尻島ではミズナラによって構成されている。イチイ林の成立について古畑（1936）は、陽光の点から、トドマツ林下では被陰に強いオンコのみが生育可能で、本地域の特徴である海霧が陽光の不足を一層助長しており、イチイ林の成立にはトドマツが必要で、イチイの純林は上層のトドマツ林の消失によるものとした。館脇・田下（1937）は群落学的な検討からイチイ林をトドマツ林中の終局的特殊団林と位置づけた。一方、焼尻島のイチイ林の成立について斉藤・豊田（1975）は、イチイは積雪による保護、耐陰性に富むことから広葉樹林の下生として生育でき、さらに森林伐採がはじまった時にイチイが残された結果であろうとしている。

井上（1941）は、尾幌のオンコ林で調査を行ない、伐根の樹齢構成から、上層のトドマツと中層のイチイはほぼ短期間に一斉に成立したもので、階層構造での違いは、イチイの成長が緩慢で、被圧と本来の性質から、よりはやく成長が衰退する結果と考えた。その成立の契機は、風倒およびこれに伴う二次的虫害によって、前生林が短期間に倒壊し、その跡地に被圧前生樹ないし多年埋蔵されていた種子が一斉状に生じたものと推定している。斉藤・豊田（1975）は焼尻島で単木的に成長錐により樹齢を推定しており、アカエゾマツとイチイとはほぼ同一齢であり、ミズナラは上木なのにイチイより約30年若いという結果を得ているが、上木のミズナラ・アカエゾマツと中層のイチイはほぼ同齢とみることもでき、井上の推定を裏付けているものといえる。

イチイの種子は多くが動物によって消費され、散布されるが、その散布もヤマガラなどによる貯食散布とヒヨドリなどによる被食散布が認められる（榊原、1983）。さらに重力散布とヤマガラ型の貯食散布、ヒヨドリ型の被食散布の更新に果たす役割については、重力散布は実生を発生するものの数年で消失するが、貯食散布では母樹から離れた位置に高い密度で散布されるのに対して、被食散布では広い範囲にランダムに散布されるという（野口、1983）。しかし、このようにして散布された種子のみでは、

高密度のイチイ林の形成にはむすびつかないであろう。以上の結果から、動物により母樹から離れた場所に散布され、局所的に好適な条件下で単木あるいは少数個体が発生する一方で、部分的な森林の破壊、具体的には茶内でイチイ林が1~5 haの団林をなす(館脇・田下, 1937)ことからすれば、その程度の面積での破壊により、一斉に更新し、生長するにつれて、下層になった個体のうちイチイ以外の個体の多くは枯死するが、イチイは生存し、中層をなすようになると考えられる。

シロエゾマツは、樹皮がトドマツに以て灰青色または灰褐色、薄くて平滑、基部では多少縦の裂け目を有することはあるが、エゾマツのような亀甲状の深い裂け目をもたないことから、館脇(1932)が *Picea jezoensis* Carr. var. *Tatewaki* Tatewaki シロエゾとして記載した。しかし樹皮以外の点では、エゾマツとのちがいはなく、現在は品種として *Picea jezoensis* Carr. form. *takedai* (Tatewaki) Hayashi の学名が与えられている。竹下(1979)によると、その生長は天然林ではトドマツ以上の成長率を示し、人工林でも良好な成績を残している。厚岸地方ではかつてシロエゾマツが多くみられたが、大径木が多く、相当量伐採され、現在では保護林とその周辺にわずかに残っているのみであるといわれている。Belt 4の結果からは、トドマツ・シロエゾマツとシナノキなどの冷温帯性広葉樹とが混交しており、シロエゾマツは、中・小径木を欠いていた。シロエゾマツの更新は、現在の状態では困難なものと思われ、この点は、エゾマツと共通する面をもっている。

保護林に指定されているアカエゾマツ林は、アカエゾマツスゲ類-藓苔類群落で、湿原系のアカエゾマツ林である。Belt 5の結果では、アカエゾマツは藓苔類に覆われた高さ50cm前後の小丘上に見られ、小丘以外の部分はスゲ類・ミズバシヨウ・ミズゴケ類等に覆われている。このようなタイプのアカエゾマツ林は、落石岬でも認められる。館脇(1952a)によると、落石岬ではアカエゾマツ-ミズバシヨウ基群叢が記載され、藓苔類型のアカエゾマツ林の1型で、樹冠下に根上状の藓類の小丘に富んでおり、小丘上では藓類中にツルツゲ・イワツツジ・コヨウラクツツジ・ゴゼンタチバナが、低地ではミズゴケ類・ミズバシヨウが多くなっている。Belt 5とは組成をやや異にするが、樹冠下に小丘をもつ点は似ており、なんらかの共通点が予想される。厚岸道立自然公園地域におけるアカエゾマツ林の分布は、聞き取り調査あるいは現地踏査・空中写真の判読の結果、本保護林以外では存在が確認できなかった。また、丘陵地の針広混交林でもアカエゾマツはまれであった。なお空中写真の判読では、トキタイ川の中流域で、ヨシを主体とする湿原内に針葉樹が1本認められ、周囲の状況から、アカエゾマツの可能性が高い。またピワセ高台の展望台の北側の湿原内にも数本の針葉樹が認められ、アカエゾマツであろう。厚岸周辺で直接観察した限りでは、尾幌川下流でアカエゾマツ林を確認したが、林床はヨシが優占しており、市街の拡大により面積を縮小しており、林分としての相観をもはや留めていない。本公園地域でのアカエゾマツ林の分布がまれであることは、温根沼周辺あるいは上尾幌で湿原系のアカエゾマツ林が発達している(館脇, 1944)のと対照的である。本地域でのアカエゾマツ林の欠如する原因は興味深い問題である。

(6) アッケンソウおよび塩湿地植生

塩湿地植生は、本公園地域では厚岸湖周辺・火散布沼周辺および霧多布地区の琵琶瀬川河口・新川河口などに分布が認められる。今回は、このうちもっとも面積が広い、厚岸湖岸トキタイ川河口付近で調査を行なった。その結果、ウミミドリ群落、ヒメウシオスゲ・シバナ群落、アッケンソウ群落が認められ、トキタイ川河口および東梅川河口ではヒメウシオスゲ・シバナ群落が塩湿地植生の大半を占めてい

た。アッケシソウ群落は小面積で、図4-19でみるようにヒメウシオスゲ・シバナ群落の間隙の裸地の部分に分布している。両群落の分布は微地形と対応しているようで、微高地ではヒメウシオスゲ・シバナが優勢で、アッケシソウは侵入できない。ヒメウシオスゲ・シバナ群落中にアッケシソウの混入をみるが、その高さはアッケシソウの純群落の場合と比較すると低くなっている。アッケシソウが定着・生育できるのは微低地の腐泥質の裸地で、さらにアッケシソウが1年生で小型の種子であることから、裸地のうちわずかに高い部分に定着・生育できるものと考えられる。

辻井(1954)によると、厚岸湖岸のアッケシソウ群落はヨシ群落の発達と反比例し、シバナおよびヒメウシオスゲはヨシ群落ほど重要な意義をもたないとしているが、現在ではヨシの刈り払いもなく、自然性の塩湿地植生が大半を占めるようになり、ヨシ群落と塩湿地植生の分布域は明瞭に分かれており、反比例的な関係は認められない。かえて、ヒメウシオスゲ・シバナ群落とアッケシソウ群落が反比例的な関係をなしていると言える。両群落の間には優劣関係があり、現在の両群落の分布状態から、ヒメウシオスゲ・シバナ群落が優勢であると考えられる。この優劣関係はヒメウシオスゲ・シバナが多年生であるのに対して、アッケシソウが1年生であるという生活形のちがいを反映しているものであろう。しかし、1年生であるアッケシソウは、新たな腐泥質の裸地に移動することで、種を維持できるであろう。

以上述べた厚岸湖畔でのアッケシソウ群落の分布は、オホーツク海沿岸ではアッケシソウ群落が先駆群落として、広い面積の純群落を形成する(伊藤, 1963)のとは、まったく異なっている。この相違は、太平洋面とオホーツク面では、干満の差が異なり、太平洋面では干満差が大きいいため、汀線付近では1年生で種子の軽いアッケシソウの定着は困難となり、逆にヒメウシオスゲ・シバナ群落の空所の裸地に定着できるものと考えられる。

第2節 現存植生図

植生調査の結果に基づいて、2種類の現存植生図を作成した。1つは50,000分の1の縮尺で、厚岸道立自然公園地域全域を対象とした。もう1つは25,000分の1の縮尺で、霧多布湿原を対象とした。

現存植生図作成にあたって使用した空中写真と図面は以下のとおりである。空中写真は、建設省国土地理院撮影によるカラー写真で、CHO-78-7 厚岸地区(1978年10月)およびCHO-77-46 釧路地区(1977年9~10月)である。図面は、昆布森地区の国有林では、根釧地域施業計画区釧路事業区第4次樹立事業図(1983年調製)、厚岸地区・霧多布地区の道有林については、厚岸経営区林相図(1985年調製)を使用した。

(1) 厚岸道立自然公園地域の現存植生図

厚岸道立自然公園地域全域の現存植生は、相観に基づいて、森林、草原、その他に区分された。さらに以上の区分は、森林13、草原9、その他5の計27に細分され、図示された。本地域の現存植生図の凡例は、以下のとおりである。なお、現存植生図は、巻末に添付した。

厚岸道立自然公園地域現存植生図凡例

森林	天然林	針葉樹林	トドマツ林	1
			アカエゾマツ林	2
		針広混交林	ダケカンバ・トドマツ林	3

		トドマツ・(エゾマツ)・シナノキ林	4
広葉樹林		ミヤマハンノキ林	5
		ダケカンバ林	6
		ミズナラ林	7
		エゾイタヤ・シナノキ林	8
		ヤチダモ林	9
		ハンノキ林	10
人工林	常緑針葉樹人工林		11
	落葉針葉樹人工林		12
	落葉広葉樹人工林		13
草原植生	海岸植生	海岸断崖植生	14
		海岸草原	15
	湿原植生	ヨシ・イワノガリヤス・スゲ類群落	16
		ヌマガヤ・ヨシ群落	17
		ワタスゲ・ヤチヤナギ群落	18
	塩湿地植生		19
	ササ草原		20
	雑草原		21
	伐採跡地		22
その他	農耕地・苗圃		23
	宅地・コンブ干場		24
	人工裸地		25
	自然裸地		26
	開放水面		27

以下各区分された群落の内容・分布について述べる。

〔森林 天然林 針葉樹林〕

1. トドマツ林：アカエゾマツ林を除く針葉樹林を一括して、トドマツ林として示した。本地域では、針広混交林が広い面積を占めており、その中に点在する針葉樹の多い部分である。海岸地域ではほぼトドマツのみからなるが、内陸部ではトドマツの他、シロエゾマツを含むエゾマツあるいはイチイをわずかに混生する。
2. アカエゾマツ林：アカエゾマツ林は本地域では、保護林に指定されている林分のみに分布が確認され、湿原系のアカエゾマツ林で、前記トドマツ林とは立地がまったく異なっている。

〔森林 天然林 針広混交林〕

3. ダケカンバ・トドマツ林：ダケカンバとトドマツから構成され、海岸性の針広混交林で、海岸地域に分布している。一般的には、ダケカンバ林の背後に成立している。
4. トドマツ・(エゾマツ)・シナノキ林：内陸性の針広混交林で、針葉樹ではトドマツを主体に、わずかにエゾマツ・イチイを混生し、広葉樹ではシナノキ・エゾイタヤ・ミズナラ・ハリギリ・ナナ

カマド等多くの広葉樹が混生している。この内陸性針広混交林が、本地域の天然林としてもっとも広い面積を占めている。

〔森林 天然林 広葉樹林〕

5. ミヤマハンノキ林：もっとも海側前線に出現する森林で、ミヤマハンノキからなる低木林である。現存植生図では面積の比較的大きいもののみを示した。厚岸地区に多くみられる。
6. ダケカンバ林：ほぼダケカンバのみからなる純林で、高木林となっており、海岸地域に広く分布しており、わずかに内陸部でもみられる。チンベから鯨浜にかけての一带や尻羽岬周辺によく発達したダケカンバ林が分布している。
7. ミズナラ林：ほぼミズナラのみからなる純林で、海側前線の風衝林と、やや内陸よりのダケカンバ林と同じ位置にみられる高木林とがある。ミズナラ林は海岸地域に分布しており、風衝林は昆布森地区で、比較的多くみられる。
8. エゾイタヤ・シナノキ林：前述した海岸地域の広葉樹林と、湿原あるいは湿潤地のハンノキ林・ヤチダモ林を除く広葉樹林を一括して示す。多くの樹種から構成されており、内陸性の針広混交林と接し、針葉樹を含むものと、ほとんど針葉樹を含まないものとがある。後者は、厚岸市街の周辺などにみられる二次林である。また道路周辺のケヤマハンノキ林をも含む。
9. ヤチダモ林：ヤチダモ主体の溪畔林で、丘陵に入り込んでいる沢の上流部の土砂の沖積地に分布している。
10. ハンノキ林：湿原に分布する森林で、低木林から高木林までを含む。

〔森林 人工林〕

11. 常緑針葉樹人工林：国有林、道有林とも林冠下にトドマツなどの補植が行なわれているが、現存植生図では天然林として、林冠の構成種により区分した。人工林は昆布森地区の大半をなす国有林ではみられず、民有林にわずかに存在するのみである。一方、厚岸地区は大半が道有林で、造林地が大きな面積を占めている。植栽樹種はトドマツを主体にアカエゾマツなどで、古いものでは大正時代までもどるが、最近も積極的に伐採・植栽が行なわれている。
12. 落葉針葉樹人工林：植栽樹種はカラマツで、面積は小さく、最近植栽されていない。
13. 落葉広葉樹人工林：植栽樹種はヤチダモ・ニセアカシアなどで、厚岸市街に近い部分にわずかにみられるのみである。

〔草原植生 海岸植生〕

14. 海岸断崖植生：海岸断崖に成立するキリンソウ - ユキワリコザクラ群落に代表される植生で、小群状をなしている。植生図の上では、崖の記号の部分に該当する。
15. 海岸草原：海岸段丘上あるいは海に面した斜面に分布しており、一般的にはエゾミヤコザサ群落となっているが、斜面下方の崖錐堆積物上ではオオイタドリ群落となっている。

〔草原植生 湿原植生〕

16. ヨシーイワノガリヤスースゲ類群落：霧多布湿原では、湿原の周辺部および各河川沿いに分布している。また厚岸湖周辺、別寒辺牛川流域、火散布沼、藁散布沼周辺の湿原は、森林植生のハンノキ林を除くと全域がヨシーイワノガリヤスースゲ類群落となっている。
17. スマガヤーヨシ群落：本群落は、霧多布湿原でもっとも広い面積を占めており、湿原の中央部一帯

に分布している。

18. ワタスゲーヤチヤナギ群落：本群落は、霧多布湿原のもっとも中央部に分布しており、ヌマガヤーヨシ群落に周囲を取り囲まれている。琵琶瀬川の南側では不規則な形をしているが、北側では、汀線にはほぼ平行に細長く分布している。

〔草原植生 塩湿地植生〕

19. 塩湿地植生：海水の流入をみる湖岸の腐泥上に分布しており、とくに厚岸湖岸で発達している。厚岸湖岸の調査ではウミドリ群落、ヒメウシオスゲ・シバナ群落、アッケシソウ群落が確認されたが、ヒメウシオスゲ・シバナ群落が広い面積を占めている。厚岸湖岸以外では、霧多布地区の琵琶瀬川等の河口部、火散布沼周辺にわずかに分布している。

〔その他草原植生〕

20. ササ草原：海岸地域のエゾミヤコザサ群落とは異なり、伐採跡地あるいは耕作放棄地に成立した代償植生である。
21. 雑草原：耕作放棄地、道路法面等を示した。
22. 伐採跡地：伐採地のうち、道有林では速やかに植栽がなされるが、民有地ではその保障がないため、空中写真上で、伐採されたが植栽の形跡が認められないものを伐採跡地として示した。
23. 農耕地・苗圃：農耕地としては、北端部で牧草地に一部がかかっているが、小面積のものが多く。また、道有林のオソナイ苗圃も農耕地と一括して示した。

〔その他〕

24. 宅地・コンブ干場：市街地としては、厚岸、霧多布、散布の他はいずれも狭い海岸線の平坦地に宅地があり、ほとんどの場合海側にコンブ干場をもっているもので、一括して示した。
25. 人工裸地：土取り場等を示した。
26. 自然裸地：自然裸地としては、海岸線に沿った礫浜および砂浜を示した。
27. 開放水面：湖沼では、海水域にアマモ群落、淡水域では若山沼にネムロコウホネーエゾヒツジグサ群落（新庄，1982）等の水生植物群落が分布しているが、今回の調査では陸上域のみを対象とし、それらの分布域を確認できなかったため、現存植生図上では、開放水面として扱った。

(2) 霧多布湿原の現存植生図

霧多布湿原の現存植生図を図4-20に示す。凡例は以下のとおりである。

霧多布湿原現存植生図凡例

- ワタスゲーヤチヤナギ群落
- ヌマガヤーヨシ群落
- ヨシイワノガリヤスースゲ類群落
- ハンノキ林
- 塩湿地植生

以下各群落の分布状態について述べる。

- ワタスゲーヤチヤナギ群落：高層湿原に性状が傾斜した群落で、河川および池沼に囲まれた立地の中央部に分布している。
- ヌマガヤーヨシ群落：ミズゴケ泥炭地を基盤とする群落で、湿原の大半を占めている。

- ヨシーイワノガリヤスースゲ類群落：低層湿原で、河川流域および丘陵地に湾入する湿原部に分布している。
- ハンノキ林：湿地林で、丘陵地に接する上流域および自然堤防地に分布している。
- 塩湿地植物群落：琵琶瀬川の河口部に分布している。

引用文献

- 文化庁．1981．天然記念物緊急調査，植生図・主要動植物地図．1 北海道（釧路・根室支庁）（財団法人地理協会）
- 古畑要司．1936．厚岸地方に於けるオンコに就て．北海道林業会報，34：463-470，534-538．
- 北大低温科学研究所．1952．防霧林に関する研究（昭和26年度）第2輯．
- 北海道林務部．1951．防霧林に関する研究（昭和25年度）第1輯．
- 北海道林務部．1953．防霧林に関する研究（昭和27年度）第3輯．
- 北海道林務部．1954．防霧林に関する研究（昭和28年度）第4輯．
- 井上義則．1941．東部北海道に於けるオンコ林の生態学的考察．昭和15年度日本林学会春季大会講演集：78-83．
- 伊藤浩司．1963．北海道東部塩湿地植物群落の研究．北大植物園紀要，1：1-101 + P1. 12．
- 環境庁．1980．日本の重要な植物群落（第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書），北海道版．
- 野口重一．1983．イチイの生態に関する研究(II)－種子の散布と実生の定着－．日本林学会北海道支部講演集，32：163-165．
- 岡崎由夫．1982．浜中町霧多布付近の地形・地質．「霧多布湿原及びその周辺の科学調査報告書」（釧路市立郷土博物館道東海岸線総合調査団）：3-8．
- 斉藤新一郎・豊田倫明．1975．焼尻島のイチイ林について．日本林学会北海道支部講演集，24：38-42．
- 榊原茂樹．1983．イチイ種子の動物による消費と散布．日本林学会北海道支部講演集，32：166-168．
- 新庄久志．1981．大黒島の植生．「大黒島及びその周辺の科学調査報告書」（釧路市立郷土博物館道東海岸線総合調査団）：4-10．
- 新庄久志．1982．若山沼周辺の植生．「霧多布湿原及びその周辺の科学調査報告書」（釧路市立郷土博物館道東海岸線総合調査団）：11-16．
- 竹下脩二．1979．シロエゾマツの生長について．北方林業，31：273-276．
- 館脇 操．1932．天塩地方演習林植物目録（第二報）．北大演習林研究報告，7：181-208．
- 館脇 操．1944．アカエゾマツ林の群落学的研究．北大演習林研究報告，13(2)：1-181．
- 館脇 操．1952 a．落石附近の植生．「防霧林に関する研究（昭和26年度）第2輯」（北大低温科学研究所）：275-291．
- 館脇 操 1952 b．屈斜路湖畔のオンコ林．植物生態学会報，2：97-103．
- 館脇 操 1953．防霧林帯の樹型．植物生態学会報，2：162-169．
- 館脇 操・三角 亨．1957．落石のトドマツ－エゾスズタケ群落．日本生態学会誌，7：14-18．
- 館脇 操・田下英治．1937．ヲンコ林の群落学的研究．生態学研究，3：279-294
- 豊岡 洪・佐藤 明・石塚森吉．1983．北海道ササ分布概説．林業試験場北海道支場．
- 辻井達一．1954．釧路厚岸湖畔アッケシソウの生態（第一報）－北海道塩湿地植物群落の研究(1)．植物生態学会報，3：236-249．
- 渡辺定元．1980．北海道天然生林の樹木社会学的研究．北海道営林局．

山田真弓. 1984. 厚岸湖の自然. 北海道の自然, 24: 76-86.

吉井義次・工藤裕舜. 1926. 北海道琵琶瀨並に静狩泥炭地調査報告. 天然記念物調査報告(植物之部)

第五輯: 25-29.

第3節 高等植物相

厚岸道立自然公園地域は、標高のもっとも高いところでも200 mと低いものの、海岸地域の断崖・草原・湿原・塩湿地・湖沼を含み、多様な植物によって構成されている。また、海霧地帯という特異な環境条件から、特異な植物の出現が期待される。

しかし、研究小史で述べたように、本地域でのまとまった植物相の解明はいまだなされていない。

今回の調査では、植生の解明を主目的として行なったため、また調査期間が短期間であったため、植物相の把握においては、不十分なものであった。そこで本項では、現地調査での確認種とともに、既存の文献に基づいて、高等植物目録を作成した。目録では、今回の調査での確認種には*印をつけ、既存の文献による確認種については、出典を記号で示した。

学名・和名はおもに田川基二：原色日本羊歯植物図鑑，保育社。北村四郎ら：原色日本植物図鑑草本編（上）（中）（下），木本編（Ⅰ）（Ⅱ），保育社。長田武正：原色日本帰化植物図鑑，保育社を基準とし、異名等については最小限の整理を行なった。

厚岸道立自然公園地域において、今回の調査で確認された植物は310種と3亜種，1変種，1品種である。既存の文献によるものを加えると，531種と7亜種，18変種，3品種がリスト・アップされた。

- a：館脇 操・中野 実・山本 肇，1953，防霧林の植生。「防霧林に関する研究（昭和27年度）第3輯」（北海道林務部）：182-227。
- b：館脇 操・中野 実・山本 肇，1954，防霧林の植生。「防霧林に関する研究（昭和28年度）第4輯」（北海道林務部）：167-204。
- c：館脇 操・田下英治，1937，オンコ林の群落学的研究。生態学研究，3：279-294。
- d：館脇 操，1953 a，茶内道有林の植生。北方林業，52：5-11。
- e：館脇 操，1953 b，大黒島の植生。樹氷，3（6）：8-14。
- f：館脇 操・辻井達一，1956，北海道牧野の植物学的研究。北海道開発局局長官房開発調査課，106pp。
- g：辻井達一，1954，釧路厚岸湖畔アッケシソウの生態（第一報）-北海道塩湿地植物群落の研究（1）。植物生態学会報，3：236-249。
- h：田中瑞穂，1959，北海道東部湿原の群落学的研究（第Ⅱ報），霧多布湿原植物群落の構造。北海道学芸大学紀要，10（1）：112-125。
- i：新庄久志，1984，道東海岸線の植生。「道東海岸線総合調査報告書」（釧路市立郷土博物館）：47-86。
- j：合田勇太郎，1981，釧路地方の植物総説。

厚岸道立自然公園の高等植物目録

PTERIDOPHYTA シダ植物

LYCOPHYTA ヒカゲノカズラ門

Lycopodiaceae ヒカゲノカズラ科

- * *Lycopodium chinensis* Christ ヒメスギラン
- * *Lycopodium serratum* Thunb. ホソバノトウゲシバ a, b, c, d, f

CALAMOPHYTA トクサ門

Equisetaceae トクサ科

- * *Equisetum arvense* L. スギナ c, i, j
- Equisetum hyemale* L. トクサ a
- * *Equisetum limosum* L. ミズトクサ i
- Equisetum palustre* L. イヌスギナ h

PTEROPHYTA シダ門

Bortrychiaceae ハナワラビ科

- * *Sceptridium multifidum* (Gmel.) Nishida var. *robustum* (Rupr.) Nishida エゾフユノハナワラビ

Osmundaceae ゼンマイ科

- * *Osmundastrum cinnamomeum* (L.) Pr. var. *fokiense* (Copel.) Tagawa ヤマドリゼンマイ a, b, f, i

Pteridaaceae イノモトソウ科

- * *Adiantum pedatum* L. クジャクシダ
- * *Coniogramme intermedia* Hieron. イワガネゼンマイ e, j
- * *Dennstaedtia wilfordii* (Moore) Christ オウレンシダ
- * *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn var. *latiusculum* (Desv.) Und. ワラビ a, b, f, i

Aspidiaceae オンダ科

- * *Athyrium brevifrons* Nakai エゾメンダ (メンダ a, b, c, f)
- * *Athyrium conilii* (Fr. et Sav.) Tagawa ホソバシケンダ
- * *Athyrium pycnosorum* Christ ミヤマシケンダ i (ハクモウイノデ a, b, c, d, f)
- * *Athyrium yokoscense* (Fr. et Sav.) Christ ヘビノネゴザ a
Cornopteris crenulatoserrulata (Makino) Nakai イッポンワラビ a
- * *Dryopteris austrica* (Jacq.) Woynar シラネワラビ a, b, c, d, e, f
- * *Dryopteris crassirhizoma* Nakai オンダ a, b, c, d, e, f
- * *Lastrea nipponica* (Fr. et Sav.) Copel. ニッコウシダ j
- * *Lastrea thelypteris* (L.) Bory. ヒメシダ a, b, f, h, i, j
- * *Leptogramma mollissima* (Fisch.) Ching ミゾシダ
- * *Matteuccia struthiopteris* (L.) Todaro クサソテツ a, b, c, f, i, j
- * *Onoclea sensibilis* L. var. *interrupta* Maxim. コウヤワラビ a, b, f, h, i
- * *Phegopteris polypodioides* Fee ミヤマワラビ b, c, d, f
- * *Polystichum braunii* (Spenn.) Fee ホソイノデ a, d
- * *Polystichum tripterum* (Kunze) Pr. ジュウモンシダ
Woodsia polystichoides Eaton イワデンダ a

Polypodiaceae ウラボシ科

- * *Lepisorus ussuriensis* (Reg.) Ching var. *distans* (Makino) Tagawa ミヤマノキンノブ
Polypodium fauriei Christ オシヤグシデンダ e

ANTHOPHYTA 顕花植物門

GYMNOSPERMAE 裸子植物亜門

CONIFEROPSIDA マツ綱

Pinaceae マツ科

- * *Abies sachalinensis* (Fr. Schmidt) Masters トドマツ a, b, d, e, f, i, j
- * *Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere カラマツ j (植栽)
- * *Picea glehnii* (Fr. Schmidt) Mast. アカエゾマツ
- * *Picea jezoensis* (Sieb. et Zucc.) Carriere エゾマツ a, b, d, e, j
- * *Picea jezoensis* (Sieb. et Zucc.) Carriere form. *takedai* (Tatewaki) Hayashi シロエゾマツ

Cupressaceae ヒノキ科

Juniperus chinensis L. var. *sargentii* Henry ミヤマビャクシン j

Taxaceae イチイ科

* *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc. イチイ (オンコ b, d, e)

ANGIOSPERMAE 被子植物亜門

MONOCOTYLEDONEAE 単子葉植物綱

Typhaceae ガマ科

Typha latifolia L. ガマ j

Potamogetonaceae ヒルムシロ科

Potamogeton natans L. オヒルムシロ j

Zosteraceae アマモ科

* *Zostera marina* L. アマモ

Scheuchzeriaceae ホロムイソウ科

Scheuchzeria palustris L. ホロムイソウ h

* *Triglochin maritimum* L. シバナ g, j

Alismataceae オモダカ科

Alisma plantago-aquatica L. subsp. *orientale* Samuelsson サジオモダカ j

Sagittaria aginashi Makino アギナシ j

Gramineae イネ科

* *Agrostis alba* L. コスカグサ a, b, c, f

* *Agrostis clavata* Trinius ヤマヌカボ a, b, c, f

- Agrostis scabra* Willd. エゾスカボ j
- Alopecurus aequalis* Sobol. var. *amurensis* (Komar.) Ohwi スズメノテッポウ c
- Beckmannia syzigachne* (Steud.) Fernald カズノコグサ j
- Brachypodium sylvaticum* (Huds.) Beauv. ヤマカモジグサ a, b, f (エゾヤマカモジグサ b, f)
- Bromus remotiflorus* (Steud.) Ohwi キツネガヤ a, b, f
- Brylkinia schmidtii* Ohwi ホガエリガヤ a, b, f
- * *Calamagrostis canadensis* (Michx.) Nutt. var. *langsdoerffii* (Link) Inman イワノガ
リヤス a, b, c, f, i
- * *Calamagrostis epigeios* (L.) Roth ヤマアワ
- Calamagrostis hakonensis* Fr. et Sav. ヒメノガリヤス a
- * *Dactylis glomerata* L. カモガヤ j
- Deschampsia flexuosa* (L.) Trin. コメススキ j
- * *Diarrhena japonica* Fr. et Sav. タツノヒゲ a, d
- Echinochloa crus-galli* P. Beauv. イヌビエ j
- Echinochloa crus-galli* P. Beauv. var. *caudata* Kitagawa ケイヌビエ j
- * *Elymus dahuricus* Turczaninow ハマムギ a, b, f
- * *Elymus mollis* Trinius ハマニソニク j
- * *Elymus sibiricus* L. エゾムギ a, f, j
- Eragrostis ferruginea* (Thunb.) P. Beauv. カゼクサ j
- * *Festuca elatior* L. ヒロハノウシノケグサ
- * *Festuca ovina* L. ウシノケグサ a
- Festuca parvigluma* Steudel トボンガラ a
- Festuca rubra* L. オオウシノケグサ a, b, c, f
- Lolium perenne* L. ホソムギ j
- Milium effusum* L. イブキスカボ a, b, f
- * *Miscanthus sinensis* Anderss. ススキ c, i (エゾススキ a)
- * *Molinia japonica* Hackel スマガヤ h
- Muhlenbergia longistolon* Ohwi オオネズミガヤ b
- * *Muhlenbergia tenuiflora* B.S.P. var. *curviaristata* (Ohwi) T. Koyama コシノネズミガヤ
- * *Phalaris arundinacea* L. クサヨシ c, i
- * *Phleum pratense* L. オオアワガエリ a, j (チモシー c)
- * *Phragmites communis* Trinius ヨシ c, g, i (キタヨシ f, h, j)
- * *Poa annua* L. スズメノカタビラ b, j
- Poa eminens* Presl オニイチゴツナギ j
- * *Poa pratensis* L. ナガハグサ a, b, c, f, j
- * *Puccinellia kurilensis* (Takeda) Honda チシマドジョウツナギ (エゾノドジョウツナギ g)
- * *Sasa chartacea* (Makino) Makino エゾミヤコザサ b, f, i, j (アイスマヤコザサ b, c, d, f)
- * *Sasamorpha borealis* (Hack.) Nakai スズタケ a

Setaria viridis P. Beauv. var. *pachystachys* (Fr. et Sav.) Makino et Nemoto ハマ
Trisetum sibiricum Ruprecht カニツリススキ (チシマカニツリ a, b, f) エノコロ j

Cyperaceae カヤツリグサ科

- Carex amplifolia* Boott subsp. *dispalata* (Boott ex A. Gray) T. Koyama カサスゲ h
* *Carex augustinowiczii* Meinsh ex Korshinsky ヒラギシスゲ h, i
* *Carex breviculmis* R. Br. アオスゲ
* *Carex caespitosa* L. カブスゲ i
Carex capillacea Boott ハリガネスゲ h
* *Carex caryophyllea* Latour. subsp. *microtricha* (Franch.) T. Koyama チャシバスゲ a,
Carex fedia Nees subsp. *miyabei* (Franch.) T. Koyama ビロウドスゲ h^{b, f}
* *Carex gmelini* Hooker et Arnott ネムロスゲ b, c, f, j
Carex humilis Less. subsp. *lanceolata* (Boott) T. Koyama ヒカゲスゲ a
* *Carex incisa* Boott カワラスゲ (タニスゲ a, b)
* *Carex japonica* Thunb. ヒゴクサ a, b, f
Carex lasiocarpa Ehrh. subsp. *occultans* (Franchet) T. Koyama ムジナスゲ h
* *Carex limosa* L. ヤチスゲ h
* *Carex lyngbyei* Horhem. ヤラメスゲ h
* *Carex middendorffii* Fr. Schmidt クロスゲ h (ホロムイスゲ)
Carex nemurensis Fr. et Sav. ホソバオゼヌマスゲ h
Carex omiana Franchet ヤチカワズスゲ h
Carex onoei Fr. et Sav. ハリスゲ h
Carex pallida C. A. Meyer ウスイロスゲ b, f
* *Carex pisiformis* Boott subsp. *sachalinensis* (Fr. Schmidt) T. Koyama ゴンゲンスゲ
* *Carex pseudo-curaica* Fr. Schmidt ツルスゲ i b, d, e, f
* *Carex sabyensis* Lessing カミカワスゲ
* *Carex subspathacea* Wormskj. ヒメウシオスゲ g
Carex thunbergii Steud. アセスゲ h
Carex vesicaria L. オニナルコスゲ c, j
Eleocharis kamschatica Komarov クロハリイ h
Eleocharis palustris (L.) Roemer et Schult. *intersita* (G. Zinserl.) T. Koyama クロヌマ
ハリイ h
Eriophorum gracile Koch subsp. *coreana* (Palla) T. Koyama サギスゲ h
* *Eriophorum vaginatum* L. subsp. *fauriei* (E. G. Camus) T. Koyama ワタスゲ h, i
Rhynchospora alba Vahl ミカズキグサ h, j
* *Scirpus lacustris* L. subsp. *creber* (Fern.) T. Koyama フトイ h, j
* *Scirpus mucronatus* L. subsp. *robustus* T. Koyama カンガレイ

Scirpus smithii A. Gray subsp. *leiocarpus* (Komarov) T. Koyama コホタルイ j
Scirpus wichurii Bockl. subsp. *asiaticus* (Beetle) T. Koyama エゾアブラガヤ j
Trichophorum alpinum (L.) Pers. ヒメワタスゲ (ミヤマサギスゲ h)

Araceae サトイモ科

Arisaema japonicum Blume var. *atropurpureum* (Engler) Kitamura コウライテンナンショウ j
* *Calla palustris* L. ヒメカユウ (ヒメカイウ i)
* *Lysichiton camtschaticense* (L.) Schott ミズバショウ j
Symplocarpus foetidus Nutt. var. *latissimus* (Makino) Hara ザゼンソウ j

Commelinaceae ツユクサ科

Commelina communis L. ツユクサ j

Juncaceae イグサ科

Juncus effusus L. var. *decipiens* Buchen. イ (イグサ a, ヒメイ a)
* *Juncus haenkei* Meyer ハマイ
* *Juncus papillosus* Fr. et Sav. アオコウガイゼキショウ (ホソバノコウガイゼキショウ j)
* *Juncus tenuis* Willd. クサイ a, b, c, f

Liliaceae ユリ科

Allium schoenoprasum L. var. *foliosum* Regel アサツキ i
Allium schoenoprasum L. var. *glehni* (Fr. Schm.) Hara エゾネギ j
Allium schoenoprasum L. var. *yezomonticola* Hara ヒメエゾネギ j
Allium victorialis L. subsp. *platyphyllum* Hulten ギョウジャニンニク a
* *Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino オオウバユリ (エゾウバユリ a)
Clintonia udensis Trautv. et Mey. ツバメオモト e
* *Convallaria majalis* L. スズラン c, f, i
Disporum smilacinum A. Gray チゴユリ a
* *Fritillaria camtschaticensis* (L.) Ker-Gawl. クロユリ h, i
* *Hemerocallis dumortierii* Morren var. *esculenta* (Koidzumi) Kitamura センテイカ (エゾセンテイカ h, i エゾカンゾウ b, f, j)
* *Hosta rectifolia* Nakai タチギボウシ f, h, j
Lilium maculatum Thunb. subsp. *davuricum* (Baker) Hara エゾスカシユリ b
Lilium medeoloides A. Gray クルマユリ a, j

- Lloydia serotina* (L.) Reichenb. チシマアマナ i
- * *Maianthemum dilatatum* (Wood.) Nels. et Macbr. マイズルソウ a, b, c, d, e, f, h, i
Paris verticillata M. v. Bieb. クルマバツクバネソウ a, d
- * *Polygonatum odoratum* (Miller) Druce var. *maximowiczii* (Fr. Schmidt) Koidzumi
オオアマドコロ a, b, d, f, i, j
- Smilacina japonica* A. Gray ユキザサ j
- Trillium hageae* Miyabe et Tatewaki シラオイエンレイソウ a
- Trillium kamschaticum* Pallas オオバナノエンレイソウ a, b, c, f, i
- Trillium tschonoskii* Maxim. シロバナエンレイソウ (ミヤマエンレイソウ a, d)
- * *Veratrum album* L. subsp. *oxysepalum* Hulten バイケイソウ a, b, c, d, f, i, j

Iridaceae アヤメ科

- * *Iris ensata* Thunb. var. *spontanea* (Makino) Nakai ノハナシヨウブ a, f, j
- * *Iris setosa* Pall. ヒオウギアヤメ a, b, c, f, h, i, j

Orchidaceae ラン科

- Calanthe nipponica* Makino キンセイラン e
- Cypripedium macranthum* Sw. アツモリソウ j
- Cypripedium macranthum* Sw. var. *hotei-atsumorianum* Sadovsky ホテイアツモリソウ b, f
- Epipactis papillosa* Fr. et Sav. エゾスズラン b, i (アオスズラン b, i)
- Gymnadenia camtschatica* (Cham.) Miyabe et Kudo ノビネチドリ i, j
- Listera cordata* (L.) R. Br. フタバラン d
- * *Listera pinetorum* Lindley タカネフタバラン e
- * *Orchis aristata* Fischer ハクサンチドリ b, h, i, j (シロバナハクサンチドリ j)
- Orchis cyclochila* (Fr. et Sav.) Maxim. カモメラン e
- Oreorchis patens* (Lindl.) Lindl. コケイラン b, d, f
- Platanthera chorisiana* (Cham.) Reichb. f. タカネトンボ j
- Platanthera chorisiana* (Cham.) Reichb. f. var. *elata* Finet ミヤケラン b, f
- Platanthera mandarinorum* Reichb. f. var. *brachycentron* (Fr. et Sav.) Koidz.
ヤマサギソウ b
- Platanthera ophrydioides* Fr. Schm. キソチドリ j
- Platanthera sachalinensis* Fr. Schm. オオヤマサギソウ a, b, f
- Platanthera tipuloides* Lindley subsp. *nipponica* (Makino) Murata コバノトンボソウ j
- Pogonia japonica* Reichb. f. トキソウ h, j
- * *Spiranthes sinensis* (Pers.) Ames subsp. *australis* (R. Br.) Kimura ネジバナ h, j

DICOTYLEDONEAE 双子葉植物綱

CHORIPETALAE 離弁花亜綱

Salicaceae ヤナギ科

- Populus maximowiczii* Henry ドロヤナギ(ドロノキ j)
Salix gracilistyla Miquel ネコヤナギ j
* *Salix kuhltenii* Floderus コウライバッコヤナギ(エゾノバッコヤナギ i, j エゾノヤマネコヤナギ a, b)
Salix integra Thunberg イヌコリヤナギ j
Salix miyabeana Seemen エゾノカワヤナギ j
Salix pet-susu Kimura エゾノキヌヤナギ j
Salix taraikaensis Kimura タライカヤナギ a, b, f

Myricaceae ヤマモモ科

- * *Myrica gale* L. var. *tomentosa* C. DC. ヤチヤナギ h, j

Juglandaceae クルミ科

- * *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura オニグルミ i, j

Betulaceae カバノキ科

- * *Alnus crispa* (Aiton) Pursh, subsp. *maximowiczii* (Call.) Hult. ミヤマハンノキ a, c, f, i
* *Alnus hirsuta* Turcz. ケヤマハンノキ a, b, c, d, e, i
* *Alnus japonica* (Thunb.) Steud. ハンノキ j (ヤチハンノキ i)
* *Betula ermanii* Cham. ダケカンバ a, b, c, d, e, f, i
* *Betula maximowicziana* Regel ウダイカンバ d
Betula platyphylla Sukatchev var. *japonica* (Miq.) Hara シラカンバ j
* *Carpinus cordata* Blume サワシバ a, b

Fagaceae ブナ科

- * *Fagus crenata* Blume ブナ(植栽)
Quercus dentata Thunb. カシワ j
* *Quercus mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson
ミズナラ b, c, d, f, i, j

Ulmaceae ニレ科

- * *Ulmus davidiana* Planchon var. *japonica* (Rehder) Nakai ハルニレ f (アカダモ e)
- * *Ulmus laciniata* (Trautv.) Mayr オヒヨウ b, j

Urticaceae イラクサ科

- * *Laportea bulbifera* (Sieb. et Zucc.) Weddell ムカゴイラクサ a, d, e, f
- * *Pilea hamaoi* Makino ミズ
Pilea mongolica Weddell アオミズ j
- * *Urtica platyphylla* Wedd. エゾイラクサ a, b, c, e, f, i

Polygonaceae タデ科

- * *Polygonum aviculare* L. ミチヤナギ j
Polygonum aviculare L. var. *vegetum* L. オオミチヤナギ c (平)
- Polygonum lapathifolium* L. subsp. *nodosum* (Pers.) Kitam. オオイスタデ j
- * *Polygonum longisetum* De Bruyn イスタデ c, j
- * *Polygonum sachalinense* Fr. Schmidt オオイタドリ c, i, j
- * *Polygonum sagittatum* L. var. *sieboldi* (Meisn.) Maxim. アキノウナギツカミ a
- * *Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc. ミゾソバ a, e, f, i, j
Polygonum viviparum L. ムカゴトラノオ a, b, j
- Rumex acetocella* L. ヒメスイバ j
- * *Rumex aquaticus* L. スマダイオウ a, c
Rumex crispus L. ナガバギンギン j
Rumex longifolius DC. ノダイオウ j
Rumex maritimus L. コガネギンギン g, j
Rumex obtusifolius L. エゾノギンギン j

Chenopodiaceae アカザ科

- * *Atriplex gmelinii* C. A. Mey. ホソバハマアカザ j
- * *Atriplex gmelinii* C. A. Mey. subsp. *dilatata* (Franchet) Kitamura ハマアカザ j
- * *Chenopodium album* L. シロザ j
- * *Chenopodium album* L. var. *centrorubrum* Makino アカザ j
Kochia scoparia (L.) Schrad. ホウキギ j
- * *Salicornia europaea* L. アッケシソウ g

Salsola momarovi Iljin オカヒジキ j

Caryophyllaceae ナデシコ科

Cerastium caespitosum Gilib. オオミミナグサ i

* *Cerastium caespitosum* Gilib. var. *ianihes* (Williams) Hara ミミナグサ a, b, f, j

Cucubalus baccifer L. ナンパンハコベ j

Dianthus superbis L. エゾカワラナデシコ c, j

Honkenya peploides (L.) Ehrh. subsp. *major* (Hook.) Hulten ハマハコベ j

* *Moehringia lateriflora* (L.) Fenzl オオヤマフスマ a, b, f, i

* *Spergula arvensis* L. var. *sativa* (Boenn.) Koch オオツメクサ i

* *Spergularia marina* (L.) Griseb. シオツメクサ(ウシオツメクサ g, j)

* *Stellaria fenzlii* Regl エゾフスマ(シラオイハコベ a, b, c, d)

* *Stellaria humifusa* Rottb. エゾハコベ j

* *Stellaria longifolia* Muhl. ナガバツメクサ f

Stellaria media (L.) Villars ハコベ a, b, c, f, j

* *Stellaria radicans* L. エゾオオヤマハコベ i, j

Nymphaeaceae スイレン科

* *Nuphar pumilum* DC. ネムロコウホネ i

* *Nymphaea tetragona* Georgi エゾノヒツジグサ(エゾヒツジグサ i)

Cercidiphyllaceae カツラ科

* *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ b, d, e, j

Ranunculaceae キンボウゲ科

Aconitum sachalinense Nakai カラフトブシ j

* *Aconitum yezoense* Nakai エゾトリカブト a, b, f, h, i, j

* *Actaea asiatica* Hara ルイヨウシヨウマ a, b, c, d, f

* *Actaea erythrocarpa* Fischer アカミノルイヨウシヨウマ b, e

* *Anemone debilis* Fisch. ヒメイチゲ h, i

* *Caltha palustris* L. エンコウソウ i

Caltha palustris L. subsp. *barthsi* (Hance) Kitam. エゾノリュウキンカ h

* *Cimicifuga simplex* Wormsk. サラシナンシヨウマ(エゾシヨウマ a, b, c, d, f, j)

- * *Clematis alpina* L. var. *ochotensis* Regel et Tiling ミヤマハンシヨウヅル
- * *Ranunculus franchetii* H. Boiss. エゾキンボウゲ i, j (アイヌキンボウゲ a, b, f)
- Ranunculus gmelinii* DC. カラクサキンボウゲ
- * *Ranunculus quelpaertensis* Nakai キツネノボタン j (ヤマキツネノボタン a)
- Ranunculus reptans* L. イトキンボウゲ j
- Ranunculus sceleratus* L. タガラシ j
- * *Thalictrum aquilegifolium* L. var. *intermedium* Nakai カラマツソウ i
- * *Thalictrum minus* L. var. *hypoleum* (Sieb. et Zucc.) Miq. アキカラマツ a, b, c, f
(エゾアキカラマツ b, j)

Magnoliaceae モクレン科

- * *Magnolia kobus* DC. var. *borealis* Sarg. キタコブシ d
- * *Magnolia obovata* Thunb. ホオノキ b, d, e

Schisandraceae マツブサ科

- * *Schisandra chinensis* (Turcz.) Baill. チョウセンゴミシ a, b, c, f, i

Papaveraceae ケシ科

- * *Chelidonium majus* L. subsp. *asiaticum* Hara クサノオウ
- Corydalis ambigua* Cham. et Schl. エゾエンゴサク i
- * *Corydalis ochotensis* Turcz. var. *raddeana* (Regel) Ohwi ナガミノツルキケマン
(ツルキケマン a)

Cruciferae アブラナ科

- * *Arabis hirsuta* (L.) Scop. subsp. *nipponica* (Franch.) Kitamura ヤマハタザオ b
- Arabis pendula* L. エゾハタザオ j
- Arabis serrata* Fr. et Sav. var. *japonica* (H. Boiss.) Ohwi イワハタザオ b, c
- * *Arabis stelleri* DC. var. *japonica* (A. Gray) Fr. Schmidt ハマハタザオ a, i
- Barbarea orthoceras* Ledeb. ヤマガラシ i
- Capsella bursa-pastoris* (L.) Medic. ナズナ c, j
- Cardamine flexuosa* With. タネツケバナ i
- * *Cardamine leucantha* (Tausch) O. E. Schulz コンロンソウ a, d, i, j
- Cardamine pratensis* L. ハナタネツケバナ i, j
- Cochlearia officinalis* L. subsp. *oblongifolia* (DC.) Hulten トモシリソウ c
- Rorippa islandica* (Oeder) Boras スカシタゴボウ j

Sisymbrium luteum (Maxim.) O. E. Schulz カキネガラシ j

Droseraceae モウセンゴケ科

Drosera anglica Hudson ナガバノモウセンゴケ h

* *Drosera rotundifolia* L. モウセンゴケ h, j

Crassulaceae ベンケイソウ科

Sedum aizoon L. ホソバノキリンソウ a, b, f, j

* *Sedum aizoon* L. subsp. *kamtschaticum* (Fischer) Froderstr. キリンソウ b, c, i
(エゾキリンソウ j)

* *Sedum verticillatum* L. ミツバベンケイソウ i, j

Saxifragaceae ユキノシタ科

Astilbe thunbergii (Sieb. et Zucc.) Miq. var. *congesta* Boiss. トリアシヨウマ i, j

* *Chrysosplenium alternifolium* L. var. *sibiricum* Seringe エゾネコノメソウ i

Chrysosplenium flagelliferum Fr. Schm. ツルネコノメソウ a

Chrysosplenium kamtschaticum Fischer チシマネコノメソウ a

* *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc. ノリウツギ b, f, h, i, j (アジサイノリウツギ a, b, d)

* *Hydrangea petiolaris* Sieb. et Zucc. ツルアジサイ a, b, e, d, f (ゴトウヅル j)

Parnassia palustris L. ウメバチソウ h, j

* *Ribes latifolium* Janczewski エゾスグリ a, i

* *Ribes sachalinense* (Fr. Schmidt) Nakai トガスグリ a

Ribes triste Pallas トカチスグリ a, d

* *Saxifraga fusca* Maxim. エゾクロクモソウ a

Rosacea バラ科

* *Agrimonia pilosa* Ledeb. キンミズヒキ b, c, f, i, j

* *Aruncus dioicus* (Walter) Fernald var. *tenuifolius* Hara ヤマブキンヨウマ a, b, i
(チシマヤマブキンヨウマ a, c, f)

* *Filipendula kamtschatica* (Pall.) Maxim. オニシモツケ a, i, j

Filipendula purpurea Maxim. キヨウガノコ (エゾノシモツケソウ a, b, f)

Fragaria iinumae Makino ノウゴウイチゴ c

* *Fragaria nipponica* Makino var. *yezoense* (Hara) Kitam. エゾクサイチゴ a, b, c, f, i, j

* *Geum aleppicum* Jacq. オオダイコンソウ a, b, c, f, i, j

* *Geum japonicum* Thunb. ダイコンソウ e

- Geum macrophyllum* Willd. カラフトダイコンソウ a, f
- Malus baccata* Borkhausen var. *mandshurica* (Maxim.) C. K. Schneider エゾノコリンゴ j
- * *Potentilla anserina* var. *grandis* Ledebour エゾツルキンバイ j
- * *Potentilla cryptotaeniae* Maxim. ミツモトソウ j
- * *Potentilla fragarioides* L. var. *major* Maxim. キジムシロ i
- * *Potentilla freyniana* Bornm. ミツバツチグリ a, b, f, i
- * *Potentilla nipponica* Th. Wolf ヒロハノカワラサイコ
- Potentilla nivea* L. ウラジロキンバイ j
- Potentilla norvegica* L. エゾノミツモトソウ a, j
- * *Potentilla palustris* (L.) Scopoli クロバナロウゲ h, i, j
- Potentilla stolonifera* Lehm. ツルキジムシロ a, b, j
- * *Prunus maximowiczii* Ruprecht ミヤマザクラ (シロザクラ a, b, d, i)
- * *Prunus sargentii* Rehder オオヤマザクラ (エゾヤマザクラ b, d, e, i)
- * *Prunus ssiiori* Fr. Schmidt シウリザクラ a, b (シウリ d, e, f)
- Rosa davurica* Pallas ヤマハマナス (カラフトイバラ j)
- Rosa nipponensis* Crepin タカネバラ b
- Rosa rugosa* Thunberg ハマナス a, b, c, f, i, j
- Rubus crataegifolius* Bunge クマイチゴ j
- * *Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius* Focke エゾイチゴ a, b, f, i
- * *Rubus parvifolius* L. ナワシロイチゴ
- Rubus phoenicolasius* Maxim. エビガライチゴ i
- * *Rubus pseudo-japonicus* Koidzumi ヒメゴヨウイチゴ a, b, d, f (トゲナシゴヨウイチゴ b, e, f)
- * *Sanguisorba tenuifolia* Fisch. form. *alba* (Trautv. et Mey.) Kitam. ナガボノシロ
ワレモコウ h, i, j (シロワレモコウ a, b, c, f)
- * *Sorbaria sorbifolia* L. var. *stellipila* Maxim. ホザキナナカマド b, f, j
- Sorbaria sorbifolia* L. var. *stellipila* Maxim. form. *incerta* (C. K. Schneider)
Kitagawa エゾホサキナナカマド a
- * *Sorbus americana* Marsh. subsp. *japonica* (maxim.) kitamura ナナカマド a, b, d, f, i, j
- * *Spiraea salicifolia* L. ホザキシモツケ b, i, j
- Waldsteinia ternata* (Stephan) Fritsch コキンバイ b

Leguminosae マメ科

- * *Amphicarpaea edgeworthii* Benth. var. *trisperma* (Miq.) Ohwi ウ斯巴ヤブマメ a, b, f
- * *Desmodium racemosum* (Thunb.) DC. ヌスビトハギ
- * *Lathyrus maritimus* (L.) Bigel. ハマエンドウ
- * *Lathyrus palustris* L. subsp. *pilosus* (Cham.) Hulten. エゾノレンリソウ b, f, i, j

- * *Lespedeza bicolor* Turcz. ヤマハギ (エゾヤマハギ a, b, i, j)
- * *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri* (Maxim.) Kitamura イヌエンジュ i
- * *Thermopsis lupinoides* (L.) Link センダイハギ a, b, f, h, i, j
- * *Trifolium pratense* L. ムラサキツメクサ (アカツメクサ a, j)
- * *Trifolium repens* L. シロツメクサ a, b, f, j
- Vicia amoena* Fisch. ツルフジバカマ j
- * *Vicia cracca* L. クサフジ j (ケクサフジ a, b, c, f, ホソバクサフジ a)
- * *Vicia unijuga* A. Br. ナンテンハギ a, j (フタバハギ a, b, f)

Geraniaceae フウロソウ科

- Geranium erianthum* DC. チシマフウロ b
- Geranium sibiricum* L. var. *glabrius* (Hara) Ohwi イチゲフウロ j
- * *Geranium thunbergii* Sieb. et Zucc. ゲンノショウコ a, j (フウロソウ a)
- Geranium wilfordi* Maxim. ミツバフウロ a, j
- Geranium yesoense* Fr. et Sav. エゾフウロ a, b, f
- * *Geranium yesoense* Fr. et Sav. var. *pseudo-palustre* Nakai ハマフウロ a, b, c, f, j

Oxalidaceae カタバミ科

- * *Oxalis acetosella* L. コミヤマカタバミ b, d, e, f
- Oxalis corniculata* L. カタバミ j

Rutaceae ミカン科

- * *Phellodendron amurense* Ruprecht キハダ b (ヒロハノキハダ b, d, e, f, i)

Simaroubaceae ニガキ科

- Picrasma quassioides* (D. Don) Benn. ニガキ d

Buxaceae ツゲ科

- * *Pachysandra terminalis* Sieb. et Zucc. フッキソウ d, e

Anacardiaceae ウルシ科

- * *Rhus ambigua* Lavallee ex Dippel ツタウルシ a, b, d, e, f, i
- * *Rhus trichocarpa* Miquel ヤマウルシ j

Celastraceae ニシキギ科

- Celastrus orbiculatus* Thunb. ツルウメモドキ j
- * *Celastrus orbiculatus* Thunb. var. *strigillosus* (Nakai) Makino イヌツルウメモドキ j
(オニツルウメモドキ a, b, c, e, f)
- * *Euonymus macropterus* Rupr. ヒロハノツリバナ a, b, e, f, j
- Euonymus oxyphyllus* Miq. ツリバナ a
- Euonymus oxyphyllus* Miq. var. *magnus* Honda エゾツリバナ a
- * *Euonymus sieboldianus* Blume マユミ i, j

Staphyleaceae ミツバウツギ科

- Staphylea bumalda* DC. ミツバウツギ j

Aceraceae カエデ科

- * *Acer ginnala* Maxim. カラコギカエデ
- Acer japonicum* Thunb. ハウチワカエデ b
- * *Acer mono* Maxim. エゾイタヤ a, b, c, d, e, f (イタヤカエデ i)
- * *Acer palmatum* Thunb. var. *matsumurae* Koidz. ヤマモミジ a, d
- * *Acer ukurunduense* Trautv. et Meyer オガラバナ a, b, d, e

Balsaminaceae ツリフネソウ科

- * *Impatiens noli-tangere* L. キツリフネ a, c, e, i
- * *Impatiens textori* Miq. ツリフネソウ

Vitaceae ブドウ科

- * *Vitis coignetiae* Pulliat ヤマブドウ a, b, i
- Vitis coignetiae* Pulliat form. *glabrescens* (Nakai) Hara タケシヤマブドウ e

Tiliaceae シナノキ科

- * *Tilia japonica* (Miq.) Simonkai シナノキ d, e

Actinidiaceae マタタビ科

- * *Actinidia arguta* (Sieb. et Zucc.) Planchon ex Miquel サルナシ i (コクワ a, b, j)
- * *Actinidia kolomikta* (Maxim. et Rupr.) Maxim. ミヤママタタビ a, b, f, i
- Actinidia polygama* (Sied. et Zucc.) Planch. ex Maxim. マタタビ i

Guttiferae オトギリソウ科

- * *Hypericum ascyron* L. トモエソウ j
- * *Hypericum erectum* Thunb. オトギリソウ a, b, f, i, j
- Hypericum pseudopetiolum* R. Keller サワオトギリ j
- * *Triadenum japonicum* (Blume) Makino ミズオトギリ h, j

Violaceae スミレ科

- * *Viola acuminata* Ledeb. エゾノタチツボスミレ i (エゾタチツボスミレ b, f イヌスミレ a)
- * *Viola blandaeformis* Nakai var. *pilosa* Hara ケウスバスミレ (チシマウスバスミレ)
- Viola grypoceras* A. Gray タチツボスミレ j
- Viola grypoceras* A. Gray form. *pubescens* (Nakai) Mizushima ケタチツボスミレ j
- Viola kusanoana* Makino オオタチツボスミレ (クサノスミレ a)
- * *Viola langsdorfii* Fischer var. *caulescens* Ging. オオバタチツボスミレ i
- Viola patrini* DC. シロバナスミレ j
- Viola sachalinensis* H. Boiss. アイヌタチツボスミレ a
- * *Viola selkirkii* Pursh ミヤマスミレ a, e
- Viola teshioensis* Miyabe et Tatewaki マルバケスミレ b, f
- * *Viola verecunda* A. Gray ツボスミレ a, b, c, i
- Viola verecunda* A. Gray var. *semilunaris* Maxim. アギスミレ j

Lythraceae ミソハギ科

- Lythrum salicaria* L. エゾミソハギ j

Onagraceae アカバナ科

- * *Circaea alpina* L. ミヤマタニタデ b, c, d, e, f
- * *Circaea mollis* Sieb. et Zucc. ミズタマソウ j
- * *Epilobium cephalostigma* Hausskn. イワアカバナ j

Oenothera biennis agg. メマツヨイグサ(アレチマツヨイグサ j)

Oenothera erythrosepala Borbas オオマツヨイグサ j

Araliaceae ウコギ科

* *Aralia cordata* Thunb. ウド a, c, i, j

* *Aralia elata* (Miq.) Seemann タラノキ b, j

* *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ハリギリ a, b, d, f, i, j (センノキ b, d, e)

Umbelliferae セリ科

Aegopodium alpestre Ledeb. エゾボウフウ a, b, d, f

* *Angelica anomala* Lallem. エゾノヨロイグサ a, b, c, f, i, j

* *Angelica edulis* Miyabe アマニウ

Angelica genuflexa Nutt. オオバセンキュウ j

Angelica ursina (Rupr.) Maxim. エゾニウ(エゾニユウ a, j)

Anthriscus sylvestris (L.) Hoffm. subsp. *aemula* (Woron.) Kitam. シャク a, i

* *Bupleurum longiradiatum* Turcz. form. *elatius* Koso-Polj. ホタルサイコ j

* *Cicuta virosa* L. ドクゼリ i

* *Coelopleurum lucidum* L. エゾノシシウド a, b, c, f

Conioselinum filicinum (Wolff) Hara ミヤマセンキュウ d

* *Conioselinum kamschaticum* Rupr. カラフトニンジン

Cryptotaenia canadensis DC. subsp. *japonica* (Hassk.) Hand.-Mzt. ミツバ a, j

Glehnia littoralis Fr. Schm. ハマボウフウ j

* *Heracleum lanatum* Michaux オオハナウド a, b, f, i, j

* *Ligusticum scoticum* L. マルバトウキ a, b, c, f, i, j

Oenothera javanica (Blume) DC. セリ j

* *Osmorhiza aristata* (Thunb.) Makino et Yabe ヤブニンジン e (ナガジラミ a, b, d, f, j)

Peucedanum terebinthaceum Fisch. カワラボウフウ a

* *Pleurospermum austriacum* (L.) Hoffm. subsp. *uralense* (Hoffm.) Somm. オオカサモチ a, i (オニカサモチ a, b, f, j)

* *Sanicula chinensis* Bunge ウマノミツバ a, b, e, f, j

Torilis japonica (Houtt.) DC. ヤブジラミ j

Cornaceae ミズキ科

Cornus canadensis L. ゴゼンタチバナ j

Cornus controversa Hemsley ミズキ b, f, j

Cornus suecica L. エゾゴゼンタチバナ h

SYMPETALAE 合弁花亜綱

Pyrolaceae イチャクソウ科

Chimaphila japonica Miq. ウメガサソウ j

Pyrola asarifolia Michx. var. *purpurea* (Bunge) Fern. ベニバナイチャクソウ b, f

Pyrola minor L. エゾイチャクソウ b, f

* *Pyrola renifolia* Maxim. ジンヨウイチャクソウ e, j

Pyrola secunda L. コイチャクソウ j

Ericaceae ツツジ科

* *Andromeda polifolia* L. ヒメジャクナゲ h, j (シロバナヒメジャクナゲ j)

Chamaedaphne calyculata (L.) Moench ヤチツツジ (ホロムイツツジ h, j)

* *Ledum palustre* L. subsp. *diversipilosum* (Nakai) Hara イソツツジ (エゾイソツツジ h, j)

* *Vaccinium oxycoccus* L. ツルコケモモ h, i, j

Vaccinium vitis-idaea L. コケモモ h, j

Empetraceae ガンコウラン科

* *Empetrum nigrum* L. var. *japonicum* K. Koch ガンコウラン b, h

Primulaceae サクラソウ科

* *Glaux maritima* L. var. *obtusifolia* Fernald ウミミドリ g, j

* *Lysimachia thysiflora* L. ヤナギトラノオ h, i, j

* *Lysimachia vulgaris* L. subsp. *davurica* (Ledeb.) Tatew. クサレダマ a, j

Primula farinosa L. subsp. *fauriae* (Franch.) Murata ユキワリコザクラ i, j (シロバナユキワリコザクラ j)

Primula jesoana Miq. オオサクラソウ a, b, d, f

* *Primula jesoana* Miq. subsp. *pubescens* (Takeda) Kitam. エゾオオサクラソウ b

* *Trientalis europaea* L. ツマトリソウ i

Trientalis europaea L. var. *arctica* (Fisch.) Ledeb. コツマトリソウ h

Oleaceae モクセイ科



- * *Fraxinus mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim. ヤチダモ b, d, e, i, j
- * *Fraxinus lanuginosa* Koidz. form. *serrata* (Nakai) Murata アオダモ a, b, d, e, f, i
- * *Syringa reticulata* (Blume) Hara ハシドイ a, i

Gentianaceae リンドウ科

- * *Gentiana triflora* Pall. エゾリンドウ a, b, f, i, j
- * *Halenia corniculata* (L.) Cornaz ハナイカリ a, b, f, j
- * *Menyanthes trifoliata* L. ミツガシワ h, i, j

Asclepiadaceae ガガイモ科

- Cynanchum caudatum* (Miq.) Maxim. イケマ j

Polemoniaceae ハナシノブ科

- * *Polemonium caeruleum* L. subsp. *laxiflorum* (Regel) Ko. Ito form. *paludosum* Ko. Ito クシロハナシノブ i, j (シロバナクシロハナシノブ j)

Boraginaceae ムラサキ科

- * *Mertensia maritima* (L.) S. F. Gray subsp. *asiatica* Takeda ハマベンケイソウ j

Labiatae シソ科

- Ajuga yezoensis* Maxim. ニシキゴロモ j
- * *Clinopodium chinense* (Benth.) O. Kuntze subsp. *grandiflorum* (Maxim.) Hara var. *parviflorum* (Kudo) Hara クルマバナ j
- * *Clinopodium micranthum* (Regel) Hara イストウバナ
- Clinopodium sachalinense* (Fr. Schm.) Koidz. ミヤマトウバナ f
- * *Elsholtzia ciliata* (Thunb.) Hylander ナギナタコウジュ c, j
- Galeopsis bifida* Boenn. チシマオドリコソウ i, j
- Lamium album* L. var. *barbatum* (Sieb. et Zucc.) Fr. et Sav. オドリコソウ c
- * *Lycopus maackianus* (Maxim.) Makino ヒメシロネ h, j
- * *Lycopus uniflorus* Michx. エゾシロネ a, f, h, j
- * *Mentha arvensis* L. subsp. *haplocalyx* Briq. var. *piperascens* Malinv. ハッカ
- Mentha japonica* (Miq.) Makino ヒメハッカ j

Rubiaceae アカネ科

- * *Asperula odorata* L. クルマバソウ a, d, e, f
- Galium japonicum* Makino クルマムグラ a, b, c, d, f, i
- Galium kamschaticum* Stell. var. *acutifolium* Hara オオバノヨツバムグラ j
- * *Galium paradoxum* Maxim. ミヤマムグラ d, e
- * *Galium pseudo-asprellum* Makino オオバノヤエムグラ j
- * *Galium trifidum* L. var. *brevipedunculatum* Regel ホソバノヨツバムグラ
- * *Galium trifloriforme* Komar. オククルマムグラ
- Galium verum* L. var. *asiaticum* Nakai キバナカワラマツバ a, c, f
- * *Galium verum* L. var. *trachycarpum* DC. エゾノカワラマツバ a, b, f, i, j
- Galium verum* L. var. *trachycarpum* DC. form. *album* Nakai チョウセンカワラマツバ j
- Rubia jesoensis* (Miq.) Miyabe et Miyake アカネムグラ a, b, c, h, i, j

Carpifoliaceae スイカズラ科

- * *Lonicera alpigena* L. var. *glehnii* (Fr. Schm.) Nakai エゾヒヨウタンボク a, b, e, j
- * *Lonicera caerulea* L. var. *emphyllocalyx* (Maxim.) Nakai クロミノウグイスカグラ h, i, j
- Lonicera chrysantha* Tutcz. ネムロブシダマ a, b, f, j
- * *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miquel) Hara エゾニワトコ a, b, c, i, j

Adoxaceae レンブクソウ科

- * *Adoxa moschatellina* L. レンブクソウ a, b, d, e, f, i

Valerianaceae オミナエシ科

- * *Patrinia scabiosaefolia* Fisch. オミナエシ a, b, f

Cucurubitateae ウリ科

- * *Schizopepon bryoniaefolius* Maxim. ミヤマニガウリ a

Campanulaceae キキョウ科

- Adenophora remotiflora* (Sieb. et Zucc.) Miq. ソバナ j
- * *Adenophora triphylla* (Thunb.) A. DC. subsp. *aperticampanulata* Kitam. ツリガネニ

ンジン a, b, c, f, i, j (シラゲシャジン a, b, d)

* *Lobelia sessilifolia* Lamb. サワギキョウ h, i, j

Compositae キク科

- * *Achillea alpina* L. ノコギリソウ a, b, c, f, i, j
* *Achillea millefolium* L. セイヨウノコギリソウ j
* *Achillea ptarmica* L. subsp. *macrocephala* Heim. エゾノコギリソウ a, b, f, i, j
* *Adenocaulon himalaicum* Edgew. ノブキ a, b, d, f, j
* *Anaphalis margaritacea* (L.) Benth. et Hook. f. ヤマハハコ a, b, c, f, j (ヒロハヤマハハコ b)
Arctium lappa L. ゴボウ j
* *Artemisia iwayomogi* Kitam. イワヨモギ (カムイヨモギ a, b, f)
* *Artemisia japonica* Thunb. オトコヨモギ a, b, c, e, f, j
* *Artemisia japonica* Thunb. subsp. *littoricola* Kitam. ハマオトコヨモギ a, c, f, j
Artemisia koidzumii Nakai ヒロハウラジロヨモギ a, b, f
* *Artemisia montana* (Nakai) Pamp. オオヨモギ i (エゾヨモギ a, b, c, f, j)
* *Artemisia stelleriana* Bess. シロヨモギ j
Aster ageratoides Turcz. var. *yezoensis* Kitam. エゾノコンギク j
* *Aster glehni* Fr. Schm. エゾゴマナ a, c, j
* *Aster scaber* Thunb. シラヤマギク a, i
* *Aster tripolium* L. ウラギク (ハマソオン g, j)
Bidens radiata Thuill. var. *pinnatifida* (Turcz.) Kitam. エゾノタウコギ j
Breea setosa (Bieb.) Kitam. エゾノキツネアザミ c, j
Cacalia auriculata DC. var. *bulbifera* Koidz. コモチミミコウモリ a, f
* *Cacalia auriculata* DC. var. *kamtschatica* Matsum. ミミコウモリ a, b, d, e, i, j
* *Cacalia hastata* L. subsp. *orientalis* Kitam. ヨブスマソウ i, j (ウラゲヨブスマソウ a, b, c, d, f)
* *Carpesium triste* Maxim. ミヤマヤブタバコ j (ミヤマガンクビソウ a, e)
* *Chrysanthemum arcticum* L. subsp. *maekawanum* Kitam. コハマギク b, c
* *Chrysanthemum leucanthemum* L. フランスギク j
* *Cirsium heianum* Koidz. エゾヤマアザミ j
* *Cirsium kamtschaticum* Ledeb. チシマアザミ a, b, d, f, i (エゾアザミ j)
Cirsium kamtschaticum Ledeb. subsp. *pectinellum* (A. Gray) Kitam. エゾノサワアザミ j
Cirsium pendulum Fisch. タカアザミ j
* *Erigeron annuus* (L.) Pers. ヒメジョオン a, f, j
Erigeron canadensis L. ヒメムカシヨモギ j
Erigeron sumatrensis Retz. オオアレチノギク b
Eupatorium chinense L. var. *simplicifolium* (Makino) Kitam. ヒヨドリバナ j

- Gnaphalium uliginosum* L. ヒメチチコグサ j
- Hieracium umbellatum* L. ヤナギタンポポ b, j
- * *Ixeris dentata* (Thunb.) Nakai ニガナ
- Ixeris dentata* (Thunb.) Nakai var. *albiflora* (Makino) Nakai シロバナニガナ a, b, f, j
- * *Ixeris repens* (L.) A. Gray ハマニガナ
- Lactuca raddeana* Maxim. var. *elata* (Hemsl.) Kitam. ヤマニガナ j
- Lebnitzia anandria* (L.) Turcz. センボンヤリ b, j
- Leontopodium discolor* Beauv. エゾウスユキソウ j
- * *Ligularia hodgsoni* Hook. f. トウゲブキ i (エゾタカラコウ a, b, c, f, j)
- Matricaria matricarioides* (Less.) Porter コシカギク c, j
- Matricaria tetragonosperma* (Fr. Schm.) Hara et Kitam. シカギク c, j
- * *Petasites japonicus* (Sieb. et Zucc.) Maxim. subsp. *giganteus* (Fr. Schm.) Kitam. アキタブキ i, j (オオブキ a, b, c, f)
- * *Picris hieracioides* L. subsp. *japonica* (Thunb.) Krylv. コウゾリナ a, b, i, j
- Picris hieracioides* L. subsp. *kamtschatica* (Ledeb.) Hulten カンチコウゾリナ a, b, c, f
- Rudbeckia hirta* L. キヌガサギク (アラゲハンゴンソウ j)
- Rudbeckia laciniata* L. オオハンゴンソウ j
- Rudbeckia laciniata* L. var. *hortensis* Bailey ヤエザキオオハンゴンソウ j
- Saussurea duiensis* Fr. Schm. ススヤアザミ j
- * *Senecio cannabifolius* Less. ハンゴンソウ a, b, c, f, i, j
- * *Senecio nemorensis* L. キオン a, b, c, f, j
- * *Senecio pseudo-arnica* Less. エゾオグルマ j
- Senecio vulgaris* L. ノボロギク c
- Siegesbeckia pubescens* Makino メナモミ c, j
- Solidago altissima* L. オオアワダチソウ j
- * *Solidago virga-aurea* L. subsp. *asiatica* Kitam. アキノキリンソウ a, b, c, f, i
- * *Solidago virga-aurea* L. subsp. *leiocarpa* (Benth.) Hulten コガネギク a, f, i, j
- Sonchus asper* (L.) Hill. オキノゲンシ j
- * *Sonchus brachyotus* DC. ハチジョウウナ j
- Sonchus oleraceus* L. ノゲンシ j
- * *Taraxacum officinale* Weber セイヨウタンポポ a, c, f, i, j
- Taraxacum shikotanense* Kitam. シコタンタンポポ c, i

Ⅳ 動物

第1章 哺乳類

近 藤 憲 久

厚岸道立自然公園は、釧路・厚岸・浜中の三町にまたがる海岸線にあり、霧多布等の湿原の他、道東海岸地域では比較的森林の良く残っている地域からなる。また、海岸線は、大黒島を含めて岩礁地帯が多く、ゼニガタアザラシ (*Phoca kurilensis*) の繁殖場として好適な環境にある。本調査は、これらの地域において、陸棲哺乳類を主体に行ない、海獣類については過去の文献を参考にまとめた。

なお、本調査を行なうにあたり、厚岸林務署・厚岸警察署・厚岸漁協・散布漁協・尾幌担当区・厚岸猟友会菅原明雄氏・厚岸1号定置罟邑道利氏・鳥獣保護員諏訪良夫氏、以上の方々にご多大なご援助をいただいた。また、ゼニガタアザラシ研究グループの諸氏には、適切なご教示をいただいたほか、未発表資料を使用させていただいた。

第1節 研究小史

厚岸道立自然公園およびその周辺域における哺乳類調査は、ゼニガタアザラシを中心とした海獣類については数多くなされているが、翼手類を含めた陸棲哺乳類については、若干の報告があるにすぎない。

ゼニガタアザラシについては、海獣談話会、ゼニガタアザラシ研究グループなどが中心になって、昭和49年から道東の上陸場でのカウントが行なわれている。この中で、当地域における、ゴメ岩・帆掛岩・嶮暮埴島・大黒島・尻羽岬における生息数が報告されている（ゼニガタアザラシ連絡会1984）。この他の海獣では、トド (*Eumetopias jubata*) に関する報告がある（伊藤ほか1977、大泰司・斎藤1981、山中1982）以外は、断片的記載があるに過ぎない。

陸棲小哺乳類は、大黒島（太田1956）と、パイロットフォレスト（阿部1975）において報告されているほかは、霧多布湿原および海岸地帯の森林における調査記録はない。また、翼手目についても、同地域における報告はない。

陸棲中・大型哺乳類に関する調査報告は、聞き取り調査によるもの（北海道1978）しかなく、これによって、エゾシカ (*Cervus nippon yesoensis*)、エゾヒグマ (*Ursus arctos yesoensis*)、キタキツネ (*Vulpes vulpes schrencki*)、エゾタヌキ (*Nyctereutes procyonoides albus*) の分布が明らかにされている。

第2節 調査地点及び調査方法

当公園指定地域は、大別して三つの地域と付属する島嶼に分けられる。すなわち、霧多布湿原と湯沸岬地区、散布から厚岸にかけての針広混交林地帯および尻羽岬から^{トド}来入人^{トド}にかけての海岸地帯である。

本調査は、付属する島嶼を除く、これら三地区において、次の三とおりの方法で行なった。

1. 聞き取り調査

この地域における聞き取り調査は、過去にも行なわれている（北海道・前出、山中・前出、大泰司・斉藤・前出）いるので、ここでは、これらの既存資料を補足するような形で行なった。調査は、1985年12月13日に行ない、次の方々から情報を得た。諏訪良夫氏（浜中猟友会、鳥獣保護員）、埜 邑 道 利 氏（厚岸一号定置）、菅原明雄氏（厚岸猟友会）、厚岸警察署防犯係である。

2. 痕跡及び目視調査

中・大型哺乳類は、短期間の調査における直接観察や捕獲の困難なものが多く、そのため糞・足跡・食痕など痕跡による種類の判定を中心として生息調査を行なった。無積雪期は、痕跡や目視のしやすい林道・河畔・湖畔などで行ない、また、夜間に車のライトによるセンサスも行なった。夜間の調査は、糸魚沢林道・リルラン林道において行なった。積雪期の調査は、道道浜中厚岸線、道道火散布茶内停車場線、道道琵琶瀬茶内停車場線、糸魚沢林道、湯沸岬において行なった。調査期間は、無積雪期が1985年9月18日から21日および10月30日で、積雪期が12月14日であった。

3. トラップによる調査

ネズミ類・トガリネズミ類の捕獲が目的でトラップを使用した調査を行なった。調査は、1985年9月18日から21日まで4日間行なった。

(1) ネズミ類

調査は次の8地点（図1-1）において行なった。A・B・D・E・F・Hの6地点ではパンチュートラップによって行ない、餌は生ピーナツを使用した。また、C・G地点ではシャーマントラップによって行ない、餌はオートミールを使用した。各地点とも、ワナは、25個×3日間、10m間隔2列ライン状に配置した。

ワナの設置点とその附近の植生は次のとおりである。

A地点（標高2m）：霧多布湿原内の低層湿原と高層湿原の両方の要素を有した地帯である。すなわち、上層は、ヨシ（*Phragmites communis*）と矮生化したハンノキ（*Alnus japonica*）で占められ、下層は、イソツツジ（*Ledum palustre*）、ガンコウラン（*Empetrum nigrum*）、コケモモ（*Vaccinium Vitis-Idaea*）等で占められる。地面は多湿である。

B地点（標高50m）：湯沸岬の台地上で、ミヤコザサ（*Sasa nipponica*）を含む自然草原である。調査地の周囲は、矮生化したカラマツ（*Larix kaempferi*）の植林地となっている。

C地点（標高40m）：火散布沼岸の斜面に発達した針広混交林で、トドマツ（*Abies sachalinensis*）、オニグルミ（*Juglans ailanthifolia*）、ドロヤナギ（*Populus Maximowiczii*）、ミズキ（*Cornus controversa*）などに代表され、林床はミヤコザサが少々ある程度である。腐植層は発達する。

D地点（標高15m）：藻散布沼岸のミズナラ（*Quercus mongolica* var. *grosseserrata*）、ケヤマハンノキ（*Alnus hirsuta*）を主体とした混交林で、林床はスズタケ（*Sasamorpha borealis*）が密生する。腐植はさほど発達しない。

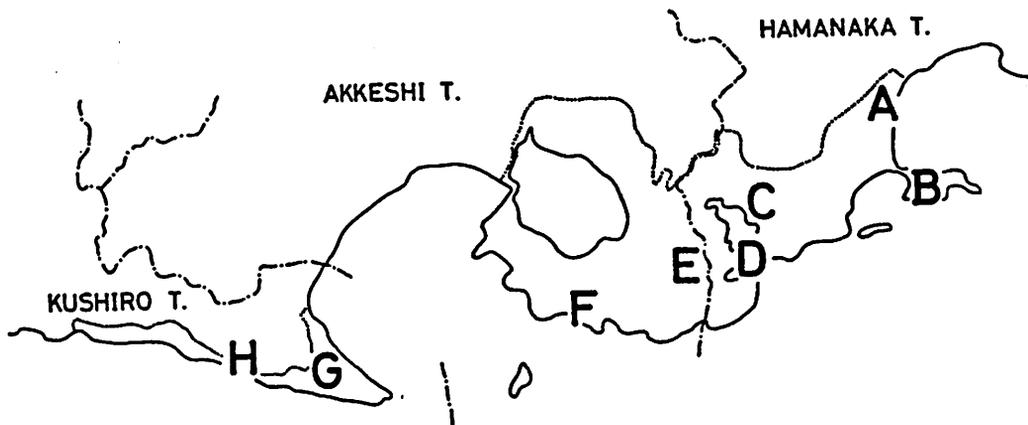


図1-1 厚岸道立自然公園における、小哺乳類の捕獲地点

E地点(標高60m)：リルラン林道脇の針葉樹林で、樹種はトドマツ、イチイ(*Taxus cuspidata*)であり、林床はスズタケが密生する。

F地点(標高40m)：滝の下の海岸上のミヤコザサ原で、一部、ススキ(*Miscanthus sinensis*)、アキカラマツ(*Thalictrum minus* var. *hypoleucum*)などが混じる。強風にさらされ、森林帯の外側にある。

G地点(標高130m)：^{チツボナイ}知方学のトドマツ、エゾイタヤ(*Acer Mono* subsp. *Mono*)、ダケカンバ(*Betula Ermanii*)を主体とした針広混交林で林床はスズタケがまばらにはえる。腐植層は発達する。

H地点(標高100m)：^{ニコマナイ}入境学の伐開地脇の広葉樹林で、エゾイタヤ、キハダ(*Phellodendron amurense*)、ケヤマハンノキが主木である。林床は疎で、沢地には、オオイタドリ(*Polygonum sachalinensis*)、ヨブスマソウ(*Cacalia hastata* subsp. *orientalis*)がみられ、斜面には、オンダ属(*Dryopteris* sp.)がみられる。斜面の腐植は発達する。

(2) トガリネズミ類

調査は、ネズミ類の調査地のうち、A・C・E・Hの4地点において行なった。調査には、墜落缶を使用し、各調査区とも、5個10m間隔ライン状に設置した。

第3節 調査結果及び考察

1. 翼手目(CHIROPTERA)

本調査において、カスミ網を使用した翼手目の調査は行なわなかったが、10月30日の夜間調査で、車のライトに向かって飛来したウサギコウモリ(*Plecotus auritus*)を、藻散布沼畔で一頭確認した。

同公園内において過去に翼手目の調査を行なった記録はないが、隣接する根室市において、カグヤコウモリ(*Myotis frater kaguyae*)、ウサギコウモリ、チチブコウモリ(*Barbastella leucomelas*)、ニホンコテングコウモリ(*Murina aurata ussuriensis*)が報告されている(服部・前出)ほか、著者は同市内において、ウサギコウモリ、ニホンコテングコウモリ、モモジロコウモリ(*Myotis macrodacty-*

lus) を採集している。また、標茶町ではノレンコウモリ (*Myotis nattereri*) が報告されている (服部・前出) ほか、浜中町で、ウサギコウモリとニホンコテンゴウモリが報告されている (橋本1984)。

永田 (1958) によると、1930年代には、ウサギコウモリは根釧原野の原生林に大群をなしていたことが報告されているが、現在は、このような現象は見られない。このことは、開発により樹木が伐採され、本種の生息環境が減少したことによると考えられる。しかし、本種については、現在でも樹林帯では普通に見られ、数の減少はしたものの、古老木の残された林を中心に、根釧地方では数多く生息する種と考えられる。

他種については、同公園地域において生息は考えられるものの、周囲の状況から判断して数は多くないと考えられる。

2. 食虫目 (INSECTIVORA)

食虫類を捕獲する目的で延べ60個の墜落缶による調査を行なった結果、1属4種67個体の食虫類が捕獲された (表1-1)。また、ネズミ類の採集を目的とした調査で、B・D・G地点で1属2種5個体の食虫類が捕獲された (表1-2)。

表1-1 墜落缶による小哺乳類の捕獲結果

	オオアシトガリネズミ <i>Sorex unguiculatus</i>	エゾトガリネズミ <i>S. caectiens</i>	カラフトヒメトガリネズミ <i>S. gracillimus</i>	トウキョウトガリネズミ <i>S. minutissimus</i>	エゾヤチネズミ <i>Clethrionomys rufocanus bedfordiae</i>	エゾアカネズミ <i>Apodemus speciosus ainu</i>
A	5	2	1	—	7	—
C	5	6	4	1	—	—
E	13	6	8	—	—	—
H	8	7	2	1	—	3
計	31	21	15	2	7	3

これら4種のうち、オオアシトガリネズミ (*Sorex unguiculatus*) とエゾトガリネズミ (*S. caectiens*) については、ほぼ全道に分布する普通種で、特に前者は、これらの仲間では最も優位な種である。本調査において、両種は全ての調査区で捕獲され、このうち、オオアシトガリネズミは3つの調査区で優占種であった。これらは一般に見られる傾向と変らないものである。

カラフトヒメトガリネズミ (*S. gracillimus*) は、前二種より小型で、道央では高地だけに多い種であるが、道東では平地でも捕獲されている (前川1981, 近藤1983, 阿部・近藤1985)。本調査では、前二種同様全ての調査区で捕獲されたが、特にE地点は8頭捕獲され、オオアシトガリネズミについて優位であった。同地点のように、林床にコケの生えた針葉樹林帯で優位なことは、阿部・近藤 (前出) にも報告されていて、同種の生態を解明する上で重要な知見と思われる。

また、本調査では、トウキョウトガリネズミ (*S. minutissimus*) が捕獲された。本種は、北海道における分布が極限されていて、これまでのところ、根釧地方の一部とサロベツ原野で、10数頭しか捕獲が報告されていなかった種であり、極めて珍しい種である。哺乳類の中で最も小形なものの一つで、体重

は2ヶ月前後しかない。シベリア、サハリンに主として分布するが、我国では、レリック状の分布をする。今回捕獲された場所は、ともに、森林地帯の腐植層が発達した所であるが、いづれにしろ、生態のよくわかっていない種である。

以上、同公園内における食虫類について、種々の知見が得れたが、これらは、道東全般にみられる *Sorex* 属の分布傾向を示し、特に、トウキョウトガリネズミが確認できたことは価値があるといえる。

3. 嚙齧目 (RODENTIA)

(1) ネズミ科 (Muridae)

ネズミ類を捕獲する目的で、延べ600個のシャーメントラップ及びパンチュートラップによる調査を行なった結果、2属5種123個体のネズミ類を得た(表1-2)。また、墜落缶で2属2種10個体のネズミ類を得た(表1-1)。

表1-2 シャーメントラップによる小哺乳類の捕獲結果

	エゾアカネズミ	カラフトアカネズミ	ヒメネズミ	エゾヤチネズミ	ミカドネズミ	オオアシトガリネズミ	エゾトガリネズミ	その他
	<i>Apodemus speciosus ainu</i>	<i>A. peninsulae</i>	<i>A. argenteus</i>	<i>Clethrionomys rufocanus bedfordiae</i>	<i>C. rutilus mikado</i>	<i>Sorex unauiculatus</i>	<i>S. caeciens</i>	Others
A	—	—	—	26	—	—	—	—
B	—	—	—	9	—	—	1	—
C	6	—	—	3	2	—	—	ニホンイヌネズミ <i>Mustela nivalis</i> 2
D	5	—	—	5	14	—	2	—
E	4	—	1	4	8	—	—	—
F	—	—	—	7	—	—	—	—
G	2	—	—	3	3	1	1	—
H	8	3	—	7	3	—	—	—
計	25	3	1	64	30	1	4	2

アカネズミ (*Apodemus*) 属のネズミは北海道で3種確認されているが、本調査ではこれら全てが捕獲された。

エゾアカネズミ (*A. speciosus ainu*) は、A・B・F地点を除く5地点で捕獲され、広葉樹および混交林 (C・D・H地点) では最優占種であった。本種が捕獲されなかったA・B・F地点はともに無立木地であり、一般的に本種の生息には不適であるため、生息は考えられない。これらのことから、本種は、他地域同様に、広葉樹林を中心に優勢な種と見られる。

カラフトアカネズミ (*A. peninsulae giliacus*) は、H地点でのみ捕獲された。本種は、通常植林地や自然草原・灌木林等で捕獲される種であるため、隣接した伐開跡地からの進入個体と考えられるが、数は多くない種と見られる。

ヒメネズミ (*A. argenteus*) は、E地点でのみ捕獲された。本種は、知床半島において、針過混交林になるにつれて個体数が多くなることが報告されている (近藤1981) ほか、隣接するパイロットフォレスト地区では、鬱閉度の高い森林において、ミカドネズミ (*Clethrionomys rutilus mikado*) とともに

優位な種であることが報告されている(阿部・前出)。同公園地区は、比較的良く針葉樹の残された所であり、本調査結果には反映されなかったが、数は多いと考えられる。

ヤチネズミ(*Clethrionomys*)属は、2種捕獲された。

エゾヤチネズミ(*C. rufocanus bedfordiae*)は、全調査区で捕獲され、特に、A・B・F地点においては、本種のみしか捕獲されなかった。通常、本種は、人工植林地や湿潤な草原では優勢な種であり、調査結果にもその傾向がみられた。

ミカドネズミについては、先に述べたように、鬱閉して下草の少ない森林で優勢な種であるが、このことは調査結果にみられ、D・E・G区で優勢であった。本種は、以前珍獣扱いられていた(太田1968)種であるが、道東地域では比較的良く捕獲されている(近藤・前出、阿部・近藤・前出)。

今回の調査では、家ネズミの捕獲を目的とした調査は行なわなかったが、調査期間中に霧多布市街で、ドブネズミ(*Rattus norvegicus*)の死骸を見かけた。また、地域住民の話では、RatもMouseも生息しているということから、一般的傾向と同様に、ハツカネズミ(*Mus musculus*)とクマネズミ(*R. rattus*)も含めて、集落のある地域で普通種と見られる。

なお、付属する島嶼のうち、大黒島では、哺乳類の生息が確認されている。太田(1956)によると、本島には、エゾヤチネズミとオオアシトガリネズミの2種が生息しているが、棲息密度は甚だ低いとされている。しかし、エゾヤチネズミは、道東一般に見られるように、時々、大発生することが知られている(私信)。

(2) リス科(Sciuridae)

リス科は、北海道に生息する3属3種全て確認された(図1-2, 1-3)。

本調査区に隣接するパイロットフォレスト地区では、多い所で1kmあたり3頭近くのシマリス(*Tamias sibiricus*)が生息していることが報告されている(阿部・前出)が、この調査では1頭しか目撃されなく、多くはなかった。このことは、シマリスは、針葉樹高木地帯では少ない種であるとされている(阿部ほか1982)ことや、調査が繁殖期をはずして行なわれたことから、警戒声による確認ができなかったためによるものと考えられる。

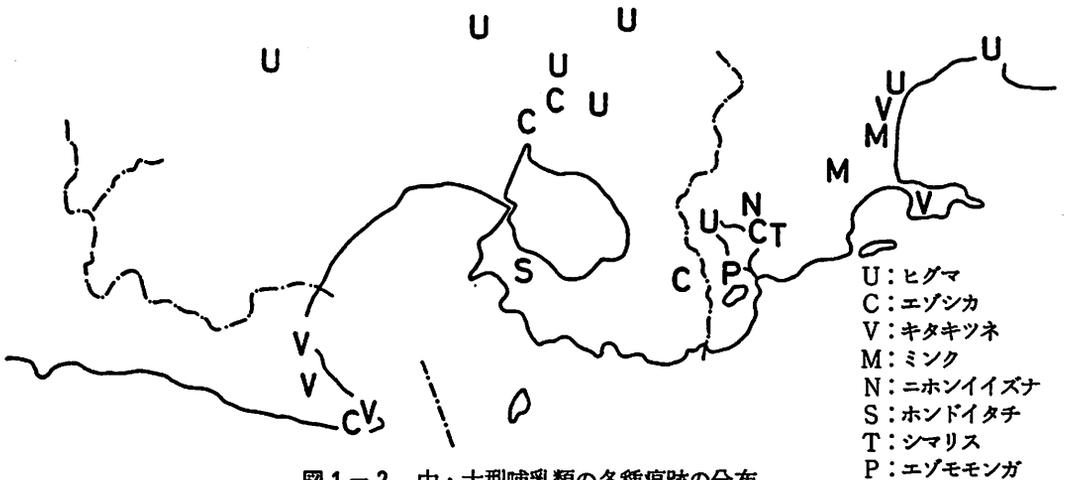


図1-2 中・大型哺乳類の各種痕跡の分布

エゾリス (*Sciurus vulgaris*) は、クルミの食痕および雪上の足跡で確認したが、目撃はなかった。本種は、道東の広葉樹林を中心に生息が確認されている (橋本1975, 阿部・前出, 阿部・近藤・前出) もの、いずれも数は少なく、貴重種と思える。

エゾモモンガ (*Pteromys volans orii*) は、本調査では1頭確認できたのみである。本種は、同様に、道東で生息が確認されている (阿部・近藤・前出, 豊原1970) が、聞き取り調査でも定かな情報が得られず、生息数は少ない。

4. 兎 目 (LAGOMORPHA)

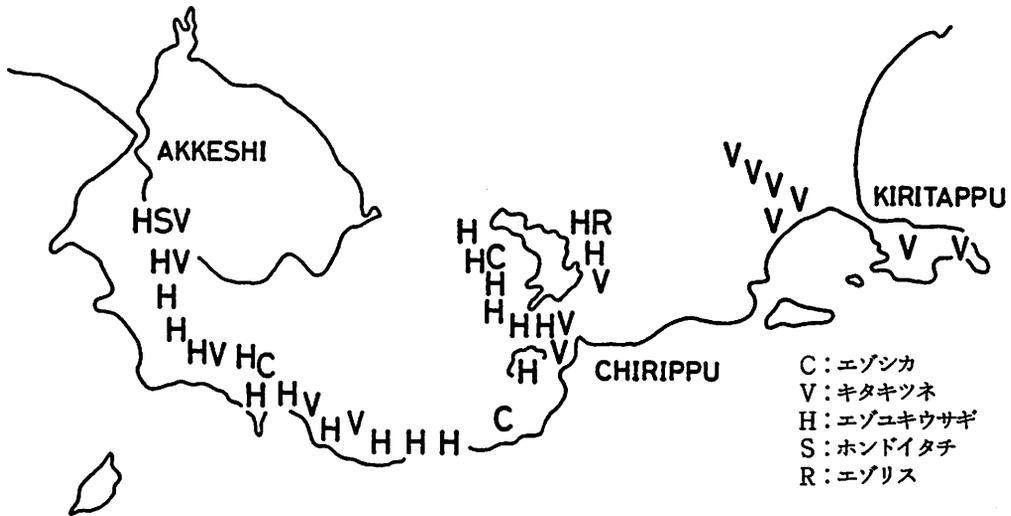


図 1-3 新雪上の動物の足跡

エゾユキウサギ (*Lepus timidus ainu*) は、無積雪期に確認できず、積雪期の確認のみであった。しかし、図 1-3 に示したように、道道浜中厚岸線、糸魚沢林道、道道火散布茶内停車場線脇の針広混交林では、確認された足跡の中では最も比率が高く、調査地一個所につき1頭から数頭生息していると見られた。今回調査した個所については、森林地帯では、キタキツネ以上に足跡が多く、これに対して霧多布湿原や湯沸岬では全く足跡が見られなかった。このことから、本種は、分布が集中するものの、当公園内では、生息数の多い種といえる。

5. 食 肉 目 (CARNIVORA)

(1) イタチ科 (Mustelidae)

北海道に生息する陸棲のイタチ (*Mustela*) 属とテン (*Martes*) 属のうち、今回の調査では、イタチ属の3種が確認できた。

ニホンイヌナ (*M. nivalis namiyei*) は、C地点で、シャーマントラップで2頭 (雄・雌) 捕獲されたが、これ以外には確認できなかった。しかし、道東では、普通種であり、シャーマントラップでも良く捕獲される (近藤・前出, 阿部・近藤・前出) ことから、当公園内においても、数多く生息していると見られる。

ミンク (*M. vison*) およびホンダイタチ (*M. sibirica*) については、痕跡および目視により生息が確認できたが、わずかであった (図 1-2・1-3)。これは、足跡の大きさから判断した場合、ホンダイタチの雄とミンクの雌の区別ができないために、目視および明らかに足跡から区別できた場合を記録したためである。北海道 (1985) は、野生化ミンクの実態調査を行ない、道東で調査した全ての河川および釧路湿原でミンクの生息を確認している。また、同報告書によれば、同地域において、約 2 対 1 の割合でミンクが多く確認されている。この調査では、同公園地区における調査は行なわれていないが、これら周囲の状況から見て、両種とも普通に生息しているものと判断できる。なお、両種の生態から見て、湿原や河川域にミンク、森林地帯にホンダイタチが生息していると考えられる。

(2) イヌ科 (Canide)

この仲間では、キタキツネおよびエゾタヌキ (*Nyctereutes procyonoides albus*) の生息を確認した。このうち、エゾタヌキについては、聞き取りによって情報を得ただけであり、実際に確認はできなかった。この地域における同種の昭和 60 年の生息確認は四件で、このうち公園内では、火散布沼で一件あった。本種は、北海道 (前出) の動物分布調査報告書においても情報は少なく、数は少ないと考えられる。

キタキツネは、無積雪期に 3 件の目撃と、捕獲したエゾヤチネズミがエキノコックス (*Echinococcus multilocularis*) に感染していることより確認できたほか、積雪期に多数確認できた (図 1-2・1-3)。この傾向は、北海道 (前出) に示されているとおりでであるが、湿原域では巣を作る条件にないことなどより、季節的な生息数の違いがあると考えられる。

(3) ヒグマ科 (Ursida)

厚岸警察署および厚岸・浜中両猟友会で得た、昭和 59 年と 60 年のエゾヒグマ (*Ursus arctos yesoensis*) の出現情報は、59 年 7 件、60 年 3 件であった。これらの中には、同一個体や移動中の個体も含まれるため、生息実数とは言えないが、主な出現場所は、浜中町奔幌戸から蒙古丹にかけての一带、厚岸町金田崎から浜中町火散布沼にかけての一带、厚岸町サツテベツから大別にかけての一带、および厚岸町片無去である。このうち、繁殖場としては、厚岸町サツテベツ付近、および、金田崎から火散布沼にかけての帯があげられる。動物分布調査報告書 (北海道・前出) によれば、厚岸町サツテベツ付近のほか、釧路町賤向^{ヒヤノツツ}夫付近と、厚岸町幌万別付近が繁殖場として記録されているが、後者二地区については、従来から情報はなく、誤記の可能性がある。

これらのことから判断して、同公園地区においては、数頭の生息個体がいるほか、サツテベツ付近からの移動個体があると考えられる。

6. 海獣類

ここでは、食肉目イタチ科、および食肉目鱧脚亜目 (Pinnipedia) アシカ科 (Otariidae) とアザラシ科 (Phocidae) に属する海獣類について報告する。

(1) イタチ科 (Mustelidae)

ラッコ (*Enhydra lutris*) は、千島列島南端付近から、カムチャッカ半島、アリューシャン列島およびロスアンゼルス付近までの北太平洋岸に分布し、古くは、北海道東部海岸に分布していたという情報があるが定かでない。最近では、霧多布岬 (1980 年 8 月、1985 年 10 月) と、隣接する根室市落石岬 (1984 年 1 月) で出現記録があるが、これらは、いずれも千島列島からの回遊個体と見られる。Bopo-

NOB(1974)によると、択捉島以北の千島列島には数千頭生息しているため、今後も出現が見られると考えられる。

(2) アンカ科(Otariidae)

この科に属する動物のうち、この近海で見られるのは、トドとオットセイ(*Collorhinus ursinus*)である。いずれも定着はなく、回遊個体である。

トドは、千島列島、カムチャッカ半島、アリューシャン列島にかけて繁殖し、冬期に北海道沿岸に南下する。この近海で見られるのは、南千島、歯舞諸島および根室半島の太平洋側で夏期を過す1・2才獣と中部千島からの若オスで、冬期に噴火湾に来遊する約200頭の群れである(大泰司・斎藤・前出)。

オットセイは、トドほど情報はなく、全て海岸部に死体で上がっている情報である。これらの個体は、樺太で繁殖し、冬期に南下するものが、網にかかって死んで打上げられたと考えられる。聞き取り調査では、散布・厚岸漁協関係の定置網での死亡個体はないということだったが、著者は、根室半島部で数例の死体を見かけているし、また、周辺漁業関係者の話では、若干の個体がこの海域で死んでいるので、稀ではあるが、生息はあると見られる。

(3) アザラン科(Phocidae)

この海域で繁殖しているのは、ゼニガタアザラン一種である。本種の生息状況は、昭和49年から毎年ゼニガタアザラン研究グループ等によって、道東の生息地においてカウントされている(図1-4)。

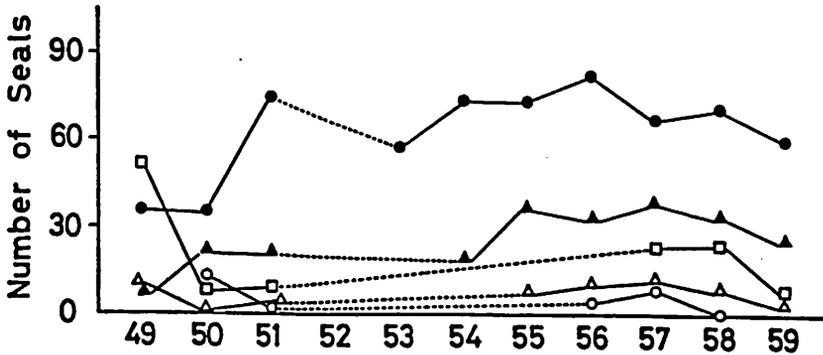


図1-4 厚岸道立自然公園におけるゼニガタアザランの生息数

(ゼニガタアザラン連絡会1984より)

これによれば、この海域の最大の生息地は大黒島であり、我国では、エリモ岬に次ぐ重要な繁殖地となっている。現在、我国で繁殖する本種の数が二百数十頭であることから見て、ゴメ岩まで含めた同公園内の海岸域は、重要な地域といえる。

本種以外では、これらの地域では、ゴマフアザラシ (*P. largha*) が普通にみられるが、この種は、繁殖場が流水上であり、回遊個体であろう。また、クラカケアザラシ (*Histiophoca fasciata*) については、最近、釧路市で保護された事例があるほか、根室半島部で記録がある (伊藤・和田 1982) が、この海域は通常の分布域をはずれているため、迷獣であろう。

7. 偶蹄目 (ARTIODACTYLA)

無積雪期および積雪期の調査において、エゾシカ (*Cervus nippon yesoensis*) の生息痕跡は数多く確認できた (図 1-2・1-3)。確認場所は、針広混交林が主であったが、積雪期に別寒辺牛川湿原で数十頭の群れを見かけた。地元の情報では、冬期に大別付近に集まるとのことで、この群れは、その個体群と見られる。しかし、霧多布湿原も含め、湿原域は凍結しない限り、本種の生息には不向きと見られるため、主生息域は厚岸湖から火散布沼一帯の森林地帯と考えられる。

8. 考 察

翼手目については、カシミ網による調査は行わず、さらに詳細な調査によって、種類は増えるものと見られる。

食虫類は、北海道で生息が確認されている *Sorex* 属 4 種全てが捕獲され、特にこの中でトウキョウトガリネズミが捕獲されたことは価値がある。

啮嚙類は、道東地域で生息している 2 科 7 属 11 種のうち、家ネズミを除く全てが確認され、また、家ネズミも生息が予想された。しかし、*Clethrionomys* 属を除いて個体数は多くなかった。

兎目はエゾキウサギ一種のみであったが、森林地帯では高密度で生息していた。

食肉目のうち、陸棲のものについては、クロテン (*Martes zibellina*) の生息は確認できなかったものの、エゾヒグマの繁殖も見られ、*Mustela* 属を中心に比較的良好と見られる。その内、ミンクは他地域ほどではないが、湿原・河川域を中心に広く分布し、生態系の変化に重要な影響を及ぼしていると思われる。海獣類については、同海岸域はゼニガタアザラシの繁殖地として主要な地域であり、また、ラッコが姿を見せるなど、重要な地帯である。

偶蹄目は、エゾシカ一種であるが、針広混交林を中心に多数生息していると見られた。

以上の結果から概観すると、厚岸道立自然公園地区は、海岸部を中心に湿原域や森林帯にいたるまで比較的良く自然が残されている地域であり、動物相も豊かであるといえる。

参 考 文 献

1. 阿部 永 (1975) : パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷。帯広営林局。107-116。
2. 阿部 永・前田喜四雄・川辺百樹 (1982) : 十勝川源流部原生自然環境保全地域の哺乳類。十勝川源流部原生自然環境保全調査。環境庁。233-245。
3. 阿部 永・近藤憲久 (1985) : 春国岱の哺乳類。春国岱原生野鳥公園基本計画報告書。日本野鳥の会。187-198。
4. 橋本正雄 (1975) : 釧路湿原の鳥獣類。釧路湿原総合調査報告書。釧路市立郷土博物館。277-290。
5. 橋本正雄 (1984) : 道東海岸線の鳥獣。道東海岸線総合調査報告書。釧路市立博物館。211-238。

6. 服部畦作(1971):北海道産翼手目に関する研究。北海道立衛生研究所報。21:68-100。
7. 北海道(1978):第2回自然環境保全基礎調査。動物分布調査報告書(哺乳類)。
8. 北海道(1985):野生化ミンク実態調査報告書。
9. 伊藤徹魯・和田一雄(1982):ゼニガタアザランの漁業被害についての聞き取り調査報告。哺乳類科学。45:109-114。
10. 伊藤徹魯・加藤秀紘・和田一雄・島崎健二・荒井一利(1977):北海道におけるトドの生態調査報告(I)・(II)。鯨研通信。305:1-8, 306:9-18。
11. 近藤憲久(1981):知床半島のネズミ類。知床半島自然生態系総合調査報告書。北海道。105-113。
12. 近藤憲久(1983):哺乳類・両生・爬虫類。釧路湿原保全対策調査報告書。北海道。97-112。
13. 前川光司(1981):知床半島のトガリネズミ類の分布。知床半島自然生態系総合調査報告書。北海道。98-103。
14. 永田洋平(1958):北海道動物記。法政大学出版局。
15. 太田嘉四夫(1956):北海道の離島の鼠類。北大農邦文紀要。2(4):123-138。
16. 太田嘉四夫(1968):北海道産ネズミ類の生態的分布の研究。北大農演研報。26(1):223-295。
17. 大泰司紀之・斎藤隆(1981):知床半島沿岸海域の齧脚類。知床半島自然生態系総合調査報告書。165-181。
18. 豊原熙司(1970):モモンガのこと。釧路博物館報。206:54-55。
19. Воронов В. Г. (1974):МЛЕКОПИТАЮЩИЕ КУРИЛЬСКИХ ОСТРОВОВ. Изд-во «Наука», Ленингр. отд., Л. 164 т.
20. 山中正実(1983):北海道沿岸におけるトド(*Eumetopias jubata*)の回遊に関する聞取調査。哺乳類科学。45:121-129。
21. 米田政明(1981):知床半島の陸棲中・小型食肉類。知床半島自然生態系総合調査報告書。114-125。
22. ゼニガタアザラン連絡会(1984):昭和58年度繁殖期(6月)ゼニガタアザラン調査報告。哺乳類科学。49:41-48。

第4節 厚岸道立自然公園の哺乳類目録

CHIROPTERA 翼手目

Vespertilionidae ヒナコウモリ科

1. *Plecotus auritus sacrimontis* G. ALLEN ニホンウサギコウモリ

INSECTIVORA 食虫目

Soricidae トガリネズミ科

2. *Sorex minutissimus hawkeri* THOMAS トウキョウトガリネズミ
3. *S. glacillimus* THOMAS カラフトヒメトガリネズミ
4. *S. caectiens* THOMAS エゾトガリネズミ
5. *S. unguiculatus* DOBSON オオアントガリネズミ

RODENTIA 嚙齧目

Muridae ネズミ科

6. *Clethrionomys rutilus mikado* THOMAS ミカドネズミ
7. *C. rufocanus bedfordiae* THOMAS エゾヤチネズミ
8. *Apodemus argenteus* TEMMINCK ヒメネズミ
9. *A. peninsulae giliacus* TEMMINCK カラフトアカネズミ
10. *A. speciosus ainu* TEMMINCK エゾアカネズミ
- ※11. *Mus musculus* LINNÉ ハツカネズミ
12. *Rattus norvegicus* BERKENHOUT ドブネズミ
- ※13. *R. rattus* LINNÉ クマネズミ

Sciuridae リス科

14. *Tamias sibiricus* SIEBOLD シマリリス
15. *Sciurus vulgaris* LINNÉ エゾリス
16. *Pteromys volans orii* LINNÉ エゾモモンガ

LAGOMORPHA 兎目

Leporidae ウサギ科

17. *Lepus timidus ainu* BARRETT - HAMILTON エゾユキウサギ

CARNIVORA 食肉目

Ursidae ヒグマ科

18. *Ursus arctos yesoensis* LYDEKKER エゾヒグマ

Canidae イヌ科

19. *Vulpes vulpes schrencki* KISHIDA キタキツネ
20. *Nyctereutes procyonoides albus* BEARD エゾタヌキ

Mustelidae イタチ科

21. *Mustela vison* SCHREBER ミンク
22. *M. sibirica itatsi* TEMMINCK et SAHLGEL ホンドイタチ
23. *M. nivalis namiyei* KURODA ニホンイイズナ
24. *Enhydra lutris* LINNAEUS ラッコ

Otariidae アシカ科

25. *Eumetopias jubata* SCHREBER トド
26. *Callorhinus ursinus* LINNAEUS オットセイ

Phocidae アザラシ科

27. *Phoca largha* PALLAS ゴマフアザラシ
28. *P. kurilensis* INUKAI ゼニガタアザラシ
29. *Histiophoca fasciata* ZIMMERMANN クラカケアザラシ

ARTIODACTYLA 偶蹄目

Cervidae シカ科

30. *Cervus nippon yesoensis* HEUDE エゾシカ

※ 今回未確認

第2章 鳥 類

橋 本 正 雄

第1節 研究小史

厚岸道立自然公園の鳥類相についての調査研究は、海鳥繁殖地として国の天然記念物に指定されている厚岸町大黒島や特別天然記念物のタンチョウなど特定の地域や種については比較的進んでいるが、それら以外のものに就いては概説的な報告が散見される程度である。

タンチョウについては、北海道教育委員会が昭和47～49年、54～55年の二次にわたって航空機による調査を含む特別調査を実施し本自然公園域での生息（営巣）状況についても報告している（北海道教育委員会 1975, 1980）。昭和58年にはタンチョウの保護・増殖の面についての所管が文化庁から環境庁に移行したため、この翌年から環境庁による航空機を使った生息調査が毎年実施されている。また、日本野鳥の会と国際ツル財団日本支部が航空機による生息調査を昭和58年より行なっている（正富他1983）。このほか、百瀬・中村（1983）、林田（1984）らはタンチョウの現況と保護について報告している。

大黒島の鳥類については、阿部他（1972）、林田・橋本（1981a）、綿貫（1985）らがコシジロウミツバメの生息状況を中心に報告している。

北海道教育委員会は天然記念物エゾシマフクロウ・クマガラ特別調査（昭和50～51年）、天然記念物オオワシ・オジロワシ特別調査（昭和52～53年）を実施し、本自然公園域での生息状況についても報告している（北海道教育委員会 1977, 1979）。また、オジロワシ・オオワシ合同研究グループ・根北郷土研究会（1985）は、昭和57年以降冬期間のオジロワシ・オオワシの生息状況を報告している。

鳥類相全般については、橋本（1979, 1981, 1982, 1984, 1985）、林田・橋本（1981b, 1982）らの報告がある。また、日本野鳥の会はシギ・チドリ及びガンカモ・ハクチョウの生息状況について、昭和51～55年にわたって調査を実施している。

第2節 調査方法及び調査地点

本調査では特にセンサス方法を定めず、随時確認出来た種及び個体数を記録した。またセンサス結果に加え橋本の1971～1984年までの鳥類観察記録、さらに関係文献からの鳥類生息記録を合わせ、厚岸道立自然公園域に生息する種類の把握につとめた。なお生息数については特定の限られた種以外は今後の調査課題としてのこされた。

主な調査地は、釧路町尻羽岬、厚岸町厚岸湖・床潭沼・大黒島、浜中町藻散布沼・火散布沼・霧多布湿原・霧多布島の8地域である（図2-1）。

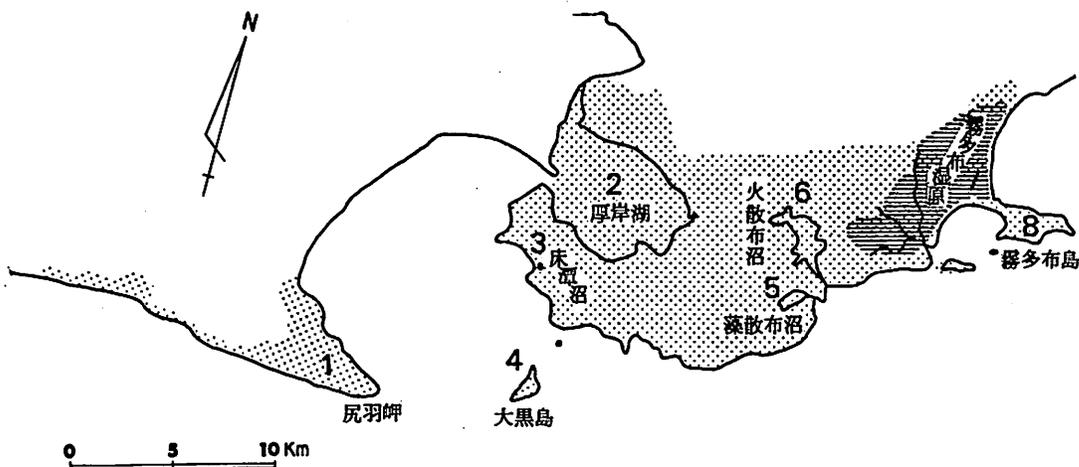


図 2-1 厚岸道立自然公園の主な鳥類生息地

第 3 節 調査結果及び考察

1. 主な調査地の鳥相

別表(鳥類目録)に、筆者の 1971～1985 年の調査記録をもとに前述の主な調査地における出現鳥類を示した。それによると、尻羽岬で 26 種、厚岸湖で 50 種、床潭沼で 33 種、大黒島で 24 種、藻散布沼で 46 種、火散布沼で 52 種、霧多布湿原で 89 種、霧多布島で 32 種を記録している。

なお、8 地域全体では 35 科 129 種が出現している。

(1) 尻羽岬 先端部は草原となっているが、基部は比較的保存の良い針広混交林となっている。そのため草原棲のノビタキやシマセンニュウと森林棲のチョウセンオオタカやエゾライチョウなどが出現している。

(2) 厚岸湖 面積 3,223 ha の汽水湖で、湖面全域が鳥獣保護区になっており、そのうちの 2,240 ha は特別鳥獣保護区に指定されている(S. 59.10.1～79.9.30)。湖東岸の丘陵地には針広混交林が発達している。

本湖に流入する別寒辺牛川の河口付近にはタンチョウの営巣地が 3 箇所ある。本湖はガン・カモ類の集中渡来地となっており、厳寒期にも全面結氷することがなく水鳥の越冬が多い。渡来するオオハクチョウは多く、1986 年 1 月 15 日の調査では 640 羽を越す個体が確認された(表 2-3)。冬期水下網漁が始まるとオオワシ・オジロワシの飛来が増え、1985 年 3 月 31 日の調査ではオジロワシ(6羽)、オオワシ(22羽)、ワシ s p. (12羽)と計 40 羽を数えている(表 2-4)。

(3) 床潭沼 周囲約 1.3 km、面積 11.8 ha の淡水湖であり、ヒブナの生息地として北海道の天然記念物(S. 32.10.1)に指定されている。沼周辺は集落化しているが、沼岸には湿地が発達している。カイツブリ、オオジシギ、シロウドツバメ、コマドリ、コヨシキリなどが出現している。

表 2-1 鳥類調査結果 (1985 年 4 月 29 日)

リストNo.	コードNo.	種 名	地 域	厚 岸 湖	藻 散 布 沼	火 散 布 沼	霧 多 布 湿 原
1	61	アオサギ		○			
2	79	オオハクチョウ			○		
3	88	コガモ		○	○		○
4	92	ヒドリガモ		○	○		○
5	94	オナガガモ			○		○
6	96	ハシビロガモ		○			○
7	103	スズガモ				550 +	
8	113	ミコアイサ		○			
9	114	ウミアイサ		○		○	
10	151	タンチョウ		2		1	
11	209	タカブシギ		○			
12	239	ユリカモメ		400 +			○
13	320	ヤマゲラ				○	
14	343	ハクセキレイ		○			
15	351	タヒバリ		○			
16	368	コマドリ		○			
17	376	ノビタキ		○			
18	397	ウグイス			○		
19	424	ハシブトガラ				○	
20	426	ヒガラ		○			
21	429	シロハラゴジュウカラ				○	
22	435	ホオジロ		○			
23	447	アオジ		○			
24	450	オオジュリン		○			
25	467	ベニマシコ					○
26		カモ s p.				800 +	
種 類 数				17	5	7	6

※ オオセグロカモメ, ハシブトガラス, ハシボソガラスは全地域で確認されたが, ごく普通種のため記録していない。

表 2-2 鳥類調査結果(1985年9月15日)

リストNo.	コードNo.	種 名	地 域	厚 岸 湖	藻散布沼	火散布沼
1	61	アオサギ		○	○	
2	74	ヒシクイ				49
3	86	マガモ		○		
4	87	カルガモ		○		
5	88	コガモ		○		
6	151	タンチョウ		1	2	5(幼1)
7	202	ツルシギ				○
8	205	アオアシシギ				○
9	209	タカブシギ		○		
10	211	キアシシギ				○
11	215	オオソリハシシギ		○		
12	241	オオセグロカモメ		○		
13	245	ウミネコ		○		
14	256	アジサシ		○		
15	343	ハクセキレイ		○		
16	357	モズ		○		
17	376	ノビタキ		○		
18	467	ベニマシコ		○		
19	488	ハシボソガラス		○		
20	489	ハシブトガラス		○		
種 類 数				16	2	5

(4) 大黒島 周田約6km, 面積107.4haの無人島である。コシジロウミツバメをはじめオオセグロカモメ, ウミウ, ケイマフリ, エトビリカなどの海鳥が繁殖し, 島の南西部約12ha(全島面積の約11%)が「大黒島海鳥繁殖地」として国の天然記念物(S. 26. 6. 9)に指定されている。また, 全島が鳥獣保護区(S. 47. 11. 1~67. 10. 31)である。かつては居住者がいたが, 現在は無人島で夏場のみ漁師の人が番屋を利用している。

本島の鳥類相を特徴付けているのはコシジロウミツバメの集団営巣である。阿部他(1972)は, その生息数を214万羽と推定している。綿貫(1985)は1981年の巣穴数を703,000とし, 巣穴利用率59.4%から繁殖番数を415,000としている。

林田・橋本(1981a)は, 1980年6月14日の調査でウミウ(172巣), オオセグロカモメ(2152+巣), ウミネコ(1巣)を確認し, 陸鳥ではクイナ, オオシシギなど12種を記録している(図2-2, 3, 表2-5, 6, 7)。阿部他(1972)は1972年7月4~8日の調査でコシジロウミツバメ, ノスリ, ハヤブサなど28種を記録している(表2-8)。

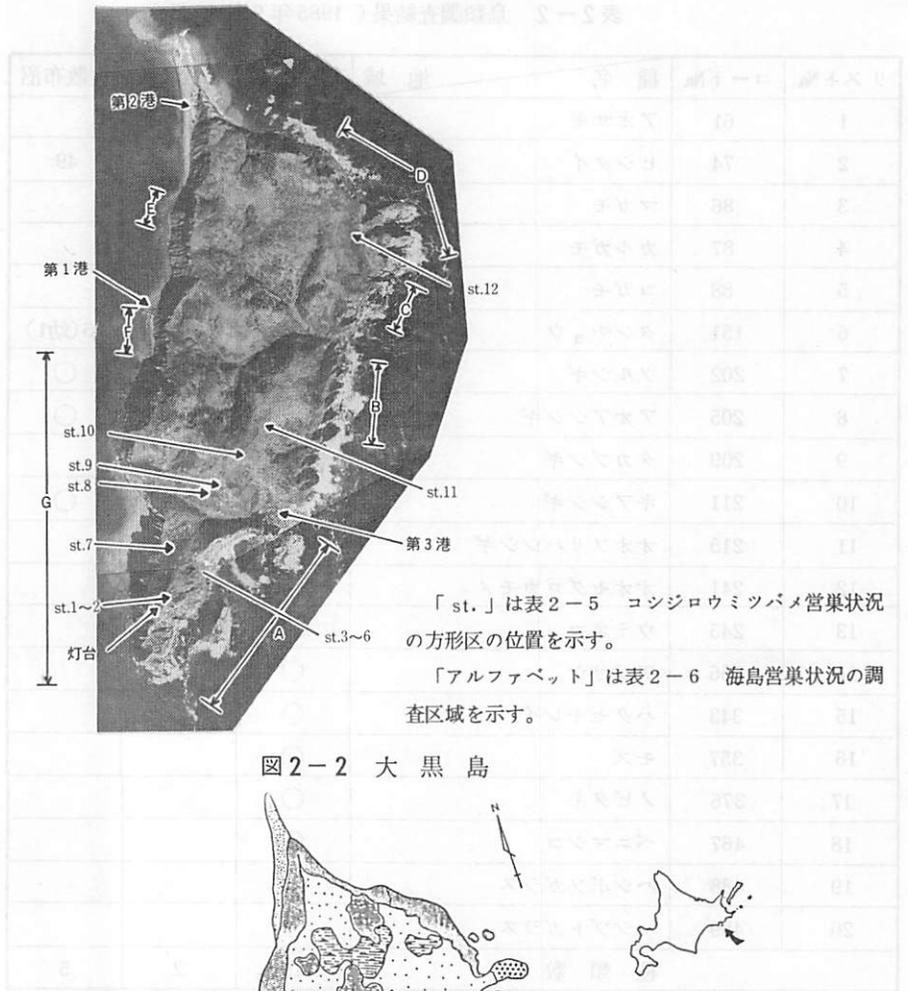


図2-2 大黒島



図2-3 大黒島の海鳥営巣分布(1980.6.13~15)

(林田・橋本1981より)

表 2-3 鳥類調査結果(1986年1月15日)

リストNo.	コードNo.	種名	地域	厚岸湖	藻散布沼	火散布沼
1	41	ヒメウ		○		
2	79	オオハクチョウ		640+	4	162
3	86	マガモ		○		○
4	92	ヒドリガモ		○		○
5	94	オナガガモ				○
6	103	スズガモ		○		
7	111	ホオジロガモ		60+		
8	114	ウミアイサ		○		
9	115	カワアイサ		360+		
10	119	オジロワシ		2		
11	151	タンチョウ			2	
12	241	オオセグロカモメ		○	○	
13	242	ワシカモメ		○		
14	243	シロカモメ		○		
15	244	カモメ		○		
16	488	ハシボソガラス		○	○	
17	489	ハシブトガラス		○	○	
種類数				15	5	4

表 2-4 厚岸湖でのオジロワシ・オオワシ渡来状況

種名 調査日	オジロワシ			オオワシ			不明ワシ	ワシ類 合計
	成鳥	幼鳥	(計)	成鳥	幼鳥	(計)		
1982年2月14日		3	(3)	3	8	(11)		14
1983年2月13日	2		(2)	2		(2)	1	5
1984年2月19日	1	2	(3)	3	7	(10)		13
1985年3月31日	2	4	(6)	6	16	(22)	12	40

表2-5 大黒島のコンジロウミツバメ営巣状況 (林田・橋本1981より)

方形区	個数	方形区 の 状 況	方形区	個数	方形区 の 状 況
St. 1	25	エゾヨモギにオオブキが少数混 じる傾斜地	St. 7	23	小径の路肩で植被はほとんどない
2	28	小径の路肩でエゾヨモギにオオ ブキが少数混じる	8	15	ほぼ平坦で、オオイタドリにエゾ イラクサ、オオブキが少数混じる
3	21	断崖へりの傾斜地でエゾイラクサ	9	22	エゾヨモギの傾斜地
4	35	断崖へりの急傾斜地でエゾヨモギ	10	7	エゾヨモギの傾斜地
5	32	ほぼ平坦でエゾヨモギ	11	3	ほぼ平坦で、イワノガリヤスにツ ルウメモドキが混じる
6	3	ほぼ平坦でイワノガリヤス	12	4	ほぼ平坦で、エゾイラクサ

※ 方形区は2メートル四方

表2-6 大黒島の海鳥営巣状況 (林田・橋本1981より)

()は個体数

種名	区域	A	B	C	D	E	F	G
ウミウ		31	80		61			
オオセグロカモメ		400 + (2,000 +)	300 +	10	267		175	1,000 +
ウミネコ				1 (100 +)		(200 +)		

表2-7 大黒島陸鳥センサス結果(1980.6.14 4:14~4:52) (林田・橋本1981より)

種 名	出現頻度	優占率%
ク イ ナ	4	6.1
オ オ ジ シ ギ	2	3.0
カ ッ コ ウ	1	1.5
ノ ゴ マ	7	10.6
エゾセンニュウ	7	10.6
シマセンニュウ	7	10.6
マキノセンニュウ	1	1.5
コヨシキリ	10	15.2
ア オ ジ	2	3.0
コカワラヒワ	4	6.1
ハシボソガラス	5	7.6
ハシブトガラス	16	24.2
計	66	100.0

表2-8 大黒島の鳥相

(阿部学他 1972より)

リストNo.	コードNo.	種名	個体数	備考
1	28	コシジロウミツバメ	2.14×10^6	繁殖
2	40	ウミウ	C	繁殖
3	41	ヒメウ	B	
4	127	ノスリ	1	
5	139	ハヤブサ	1	
6	157	クイナ	A	
7	227	オオジシギ	B	
8	237	グロトウゾクカモメ	7	
9	241	オオセグロカモメ	E	繁殖
10	245	ウミネコ	A	
11	268	ウミガラス	B	
12	271	ケイマフリ	C又はD	繁殖
13	279	ウトウ	B	
14	281	エトピリカ	A	繁殖
15	309	キタアマツバメ	B	
16	332	ヒバリ	A	
17	338	イワツバメ	A	
18	343	ハクセキレイ	B又はC	繁殖
19	364	ミソサザイ	1+	
20	371	ノゴマ	A	繁殖
21	399	エゾセンニュウ	A	
22	400	シマセンニュウ	B	
23	402	コヨシキリ	B	
24	428	シジュウカラ	6+	繁殖
25	447	アオジ	A	繁殖
26	457	コカラヒワ	A	
27	488	ハンボソガラス	A	
28	489	ハシブトガラス	A	繁殖

A : 1 ~ 10 個体 B : 11 ~ 40 個体 C : 41 ~ 70 個体

D : 71 ~ 100 個体 E : 100 個体以上 + : $1 \leq + < 5$

- (5) 藻散布沼 周囲約5 km, 面積87haの汽水湖であり, 湖面全域が鳥獣保護区 (S. 53. 10. 1 ~ 73. 9. 30) となっている。湖畔の丘陵地は良質の針広混交林で, 南岸には湿地が広がっている。タンチョウが1番繁殖するほか, ヒシクイ, オオハクチョウ, オジロワシ, ウグイス, マキノセンユウなどが出現している。

表 2-9 藻散布沼・火散布・霧多布湿原でのオジロワシ・オオワシ渡来状況

調査日	種名			オジロワシ			オオワシ			不明ワシ	ワシ類合計
	成鳥	幼鳥	(計)	成鳥	幼鳥	(計)					
1982年2月14日	6	1	(7)	1		(1)				8	
1983年2月13日	2	1	(3)					3		6	
1984年2月19日	4		(4)					2		6	
1985年3月31日			(0)			(0)				0	

- (6) 火散布沼 周囲約13km, 面積約588 haで, 湖面全域が銃弾禁止区域 (S. 57. 10. 1 ~ 67. 9. 30) となっている。沼の南西・北・北東岸に広く湿地が発達し, 周辺の丘陵地は保存の良い針広混交林となっている。タンチョウが2番繁殖し, またガン・カモ類の集中飛来地で200羽程のオオハクチョウや時にはスズガモ・ヒドリガモを中心に5,000羽以上のカモ類を見ることができる。1986年1月15日の調査では, オオハクチョウ162羽を確認した(表2-3)。

- (7) 霧多布湿原 面積約3,200 haで, そのうち803 haが国の天然記念物 (T. 11. 10. 12) に指定されている。89種と全調査地のうちで最も多くの鳥が出現している。タンチョウの営巣地が4~5箇所知られている。琵琶瀬川河口は本自然公園内では限られた干潟的環境の生じる場所となっており, そのためシギ・チドリ類の渡来が多く, またヒシクイがよく出現する。

- (8) 霧多布島 周囲約13kmの海食崖にかこまれた台地である。湯沸岬の先端部の独立した岩場では100番程のオオセグロカモメが営巣し, またエトピリカの数少ない繁殖地ともなっている。島上は草原となっており, ノゴマ, ノビタキなどがみられる。

2. 特定種の生息状況

- (1) タンチョウ 本自然公園域におけるタンチョウの生息(営巣)状況を環境庁の1985年5月26日の調査結果よりみると, 別寒辺牛川, 大別, 糸魚沢, 火散布沼北側, 霧多布湿原(大沼), 霧多布湿原(新川)の6箇所においてヒナ連れ或いは抱卵中のものが確認され, その他, 東梅川, 藻散布沼, 火散布沼西側, 霧多布湿原(氷切沼)の4箇所成鳥が見つかる(表2-10, 図2-4)。

表 2-10 1985年タンチョウ生息状況

(1985年5月26日環境庁タンチョウ特別調査結果より)

生息地番号	地域名	生息状況
1	別寒辺牛川河口	家族(成鳥2羽, ヒナ1羽)
2	大別	家族(成鳥2羽, ヒナ2羽)
3	糸魚沢	家族(成鳥2羽, ヒナ2羽)
4	東梅川	成鳥1羽
5	藻散布沼	成鳥2羽
6	火散布沼西側	成鳥2羽
7	〃 北側	巣(成鳥1羽, 2卵)
8	〃 東側	成鳥2羽
9	霧多布湿原(氷切沼)	成鳥2羽
10	〃 (大沼)	家族(成鳥2羽, ヒナ1羽)
11	〃 (新川)	家族(成鳥2羽, ヒナ1羽)

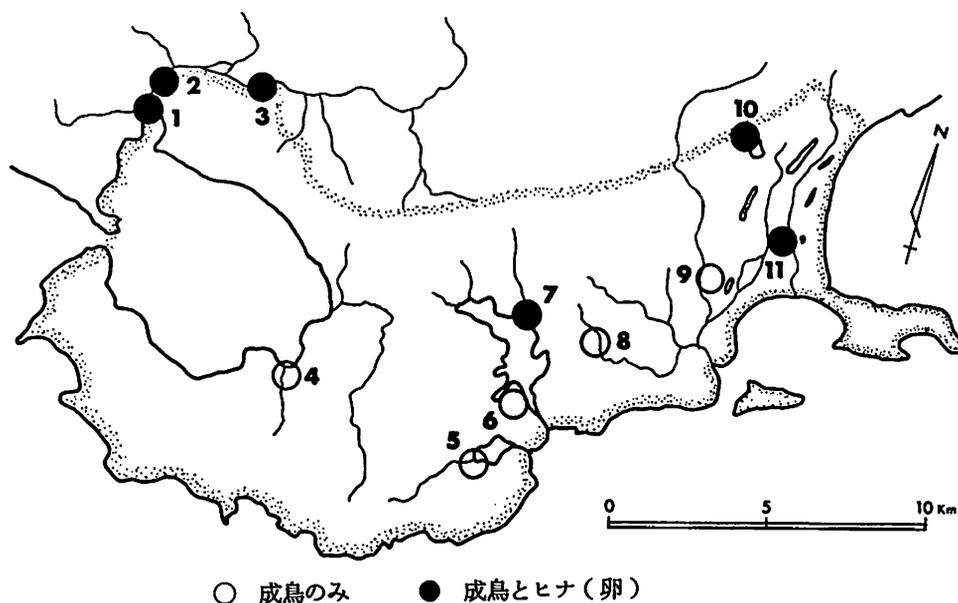
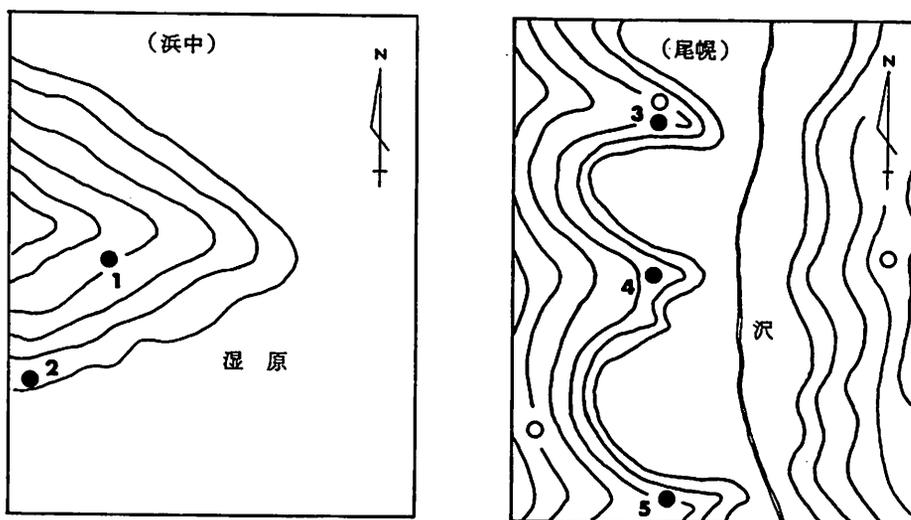


図 2-4 1985年タンチョウ生息状況

(1985年5月26日環境庁タンチョウ特別調査結果より)

(2) オジロワシ 北海道教育委員会(1979)は、霧多布湿原で2箇所のオジロワシの営巣地を報告している。位置からして同一番のものと考えられ、1箇所は1973年に使用され、他の1箇所は1974～1977年まで使用されている(図2-5)。1977年以降の繁殖状況については不明であるが、霧多布湿原及びその周辺で夏期にも成鳥が目撃されることから繁殖している可能性が高い。



- 営巣木 ○ 頻繁に使用された見張用の木
- 1 : 針広混交林の樹高約18 mのトドマツで、1974～1977年まで使用された。
 2 : " の樹高約20 mのセンノキで、1973年に使用された。
 3 : " の樹高約18 mのミズナラで、1978年に使用された。
 4 : " の樹高約18 mのミズナラで、1978年に発見されたが、使用されず。
 5 : " の樹高約18 mのトドマツで、1978年に発見されたが、使用されず。

図2-5 浜中・尾幌地域のオジロワシ営巣地略図

(北海道教育委員会 1978オオワシ・オジロワシ特別調査報告書より)

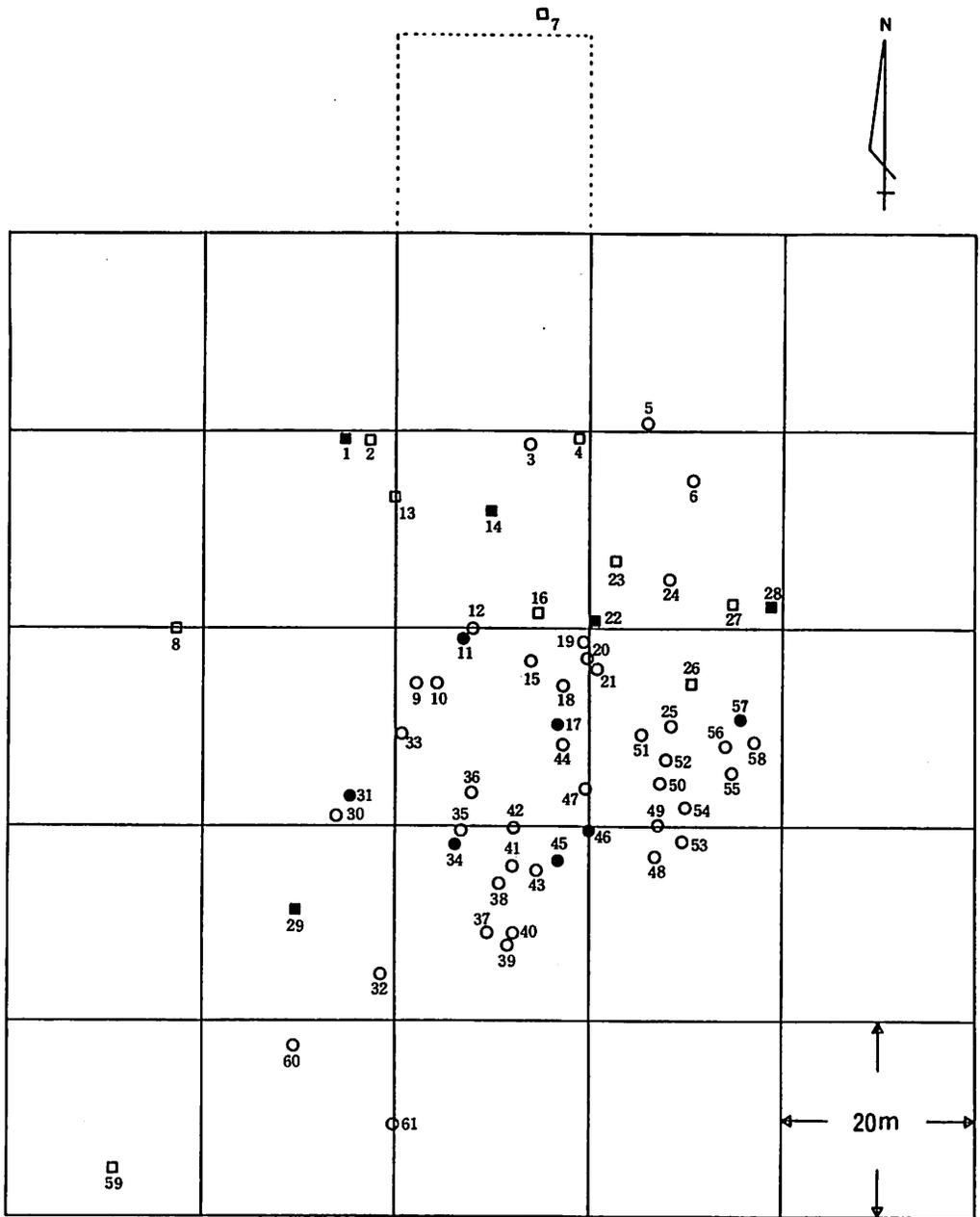
(3) アオサギ 1984年、厚岸町湾月町市街より南へ約500 m寄った標高50～80 mの高台にアオサギの営巣地が発見された(橋本1985)。同地はトドマツが優先する針広混交林で、鳥獣保護区内にある。100 m四方の範囲に主としてトドマツであるが61本の営巣木があり、樹上巣78個と落巣2個が確認された(表2-11, 図2-6, 7)。なお、アオサギの営巣地としては本邦最東端に位置している。

表2-11 1984年厚岸アオサギ営巣状況 (橋本1985より)

営巣木	樹種	樹高(m)	胸高直径(cm)	巣数	巣径(cm)
1	ミズナラ	20	50	2	30(×2)
2	"	20	54	1	30
3	トドマツ	17	32	1	30
4	ダケカンバ	22	61	1	20
5	トドマツ	15	22	1	40

営巣木	樹種	樹高(m)	胸高直径(cm)	巣数	巣径(cm)
6	トドマツ	18	37	1	40
7	ミズナラ	16	40	1	60
8	ハルニレ	20	70	1	40
9	トドマツ	22	45	1	60
10	"	22	45	1	60
11	"	22	41	2	30, 40
12	"	22	41	1	50
13	ミズナラ	20	60	1	40
14	"	24	51	6	20(×2), 60(×4)
15	トドマツ	20	45	1	60
16	ミズナラ	21	38	1	60
17	トドマツ	22	40	2	30, 60
18	"	20	35	1	60×100
19	"	20	32	1	60
20	"	20	29	1	30
21	"	19	25	1	80
22	"	20	38	3	40(×2), 70
23	ミズナラ	21	35	1	40
24	トドマツ	22	29	1	60
25	"	22	36	1	80
26	ダケカンバ	20	45	1	30
27	ミズナラ	20	38	1	30
28	"	20	54	2	40, 60
29	"	22	54	2	40(×2)
30	トドマツ	21	45	1	50
31	"	20	54	2	20, 70
32	"	22	45	1	60
33	"	22	32	1	60
34	"	22	51	2	50, 70
35	"	20	38	1	80
36	"	20	38	1	80
37	"	22	38	1	60
38	"	21	41	1	60
39	"	22	41	1	60
40	"	20	32	1	70

営巣木	樹種	樹高(m)	胸高直径(cm)	巣数	巣径(cm)
41	トドマツ	20	32	1	80
42	"	20	38	1	80
43	"	18	38	1	50×90
44	"	18	48	1	50
45	"	18	38	2	50, 80
46	"	18	51	2	40, 80
47	"	18	41	1	100
48	"	18	45	1	80
49	"	18	29	1	60
50	"	18	45	1	50
51	"	18	38	1	100
52	"	18	38	1	80
53	"	16	22	1	60
54	"	18	32	1	80
55	"	20	38	1	80
56	"	20	29	1	60
57	"	20	38	2	40, 60
58	"	20	35	1	60
59	ハリギリ	20	45	1	60
60	トドマツ	18	42	1	60
61	"	18	32	1	60
計	—	—	—	78	—



○ 単巢の営巣木 (針葉樹) ● 複巢の営巣木 (針葉樹) □ 単巢の営巣木 (広葉樹) ■ 複巢の営巣木 (広葉樹)

図 2-7 1984 年厚岸アオサギ営巣状況

以上、調査の結果について述べたが、森林棲の鳥類について調査不足の面があり数量的な面と合わせて今後の課題としてのこった。

第4節 厚岸道立自然公園の鳥類目録

リスト No.	コード No.	移動習性 科・種(亜種)	地域	1	2	3	4	5	6	7	8	出現率 %
		(アビ科)										
1	1	アビ	T							△		—
		(カイツブリ科)										
2	5	カイツブリ	S			○						13
3	6	ハジロカイツブリ	T		○							13
4	8	アカエリカイツブリ	S							○		13
		(ウミツバメ科)										
5	28	コシジロウミツバメ	S				○					13
		(ウ科)										
6	40	ウミウ	S>R	○	○		○	○			○	63
7	41	ヒメウ	R		○		○		○		○	50
8	42	チンマウガラス	R		○						○	25
		(サギ科)										
9	58	コサギ	St						○			13
10	61	アオサギ	S		○	○		○	○	○		63
		(ガンカモ科)										
11	74	ヒシクイ	T>W					○	○	○		38
12	79	オオハクチョウ	W		○			○	○	○		50
13	86	マガモ	R		○	○		○	○	○		63
14	87	カルガモ	S		○							13
15	88	コガモ	W		○			○	○	○		50
16		アメリカコガモ	St						○			13
17	90	ヨシガモ	W>R		○			○	○			38
18	92	ヒドリガモ	W		○			○	○	○		50
19	94	オナガガモ	W		○			○	○	○		50
20	95	シマアジ	W							○		13
21	96	ハシビロガモ	W		○			○		○		38
22	98	ホシハジロ	W		○			○	○			38
23	102	キンクロハジロ	W		○			○	○	○		50
24	103	スズガモ	W		○			○	○	○	○	63
25	106	クロガモ	W		△						○	13
26	107	ビロードキンクロ	W								○	13

リスト No.	コード No.	科・種(亜種)	移動習性 地域	1	2	3	4	5	6	7	8	出現率 %
27	109	シノリガモ	W	○			○				○	38
28	110	コオリガモ	W						○		○	25
29	111	ホオジロガモ	W		○			○	○	○		50
30	113	ミコアイサ	W		○			○				25
31	114	ウミアイサ	W		○			○	○	○		50
32	115	カワアイサ	W		○			○	○			38
		(ワシタカ科)										
33	116	ミサゴ	S					○				13
34	118	トビ	R	○	○	○		○	○	○	○	86
35	119	オジロワシ	W>R		○			○	○	○	○	63
36	120	オオワシ	W		○			○	○			38
37	121	チョウセンオオタカ	R	○								13
38	127	ノスリ	R		○					○		25
39	137	チュウヒ	W						○	○		25
		(ハヤブサ科)										
40	139	ハヤブサ	R							○		13
		(ライチョウ科)										
41	144	エゾライチョウ	R	○								13
		(ツル科)										
42	151	タンチョウ	R		○			○	○	○		50
		(クイナ科)										
43	157	クイナ	S				○					13
		(チドリ科)										
44	175	シロチドリ	T							○		13
45	176	メダイチドリ	T							○		13
46	180	ムナグロ	T							○		13
		(シギ科)										
47	185	トウネン	T					○	○	○		38
48	191	ハマシギ	T							○		13
49	194	オバシギ	T							○		13
50	197	エリマキシギ	T							○		13
51	202	ツルシギ	T							○		13
52	203	アカアシシギ	T							○		13
53	205	アオアシシギ	T							○		13

リスト No.	コード No.	移動習性 科・種(亜種)	地域	1	2	3	4	5	6	7	8	出現率 %
54	209	タカブシギ	T		○							13
55	211	キアシシギ	T						○	○		25
56	212	イソシギ	S					○	○			25
57	213	ソリハシギ	T							○		13
58	214	オグロシギ	T							○		13
59	215	オオソリハシギ	T		○					○		25
60	217	ハウロクシギ	T								○	13
61	219	チュウジャクシギ	T							○		13
62	222	ヤマシギ	S							○		13
63	227	オオジシギ	S	○		○	○			○	○	63
		(ヒレアシギ科)										
64	233	アカエリヒレアシギ	T								○	13
		(カモメ科)										
65	239	ユリカモメ	T>W		○			○	○	○		50
66	240	セグロカモメ	W		○				○		○	38
67	241	オオセグロカモメ	R	○	○	○	○	○	○	○	○	100
68	242	ワシカモメ	W		○							13
69	243	シロカモメ	W		○							13
70	244	カモメ	W		○	○		○	○	○	○	75
71	245	ウミネコ	S	○	○	○	○	○	○	○	○	100
72	248	ミツユビカモメ	W			○						13
73	256	アジサシ	T		○				○	○		38
		(ウミスズメ科)										
74	271	ケイマフリ	S>R				○				○	25
75	279	ウトウ	R				○					13
76	281	エトピリカ	R								○	13
		(ハト科)										
77	288	キジバト	S						○	○		25
78	290	アオバト	S							○		13
		(ホトトギス科)										
79	293	カッコウ	S			○	○			○		38
80	294	ツツドリ	S			○				○		25
		(アマツバメ科)										
81	307	ハリオアマツバメ	S							○		13

リスト No.	コード No.	科・種(亜種)	移動習性	地域								出現率 %	
				1	2	3	4	5	6	7	8		
82	309	キタアマツバメ (キツツキ科)	S	○				○			○	○	50
83	318	アリスイ	S	○							○		25
84	320	ヤマゲラ	R							○	○		25
85	324	エゾアカゲラ	R			○					○		25
86	327	エゾコゲラ (ヒバリ科)	R			○		○				○	38
87	332	ヒバリ (ツバメ科)	S							○	○	○	38
88	334	ショウドウツバメ	S			○					○		25
89	338	イワツバメ (セキレイ科)	S	○				○					25
90	343	ハクセキレイ	S	○	○	○	○	○	○	○	○	○	100
91	348	ビンズイ	S	○							○		25
92	351	タヒバリ (ヒヨドリ科)	T		○					○	○	○	50
93	355	エゾヒヨドリ (モズ科)	S>R		○								13
94	357	モズ (ミソサザイ科)	S			○				○	○		38
95	364	ミソサザイ (ヒタキ科)	S						○	○	○		38
96	368	コマドリ	S	○	○	○		○			○		63
97	371	ノゴマ	S	○		○	○				○	○	63
98	373	コルリ	S								○		13
99	376	ノビタキ	S	○	○	○					○	○	63
100	383	トラツグミ	S			○					○		25
101	387	アカハラ	S	○							○		25
102	392	ツグミ	W									○	13
103	397	ウグイス	S			○	○	○	○	○	○		63
104	399	エゾセンニュウ	S	○		○	○			○	○		63
105	400	シマセンニュウ	S	○		○	○				○		50
106	401	マキノセンニュウ	S				○				○		25
107	402	コヨシキリ	S			○	○				○		38

リスト No.	コード No.	移動 科・種(亜種)	地域 習性									出現率 %	
				1	2	3	4	5	6	7	8		
108	403	オオヨシキリ	S								○		13
109	408	エゾムシクイ	S			○		○			○		38
110	409	センダイムシクイ	S			○		○			○		38
111	414	キビタキ	S	○		○					○		38
		(エナガ科)											
112	422	シマエナガ	R		○						○		25
		(シジュウカラ科)											
113	424	ハシブトガラ	R		○			○	○	○	○		63
114	426	ヒガラ	R	○	○			○	○	○			63
115	428	シジュウカラ	R					○	○	○			38
		(ゴジュウカラ科)											
116	429	シロハラゴジュウカラ	R		○			○	○	○			50
		(ホオジロ科)											
117	443	シマアオジ	S								○		13
118	447	アオジ	S	○		○	○	○	○	○			75
119	450	オオジュリン	S		○	○		○			○		50
		(アトリ科)											
120	457	コカワラヒワ	S			○	○	○				○	50
121	459	ベニヒワ	W							○			13
122	467	ベニマシコ	S		○			○	○	○			50
123	469	ウソ	S	○						○			25
124	472	シメ	S>R								○		13
		(ハタオリドリ科)											
125	474	スズメ	R		○	○				○	○	○	63
		(ムクドリ科)											
126	476	コムクドリ	S								○		13
		(カラス科)											
127	481	ミヤマカケス	R	○				○			○		38
128	488	ハシボソガラス	R	○	○	○	○	○	○	○	○	○	100
129	489	ハシブトガラス	R	○	○	○	○	○	○	○	○	○	100
種類数				26	50	33	24	46	52	89	32		

凡 例

- (地域) 1: 尻羽岬 2: 厚岸湖 3: 床潭沼 4: 大黒島
5: 藻散布沼 6: 火散布沼 7: 霧多布湿原 8: 霧多布島
- : 1971～1985年に橋本の観察記録のあるもの
△: 1971～1985年に釧路市立博物館に保護されたもの
- S: 夏鳥
R: 留鳥
W: 冬鳥
St: 迷鳥

引 用 文 献

- 1) 阿部 学ほか (1972) コンジロウミツバメの営巣個体数推定の試みと動物相—北海道大黒島—, 鳥, 21 (91/92): 346—365
- 2) 橋本正雄 (1973) 釧路市立郷土博物館所蔵鳥類目録, 釧路市博紀要, (2): 1—33
- 3) ——— (1979) 厚岸・浜中・根室の湖沼調査(鳥類), 釧路博物館報, 258: 4—6
- 4) ——— (1981) 釧路管内鳥類観察記録(1), 釧路市博紀要, 8: 47—58
- 5) ——— (1982) 同上(2), 同上, 9: 9—18
- 6) ——— (1984) 道東海岸線の鳥獣, 道東海岸線総合調査報告書: 211—238, 釧路市立博物館
- 7) ——— (1985) 釧路湿原, 厚岸町におけるアオサギ営巣地について, 釧路市博紀要, 10: 19—27
- 8) 林田恒夫・橋本正雄 (1981a) 大黒島の鳥獣類, 大黒島及びその周辺の科学調査報告書, : 31—34, 釧路市立郷土博物館
- 9) ———・——— (1981b) 床潭沼の鳥類, 同上, : 60—61, 同上
- 10) ———・——— (1982) 霧多布湿原若山沼周辺の鳥類, 霧多布湿原及びその周辺の科学調査報告書: 38—41, 同上
- 11) 北海道教育委員会 (1977) エゾシマフクロウ・クマゲラ特別調査報告書, 83 pp.
- 12) ——— (1979) オオワシ・オジロワシ特別調査報告書, 63 pp.
- 13) 正富宏之他 (1983) 1983年繁殖期におけるタンチョウの分布, 専大北海道紀要, 16: 200—212
- 14) オジロワシ・オオワシ合同研究グループ, 根北郷土研究会(1985) オジロワシ・オオワシ—斉調査報告書—第2報—, 28 pp.
- 15) 綿貫 豊 (1985) 大黒島におけるコンジロウミツバメ (*Oceanodroma leucorhoa*) の繁殖生態, 山階鳥研報, 17: 9—22



第3章 昆虫類

飯島 一雄

第1節 研究小史

「厚岸道立自然公園」と言うタイトルのもとでの調査はこれまで一度もなされていないが、古くは1910年7月31日、霧多布で採集されたエゾアカネ、ムツアカネの2種が、北海道大学の昆虫学教室に所蔵されており、朝比奈正二郎(1938)により記録され、次いで1936年6月26～28日朝比奈英三氏が、厚岸でキタイトトンボ、エゾイトトンボ、エゾルリイトトンボ、カラカネトンボを採集し、翌年8月5日に実兄の朝比奈正二郎氏が厚岸を訪ずれ翌日の6日トコタン沼にかけて採集し、エゾルリイトトンボ、コサナエ、ルリボシヤンマ、オオルリボシヤンマ、コエゾトンボ、キバネモリトンボ、エゾトンボ、ホソミモリトンボ、シオカラトンボ、ヨツボシトンボ、タイリクアカネなどを採集している(朝比奈正二郎 1938)。

次いでまとまった調査は、釧路市立博物館が実施した道東海岸線総合調査(1977年～1981年)である。この空白の1950年～1970年頃は調査者飯島によって、釧路湿原のトンボが次々と学界に発表され、日本から未発見だったエゾカオジロトンボ、イジマルリボシヤンマなどの発見もあって学会を沸騰させた。

さて海岸線調査であるが、第1次総合調査(実際は予備調査)は1976年11月1日～2日にかけて、厚岸一浜中町霧多布湿原を調査、すでに昆虫のシーズンは過ぎていて収穫は少ない。藪散布沼でアキアカネ、キモンナガミズギフゴムシその他若干の甲虫類を、霧多布湿原でタイリクアカネを、霧多布岬ではエゾアリガタハネカクシを採集したに過ぎない(飯島 1978)。

1977年の第1次個別調査として(10月1日～2日)調査者飯島は釧路町初無敵、浦雲泊：厚岸町厚岸、アヤマガ原を調査(飯島 1978)。

このほか飯島個人の資料1973年9月22日厚岸博物館前でクモガタヒョウモン、ジャノメチヨウ：霧多布岬でモンキチヨウ、カブラヤガ、ムツアカネを採集している(飯島 1978)。

2年目の1978年は第1次個別調査として(6月7日)厚岸アヤマガ原を、第2次個別調査(7月16日)厚岸町床潭、筑紫恋：第3次個別調査(7月25日)厚岸町愛冠岬を調査し、個人の資料としては飯島の厚岸林務署前(1978年7月24日)での採集資料：大黒島(1978年6月15日～19日)新妻昭夫採集：霧多布(1978年9月2日)飯島猛秀採集、以上は(飯島 1979)参照のこと。

3年目の1979年は第1次個別調査(6月15日)火散布海岸：第2次個別調査(7月29日～30日)愛冠岬を調査(飯島 1980)。

4年目の1980年は厚岸町大黒島の総合調査が6月13日～15日にかけて実施された。

昆虫班は飯島、須摩靖彦、大西純が当り、夜間採集でナワメナミシヤクを発見する。

本種はButlerが1978年に函館から記載して100年ぶりの再発見で(飯島 1980a)北海道未記録のミヤマスソモンヒメハマキなども発見された(飯島ほか1981)。同年6月28日には床潭沼周辺で採集さ

れた資料が飯島によって記録されている。採集者は須摩，大西（飯島ほか1981）。

最終年の5年目1981年は霧多布湿原の若山沼の調査が実施された（6月26日～27日）（飯島1982）。5カ年間の調査のしめくりとして1984年には、道東海岸線総合調査報告書が出版された（飯島1984）。昆虫類は、Ⅳ.道東海岸線の昆虫P. 87～126及び、Ⅴ.道東海岸線のトビムシ相P. 127～147にまとめられている。

前田惣一（1956）厚岸の蝶，前田の勤務していた厚岸博物館付近での2年間の採集記録で，52種を記録している（内3種は不確実と記してある）。

このほか断片的な記録としては，片岡新助（1960）厚岸博物館前でアサギマダラを採集している。岡野磨麿郎，山根正気（1969）厚岸町からチャモントリバを記録，本種はアイノトリバと考えられる。

高橋弘（1955）厚岸にセスジャブカが毎年大発生することをのべている。

木村津登志（1955）シロオビウソカが北海道に産するとのべ，その産地厚岸をあげている。

杉繁郎，神保一義（1978）日本産クモマウスグロヤガの記録の中で，北海道では厚岸産の1ものあることをのべている。

杉繁郎（1965）日本からはじめてのキタウスグロヤガ，標茶町と厚岸の標本を記録している。

山根正気（1969）著者の兄が北大臨海実験所で1968年7月16日に採集した31種の蛾類と，10種の蝶類を記録している。

矢崎康幸（1980）1979年8月26日～31日の間，愛冠岬及び床潭沼で蝶類を採集，31種を記録している。須摩靖彦（1981，1982，1984）厚岸道立自然公園内のトビムシ相について詳細な報告がなされている。

Shôichi F. Sakagami & Ryôsuke Ishikawa（1972）。

厚岸におけるマルハナバチ類の生息比率についてのべられている。トラマル，エゾマルナガ，シュレンクマル，オオマルハナ，アカマルハナ，コマルハナ，アイヌマルハナ，ニセマルハナバチの順となっている。

なお，今回の調査に当っては大崎恵美子，成田美穂子，成田久美子の諸氏にお世話になった。篤くお礼申しあげる。

また，ハマキ科の一部は川辺湛氏に同定を載いた篤くお礼申しあげる。

第2節 調査方法及び調査地点

昆虫全般について採集したが，鱗翅目及び蜻蛉目には特に重点を置いた。

広葉樹の多い来止臥，浦雲泊，愛冠岬，アヤマガ原（海岸に降りない段丘上）と，蜻蛉目の好む（止水性の）挺水植物，沈水植物の多い霧多布湿原の氷切沼に接した小さな池沼，蜻蛉目の比較的きらう傾向にある汽水性の藻散布沼などを調査地点とした。

日中のみつけ取りで，幼虫は自宅へ持ち帰って，成虫を羽化させて確認した。

第3節 調査結果及び考察

1. 調査の結果

1) 釧路町来止臥 1985年7月21日

鱗翅目(蝶類)

Satyridae ジャノメチョウ科

Ypthima argus Butler ヒメウラナミジャノメ 1♂ 1♀
Letho diana Butler クロヒカゲ 1♀
Lopinga achine jezoensis Matsumura ウラジャノメ 1♂

鱗翅目(蛾類)

Yponomeutidae スガ科

Eidophasia albifasciata Issiki シロオビクロナガ 1♂
Xyrosaris lichneuta Meyrick ホソバコスガ 14♂ 4♀ 幼虫はニシキギを食べていた。
7月31日と8月8日に羽化した。
Yponomeuta polystictus Butler オオボシオオスガ 3♀ 幼虫はニシキギを食べていた。

Glyphipterigidae ホソハマキモドキガ科

Glyphipterix regula Diakonoff & Arita アトミスジホソハマキモドキ 1♂
Glyphipterix basifasciata Issiki シロオビホソハマキモドキ 1♂

Tortricidae ハマキガ科

Archips ingentanus (Christoph) オオアトキハマキ 1♂
Croesia fuscotogata (Walsingham) モトキハマキ 3♂
Enarmonia flammeata Kuznetsov コナミスジキヒメハマキ 25♂
Dichrorampha cancellatana Kennel ヘリホシヒメハマキ 7♂
Olethreutes pryerana (Walsingham) キスジオビヒメハマキ 1♀
Olethreutes cacuminana (Kennel) ツヤスジウンモンヒメハマキ 1♂

Pyralidae メイガ科

- Acropentias aurea* (Butler) クロスジキオオメイガ 1 ♀
Scoparia spinata Inoue ノリクラヤマメイガ 1 ♂
Scoparia nipponalis Inoue オオヤマメイガ 1 ♂
Evergastis junctalis junctalis (Warren) フタモンキノメイガ 2 ♂
Anania funebris assimilis (Butler) シロモンクロノメイガ 1 ♂

Geometridae ジャクガ科

- Hydrelia shioyana* (Matsumura) チビヒメナミジャク 1 ♂
Spilopera debilis (Butler) ツマトビシロエダジャク 1 ♂ 本種は道東部では大変少ない。

鞘 翅 目

Cantharidae ジョウカイボン科

- Themus cyanipennis* Motschulsky アオジョウカイ 1 ex

Curculionidae ゾウムシ科

- Catopionus viridimetallicus* Motschulsky ハナウドゾウムシ 1 ex

2) 釧路町浦雲泊 1985年7月21日

鱗 翅 目(蛾類)

Glyphipterigidae ホソハマキモドキガ科

- Glyphipterix basifasciata* Issiki シロオビホソハマキモドキ 2 ♀

Tortricidae ハマキガ科

- Eana argentana* (Clerck) ギンムジハマキ 2 ♂
Croesia fuscotogata Walsingham モトキハマキ 2 ♂
Olethreutes siderana (Treitschke) ギンボシモトキヒメハマキ 2 ♂ 2 ♀
Enarmonia flammeata Kuznetzov コナミスジキヒメハマキ 1 ♂

Dichrorampha cancellatana Kennel ヘリホシヒメハマキ 2♂

Pyralidae メイガ科

Crambus pascuellus (Linnaeus) ギントガリツトガ 1♂ 4♀

Algedonia luctualis luctualis (Hübner) ヨツメクロノメイガ 1♂

Pterophoridae トリバガ科

Platyptilia ainonis Matsumura アイノトリバ 1♂ 1♀

Geometridae ジャクガ科

Idaea muricata minor (Sterneck) ベニヒメジャク 1♂

鞘 翅 目

Lampyridae ホタル科

Lucidina biplagiata Motschulsky オバボタル 1 ex

Chrysomllidae ハムシ科

Argopus punctipennis (Motschulsky) アカイロマルノミハムシ 1 ex

Attlabidae オトシブミ科

Apoderus geminus Sharp セアカヒメオトシブミ 1 ex

膜 翅 目

Apidae ミツバチ科

Bombus diversus geminus Smith トラマルハナバチ 1♀

3) 厚岸町愛冠岬 1985年7月28日

鱗翅目(蝶類)

Hesperiidae セセリチョウ科

Ochlodes venata herculea Butler コキマダラセセリ 1♂ 1♀
Thoressa varia Murray コチャバネセセリ 1♂ 1♀

Pieridae シロチョウ科

Aporia crataegi abherbal Fruhstorfer エゾシロチョウ 1♂
Colias erate poliographus Motshulsky モンキチョウ 1♂

Lycaenidae シジミチョウ科

Maculinea teleius matsumurai Shirôzu ゴマンジミ 1♂

Nymphalidae タテハチョウ科

Mesoacidalia charlotta basalis Matsumura ギンボンシヨウモン 1♂
Fabriciana adippe pallescens Butler ウラギンシヨウモン 3♂
Paraneptis rivularis aino Shirôzu フタスジチョウ 1♂

Satyridae ジャノメチョウ科

Ypthima argus Butler ヒメウラナミジャノメ 1♀
Lethe diana Butler クロヒカゲ 3♂
Lopinga achine jezoensis Matsumura ウラジャノメ 3♂
Neope goschkevitschii Ménétériés サトキマダラヒカゲ 1♀

鱗翅目(蛾類)

Gelechiidae キバガ科

Polyhymno obliquata (Matsumura) カギツマンマキバガ 2♂ 1♀

Tortricinae ハマキガ科

- Archips betulanus* (Hübner) コアトキハマキ 1♂
Eana argentana (Clerck) ギンムジハマキ 1♂
Croesia fuscotogata (Walsingham) モトキハマキ 1♂♀
Olethreutes lacunana Denis & Schiffermüller ミヤマウンモンヒメメハマキ 1♂ 1♀
Enarmonia major (Walsingham) ギンボシキヒメハマキ 1♂
Enarmonia flammeata Kuznetsov コナミスジキヒメハマキ 2♂
Dichrorampha cancellatana Kennel ヘリホシヒメハマキ 1♂ 1♀
Hikagehamakia albiguttata Oku ヒカゲヒメハマキ 1♂
Hedya vicinana (Ragonot) シラフオオヒメハマキ 1♂
Epinotia exquisitana (Christoph) クロマダランシロヒメハマキ 2♀

Zygaenidae マダラガ科

- Balataea gracilis* (Walker) キスジホソマダラ 2♀

Pyralidae メイガ科

- Crambus pascuellus* (Linnaeus) ギントガリツトガ 1♂ 3♀
Crambus perlellus (Scopoli) ウスギンツトガ 1♂
Evergestis junctalis junctalis (Warren) フタモンキノメイガ 3♂
Paratalanta ussuriensis (Bremer) フチグロノメイガ 1♂
Pleuroptya deficiens (Moore) シロハラノメイガ 1♀
Anania funebris asimilis (Butler) シロモンクロノメイガ 2♂
Salebria semirubella (Scopoli) アカマダラノメイガ 1♂

Pterophoridae トリバガ科

- Pselnophorus vilis* (Butler) フキトリバ 1♂

Geometridae ジャクガ科

- Scopula apicipunctata* (Christoph) クロテンシロヒメジャク 1♀
Idea remissa (Wileman) ホソスジキヒメジャク 1♀
Trichodezia kindermanni latifasciaria Matsumura シラフシロオビナミジャク 1♀
Laciniodes denigratus ussuriensis Prout セジロナミジャク 1♂ 1♀

Abraxas grossulariata conspurata Butler スグリシロエダシヤク 1 ♀
Microcalicha sordida (Butler) シタクモエダシヤク 1 ♀
Garaeus mirandus mirificus Bang-Haas ナシモンエダシヤク 1 ♀ 道東部では個体数が少なく、産地は阿寒町、羅臼岳、糠平など限られている。

Arctiidae ヒトリガ科

Eilema okanoi Inoue ミヤマキベリホソバ 1 ♂ 1 ♀

Noctuidae ヤガ科

Holocryptis nymphula Rebel ベニエグリコヤガ 1 ♀ 道東部の既知産地は十勝では糠平、音調津、湧洞、釧路では標茶町ニツ山、雷別などが知られている。個体数も少ない。

Rivula sericealis (Scopoli) テンクロアツバ 1 ♂ 1 ♀
Hypena tatorhina Butler ヒトスジアツバ 1 ♀
Paracolax albinotata (Butler) シロモンアツバ 1 ♀
Zanclognatha southi Owaba コウスグロアツバ 1 ♀

鞘 翅 目

Scarabaeidae コガネムシ科

Phyllopertha intermixta Arrow アオウスチャコガネ 1 ♀

Elateridae コメツキムシ科

Dalopius sp. 1 ex

膜 翅 目

西洋ミツバチ 3 ♀

4) 厚岸町アヤマガ原 1985年8月13日

鱗 翅 目(蝶類)

Hesperiidae セセリチョウ科

- Ochlodes venata herculea* Butler コキマダラセセリ 1♂
Polytremis pellucida Murray オオチャパネセセリ 2♂ 2♀

Pieridae シロチョウ科

- Pieris napi nesis* Feruhstor エゾスジグロシロチョウ 1♂
Colias erate poliographus Motshulsky モンキチョウ 1♀

Lycaenidae シジミチョウ科

- Maculinea teleius matsumurzi* Shirôzu ゴマシジミ 4♂

Nymphalidae タテハチョウ科

- Brenthis daphne iwatensis* Okano ヒョウモンチョウ 1♂ 1♀
Fabriciana adippe pallescens Butler ウラギンヒョウモン 1♂
Argynnis geisha Hemming ミドリヒョウモン 目撃
Mesoacidalia charlotta basalis Matsumura ギンボシヒョウモン 目撃

Satyridae ジャノメチョウ科

- Lethe diana* Butler クロヒカゲ 1♀
Lopinga achine jezoensis Matsumura ウラジャノメ 1♀
Minois dryas bipunctatus Motschulsky ジャノメチョウ 目撃

鱗翅目(蛾類)

Arctiidae ヒトリガ科

- Rhyarioides nebulosus* Butler ベニシタヒトリ 1♂

鞘翅目

Cerambycidae カミキリムシ科

Leptura ochraceofasciata ochraceofasciata (Motschulsky) ヨツスシツカミキリ 1♂ 1♀

半 翅 目

コエゾゼミとエゾチッチゼミの鳴き声を確認する。

5) 浜中町藻散布沼 1985年8月13日

鱗 翅 目(蝶類)

Papilionidae アゲハチ ヨウ科

Papilio machaon hippocrates C.&R. Felder キアゲハ 目撃

Hesperiidae セセリチ ヨウ科

Ochlodes venata herculea Butler コキマダラセセリ 目撃

Pieridae シロチ ヨウ科

Pieris napi nesis Feruhstor エゾスジグロシロチ ヨウ 1♂

Colias erate poliographus Motshulsky モンキチ ヨウ 目撃

Lycaenidae シジミチ ヨウ科

Ussuriana stygiana Butler ウラキンシジミ 3♂ 1♀ 厚岸, 仙鳳趾, 三津浦, 別保, 高山, 白糠などの太平洋岸に産地が知られていて, 内陸では弟子屈町の和琴から採れている。釧路湿原をとりまく丘陵からは未発見。

Lycaena phlaeas daimio Seitz ベニシジミ 1♂ 2化の個体

Maculinea teleius matsumurai Shirôzu ゴマシジミ 1♂

Nymphalidae タテハチ ヨウ科

Argynnis geisha Hemming ミドリヒ ヨウモン 2♂

Mesoacidalia charlotta basalis Matsumura ギンボシヒ ヨウモン 目撃

Ladoga camilla japonica Ménétériés イチモンジチ ヨウ 目撃

Paraneptis rivularis aino Shirôzu フタスジチヨウ 目撃
Araschnia levana obscura Fenton アカマダラ 目撃

Satyridae ジャノメチヨウ科

Harima callipteris diluta Esaki & Nakahara ヒメキマダラヒカゲ 1♀

鱗翅目(蛾類)

Tortricidae ハマキガ科

Dichrorampha cancellatana Kennel ヘリホシヒメハマキ 1♀

Pyralidae メイガ科

Crambus perlellus (Scopoli) ウスギンツトガ 1♂

Salebria semirubella (Scopoli) アカマダラメイガ 1♂

Geometridae シャクガ科

Eucosmabraxas placida placida (Butler) キベリシロナミシャク 1♂

6) 浜中町霧多布(氷切沼) 1985年8月13日

蜻蛉目

Coenagrionidae イトトンボ科

Enallagma boreale circulatum Selys ルリイトトンボ 3♂

Coenagrion ecornutum Selys キタイトンボ 2♂ 1♀

Lestidae アオイトトンボ科

Lestes sponsa (Hansemann) アオイトトンボ 4♂ 1♀ 羽化期に当り、軟弱の個体を多数見受けた。

Aeshnidae ヤンマ科

Aeshna nigroflava Martin オオルリボシヤンマ 水面を飛翔する数頭を目撃

Aeshna subarctica Walker イイジマルリボシヤンマ 2♀ この雌はミズゴケ湿地で産卵していた。本種は比較的最近釧路湿原から発見され、道北にも分布していることが知られたが、霧多布湿原からは初めての発見である。

Corduriidae エゾトンボ科

Cordulia aenea amurensis Selys カラカネトンボ 1♂

Libellulidae トンボ科

Libellula quadrimaculata asahinai Schmidt ヨツボシトンボ 1♂ 春の蜻蛉だが、この個体は発生の遅れたものとする。このほか3頭を目撃

Sympetrum infuscatum (Selys) ノシメトンボ 目撃

Sympetrum danae Sulzer ムツアカネ 1♂ 1♀

Leucorrhinia dubia orientalis Selys カオジロトンボ 3♂

鱗翅目(蝶類)

Hesperiidae セセリチョウ科

Ochlodes venata herculea Butler コキマダラセセリ 1♀

Pieridae シロチョウ科

Colias erate poliographus Motshulsky モンキチョウ 1♀

Papilionidae アゲハチョウ科

Papilio machaon hippocrates C. & R. Felder キアゲハ 目撃

Lycaenidae シジミチョウ科

Neozephyrus taxila regina Butler ミドリシジミ 2♂ 1♀

Maculinea teleius matsumurai Shirôzu ゴマシジミ 2♂

Nymphalidae タテハチョウ科

Fabriciana abippe pallescens Butler ウラギンヒョウモン 1♂

Inachus io geisha Stichel クジャクチョウ 1♀

鱗翅目(蛾類)

Pyralidae メイガ科

Crambus silvellus (Hübner) ヒメギンスジツトガ 1♂ 4♀ 本種は湿原性の種。

Nymphula orientalis Filipjev ウスマダラミズメイガ 2♂ 本種も湿原性の種。道東部では標茶町二ツ山、サルルントウ、釧路市愛国、白糠町上茶路から知られている。

Nymphula interruptalis (Pryer) マダラミズメイガ 1♀ 湿原性の種。

Endotricha sp. 1♀

Pterophoridae トリバガ科

Platyptilia sachalinensis Matsumura カラフトトリバ 1♂

Geometridae ジャクガ科

Arichanna melanaria fraterna (Butler) キシタエダジャク 6♂ 14♀ 本種はきわめて多く見受けた。

Ctenuchidae カノコガ科

Amata fortunei fortunei (Orza) カノコガ 2♀ 前種と同じく日中かなり見られた。

Noctuidae ヤガ科

Rivula sericealis (Scopoli) テンクロアツバ 1♀

7) 霧多布湿原(氷切沼) 1985年9月16日

イイジマルリボシヤンマを目標としての調査であったが、風が強くて失敗であった。

アオイトトンボ2♂1♀とハネナガキリギリス1♀を得た。ハネナガは湿原の草むらでしきりと鳴いていた。

2. 考 察

北海道東部に生息している昆虫で、調査のいきとどいているトンボ類は49種知られていて、この内厚岸道立公園内には、今回発見されたものを含めて23種の生息が明かになった。チョウ類は91種の内公園内には61種類が生息（アサギマダラは除く）する。

ガ類は大型のヤママユ科からはじまって小型なハマキガ科までの、約1,300種類が完結し、目下ミクロと総称される小型の種類の分類が進行中であるが、今回までに採れた公園内のガ類は201種類である。

その他の昆虫類は鞘翅目98種類、直翅目4種類、革翅目2種類、半翅目9種類、双翅目6種類、膜翅目（ミツバチ科、スズメバチ科）15種類などを記録した。

分布上特筆すべきものはイジマルリボシヤンマの霧多布湿原での発見である。

本種はヨーロッパ～北アメリカにかけての寒冷地帯に分布する好寒種で、日本では北海道のみに分布する氷河期の遺存種である。

カオジロトンボは高地の池沼を好む山地性のトンボであるが、霧多布湿原のような低地での生息は、釧路湿原以外からは知られていなかった。

釧路湿原に多産するエソトンボ科の *Somatochlora* 属は、厚岸から4種知られているが、霧多布湿原からは1種も発見できなかった。

蛾類のナフメナミシヤクは100年ぶりの再発見で、学界から注目されたが（飯島1980a）最近十勝の留真からも発見された。

キンタエダシヤクは今回の調査で、霧多布湿原で多数採れたが、調査のいきとどいている釧路湿原では稀少種である（本種の食草であるツツジ類が釧路湿原では1部分にしか自生していない）。

湿原性の蛾類としてはマダラミズメイガ、ウスマダラミズメイガ、ヒメギンスジツガなどが、霧多布湿原からも採れたが、ウスマダラミズメイガは最近本邦から発見された稀種で、釧路地方と秋田県下の湿地帯からのみ知られていた。

膨大な種類の蛾類については、わずかな調査期間なので考察はひかえるが、今後食草との関連や、灯火採集の実施などでより多くの種類や、新発見が得られるものと信じる。

蝶類ではウラキシシジミが、藻散布沼付近にかなり生息していたが、釧路市に至る太平洋岸には生息地が多く知られている。これは本種の食草であるアオダモの自生が多いものとする。釧路湿原とその周辺の丘陵帯ではアオダモの自生は僅少で本種は生息しない。

いっぽう釧路湿原の周辺丘陵はミズナラ帯が多く（近年草地造成で壊滅しつつある）、セフィルス類が多いが、公園内では局地的で個体数もはるかに少ない。それはミズナラの樹林が貧弱なのが原因の一つとも考えられる。

海浜性昆虫としては鞘翅目の中のオオズミズギワゴミムンをあげるが（大黒島）、今後オサムシ科の中から若干の種が追加されよう。

第4節 厚岸道立自然公園の昆虫目録

蜻 蛉 目

Coenagrionidae イトトンボ科

1. *Enallagma boreale circulatum* Selys ルリイトトンボ 厚岸¹⁾ 浜中町若山沼¹⁰⁾ 氷切沼
2. *Coenagrion lanceolatum* (Selys) エゾイトトンボ 厚岸¹⁾ 厚岸町床潭¹¹⁾
3. *Coenagrion ecornutum* Selys キタイトンボ 厚岸¹⁾ 氷切沼(2♂1♀)

Lestidae アオイトトンボ科

4. *Lestes sponsa* (Hansemann) アオイトトンボ 氷切沼(4♂1♀)

Gomphidae サナエトンボ科

5. *Trigomphus melampus* Selys コサナエ 厚岸¹⁾ 若山沼¹⁰⁾

Aeshnidae ヤンマ科

6. *Aeshna juncea* (Linnaeus) ルリボシヤンマ 厚岸¹⁾
7. *Aeshna nigroflava* Martin オオルリボシヤンマ 厚岸¹⁾ 氷切沼(目撃)
8. *Aeshna subarctica* Walker イイジマルリボシヤンマ 氷切沼(2♀)

Corduriidae エゾトンボ科

9. *Corduria aenea amurensis* Selys カラカネトンボ 厚岸¹⁾ 氷切沼(1♂)
10. *Somatochlora japonica* Matsumura コエゾトンボ 厚岸¹⁾
11. *Somatochlora graeseri aureola* Oguma キバネモリトンボ 厚岸¹⁾
12. *Somatochlora viridiaenea viridiaenea* Selys エゾトンボ 厚岸¹⁾
13. *Somatochlora arctica* (Zetterstedt) ホソミモリトンボ 厚岸¹⁾
14. *Epithea bimaculata sibirica* Selys オオトラフトンボ 厚岸 霧多布¹⁾ 若山沼¹⁰⁾

Libellulidae トンボ科

15. *Orthetrum albistylum speciosum* (Uhler) シオカラトンボ 厚岸¹⁾ 愛冠岬⁵⁾
16. *Libellula quabrimaculata asahinai* Schmidt ヨツボシトンボ 厚岸¹⁾ 若山沼¹⁰⁾ 氷切沼(1♂)
17. *Sympetrum striolatum imitoides* Batenef タイリクアカネ 厚岸¹⁾ 霧多布 初無敵⁵⁾
18. *Sympetrum flaveolum flaveolum* (Linnaeus) エゾアカネ 霧多布¹⁾
19. *Sympetrum danae* (Sulzer) ムツアカネ 霧多布¹⁾ 霧多布岬⁵⁾ 氷切沼(1♂1♀)
20. *Sympetrum frequens* Selys アキアカネ 霧多布 藻散布 初無敵⁵⁾
21. *Sympetrum infuscatum* (Selys) ノシメトンボ 氷切沼(目撃)

22. *Sympetrum parvulum* (Batenef) ヒメアカネ 厚岸²⁾
 23. *Leucorrhinia dubia orientalis* Selys カオジロトンボ 氷切沼(3♂)

鱗翅目(蝶類)

Hesperiidae セセリチョウ科

1. *Pyrgus maculatus* Bremer & Grey チャマダラセセリ 厚岸^{7) 13)}
 2. *Erynnis montanus* Bremer ミヤマセセリ 厚岸^{7) 13)}
 3. *Bibasis aquilina chrysaeglia* Butler キバネセセリ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{7) 2)}
 4. *Carterocephalus sylvicola isschikii* Matsumura カラフトタカネキマダラセセリ
 厚岸¹³⁾ 若山沼¹⁰⁾
 5. *Ochlodes venata herculea* Butler コキマダラセセリ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{6) 7) 2)} アヤメガ原(1♂)
 藻散布沼(目撃)
 6. *Polytremis pellucida* Murray オオチャバネセセリ 愛冠岬 床潭沼²⁾ アヤメガ原(2♂2♀)
 7. *Thoressa varia* Murray コチャバネセセリ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{6) 2)}

Pieridae シロチョウ科

8. *Aporia crataegi adherbal* Fruhstorfer エゾシロチョウ 厚岸¹³⁾ 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬(1♂)
 9. *Pieris melete* Ménétriés スジグロシロチョウ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬²⁾
 10. *Pieris napi nesis* Feruhstor エゾスジグロシロチョウ 厚岸¹³⁾ 若山沼¹⁰⁾ 愛冠岬^{5) 6) 2)}
 アヤメガ原⁶⁾ 藻散布(1♂)
 11. *Pieris rapae crucivora* Boisduval モンシロチョウ 火散布⁶⁾ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬²⁾ 大黒島⁶⁾
 12. *Leptidea morsei* Fenton エゾヒメシロチョウ 厚岸¹³⁾ 火散布⁶⁾
 13. *Anthocaris scolymus* Butler ツマキチョウ 若山沼¹⁰⁾
 14. *Colias erate poliographus* Motshulsky モンキチョウ 厚岸¹³⁾ 霧多布 初無敵 浦雲泊⁵⁾
 火散布⁷⁾ 若山沼¹⁰⁾ アヤメガ原(1♀) 藻散布沼(目撃) 氷切沼(1♀)

Papilionidae アゲハチョウ科

15. *Parnassius glacialis* Butler ウスバシロチョウ 厚岸¹³⁾ アヤメガ原¹¹⁾
 16. *Papilio maackii tutanus* Fenton ミヤマカラスアゲハ 厚岸¹³⁾ 火散布⁷⁾ 愛冠岬^{6) 7) 2)}
 17. *Papilio machaon hippocrates* C. & R. Felder キアゲハ 厚岸¹³⁾ 火散布⁷⁾ 愛冠岬^{6) 7) 2)}
 布沼 氷切沼(目撃)
 18. *Papilio bianor dehaanii* C. & R. Felder カラスアゲハ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁷⁾

Lycaenidae シジミチョウ科

19. *Artopetes pryeri* Murray ウラゴマダラシジミ 厚岸¹³⁾
 20. *Ussuriana stygiana* Butler ウラキンシジミ 厚岸¹³⁾ 藻散布沼(3♂1♀)

21. *Japonica lutea* Hewitson アカシジミ 知方学²⁾
22. *Antigius butleri* Fenton ウスイロオナガシジミ 厚岸¹³⁾
23. *Favonius cognatus* Staudinger ジョウザンミドリシジミ 愛冠岬²⁾
24. *Neozephyrus taxila regina* Butler ミドリシジミ 厚岸¹³⁾ 床潭沼²⁾ 氷切沼(2♂1♀)
25. *Chrysozephyrus aurorinus* Oberthür アイノミドリシジミ 厚岸¹³⁾
26. *Rapala arata* Bremer トラフシジミ 愛冠岬⁷⁾
27. *Lycæna phlaeas daimio* Seitz ベニシジミ 厚岸¹³⁾ 霧多布 床潭 筑紫恋⁶⁾ 藻散布沼(1♂)
28. *Everes argiades hellotia* Ménétriés ツバメシジミ 厚岸¹³⁾ 床潭²⁾
29. *Celastrina argiolus ladonides* de l'Orza ルリシジミ 厚岸¹³⁾
30. *Celastrina sugitanii ainonica* Matsumura スギタニルリシジミ 厚岸(前田未発表資料による)
31. *Glaucopsyche lycormas* Butler カバイロシジミ 厚岸¹³⁾
32. *Maculinea teleius matsumurai* Shirôzu ゴマシジミ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ アヤマガ原(4♂) 藻散布沼(1♂) 氷切沼(2♂)

Nymphalidae タテハチョウ科

33. *Brenthis ino mashiensis* Kono コヒョウモン 厚岸¹³⁾ 床潭沼²⁾
34. *Brenthis daphne iwatensis* Okano ヒョウモンチョウ 厚岸¹³⁾ アヤマガ原(1♂1♀)
35. *Argynnis anadyomene midas* Butler クモガタヒョウモン 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2)
36. *Argynnis geisha* Hemming ミドリヒョウモン 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2) アヤマガ原 藻散布沼(2♂)
37. *Damora sagano liane* Fruhstorfer メスグロヒョウモン 厚岸¹³⁾ 床潭沼²⁾
38. *Argyronome laodice japonica* Ménétriés ウラギンスジヒョウモン 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2)
39. *Argyronome rutilana lysippe* Janson オオウラギンスジヒョウモン 厚岸¹³⁾ 床潭 愛冠岬⁷⁾ 2)
40. *Mesoacidalia charlotta basalis* Matsumura ギンボシヒョウモン 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2) アヤマガ原 藻散布沼(目撃)
41. *Fabriciana adippe pallescens* Butler ウラギンヒョウモン 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2) 筑紫恋⁶⁾ 床潭²⁾ アヤマガ原 氷切沼(1♂)
42. *Ladaga camilla japonica* Ménétriés イチモンジチョウ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2) 藻散布沼(目撃)
43. *Paraneptis rivularis aino* Shirôzu フタスジチョウ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁵⁾
44. *Araschnia levana obscura* Fenton アカマダラ 厚岸¹³⁾ 床潭²⁾ 藻散布沼(目撃)
45. *Araschnia burejana strigosa* Butler サカハチチョウ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2)
46. *Aglais urticae comexa* Butler コヒオドシ 厚岸¹³⁾
47. *Inachus io geisha* Stichel クジャクチョウ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬⁶⁾ 2) 氷切沼(1♀)
48. *Vanessa cardui* Linnaeus ヒメアカタテハ 厚岸¹³⁾
49. *Vanessa indica* Herbst アカタテハ 厚岸¹³⁾
50. *Polygonia vav - albm samurai* Fruhstorfer エルタテハ 厚岸¹³⁾
51. *Polygonia c - album hamigera* Butler シータテハ 厚岸¹³⁾

52. *Nymphalis asopos* Fruhstorfer キベリタテハ 厚岸¹³⁾ 床潭沼²⁾
 53. *Apatura ilia substituta* Butler コムラサキ 床潭沼²⁾

Satyridae ジャノメチョウ科

54. *Ypthima arqus* Butler ヒメウラナミジャノメ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{6) 7)} 床潭⁶⁾ 筑紫恋⁶⁾ 来止臥⁶⁾
 55. *Minois dryas bipunctatus* Motschulsky ジャノメチョウ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{6) 2)} アヤメガ原⁶⁾
 56. *Lethe diana* Butler クロヒカゲ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{6) 2)} アヤメガ原¹⁰⁾ 来止臥(1♀)
 57. *Lopinga achine jezoensis* Matsumura ウラジャノメ 厚岸¹³⁾ 愛冠岬^{6) 2)} 来止臥¹³⁾ アヤメガ原⁷⁾
 58. *Coenonympha hero latifasciata* Matsumura シロオビヒメヒカゲ 火散布⁷⁾
 59. *Harima callipteris diluta* Esaki & Nakahara ヒメキマダラヒカゲ 厚岸¹³⁾ 藻散布沼⁷⁾
 60. *Neope goschkevitschii* Ménétriés サトキマダラヒカゲ 愛冠岬⁷⁾
 61. *Neope nipponica* Butler ヤマキマダラヒカゲ 厚岸¹³⁾

Danaiidae マダラチョウ科

62. *Caduga sita nipponica* Moore アサギマダラ 厚岸博物館前¹⁴⁾ (暖地からの飛来種)

鱗翅目(蛾類)

Heplalidae コウモリガ科

1. *Phymatopus hecta japonicus* Inoue キンスジコウモリ 愛冠岬⁶⁾

Incurvariidae マガリガ科

2. *Nemophora* sp. 筑紫恋⁶⁾
 3. *Nemophora staudingerella* (Christoph) ウスベニヒゲナガ 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬⁶⁾

Tineidae ヒロズコガ科

4. *Opogona nipponica* Stringer クロエリメンコガ 愛冠岬⁶⁾

Yponomeutidae スガ科

Plutellinae クチブサガ亜科

5. *Eidophasia albifasciata* Issiki シロオビクロナガ 愛冠岬¹²⁾ 来止臥(1♂)

Yponomeutinae スガ亜科

6. *Yponomeuta polystictus* Butler オオボシオオスガ 来止臥(3♀)
 7. *Xyrosaris lichneuta* Meyrick ホソバコスガ 来止臥(14♂4♀) 幼虫はニシキギを食害。

Glyphipterigidae ホソハマキモドキガ科

8. *Ypsolopha amoenellus* (Christoph) メノコクチブサガ 愛冠岬²⁸⁾
 9. *Ypsolopha parenthesesellus* (Linnaeus) ウスイロクチブサガ 愛冠岬²⁸⁾
 10. *Glyphipterix regula* Diakonoff & Arita アトミスジホソハマキモドキ 来止臥(1♂)
 11. *Glyphipterix basifasciata* Issiki シロオビホソハマキモドキ 来止臥(1♂) 浦雲泊
 泊(2♀)

Oecophoridae マルハキバガ科

12. *Agonopterix japonica* Saito ウスマダラヒラタマルハキバガ 愛冠岬⁶⁾
 13. *Agonopterix yomogiella* Saito ヨモギヒラタマルハキバガ 大黒島⁹⁾

Gelechiidae キバガ科

14. *Polyhymno obliquata* (Matsumura) カギツマシマキバガ 愛冠岬(2♂1♀)

Zygaenidae マダラガ科

15. *Balataea gracilis* (Walker) キスジホソマダラ 愛冠岬⁶⁾ 床潭 筑紫恋⁷⁾

Limacodidae イラガ科

16. *Latoia sinica* (Moore) クロシタアオイラガ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 17. *Heterogenea asella* (Denis & Schiffermüller) カギバイラガ 愛冠岬⁷⁾

Thyridae マドガ科

18. *Pyrinioides aureus* Butler ハスオビマドガ 床潭 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬⁷⁾

Pyalidae メイガ科

Schoenobiinae オオメイガ亜科

19. *Acropentias aurea* (Butler) クロスジキオオメイガ 来止臥(1♀)

Scopariinae ヤマメイガ亜科

20. *Scoparia yamanakai* Inoue ヤマナカヤマメイガ 愛冠岬⁶⁾
 21. *Scoparia spinata* Inoue ノリクラヤマメイガ 来止臥(1♂)
 22. *Scoparia nipponalis* Inoue オオヤマメイガ 来止臥(1♂)

Crambinae ツトガ亜科

23. *Crambus pascuellus* (Linnaeus) ギントガリツトガ 筑紫恋⁶⁾ 浦雲泊(1♂4♀) 愛冠
 岬(1♂3♀)
 24. *Crambus perlillus* (Scopoli) ウスギンツトガ 愛冠岬⁶⁾ 藻散布沼(1♂)
 25. *Crambus humidellus* Zuller ギンスジツトガ 愛冠岬⁶⁾

26. *Crambus silvellus* (Hübner) ヒメギンスジツトガ 氷切沼(1♂4♀)
 27. *Chrysoteuchia distinctella* (Leech) テンスジツトガ 愛冠岬⁶⁾

Nymphulinae ミズメイガ亜科

28. *Nymphula interruptalis* (Pryer) マダラミズメイガ 氷切沼(1♀)
 29. *Nymphula orientalis* Filipjev ウスマダラミズメイガ 氷切沼(2♂)

Pyralinae シマメイガ亜科

30. *Endotricha* sp. 氷切沼(1♀)

Pyraustinae ノメイガ亜科

31. *Evergestis forficalis* (Linnaeus) ナノメイガ 愛冠岬⁶⁾
 32. *Evergestis junctalis junctalis* (Warren) フタモンキノメイガ 愛冠岬⁶⁾ 来止臥(2♂)
 33. *Pleuroptya deficiens* (Moore) シロハラノメイガ 愛冠岬(2♂)
 34. *Palpita nigropunctalis* Bremer マエアカスカシノメイガ 霧多布⁶⁾
 35. *Nomophila noctuella* (Denis & Schiffermüller) ワモンノメイガ 初無敵 浦雲泊⁵⁾
 36. *Algedonia luctualis diversa* (Butler) ヨツメクロノメイガ 愛冠岬⁶⁾ 浦雲泊(1♂)
 37. *Perinephela lancealis pryeri* Munroe & Mutuura キイロノメイガ 愛冠岬⁷⁾
 38. *Paratalanta ussurialis* (Bremer) フチグロノメイガ 愛冠岬⁶⁾⁷⁾ 床潭⁷⁾
 39. *Anania funebris assimilis* Butler シロモンクロノメイガ 愛冠岬⁷⁾ 筑紫恋⁶⁾ 来止臥(1♂)

Phycitinae マダラメイガ亜科

40. *Salebria semirubella* (Scopoli) アカマダラメイガ 愛冠岬⁶⁾ 藻散布沼(1♂)

Tortricidae ハマキガ科

Tortricinae ハマキガ亜科

41. *Archips ingentanus* (Christoph) オオアトキハマキ 来止臥(1♂) 愛冠岬(1♂)
 42. *Pseudargyrotoza conwagana* (Fabricius) ミヤママダラギンスジハマキ 愛冠岬⁷⁾ 文献12
 (p. 111) で用いた本種の学名は誤用であった。
 43. *Cnephasia cinereipalpana* Razowski ホソバハイイロハマキ 大黒島⁹⁾
 44. *Eana argentana* (Clerck) ギンムジハマキ 愛冠岬⁶⁾⁷⁾ 浦雲泊(2♂)
 45. *Acleris delicatana* (Christoph) コトサカハマキ 愛冠岬¹²⁾
 46. *Acleris paradiseana* (Walsingham) ツマモンエグリハマキ 愛冠岬²⁰⁾
 47. *Croesia fuscotogata* (Walsingham) モトキハマキ 愛冠岬⁷⁾ 来止臥(3♂) 浦雲泊(2♂)

Olethreutinae ヒメハマキガ亜科

48. *Hedya vicinana* (Ragonot) シラフオオヒメハマキ 愛冠岬(1♂)

49. *Olethreutes lacunana* Denis & Schiffermüller ミヤマウンモンヒメハマキ
愛冠岬(1♂1♀)
50. *Olethreutes siderana* (Treitschke) ギンボシモトキヒメハマキ 浦雲泊(2♂2♀)
51. *Olethreutes pryerana* (Walsingham) キスジオビヒメハマキ 愛冠岬 来止臥(1♀)
52. *Olethreutes cacuminana* (Kennel) ツヤスジウンモンヒメハマキ 来止臥(1♂)
53. *Enarmonia flammeata* Kuznetsov コナミスジキヒメハマキ 来止臥(25♂) 浦雲泊(1♂) 愛冠岬(2♂)
54. *Enarmonia major* Walsingham ギンボンキヒメハマキ 愛冠岬(1♂)
55. *Hikagehamakia albiguttata* Oku ヒカゲヒメハマキ 愛冠岬(1♂)
56. *Epinotia solandriana* (Linnaeus) セウスモンヒメハマキ 浦雲泊
57. *Epinotia exquisitana* (Christoph) クロマダラシロヒメハマキ 愛冠岬
58. *Zeiraphera argutana* (Christoph) ガレモンヒメハマキ 愛冠岬
59. *Epiblema quinquefasciana* (Matsumura) ギンスジアカチャヒメハマキ 若山沼
60. *Eucosma aspidiscana* (Hübner) ミヤマスソモンヒメハマキ 大黒島
61. *Eucosma ommatoptera* Falkovitsh コスソクロモンヒメハマキ 筑紫恋 愛冠岬
62. *Dichrorampha cancellatana* Kennel ヘリホシヒメハマキ 来止臥(7♂) 浦雲泊(2♂)
愛冠岬(1♂1♀) 藻散布沼(1♀)

Pterophoridae トリバガ科

63. *Platyptilia ainonis* Matsumura アイノトリバ 厚岸¹⁵⁾ 浦雲泊(1♂1♀)
64. *Pselnophorus vilis* (Butler) フキトリバ 愛冠岬(1♂)
65. *Platyptilia sachalinensis* Matsumura カラフトトリバ 氷切沼(1♂)

Drepanidae カギバガ科

66. *Drepana curvatula acuta* Butler オビカギバ 霧多布 厚岸北大実験所⁶⁾²⁰⁾
67. *Sabra harpagula olivacea* (Inoue) ウソビカギバ 厚岸北大実験所

Thyatiridae トガリバガ科

68. *Thyatira batis* (Linnaeus) モントガリバ 厚岸北大実験所²⁰⁾
69. *Tethea ampliata ampliata* (Butler) オオバトガリバ 床潭 筑紫恋⁶⁾²⁰⁾
70. *Parapsestis argenteopicta* Oberthür ギンモントガリバ 厚岸北大実験所²⁰⁾
71. *Mimapsestis basalis* (Wileman) ネグロトガリバ 厚岸北大実験所

Geometridae シャクガ科

Oenochrominae ホンジャク亜科

72. *Inurois fumosa* (Inoue) ウスモンフユジャク 愛冠岬²⁾

Geometrinae アオシヤク亜科

73. *Gelasma fuscofrons* Inoue ズグロツバメアオシヤク 愛冠岬⁶⁾
 74. *Comibaena ingrata* (Wileman) カラフトウスアオシヤク 床潭 筑紫恋⁶⁾
 75. *Culpinia diffusa* (Walker) アカアジアオシヤク 愛冠岬⁶⁾

Sterrhinae ヒメシヤク亜科

76. *Scopula apicipunctata* (Christoph) クロテンシロヒメシヤク 愛冠岬 筑紫恋^{6) 7)}
 77. *Idaea muricata minor* (Sterneck) ベニヒメシヤク 浦雲泊(1♂)
 78. *Idaea foadata* (Butler) クロテントビヒメシヤク 愛冠岬⁶⁾
 79. *Idaea biselata* (Hufnagel) ウスキヒメシヤク 愛冠岬⁶⁾
 80. *Idaea remissa* (Wileman) ホソスジキヒメシヤク 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬(1♀)

Larentiinae ナミシヤク亜科

81. *Trichodezia kindermanni latifasciaria* Matsumura シラフシロオビナミシヤク 床潭
 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬⁷⁾
 82. *Trichodezia exsecuta fatifasciaria* Leech シロオビクロナミシヤク 愛冠岬 筑紫恋^{6) 7)}
 83. *Heterophleps confusa* (Wileman) コウスクモナミシヤク 愛冠岬⁷⁾
 84. *Leptostegna tenerata* Christoph アオナミシヤク 愛冠岬⁷⁾
 85. *Xanthorhoe abraxina pudicata* (Christoph) キアংশロナミシヤク 愛冠岬^{6) 7)} 筑紫恋⁶⁾
 86. *Xanthorhoe birviata angularia* (Leech) ナカシロスジナミシヤク 大黒島⁶⁾
 87. *Glaucorhoe unduliferaria unduliferaria* (Motschulsky) シラナミナミシヤク 愛冠岬⁶⁾
 筑紫恋⁶⁾
 88. *Euphyia unangulata gracilaria* (Bang - Haas) フタテンツマジロナミシヤク 筑紫恋⁶⁾
 89. *Pareulype taczanowskii* (Oberthür) クロアシナミシヤク 愛冠岬⁶⁾
 90. *Epirrhoe supergressa supergressa* (Butler) フタシロスジナミシヤク 愛冠岬⁷⁾
 91. *Eucosmabrazas placida placida* (Butler) ケベリシロナミシヤク 藻散布沼(1♂)
 92. *Eulithis ledereri inurbana* (Prout) ウストビモンナミシヤク 霧多布⁶⁾
 93. *Photoscotosia atrostrigata* (Bremer) ネグロウスベニナミシヤク 愛冠岬²⁸⁾
 94. *Gandaritis fixseni* (Bremer) キマダラオオナミシヤク 霧多布⁶⁾ 愛冠岬⁷⁾
 95. *Gandaritis agnes festinaria* (Christoph) キガシラオオナミシヤク 愛冠岬⁶⁾
 96. *Ecliptopera umbrosaria umbrosaria* Motschulsky オオハガタナミシヤク 厚岸北大実
 験所²⁰⁾
 97. *Ecliptopera pryeri* (Butler) ソトキナミシヤク 大黒島⁶⁾
 98. *Ecliptopera capitata mariesii* (Butler) セキナミシヤク 厚岸北大実験所²⁰⁾
 99. *Lampropteryx otregiata* Metcalfe チビアトロナミシヤク 若山沼¹⁰⁾
 100. *Lampropteryx jameza jameza* (Butler) ナワメナミシヤク 大黒島⁶⁾
 101. *Eustroma melancholicum melancholicum* (Butler) ハガタナミシヤク アヤマガ原⁶⁾

102. *Dysstroma korbi* Heydemann マエキナカジロナミシヤク 厚岸⁹⁾
 103. *Asthena sachalinensis* (Matsumura) カラフトシロナミシヤク 愛冠岬⁶⁾
 104. *Asthena nymphaeata* Staudinger ムスジシロナミシヤク 筑紫恋⁶⁾
 105. *Laciniodes denigratus ussuriensis* Prout セジロナミシヤク 愛冠岬^{6) 7)} 床潭⁶⁾ 筑紫恋⁶⁾
 106. *Perizoma saxum* (Wileman) ヒメカバズジナミシヤク 霧多布⁶⁾ 愛冠岬²⁸⁾
 107. *Perizoma minimata* Staudinger キオビカバズジナミシヤク 愛冠岬⁶⁾

Ennominae エダシヤク科

108. *Abraxas grossulariata conspurata* Butler スグリシロエダシヤク 愛冠岬(1♀)²⁸⁾
 109. *Lomographa simplicior* (Butler) クロズウスキエダシヤク 愛冠岬²⁸⁾
 110. *Lomographa temerata* (Denis & Schiffermüller) パラシロエダシヤク 愛冠岬⁶⁾
 111. *Cabera exanthemata insulata* Inoue ミスジコナフキエダシヤク 筑紫恋⁶⁾
 112. *Semiothisa clathrata kurilata* Bryk ヒメアミエダシヤク 厚岸北大実験所²⁰⁾
 113. *Semiothisa fuscaria* (Leech) シロオビエダシヤク 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬⁶⁾
 114. *Arichanna melanaria fraterna* (Butler) キンタエダシヤク 水切沼(6♂14♀)
 115. *Alcis jubata melanonota* Prout コケエダシヤク 愛冠岬⁶⁾
 116. *Ramobia basifuscaria* (Leech) ネグロエダシヤク 愛冠岬²⁸⁾
 117. *Deileptenia ribeata* (Clerck) マツオオエダシヤク 愛冠岬⁶⁾
 118. *Phthonosema invenustaria* (Leech) トビネオオエダシヤク 厚岸北大実験所²⁰⁾
 119. *Microcalicha sordida* (Butler) シタクモエダシヤク 愛冠岬⁶⁾
 120. *Ectropis excellens* (Butler) オオトビスジエダシヤク 大黒島⁶⁾
 121. *Aethalura ignobilis* (Butler) ハンノトビスジエダシヤク 若山沼¹⁰⁾
 122. *Scionomia parasinuosa* Inoue コツマキウスグロエダシヤク 愛冠岬⁶⁾
 123. *Biston betularia parvus* Leech オオシモフリエダシヤク 厚岸北大実験所²⁰⁾
 124. *Angerona prunaria turbata* Prout スモモエダシヤク 愛冠岬⁶⁾ 筑紫恋²⁸⁾
 125. *Ennomos autumnaria intermedia* Inoue キリバエダシヤク 愛冠岬²⁸⁾
 126. *Garaeus mirandes mirandes* Bang - Haas ナシモンエダシヤク 愛冠岬(1♀)²⁸⁾
 127. *Garaeus spechlaris mactans* (Butler) キバラエダシヤク 愛冠岬²⁸⁾
 128. *Seleniopsis evanescens* (Butler) フタテンエダシヤク 霧多布⁶⁾
 129. *Cepphis advenaria* (Hübner) アトボシエダシヤク 火散布⁷⁾
 130. *Petrophora chlorosata* (Scopoli) シダエダシヤク 火散布⁷⁾ 大黒島⁶⁾ 若山沼¹⁰⁾
 131. *Spilopera debilis* (Butler) ツマトビシロエダシヤク 来止臥(1♂)
 132. *Ourapteryx maculicaudaria* (Motschlsky) シロツバメエダシヤク 愛冠岬⁷⁾

Epiplemidae フタオガ科

133. *Epiplema styx* (Butler) クロフタオ 愛冠岬⁶⁾ 筑紫恋⁶⁾

Saturnidae ヤママユガ科

134. *Actias artemis artemis* (Bremr & Grey) オオミズアオ 床潭 筑紫恋⁶⁾
 135. *Caligula jonasii* Butler ヒメヤマユ 厚岸⁶⁾

Notodontidae シャチホコガ科

136. *Furcula lanigera* (Butler) ナカグロモクメシヤチホコ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 137. *Notodonta stigmatica* Matsumura トビスジシヤチホコ 霧多布⁶⁾
 138. *Microphalera grisea* Butler ハイイロシヤチホコ 霧多布⁶⁾
 139. *Hagapteryx admirabilis* (Staudinger) ハガタエグリシヤチホコ 愛冠岬⁶⁾
 140. *Fusapteryx ladislai* (Oberthür) シロスジエグリシヤチホコ 霧多布⁶⁾
 141. *Spatalia doerriesi* Graeser ウスイロギンモンシヤチホコ 厚岸北大実験所²⁰⁾

Lymantriidae ドクガ科

142. *Orgyia thyellina* Butler ヒメシロモンドクガ 愛冠岬²⁶⁾
 143. *Calliteara pudibunda pseudabietis* Butler リンゴドクガ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 144. *Calliteara lunulata* (Butler) アカヒゲドクガ 厚岸北大実験所²⁰⁾

Arctiidae ヒトリガ科

145. *Eilema okanoi* Inoue ミヤマキベリホソバ 厚岸北大実験所 愛冠岬 (1♂1♀)²⁰⁾
 146. *Eilema cribrata* (Staudinger) ヒメキホソバ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 147. *Agylla gigantea gigantea* (Oberthür) キベリネズミホソバ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 148. *Melanaema venata venata* Butler オオベニヘリコケガ 愛冠岬⁶⁾
 149. *Miltochrista miniata rosaria* Butler ベニヘリコケガ 愛冠岬⁶⁾
 150. *Phragmatobia amurensis amurensis* Seitz アマヒトリ 霧多布²⁾
 151. *Spilosoma lutum japonicum* (Rothschild) キバネモンヒトリ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 152. *Spilosoma seiato-punctata seriato-punctata* Motschulsky スジモンヒトリ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 153. *Spilosoma punctaria* (Stoll) アカハラゴマダラヒトリ 厚岸北大実験所²⁰⁾ 若山沼¹⁰⁾
 154. *Rhyparioides nebulosus* Butler ベニシタヒトリ 愛冠岬 (1♂)
 155. *Parasemia plantaginis jezoensis* Inoue ヒメキンタヒトリ 床潭 筑紫恋⁶⁾

Ctenuchidae カノコガ科

156. *Amata fortunei fortunei* (Orza) カノコガ 氷切沼 (2♀)

Noctuidae ヤガ科

Pantheinae ウスベリケンモン亜科

157. *Panthea coenobita* (Esper) カラフトゴマケンモン 厚岸北大実験所²⁰⁾

Acronictinae ケンモンヤガ亜科

158. *Moma alpium* (Osbeck) ゴマケンモン 厚岸北大実験所²⁰⁾

Heliothinae タバコガ亜科

159. *Pyrria umbra* (Hufnagel) キタバコガ 厚岸北大実験所²⁰⁾

Noctuinae モンヤガ亜科

160. *Euxoa islandica* (Staudinger) クモマウスグロヤガ 厚岸¹⁸⁾
 161. *Agrotis exclamationis* (Linnaeus) センモンヤガ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 162. *Agrotis segetum* (Denis & Schiffermüller) カブラヤガ 霧多布岬⁵⁾
 163. *Spaelotis suecica* (Aurivillius) キタウスイロヤガ 厚岸北大実験所²⁰⁾ 厚岸¹⁰⁾
 164. *Diarsia canescens* (Butler) オオバコヤガ 霧多布⁶⁾ 厚岸⁵⁾ 大黒島⁶⁾
 165. *Xestis ditrapezium orientalis* (Strand) タンボヤガ 筑紫恋⁶⁾
 166. *Xestis c-nigrum* (Linnaeus) シロモンヤガ 厚岸⁵⁾ 霧多布⁶⁾
 167. *Xestis efforescens* (Butler) キンタミドリヤガ 愛冠岬²⁰⁾

Hadeninae ヨトウガ亜科

168. *Mythimna turca* (Linnaeus) フタオビキヨトウ 愛冠岬⁶⁾
 169. *Mythimna grandis* Butler オオフタオビキヨトウ 床潭 筑紫恋 愛冠岬⁶⁾
 170. *Mythimna divergens* Butler ナガフタオビキヨトウ 厚岸北大実験所²⁰⁾ 愛冠岬⁶⁾
 171. *Leucania insecuta* Walker ノヒラキヨトウ 若山沼¹⁰⁾ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 172. *Senta flammea* (Curtis) ナカスジキヨトウ 若山沼¹⁰⁾

Cuculliinae セダカモクメ亜科

173. *Dasyampa castaneofasciata* (Motschulsky) ゴマダラキリガ 厚岸⁵⁾
 174. *Blepharita bathensis* (Lutzaeu) ミヤマハガタヨトウ 大黒島⁶⁾

Amphipyriinae カラスヨトウ亜科

175. *Apamea lateritia* (Hufnagel) オオアカヨトウ 床潭 筑紫恋⁶⁾
 176. *Atrachea nitens* (Butler) ギンギンヨトウ 愛冠岬⁶⁾
 177. *Hydraecia amurensis* Staudinger フキヨトウ 愛冠岬²⁰⁾
 178. *Triphaenopsis jezoensis* Sugi エゾキンタヨトウ 愛冠岬²⁰⁾
 179. *Euplexia aureopuncta* Hampson モンキアカガネヨトウ 愛冠岬⁶⁾
 180. *Phlogophora beatrix* Oberthür キグチヨトウ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 181. *Athetis albisignata* (Oberthür) シロテンウスグロヨトウ 愛冠岬⁶⁾
 182. *Cosmia restituta picta* Staudinger シラホンキリガ 愛冠岬⁷⁾
 183. *Chytonix albonotata* (Staudinger) ネグロヨトウ 愛冠岬⁶⁾

Chloephorinae リンガ亜科

184. *Kerala decipiens* (Butler) ハネモンリンガ 愛冠岬⁶⁾ 厚岸北大実験所²⁰⁾

Acontiinae コヤガ亜科

185. *Holocryptis nymphula* Rebel ペニエグリコヤガ 愛冠岬 (1♀)
 186. *Deltote bankiana amurula* (Staudinger) フタスジコヤガ 床潭 筑紫恋⁶⁾
 187. *Lithacodia pygarga* (Hufnagel) シロフコヤガ 愛冠岬⁶⁾
 188. *Lithacodia falsa* (Butler) スジシロコヤガ 筑紫恋 愛冠岬⁶⁾

Plusiinae キンウワバ亜科

189. *Abrostola major* Dufay オオマダラウワバ 厚岸北大実験所²⁰⁾
 190. *Autographa gamma* (Linnaeus) ガマキンウワバ 厚岸 浦雲泊⁶⁾ 愛冠岬²⁰⁾

Ophiderinae クチバ亜科

191. *Rivula sericealis* (Scopoli) テンクロアツバ 愛冠岬⁶⁾ 氷切沼 (1♀)

Hypeninae アツバ亜科

192. *Hypena tatorhina* Butler ヒトスジアツバ 床潭 筑紫恋⁶⁾ 愛冠岬 (1♀)
 193. *Hypena proboscidalis* (Linnaeus) フタオビアツバ 愛冠岬^{6), 7)}

Herminiinae クルマアツバ亜科

194. *Paracolax albinotata* (Butler) シロモンアツバ⁷⁾ 火散布 愛冠岬 (1♀)
 195. *Paracolax fascilis* (Leech) オビアツバ 愛冠岬⁷⁾
 196. *Bertula bistrigata* (Staudinger) フタスジアツバ 愛冠岬⁶⁾
 197. *Polypogon gryphalis* (Herrich - Schäffer) ナガキバアツバ 筑紫恋⁶⁾
 198. *Zanclognatha fumosa* (Butler) ウスグロアツバ 愛冠岬^{6), 7)} 床潭 筑紫恋⁶⁾
 199. *Zanclognatha helva* (Butler) キイロアツバ 床潭 筑紫恋⁶⁾
 200. *Zanclognatha southi* Owada コウスグロアツバ 愛冠岬 (1♀)
 201. *Herminia dolosa* Butler フシキアツバ 愛冠岬⁶⁾

鞘 翅 目

Cicindelidae ハンミョウ科

1. *Cicindela japana yezoana* Nakane ニワハンミョウ 火散布⁷⁾

Carabidae オサムシ科

Carabinae オサムシ亜科

2. *Cychrus morawitzi* Géhin セダカオサムシ 浦雲泊¹²⁾
3. *Carabus conciliator hokkaidensis* Lapouge コブスジアカガネオサムシ 若山沼¹⁰⁾ 床潭⁹⁾
4. *Carabus granulatus yezoensis* Bates エゾアカガネオサムシ 若山沼¹⁰⁾ 大黒島⁹⁾ 愛冠岬⁶⁾
浦雲泊¹²⁾ 散布
5. *Leptocarabus opaculus opaculus* (Putzeys) ヒメクロオサムシ 大黒島⁹⁾
¹²⁾
6. *Leptocarabus arboreus arboreus* (Lewis) エゾクロナガオサムシ 散布¹²⁾
7. *Damaster gehini konsenensis* Ishikawa コンセンオオルリオサムシ 浦雲泊¹²⁾
8. *Procrustes kolbei aino* (Rost) アイスキンオサムシ アヤマガ原⁵⁾ 散布¹²⁾
9. *Damaster blaptoides rugipennis* Motschulsky エゾマイマイカブリ 散布¹²⁾

Nebriinae マルクビゴミムシ亜科

10. *Notiophilus impressifrons* Morawitz ミヤマメダカゴムシ 大黒島⁹⁾⁹⁾
11. *Leistus niger alecto* Bates キノカワゴミムシ 散布¹²⁾

Scaritinae ヒョウタンゴミムシ亜科

12. *Clivina fossor sachalinica* Nakane カラフトヒメヒョウタンゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 厚岸林務署⁶⁾
13. *Dyschirius glypturus* Bates アシグロチビヒョウタンゴミムシ 若山沼¹⁰⁾

Bembidiini ミズギワゴミムシ亜科

14. *Bembidion fasciatum* (Motschulsky) ヒメマダラミズギワゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 厚岸林務署⁶⁾
15. *Bembidion paediscum* Bates ヨツボシケンミズギワゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 大黒島⁹⁾
16. *Bembidion dolorosum* (Motschulsky) チシマミズギワゴミムシ 大黒島⁹⁾
17. *Bembidion octomaculatum* (Goeze) ヒメマダラケンミズギワゴミムシ 床潭⁹⁾
18. *Bembidion morawitzi* Ciki ヨツボシミズギワゴミムシ 若山沼¹⁰⁾
19. *Bembidion poppii captivorum* Netolitzky カギモンミズギワゴミムシ 厚岸⁵⁾ 大黒島⁶⁾⁹⁾
20. *Bembidion scopulinum* (Kirby) キモンナガミズギワゴミムシ 大黒島¹²⁾ 藻散布⁵⁾
21. *Bembidion tetraporum* Bates ヨツアナミズギワゴミムシ 大黒島⁹⁾
22. *Bembidion quadriimpressum* (Motschulsky) オオズミズギワゴミムシ 大黒島⁹⁾
23. *Bembidion fasciatum* (Motschulsky) ヒメマダラミズギワゴミムシ 若山沼¹⁰⁾
24. *Asaphidion semilucidum* Motschulsky メダカチビカワゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 大黒島⁹⁾

Pterostichinae ナガゴミムシ亜科

25. *Pterostichus neglectus* Morawitz ツヤムネナガゴミムシ 床潭⁹⁾
26. *Pterostichus adstrictus* Eschscholtz エゾマルガタナガゴミムシ 愛冠岬⁷⁾ 大黒島⁹⁾ 若山沼¹⁰⁾
27. *Pterostichus rotundangulus* Morawitz ヒメホソナガゴミムシ 若山沼¹⁰⁾
28. *Pterostichus orientalis jessoensis* Tschitschérine アトマルナガゴミムシ 厚岸⁵⁾ 初無敵⁹⁾ 大黒島

29. *Pterostichus haptodcroides japonensis* Lutshnik トックリナガゴミムシ 床潭⁹⁾
 30. *Platynus impressum* (Panzer) セボシヒラタゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 藻散布 初無敵⁵⁾ 厚岸林務署⁶⁾
 31. *Platynus thoreyi nipponicum* Habu アシミゾヒメヒラタゴミムシ 大黒島¹²⁾
 32. *Platynus ezoanum* (Nakane) エゾヒメヒラタゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 大黒島^{6) 9)}

Zabrinae マルガタゴミムシ亜科

33. *Amara chalcites* Dejean マルガタゴミムシ 若山沼¹⁰⁾ 大黒島⁶⁾
 34. *Amara communis* (Panzer) ムネナガマルガタゴミムシ 厚岸林務署⁶⁾ 大黒島^{6) 9)}

Harpalinae ゴモクムシ亜科

35. *Anisodactylus signatus* (Panzer) ゴミムシ 厚岸林務署⁶⁾
 36. *Trichotichnus longitarsis* Morawitz クビアカツヤゴモクムシ 愛冠岬⁷⁾
 37. *Harpalus propinquus* Morawitz ムネアカマメゴモクムシ 若山沼¹⁰⁾ 厚岸林務署⁶⁾
 38. *Chlaenius pallipes* Gebler アオゴミムシ 初無敵⁵⁾ 床潭⁶⁾

Dytiseidae ゲンゴロウ科

39. *Rhantus erraticus* Sharp オオヒメゲンゴロウ 大黒島⁶⁾

Histeridae エンマムシ科

40. *Margarinotus nipponicus* (Lewis) コエンマムシ 若山沼¹⁰⁾

Catopidae チビンデムシ科

41. *Sciodrepoides fumatus* (Spence) カバイロコチビンデムシ 大黒島^{6) 9)}

Silphidae シデムシ科

42. *Phosphuga atrata* (Linnaeus) クロヒラタシデムシ 若山沼¹⁰⁾ 愛冠岬⁶⁾
 43. *Silpha perforata venatoria* Harold ヒラタシデムシ 若山沼¹⁰⁾ 床潭⁶⁾

Staphylinidae ハネカクシ科

44. *Anotylus cognatus* Sharp セスジハネカクシ 大黒島⁶⁾
 45. *Paederus parallelus* Weise エゾアリガタハネカクシ 厚岸 霧多布⁵⁾
 46. *Paederus fuscipes* (Curtis) アオバアリガタハネカクシ 大黒島⁶⁾ 若山沼¹⁰⁾
 47. *Phionthus japonicus* Sharp クロコガシラハネカクシ 大黒島^{6) 9)} 愛冠岬⁶⁾
 48. *Ocypus rambouseki nigroaeneus* Sharp クロハネカクシ 藻散布⁵⁾
 49. *Tochinus impunctatus* Sharp ムネアカマルクビハネカクシ 大黒島⁶⁾

Scarabaeidae コガネムシ科

50. *Geotrupes laevistriatus* Motschulsky センチコガネ 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾ 床潭⁹⁾
 51. *Aphodius rectus* (Motschulsky) マグソコガネ 大黒島⁶⁾
 52. *Ectinoboplia rufipes* (Motschulsky) カバイロアシナガコガネ 床潭 筑紫⁶⁾ 恋⁶⁾
 53. *Anomala lucens* Ballion ツヤコガネ 床潭 筑紫⁶⁾
 54. *Phyllopertha intemixta* Arrow アオウスチャコガネ 大黒島⁶⁾ 愛冠岬⁶⁾ (1♀)

Elateridae コメツキムシ科

55. *Ampedus orientalis* (Lewis) アカコメツキ アヤメガ原⁶⁾ 大黒島⁹⁾
 56. *Ectinus dahuricus persimilis* (Lewis) オオカバイロコメツキ アヤメガ原⁶⁾ 大黒島⁹⁾
 57. *Ectinus sericeus* Candéze カバイロコメツキ 火散布⁷⁾ 愛冠岬⁶⁾
 58. *Silesis musculus* Candéze クチプトコメツキ 床潭 筑紫⁶⁾ 恋⁶⁾
 59. *Athous inoratus* (Lewis) キバネツヤハダコメツキ 愛冠岬⁷⁾
 60. *Dalopius* sp. 愛冠岬 (1 ex)

Lampyridae ホタル科

61. *Lucidina biplagiata* (Motschulsky) オバボタル 床潭 筑紫⁶⁾ 恋⁶⁾ 愛冠岬⁷⁾ 浦雲泊 (1 ex)

Cantharidae ジョウカイボン科

62. *Athemus suturellus* (Motschulsky) ジョウカイボン 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾ 愛冠岬⁶⁾ 床潭⁹⁾
 63. *Themus cyanipennis* Motschulsky アオジョウカイ 愛冠岬⁷⁾ 来止臥 (1 ex)⁶⁾
 64. *Podabrus macilentus* Kiesenwetter ヒメクビボソジョウカイ 床潭 筑紫⁶⁾ 恋⁶⁾
 65. *Wittmercantharis vulcana* (Lewis) ホツカイジョウカイ 火散布⁷⁾
 66. *Cantharis baikalica* Pic 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾
 67. *Cantharis japonica* Kono 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾
 68. *Rhagonicha latiuscula* (Sahlberg) クロヒメジョウカイ 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾ 愛冠岬⁶⁾ 大黒島⁶⁾ 恋⁶⁾

Nitidulidae ケシキスイ科

69. *Carpophilus chalybeus* Murray クロハナケシキスイ 火散布⁷⁾
 70. *Epuraea bergeri* Sjöberg カクアシヒラタケシキスイ 大黒島⁶⁾ 恋⁶⁾
 71. *Omosita colon* (Linnaeus) キボシヒラタケシキスイ 大黒島⁶⁾

Coccinellidae テントウムシ科

72. *Epilachna vigintiottomaculata* Motschulsky オオニジュウヤホシテントウ 愛冠岬⁷⁾
 73. *Coccinella septempunctata* Linnaeus ナナホシテントウ 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾ 愛冠岬⁶⁾ 大黒島⁶⁾
 74. *Anisosticta kobensis* Lewis ジュウクロホシテントウ 若山¹⁰⁾ 沼⁹⁾

75. *Propylaea quatuordecimpunctata* (Linnaeus) コカメノコテントウ 大黒島⁶⁾

Cephaloidea クビナガムシ科

76. *Scotodes niponicus* Lewis クビカクシナガクチキムシ 火散布⁷⁾ 若山沼¹⁰⁾

Oedemeridae カミキリモドキ科

77. *Oedemeronia lucidicollis* (Motschulsky) モモフトカミキリモドキ 大黒島⁶⁾

Cerambycidae カミキリムシ科

78. *Leptura ochraceofasciata ochraceofasciata* (Motschulsky) ヨツスジハナカミキリ
アヤマガ原(1♂ 1♀)

79. *Anoploderomorpha cyanea* (Gebler) ルリハナカミキリ 愛冠岬⁷⁾

80. *Phymatodes maaki* Kraatz アカネカミキリ 若山沼¹⁰⁾

81. *Agapanthia daurica* Ganglbauer ケマダラカミキリ 若山沼¹⁰⁾

82. *Pogonocherus seminiveus* Bates ネジロカミキリ 火散布⁷⁾

Chrysomellidae ハムシ科

83. *Pachybrachys eruditus* Baly ハギツツハムシ 愛冠岬⁷⁾

84. *Basilepta balyi* (Harold) チャイロサルハムシ 床潭 筑紫恋⁶⁾ 大黒島⁶⁾

85. *Chrysolina brunneipennis lamii* Takizawa オドリコソウハムシ 若山沼¹⁰⁾

86. *Syneta adamsi* Baly カバノキハムシ 若山沼¹⁰⁾

87. *Atrachya menetriesi* (Faldermann) ウリハムシモドキ 愛冠岬⁷⁾

88. *phlloreta striolata* (Fabricius) キスジノミハムシ 大黒島⁶⁾

89. *Argopus punctipennis* (Motschulsky) アカイロマルノミハムシ 若山沼¹⁰⁾ 大黒島⁶⁾ 浦雲
泊(1 ex)

Anthribidae ヒゲナガゾウムシ科

90. *Bruchidius* sp. 床潭 筑紫恋⁶⁾

Attelabidae オトシブミ科

91. *Apoderus geminus* Sharp セアカヒメオトシブミ 浦雲泊(1 ex)

Curculionidae ゾウムシ科

92. *Phyllobius longicornis* Roelofs リンゴヒゲナガゾウムシ 愛冠岬⁷⁾

93. *Phyllobius picipes* Motschulsky コブヒケボソゾウムシ 愛冠岬⁷⁾

94. *Catopionus viridimetallicus* (Motschulsky) ハナウドゾウムシ 火散布⁷⁾ 若山沼¹⁰⁾ 霧多
布岬¹⁰⁾ 大黒島⁷⁾ 来止臥(1 ex)

95. *Blosyrus japonica* Sharp マルカクチゾウムシ 大黒島⁶⁾
 96. *Larinus meleagris* Petri オオゴボウゾウムシ 大黒島⁶⁾
 97. *Hylobitelus gebleri* (Boheman) クロアナアキゾウムシ 大黒島⁶⁾ 愛冠岬⁷⁾
 98. *Catapionus* sp. 大黒島⁹⁾ (チシマアザミを食べる)

直 翅 目

Nemobiidae マダラスズ科

1. *Pteronemobius nigrofasciatus* (Matsumura) マダラスズ アヤマガ原⁸⁾

Tettigoniidae キリギリス科

2. *Gampsocleis ussuriensis* Adelung ハネナガキリギリス 氷切沼(1♀)

Locustidae バッタ科

3. *Chorthippus kurilensis* Bienko チシマヒナバッタ 愛冠岬⁷⁾ 初無敵⁷⁾ 浦雲泊⁹⁾
 4. *Parapodisma mikado* Bolivar ミカドフキバッタ 初無敵⁷⁾ 浦雲泊⁹⁾

革 翅 目

Psalididae ハサミムシ科

1. *Anisolabis maritima* Borelli ハサミムシ 愛冠岬⁷⁾
 2. *Anechura japonica* de Bomans コブハサミムシ 大黒島⁹⁾

半 翅 目

Pentatomidae カメムシ科

1. *Carbula humerigera* Uhler トゲカメムシ 筑紫恋⁸⁾
 2. *Dolycoris baccatum* Linnaeus ブチヒゲカメムシ 若山沼¹⁰⁾

Acanthosomatidae ツノカメムシ科

3. *Elasmucha dorsalis* Jakovlev アカヒメツノカメムシ アヤマガ原 愛冠岬⁸⁾
 床潭⁹⁾
 4. *Elasmotethus humeralis* Jakovlev ベニモンツノカメムシ 床潭⁹⁾ 筑紫恋⁸⁾ 愛冠岬⁷⁾ 大黒島⁹⁾
 5. *Acanthosoma spinicole* Jakovlev ミヤマツノカメムシ 大黒島⁹⁾

Membracidae ツノゼミ科

6. *Machaerotypus sibiricus* Lethierry トビイロツノゼミ 大黒島⁶⁾

Delphacidae ウンカ科

7. *Delphacodes albifascia* Matsumura シロオビウンカ 厚岸¹⁷⁾

Cicadidae セミ科

8. *Tibicen bihamatus* Motschulsky コエゾゼミ アヤマガ原(目撃)
9. *Melampsalta yezoensis* Matsumura エゾチッチゼミ アヤマガ原(目撃)

双 翅 目

Culicidae カ科

1. *Aedes dorsalis* Meigen セスジヤブカ 厚岸¹⁰⁾

Tipulidae ガガンボ科

2. *Tipula caquillei* Enderlein マダラガガンボ 大黒島⁹⁾

Syrphidae ハナアブ科

3. *Volucella jeddona* Bigot ベッコウハナアブ 愛冠岬⁷⁾
4. *Eristalis cerealis* Fabricius シマハナアブ 愛冠岬⁷⁾
5. *Eristalomyia tenax* Linnaeus ハナアブ 初無敵⁵⁾
6. *Lucozona lucorum* Linnaeus ツマグロハナアブ 愛冠岬⁷⁾

膜 翅 目

Tenthrednidae ハバチ科

1. *Tenthredo fulva adusta* Motschulsky ウスツマグロハバチ 愛冠岬⁷⁾

Vespidae スズメバチ科

2. *Vespa crabro flavofasciata* Cameron モンスズメバチ 愛冠岬⁷⁾
3. *Vespula rufa schrencki* Radoszkowski ツヤクロスズメバチ 若山沼¹⁰⁾

Sphecidae ジガバチ科

4. *Ammophila sabulosa infesta* Smith ジガバチ 愛冠岬⁷⁾
5. *Ectemnius planifrons* Thomson ヤマギンクチバ 愛冠岬⁷⁾

Apidae ミツバチ科

6. *Bombus diversus geminus* Smith トラマルハナバチ 若山沼¹⁰⁾ 床潭 愛冠岬⁶⁾ 大黒島⁶⁾ 厚岸²⁸⁾ 浦雲泊(1♀)

7. *Bombus hypocrita sapporensis* Cockerell オオマルハナバチ 若山沼¹⁰⁾ アヤメガ原 筑紫恋 愛冠岬⁶⁾
8. *Bombus yezoensis* Matsumura エゾマルナガハナバチ 大黒島⁹⁾ 厚岸²⁸⁾
9. *Bombus pseudobaicalensis* Vogt ニセハイイロマルハナバチ 若山沼¹⁰⁾ 厚岸²⁸⁾ 若山沼から記録された(文献10) *B. senilis* ハイイロマルハナバチは誤りなので上記の種に改める。
10. *Bombus hypnorum* Linnaeus アカマルハナバチ 厚岸²⁸⁾
11. *Bombus schrencki albidopleuralis* Skorikov シュレンクマルハナバチ 厚岸²⁸⁾
12. *Bombus ardens sakagami* (Tkalcu) エゾコマルハナバチ 厚岸²⁸⁾
13. *Bombus beaticola moshkarareppus* Sakagami & Ishikawa アイヌヒメマルハナバチ 厚岸²⁸⁾
14. *Eucere spurcatipes* Pérez シロスジヒゲナガハナバチ 愛冠岬⁷⁾
15. 洋ミツバチ 愛冠岬(3♀)

粘管目については文献 23. 24. 25 に、すぐれた報告があるので参照願いたい。

産地の肩に付したNoは記録された文献を表す。

Noの無い産地は1985年の調査によるものである。

引 用 文 献

- 1) 朝比奈正二郎(1938)北海道の蜻蛉. *Entomologica* Vol. 11, No. 2
- 2) 飯島一雄(1959)北海道釧路の蜻蛉目, 追記. *Tombo* 11, (3/4), 31-32
- 3) 飯島一雄(1966)稀少種の宝庫道東部のトンボについて. 釧路市立郷土博物館々報, No. 177, 43-46
- 4) 飯島一雄(1972-1973)釧路湿原とその周辺地の昆虫相, (I)-(III). 同上, No. 215, 15-19; No. 223, 108-116
- 5) 飯島一雄(1978)道東海岸線調査中間報告(昆虫). 同上, No. 250, 92-94
- 6) 飯島一雄(1979)道東海岸線総合調査日誌-昆虫1978年度-. 同上, No. 257, 30-36
- 7) 飯島一雄(1980)道東海岸線総合調査日誌-昆虫1979年度-. 同上, No. 264, 119-122
- 8) 飯島一雄(1980a)本邦から再発見されたナワメナミシヤク. 蛾類通信, No. 108, 127
- 9) 飯島一雄・須摩靖彦・大西 純(1981)大黒島の昆虫. 11-14及び床潭沼周辺部の昆虫採集目録. 53, 岡崎ほか:大黒島及びその周辺の科学調査報告書
- 10) 飯島一雄(1982)浜中町若山沼とその周辺の昆虫類. 17-20, 岡崎ほか:霧多布湿原及びその周辺地の科学調査報告書
- 11) 飯島一雄(1983)道東海岸線総合調査日誌-1981年度-. 釧路市立郷土博物館々報, No. 281, 33-34
- 12) 飯島一雄(1984)IV.道東海岸線の昆虫. 87-126, 岡崎ほか:道東海岸線総合調査報告書
- 13) 前田惣一(1956)厚岸の蝶. 釧路博物館新聞, No. 59, 87-88

- 14) 片岡新助(1960)あさぎまだら. 釧路市立郷土博物館々報, No.102, 11
- 15) 岡野磨蹠郎・山根正気(1969)厚岸町からチャモントリバ記録. 東北昆虫研究, Vol. 4, No.1
- 16) 高橋 弘(1955)北海道の虻, 蚊, 糠蚊など, 新昆虫, Vol. 8, No. 5, 37-40
- 17) 木村津登志(1955)シロオビウシカ北海道に産す. 新昆虫, Vol. 8, No.5, 50
- 18) 杉 繁郎・神保一義(1978)本州の高山帯に分布するクモウスグロヤガについて. 蛾類通信,
No.96, 611-616
- 19) 杉 繁郎(1965)キタウスグロヤガ(新称)の発見. あきつ, Vol. xii, 3/4, 25-26
- 20) 山根正気(1969)厚岸で採れた若干の蛾類について, Coenonympha, No.24, 490-491
- 21) 矢崎康幸(1980)厚岸町8月下旬の蝶. エゾエンシズ, 第7号, 103-106
- 22) 鈴木一生(1965)北海道釧路地方のミドリシジミ類(I)-(Ⅷ). 東北昆虫研究, Vol.1, No.4:Vol.
2, No.2
- 23) 須摩靖彦(1981)大黒島及びその周辺のトビムシ相. 15-21, 岡崎ほか:大黒島及びその周辺の
科学調査報告書
- 24) 須摩靖彦(1982)霧多布湿原及びその周辺のトビムシ相, 21-24, 岡崎ほか:霧多布及びその周
辺の科学調査報告書
- 25) 須摩靖彦(1984)V. 道東海岸線のトビムシ相. 127-147, 岡崎ほか:道東海岸線総合調査報告
書
- 26) Sakagami, S. & R. Ishikawa(1972) Note Supplémentaire sur `la Taxonomie
et Répartition Géographique de Quelques Bourdons
Japonais, avec la Description d'une Nouvelle Sous-
espece. National science Museum. Vol. 15, No. 4, 152-196
- 27) 釧路市立郷土博物館(1982)釧路市立郷土博物館収蔵資料目録(Ⅱ), 昆虫目録(2)
- 28) 亀田 満(1985)北海道釧路管内9月の蛾類採集記録. Sylvicola, Vol. 3, 15-21

V 自然環境保全上の所見

第1章 地形・地質

岡崎由夫

1. 地形・地質上の貴重な現象と地域

厚岸道立自然公園地域内には、既に述べたような、特異で貴重な地学現象がみられる。この自然環境を長く保全していくことは申すまでもないが、他方その適切な利用・開発などの運用についても、計画的に進める必要がある。

本公園地域で地形及び地質上、特に貴重と思われるのは、次のようなものである。

(1) 砂岩脈

厚岸湾の西海岸の砂岩脈は脈幅が小さいが、砂岩脈そのものと砂岩脈がまとまって分布することは、北海道でも例がほとんどなく、珍しい存在である。また、その分布が釧路炭田の東域に限定され、その生成機構が地質構造との関連で注目されるものである。

(2) スランプ構造

厚さ10数m以上の大規模なスランプ構造（層間褶曲）は道内でも例がない上、本地域のように市街地で観察できるものはまったくない。7千万年前の海底の地すべりを示す教科書的な例である。

(3) 尻羽岬と天寧層の貝化石、珪化木

厚岸湾口に突き出す尻羽岬は、本自然公園でも第一の景勝地である。湾口の大黒島、小島や広く展開する湾や平坦台地と海岸が望まれる。

地質的には炭田東端部にあって、造崖層の礫岩主体の地層（天寧層）が露出し、120mの高い断崖をつくる。この同地層には貝化石と珪化木（木石）を多産する。本公園地域では、貝化石、珪化木の唯一の産出地であり、また観察地としても好適地である。

貝化石は、海水・汽水から淡水に生息する貝をそろえて多産することは、釧路炭田で唯一の地であり、また炭田形成史の上で注目される。自然学習の場としても優れている。

なお、天寧層には公園地域の西端で、学術上貴重な陸生の哺乳類クシロムカンバク化石を産している。

(4) 霧多布の泥炭地と海岸地形

霧多布泥炭地はミズゴケの高層湿原が主体で、一部は天然記念物に指定されているが、釧路湿原のヨシ・スゲ主体の低層湿原と異なる。両者地の比較研究にとって重要であり、またその生成過程を研究する上で、貴重な存在である。

本泥炭地は、その表面地形が南半部と北半部で大きく異なるような特色は、道内の他の湿原には全くない。その生成が他と違った過程をたどったもので、きわめて特異な湿原・泥炭地であり、他に類例をみない。

霧多布付近は上述の泥炭地のほか、特色ある地形景観と特異な地学現象がみられる。景観としては、

海食崖と平滑な海岸，大小の島々と窓岩などの岩礁で変化を与え，沈降の塩湖，散布両沼と泥炭地で特色ある風情をつくる。

地学現象としてはトンボロ（陸繋砂州）とカスプ リップル（尖角状さざ波）地形がある。トンボロは函館と並ぶもので，美しい孤状の姿態を示し，鋸（のこぎり）歯状のカスプ リップルも見事で，このように一望できる海岸はきわめて少ない。トンボロで結ばれる霧多布（島）では，地層・岩石の硬軟に応じた菱形の断崖と平滑の輪郭をつくるが，ここには台地より一層低い海岸段丘がある。

2. 環境保全について

本自然公園地域は長大にわたる海岸地帯であるが，道路整備が十分とはいえない。海岸近くの道道から，海岸へは急斜面であるが，ほとんど道路がない。また道標，案内などの標札がきわめて少ない。このためか霧多布周辺を除いて，来訪者は比較的少ない。従って，自然環境の面からみると，破壊はほとんど認められない。

環境保全の面では望ましい状態であるが，公園の利用という面では立ち遅れが目立つ。道路，施設，案内などの整備を進める必要があると思われる。他方，将来を展望した環境保全についても，十分な配慮が望まれる。

(1) 霧多布泥炭地について

自然環境保全上，最も留意すべきは霧多布泥炭地である。泥炭地・湿原は水の微妙なバランスの上になり立つ自然で，来訪者の増加や開発行為で容易に損傷をうける。特に本泥炭地はその生因上，北側ほど乾燥しやすい状態にあるのでその配慮が望まれる。また，ここは一望できるほどの小さい湿原なので，たやすく近づくことができるので，破壊をうける機会が多い。

他方，ここには特定の観察する場がないため，木道などの施設を設ける必要がある。来訪者や小中学生の見学の便をはかるとともに，コース以外の不特定の湿原内に分散して入ることを防ぎ，湿原の管理を特定地に集中させる点でも，保全上効果があろう。

また，この泥炭地については，案内板や説明板がまだ不備であるので，整備の必要がある。

(2) スランブ構造について

厚岸町市街地にあるスランブ構造については，その知識の啓発が必要である。スランブ構造の露頭がある崖をそのままの状態に保存することは，落石，崩壊の危険があるので困難である。危険防止の金網をおおうことは現状ではやむを得ない。

将来を展望した場合，貴重な地質現象であるので，保存対策の検討が望まれる。

(3) 公園地域の整備について

自然公園地域の交通は，海岸沿いの道道が主要路であるが，道道から分岐して，海岸の景観を望める道路は少なく，またあっても案内が不備のため，十分利用ができていないのが実状と思われる。

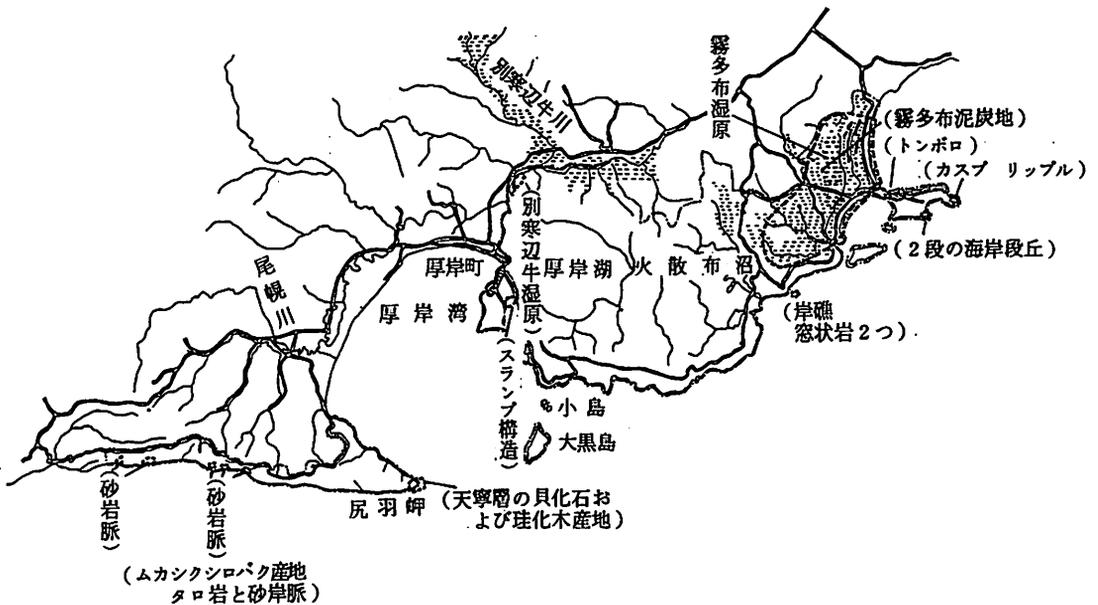
地元では「北太平洋シーサイドライン」として観光化を進めているが，その全体地図，コース，名所を示す案内板，標識はほとんど目につかない。広い地域にわたるため，展望台などの要所に，厚岸，浜中，釧路の3町で共通した総合的な案内，標識が必要であろう。

公園地域の展望台は十町瀬，アイカップ岬，幌万別，あやめが原（チンペノ鼻），琵琶瀬，霧多布などにあるが，尻羽岬にはない。十町瀬と幌万別の知名度は低く，道道の道路標識もない。他の4つ

の展望台は整備されているが、アイカップ岬では、すぐ前の断崖が崩れやすい状態にあるので注意を要する。あやめが原（チンペノ鼻）では、双見岩や海岸を望むための配慮一案内コース、地点などが欲しい。

(4) 尻羽岬について

尻羽岬は、先に述べたように、貝化石、珪化木が産出し、これらの観察には好適地であり、厚岸湾や島々を望む景勝地である。ここにはまた自然休養林があり、岬は草原の広場になっている。小・中学生などを対象にした「自然教室」的な学習とレクリエーションの場とする整備が望ましい。海岸へ下りるルートには、湾側の東と外洋の帆かけ岩がある南の2か所があるが、南側は急斜した露岩の斜面なので、その整備が必要である。また、南側台地では海食崖が台地面まで迫って、危険なところもあるので注意を要する。



特に貴重な区域（地形・地質）

第2章 植 物

辻井 達 一

1. 注目すべき植物群落

この地方の植物群落として重要と考えられるものに次のようなものがある。

(1) 霧多布湿原

霧多布湿原は北海道東部では釧路湿原、風逆湿原とならんで代表的な湿原とされる。成立条件からは釧路湿原とおなじく海岸に沿った砂丘列の発達によつた閉塞湖を母体とするが、釧路湿原が多くの河川の貫流によつて灌がいされるのにたいして、霧多布湿原の場合はそのほぼ南端近くを流れる琵琶瀬川に北から二本の水流がこれに注ぐのみである。

湿原を貫流する河川が多いか、大きいかすれば、洪水量も、また河川運積物の量も多くなることが予想される。湿原への無機質土壌の供給は、植生としてはしばしばヨシ群落の発達をうながし、土壌としてはいわゆる低位泥炭の特徴的な形成をみることが多い。

これに対して、たとえば河川が湿原の周囲を環流するようなかたちをとるなど、湿原が河川とその水流の影響をより少なく受ける場合には、相対的に安定した条件での植生と泥炭との発達があり、ここではしばしば高位泥炭の形成が顕著なことが多い。釧路湿原に対するサロベツ湿原などはそのよい例であろう。

霧多布湿原も後者に属する。したがつてその中心部には高層湿原を核とした泥炭地植生の同心円状の配列がみられ、スケールはサロベツ原野などにゆずるが、景観的には見事なものがある。

もうひとつの特徴は、海岸線に並行してやや弓なりに走る数列の砂丘列の存在で、その列間にさらに湿原を生じていることである。この点でサロベツとはまたちがった景観上の趣きも生じているといつてもよい。

景観的には、この湿原が南にも北にも丘陵を控えていて、展望の点で恵まれていることも述べなければならぬ。その展望はまた、先に述べた弓なりの海岸地形によつてさらに変化を与えられている。

湿原植生としては、ミズゴケをベースとするツルコケモモ、ホロムイソウ、ミカヅキグサ、イヌノハナヒゲなどの群落、イソツツジ、ゼンテイカ、ワタスゲ、タチギボウシ、ヤチヤナギなどの中間湿原の群落、そして、川に近いヨシを主とする群落があるが、この湿原でもっとも代表的な存在は、ゼンテイカとワタスゲを主とする群落の景観であろう。面積としても大きく、位置的にも景観の主部を占める。中央部の氷切沼を含めた一帯はそのひとつの中心である。

(2) 厚岸湖とその塩湿地

厚岸湖は北海道東部の潟湖の代表的なものの一つで、厚岸湾に開口し、別寒辺牛川によつて淡水の供給をうけるかん水湖である。

外海への開口部の狭いこともあつて、湖内での無機質ならびに栄養塩類の堆積・滞留が大きく、それらに支えられて牡蛎、田螺、海藻類などの生産性がきわめて高い。湖畔には泥質の海浜があり、いわゆる塩湿地植物群落の成立がみられる。湖の水深は浅く、湖内には数個の牡蛎礁があつて、かつてはその上にも塩湿地植物群落が存在し、その一部は天然記念物に指定されている。しかし、1968年の十勝沖地震後、かなり急激な地盤の沈下を生じた結果、牡蛎島の群落は事実上、消滅するにいたつた。

塩湿地の群落としては厚岸の名をもつアッケシソウ群落がもっとも代表的なものであるが、牡蛎島だけでなく湖岸のそれも地盤沈下にもなつて大幅に退行するに至つた。

塩湿地群落としては、アッケシソウ、ウミミドリ、シオツメクサ、シバナ、ハマシオンなどがあり、これらは湖の各所にみられるが、なかでもその最東端部にもっともまとまつたものがある。

アッケシソウはこの湖の名に由来するものであり、できるだけその群落の再生を図るべきで、たとえば牡蛎島のひとつ弁天島などにしかるべき土砂の流亡をふせぐ手段を講ずるなどして、新しい標本

的群落の成立をたすけるなども考えられるのではないか。

(3) 別寒辺牛湿原

厚岸湖に流入する別寒辺牛川は、その流域に別寒辺牛湿原を成立させている。この湿原は太田村のバイロット・フォレストをその上流部とするもので、ヨシを主とする低層湿原の群落が多いが、なお不明なところが少なくない。厚岸湖のかん養源としても、またタンチョウの生息地としても重要なところと考えられ、また、比較的人為の加わっていない湿原として、今後の調査に期待されるところが大きい。

(4) 海岸段丘の植生

釧路以東の海岸線には高さ50mないし100mに達する海岸段丘の発達がみられる。この海岸段丘は北海道の海岸でもかなり特徴的な存在であって、景観的にも優れたものがあり、この自然公園の一つの特徴となっている。段丘はその斜面にきりたった断崖を、その段丘面にしばしば海岸草原を成立させている。

海岸草原は北海道の特徴的な植生のひとつで、たとえば網走・小清水海岸などもその典型であるが、釧路から根室にかけての段丘、ことに厚岸道立自然公園に属する昆布森海岸、厚岸・鯨浜、チンベ、リルランにかけてのものは、その地形的特性をふくめてきわめて特異な存在である。すなわち、それは前者を砂丘型とすれば段丘型に分類されるもので、日本の海岸群落のなかでも特筆するに足るものと言えよう。

群落組成の項で述べたように、段丘面と段丘崖にはそれぞれに特徴的な植生がみられるが、ここではとくに段丘面の草原群落と、それにつづく海岸林とが注目される。

草原群落は夏季に多い海霧を受けてやや湿性のものが多い。日本でもっとも冷涼な気候条件によって支えられるもので亜高山帯のそれに近い。組成要素にはヒオウギアヤメ、トウゲブキ、ヤマブキ、シヨウマ、エゾトリカブト、エゾフウロ、アキカラマツ、エゾキンボウゲ、チシマカニツリ、マイズルソウ、ツリガネニンジン、ナガボノシロワレモコウ、センテイカ、バイケイソウなどに、センダイハギ、ハマナス、ムジャリンドウ、ウンラン、ハマエンドウ、エゾノカワラマツバナなどの海岸要素、そしてガンコウラン、コケモモ、ユキワリコザクラ、キクバクワガタ、シコタンタンポポなどの寒地・高山要素が加わる。

段丘面には海岸草原につづいて主としてダケカンバとトドマツからなる森林群落がある。この林はその前生林としてミヤマハンノキの低い群落をそなえることが多い。そして両者ともに強い風衝を受けてしばしば甚だしい風衝型を呈している。日本でもっともきわだった風衝型のみられるところといえよう。

海岸草原もそれにつづく海岸林も、古くから放牧に利用されてきたために、いわゆる過放牧状態を呈するところが少なくない。それはまた、家畜の不食草を残す結果を生ずるため、景観的には美しいお花畑の成立に寄与している。すなわち、この海岸草原の維持には放牧が大きな要因としてあづかっているわけで、自然公園の景観維持・管理計画にあたっては十分に配慮すべき要件と考えられる。

海岸林が強い風衝を受けていると述べたが、このことは前線の樹木が一種の犠牲林としての効果を果たしているとみるべきで、ミヤマハンノキの前生林はもちろん、林縁を構成するダケカンバの保全はきわめて重要な要件である。

樹種としてもミヤマハンノキ、ダケカンバはきわめて低標高での分布であり、これも注目される存在である。

この地域の海岸林はまた、防霧林という特殊な効果と名称とを持つものである。夏季の濃い海霧は日射をさえぎり、気温の低下をもたらすなど生物の生育、生活に影響が少なくないが、森林は海霧を運ぶ風をさえぎり、内陸への侵入をおさえる効果を果たす。この防霧林は北海道でもここだけのもので、世界でも唯一の存在として注目され、評価されている。その機能と効果については、1950～53年に調査が行われた。

(5) トドマツ林

トドマツは海岸林においてダケカンバ林に混生し、内陸に入るにつれてしばしばその割合を増す。しかし自然林としては純林は少ない。厚岸から東にむかってチンベの鼻に近づくあたりに比較的まとまったトドマツの人工林がある。成長もよく、森林景観としても優れている。

純林ではないが、さきに述べたダケカンバとの混交林はこの地域に広く分布し、景観の重要な部分を占め、かつ、美しいものとして注目される存在である。

(6) アカエゾマツ林

アカエゾマツは北海道の常緑針葉樹の代表的なもののひとつでかなり広く分布するが、比較的東北北海道に多い。その分布と生育する立地については、砂丘系と湿原系とが区分され、東北北海道では風蓮湖の春国岱に砂丘系、温根沼や落石岬に湿原系のものの例がある。

厚岸道立自然公園の区域内では茶内の浅い沢筋に沿ってと、周辺では尾幌などに湿原系のものがあるが、いずれも規模は小さい。

(7) シロエゾマツ林

シロエゾマツ (*Picea jezoensis* form. *takedai*) は、エゾマツの樹肌の灰白色のもので、一見、トドマツにも似ている。この地域内では、茶内の道有林にややまとまって生育するのがみられる。特殊な少数種として十分な保存のつづけられることと、さらに積極的な育成の行われることが望ましい。この樹を使ってのこの自然公園の修景も効果的であろう。

(8) イチイ(オンコ)林

イチイはまとまった樹林をつくることは少ないが、北海道東部では時としてややまとまった林のみられることがある。この自然公園では茶内の道有林にその好例がある。ここも純林ではないが、樹高10mにおよぶものがかなりの割合でトドマツ、イタヤカエデ、ミズナラ、シウリザクラ、ナナカマドなどに混生する。

ここに述べたアカエゾマツ林、シロエゾマツ林ならびにイチイ林は、現在すでに保護林に指定されており、特徴の解説も掲示されているが、一般には公開のかたちはとっていない。森林の管理上、林道の無制限な通行や林内への立ち入りは問題があるが、しかるべき場所を選んでの新しい林分の造成などによる、新しい景観の付加も考えられるのではないか。

2. 注目すべき植物

注目すべき植物としては以下のようなものがあげられる。これらの植物は、海岸の段崖あるいは霧多布湿原に分布する種が多く、樺太あるいは千島と密接に関連した分布を示している。それぞれ、比較的

分布が限られていること、数の少ないことなどで保全の対象と考えられる。

1) ユキワリコザクラ *Primula farinosa* L. subsp. *fauriei* (Franch.) Murata (サクラソウ科)
ユキワリコザクラは厚岸・チンベから鯨浜にかけての海岸段丘の草原に点的に分布する。これも他の地域では高山に生ずるもので、低標高の所生の事例としては貴重なものといえよう。

2) エゾウスユキソウ *Leontopodium discolor* Beauv. (キク科)
エゾウスユキソウは多くが高山に生じ、低標高では礼文島にみるほか、昆布森海岸の一部の断崖に少数が生ずるにすぎない。

3) トモンリソウ *Cochlearia officinalis* L. subsp. *oblongifolia* (DC.) Hulten (アブラナ科)

トモンリソウの和名は、根室市友知の地名にちなんだもので、大黒島の断崖で確認されている。

4) シコタンタンポポ *Taraxacum shikotanense* Kitam. (キク科)

シコタンタンポポは、海蝕崖および海岸草原の構成種として、比較的広くみとめられる。

5) ハイネズ *Juniperus rigida* Sieb. et Zucc. subsp. *conferta* (Parlatore) Kitamura
およびミヤマビャクシン *J. chinensis* L. var. *sargentii* Henry (ヒノキ科)

ハイネズおよびミヤマビャクシンは、東北北海道では海岸の断崖に見られるものだが、知床半島などではしばしば盗採され、本地域でもその危険性は大きい。

6) カラクサキンボウゲ *Ranunculus gmelinii* DC. (キンボウゲ科)

カラクサキンボウゲは、本邦では霧多布湿原でのみ分布が確認されており、湿原の一部に稀に見られる。道路側溝に生じた例もあるが、その後確認されていない。今回の調査でも発見するにいたらなかった。小型で、めだたないから各種の工事などで気付かないままに生育地が破壊される可能性も少なくないと思われる。出来るだけ早く、花時を選んで生育地と生育状態の確認に努め、生育条件次第ではたとえば湿原の適当な場所を選んで浅いプールを設けるなど、その保護を図ることも必要と考えられる。

7) イトキンボウゲ *Ranunculus reptans* L. (キンボウゲ科)

イトキンボウゲは、本州の野反池、日光および尾瀬、北海道では空沼岳、野付崎、羅臼湖に隔離分布しており、合田が霧多布湿原で分布を確認している。イトキンボウゲは小型のキンボウゲで、本地域でもその所生はごく限られている。

8) ハナタネツケバナ *Cardamine pratensis* L. (アブラナ科)

ハナタネツケバナは、樺太との結びつきの強い種で、霧多布湿原と釧路湿原、海沸湖周辺で分布が確認されているのみである。

9) ススヤアザミ *Saussurea duiensis* Fr. Schm. (キク科)

ススヤアザミは、1973年に合田が霧多布湿原で採集し、本邦ではじめて確認された。本種は樺太と結びつきの強い種で、他の地域では見つかっていない。

10) クシロハナシノブ *Polemonium caeruleum* L. subsp. *laxiflorum* (Regel) Ko. Ito form. *paludosum* Ko. Ito (ハナシノブ科)

クシロハナシノブはカラフトハナシノブの1品種で全体が繊細になり、小葉の幅は狭く、通例1cm以下である。カラフトハナシノブが適潤地に生育するのに対して、道東の泥炭地や湿原に生育しており、霧多布湿原に広く分布している。

11) ナガバノモウセンゴケ *Drosera anglica* Hudson (モウセンゴケ科)

ナガバノモウセンゴケは、北海道ではサロベツ原野と大雪で分布が確認されている。霧多布湿原での報告はあるが、再確認の必要がある。

12) アツモリソウ *Cypripedium macranthum* Sw. およびホテイアツモリソウ *C. macranthum* Sw. var. *hotoi-atsumorianum* Sadovsky (ラン科)

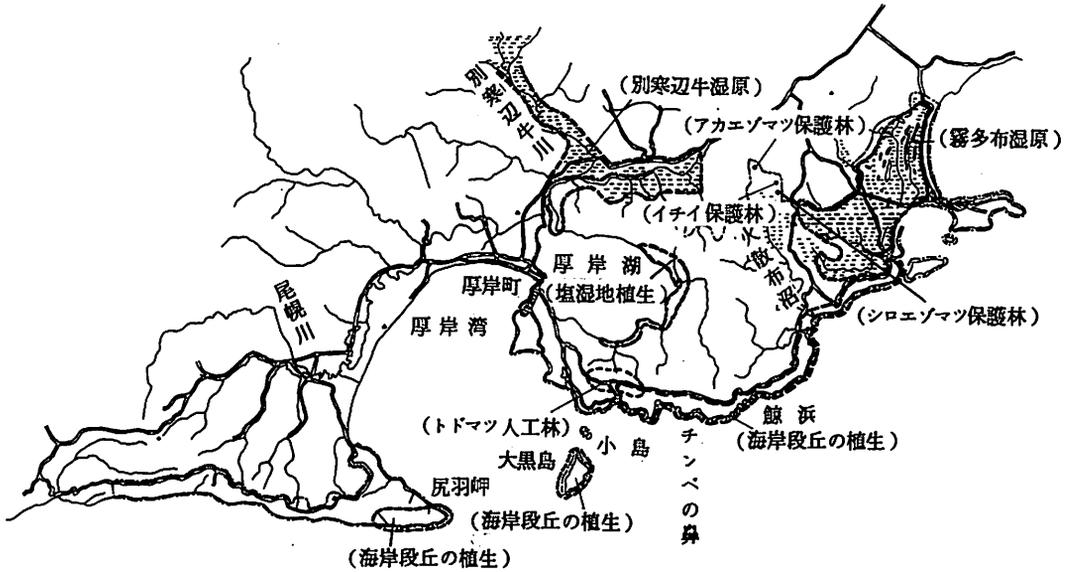
アツモリソウおよびホテイアツモリソウは、ともに海岸草原に見られる。美しい花が珍重されるために、栽培用に採集され、絶滅状態にあると思われる。

13) ネムロシオガマ *Pedicularia vanusta* Schangin var. *schmidtii* T. Ito (ゴマノハグサ科)

ネムロシオガマの和名は、発見地の根室にちなんだもので、海岸草原に見られる。

14) アッケシソウ *Salicornia europaea* Linn. (アカザ科)

アッケシソウは厚岸で発見されたことからの命名によるものだが、その分布は北海道沿岸各地にわたっている。生育立地として一般に泥質の、波浪の強く当たらないところを選ぶから、必然的に潟湖などに多い。したがって北海道では厚岸湖、風蓮湖、尾岱沼、寿沸湖、藻琴沼、能取湖、サロマ湖など、東北海道の海岸にある湖沼に多い。なかでも現在では能取湖の群落がもっともよく発達しており、厚岸はその地位をゆずった感がある。厚岸の場合、十勝沖地震(1968年)以来の地盤沈下の影響が大きいと見られる。



特に貴重な区域(植 物)

第3章 動物

第1節 哺乳類

近藤 憲久

1. 全般的評価

調査結果に見られるように、同自然公園内は、比較的良く自然が残り、哺乳類相も豊かで、かつ特徴的である。

小哺乳類のうち、ネズミ科およびリス科の動物については、道東で生息する在来種の全てが確認でき、それぞれ、特徴ある分布をしている。また、トガリネズミ科は4種類が捕獲され、この中で過去の捕獲例が極めて少ないトウキョウトガリネズミが捕獲できたことは学術上価値がある。

陸棲中型哺乳類では、イタチ科の動物に特徴が見られた。在来種については、ニホンイイズナ1種が確認できたただけであったが、このことは、イタチ科の減少ということではなく、過去の在来種の生態的地位(niche)を、ホンドリタチおよびミンクが占めたことによる。特に、この中で、ミンクは、湿原や河川を中心に害獣としての評価を受け、生息数も多い。

大型哺乳類では、一例であるが、エゾヒグマの繁殖情報が得られた。根釧原野の平担地では、開拓とともに絶滅した地域が増えている中で、海岸に面した、この地域で個体群が維持されていることは価値がある。

湿原地域は、哺乳類相が貧弱であった。このことについては、道内の類似した環境では同様のことであるが、反面、種の個体数は多く、一生態系として重要である。この地域では、エゾヤチネズミが高密度で生息しているが、本種は、食肉類および猛禽類の餌として重要な地位にあって、ここでは、冬期飛来するコミミズク(*Asio flammeus*)の餌として価値がある。

以上、陸棲哺乳類について述べたが、同公園域の大部分は海岸域で占められ、海獣類の生息が見られる。この地域で繁殖しているのはゼニガタアザラシ一種であるが、本種の昭和58年の全道の繁殖における生息数270頭(当年獣39頭)のうち、生息圏を同じくすると思われるゴメ岩も含めて、135頭(当年獣27頭)が生息し、非常に重要な地域といえる。特に、繁殖の南限が、エリモ岬であることを考えると、価値のある海岸域と言える。

2. 貴重な区域

中・大型哺乳類の保護には、まとまった面積を必要とするが、この点、釧路町にかかる区域は、広がりにかけており、公園域の拡大が望まれる。また、厚岸湖から火散布沼にかけての一带は、エゾヒグマも繁殖していて、かつ、同公園内で確認された全ての陸棲哺乳類がこの地域で確認されていることより、貴重な区域として保護されるべきと考えられる。

また、霧多布湿原は、哺乳類相は豊かではないが、同様の生態系を代表する哺乳類相であり、そこに依存している他の動物も考えられることから、貴重と言える。

海岸域は、ゼニガタアザランの繁殖地として重要な所であるが、いくつかある繁殖地のうち、大黒島および帆掛岩が貴重な繁殖場としてあげられるだろう。

3. 保全上の所見

陸棲哺乳類については、植生の違いにより生息種に違いが見られることから、哺乳類相の保全にあたっては、植生の変化がないように留意すべきであるが、その程度も種によって異なる。

小哺乳類については、森林施業の方法により、生息種や生息数に変化があるものと考えられる。食虫類については、腐植層の発達状態により動物相も異なり、多様性を保つ上では、今回数も種類も多かった腐植層の発達した森林が多くあるのが望ましい。なお、ここでは、トウキョウトガリネズミが捕獲されているが、本種は生態もよくわからず、さしあたり捕獲地を保存する以外手段はない。ネズミ類では、比較的研究も進んでいるため、森林がないと生息しない種とか、林床が疎であると多くなる種とか、種の生態に合わせて保全を考えねばならないだろう。しかし、いずれにしても、一度に大規模な施業をほどこさない限り、全体的な個体群に影響はないと見られる。すなわち、施業を、小規模な択伐で年次により場所を移動させていくような方法を取れば、小規模地で小哺乳類相の変化はあっても、全体的には、さほど変化は見られないだろう。

リスの仲間については、種子食であるためこれらの餌となるような樹種の保存が望まれるが、特に、オニグルミとかミズナラなどの樹木が残され、針広混交林が保たれる限り、問題はないと思われる。また、モモンガについては、食物以外に巣穴の問題があるが、これについては、キツツキ等による供給を考えると現状で十分であろう。

イタチ科の仲間では、移入種であるミンクの個体数が増え、他の生態系へ悪影響を及ぼす問題がある。本種は元来カワウソ (*Lutra lutra*) の占めていた生態的地位を主として占めているわけであるが、タンチョウの繁殖等貴重種への影響が懸念される。

中哺乳類の中で、エゾキウサギの数が多く確認されたが、本種の天敵であるキタキツネは森林内では周辺域に比べて少ないため、種の多様性を保つためには、小哺乳類のところで述べたような森林施業が望ましい。なお、本種は害獣と言われているが、これは、天然更新を心がけることで問題は小さくなるだろう。

大型獣のうち、エゾヒグマは、平坦地での生息数が減少していることもあり、是非保存したい種であるが、こちらは人害との兼ね合いがあり、現レベルを維持するのが妥当と思われる。なお、現レベルでは被害が出ていないようなので、積極的に駆除を進めるべきでないと思われる。

湿原の哺乳類相の維持については、植生の維持により保たれると考えられる。たとえば、明きょを掘ることで乾燥化が進み植生の変化が起ると、乾燥地を好む種が多くなる。そのため、植生に大きな変化を及ぼすような行為はさけるべきと考えられる。

海獣では、ゼニガタアザラン以外は回遊種であり、あまり問題はないと思われる。

ゼニガタアザランについては、同公園内に大きな繁殖場があるが、本種は、道東沿岸が繁殖の南限であり、生息数も300頭弱に激減していることを考えると保護の必要があると見られる。

現在、本種に対する法的規制はないが、昭和49年に、文化財保護審議会から文化庁へ、天然記念物指定に向けての答申が出されており、指定に向けて積極的な対応が望まれる。

また、大黒島、ゴメ岩、帆掛岩などの繁殖地を法的に保護していくことも、本種の保護上重要である。天然記念物の地域指定、自然公園の特別保護地区、自然環境保全地域の野生動物植物保護地区など、諸制度による積極的な保護措置が必要と考えられる。



特に貴重な区域（哺乳類）

第2節 鳥 類

橋 本 正 雄

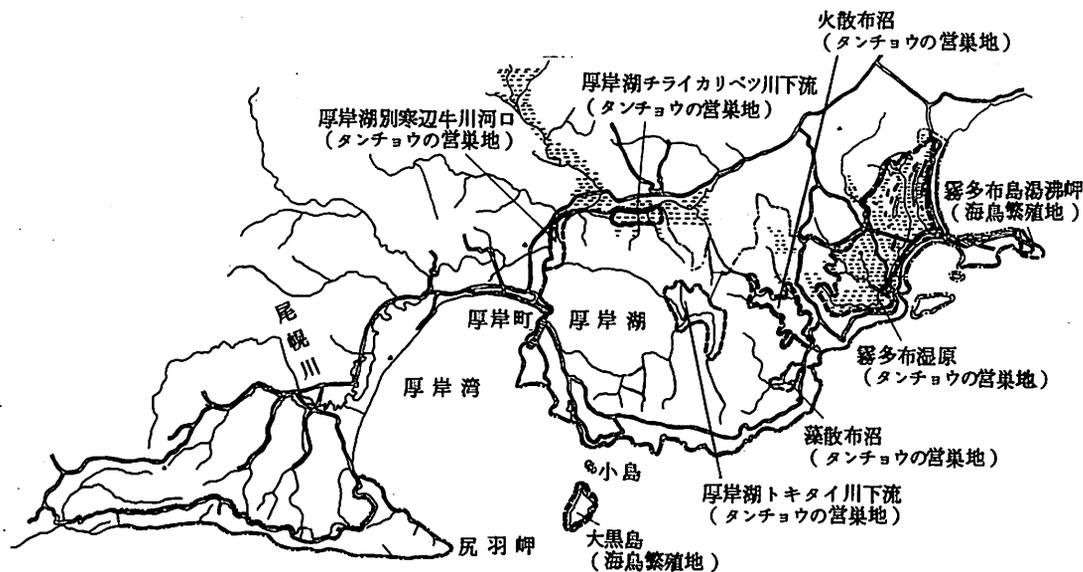
厚岸道立自然公園の自然環境は、道有林に代表される保存の良い森林、生産性の高い湖沼・河川、海食崖の発達する海岸線と多様性に富んでおり、陸鳥と海鳥の双方に良好な生息地を提供している。

厚岸湖・藻散布沼・火散布沼はオオハクチョウをはじめとしたガンカモ類の重要な渡来地であり、汽水湖であることから厳寒期にも全面的に結氷することがなく、多数の水鳥の越冬を可能にしている。また、湖岸に発達した湿地はいずれもタンチョウが営巣しており、周辺の丘陵地は林地の保全が良く森林棲鳥類の出現も多い。霧多布湿原はタンチョウの重要な生息地であり、営巣地も4～5箇所を数える。湿原内の琵琶瀬川河口はシギ・チドリ類の観察できる釧路地方では数少ない場所である。大黒島はコンジロウミツバメの大規模繁殖地としては最も南に位置しており、オオセグロカモメについても日本有数の営巣地である。霧多布島は、繁殖するエトピリカを比較的容易に観察できる本邦唯一といってもよいところである。

このように本自然公園は鳥類の生息地として良好な自然環境を保持しているが、いくつか保全上での問題点がある。林地についてみると伐採による森林の低質化が目立ち始めている。湖沼・河川において

は保全上緊急を要するものは見当たらないが、ただ藻散布沼で4年程前に番屋が岸边に建てられたところヒシクイが飛来しなくなったということがある、湖沼周辺での開発行為には十分留意すべきである。海鳥繁殖地については、幸いにも大黒島は無人島であり海鳥の楽園となっているが、ただ、近年調査研究以外にも島へ立ち入る人が多くなっておりその影響が心配される。

やはり、最大の問題は霧多布湿原の保全である。湿原内での宅地の造成・分譲をはじめ皆伐状態に近い周辺丘陵地での森林の減少など諸々の開発行為による湿原の乾燥化・非湿原化が進行しており、タンチョウの生息地保護の面からも周辺環境復元を含めた保全策を早急にとる必要があると考えられる。



特に貴重な区域(鳥類)

第3節 昆虫類

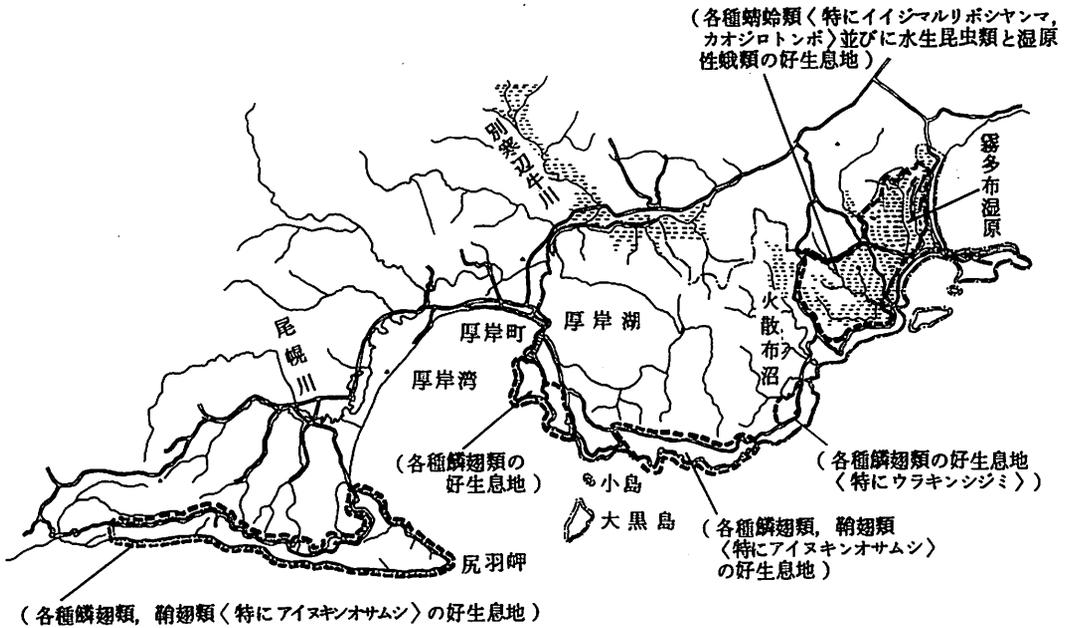
飯島 一雄

霧多布湿原から新たにイイジマルリボシヤンマ、カオジロトンボなどが発見され、この湿原の重要性が再確認された。

生息地は低位池沼で他からの土砂やヘドロの流入がないので、今後も比較的安定した状態が続くものと考えられる。

海岸段丘上の樹林帯は林相が豊かで、多くの昆虫類を育てている。昆虫の多い所には野鳥が集まり、野鳥は昆虫の異常発生を抑え森林を守る。豊かな昆虫相を保全していくためには、森林が皆伐などによる大きな環境変化をうけないことが肝要である。自然公園内においては、国公民有林を含めた広域的か

つ長期的な視点から環境に大きな変化を与えないような方法で森林の施業が行われることが必要と考えられる。



特に貴重な区域（昆虫類）

第4章 自然公園への提言

辻井達一

厚岸道立自然公園は釧路から東にかけての太平洋に面する海岸段丘とそれに介在するいくつかの湿原を中心とし、かつ特徴とする。その景観的特性は、一つには海岸段丘とその上に成立する海岸林および海岸草原にあり、これも特徴的な海霧の存在とともにきわめて特異な風物となっている。もう一つは湿原であって、これも北海道東部によく発達をみせるものだが、この公園地内では霧多布湿原にその代表的なものを見る。それは釧路湿原と同じく砂丘列の発達にもなる閉塞型の湿原であるが、砂丘列が多いことから列間に湿原がはさみこまれること、また、大きな河川が無いことから運積物が少ないことから、釧路湿原とやや異なったものがある。

湿原としては公園地内だけでなく、これと隣接するもので優れたものが少なくない。たとえば厚岸湖に注ぐ別寒辺牛川の流域に発達する別寒辺牛湿原などはその代表的なものである。これは北海道でも数少ない極めて原始性の高い湿原の一つであって、その調査と保全、出来る限り早期の自然公園への繰り入れが望まれるところである。

現在、釧路湿原の自然公園化への問題が検討されつつあるが、その地形的、景観的つながりから見て、これは厚岸道立自然公園と結ぶのがもっともよいのではないかと考える。湿原を多く含む点で管理・運営上にも好都合であろう。たとえばまた、タンチョウの営巣、繁殖、冬季の生息についても連携した対策が可能になるはずである。

いわゆるラムサール条約による国際湿原としても、公園地内に複数の湿原が含まれていることは、その活用のために有利であろう。

海岸段丘の特徴について先に述べたが、段丘崖の海鳥類の生息地としての重要性も極めて大きい。大黒島、嶮暮婦島などを含めて、それらの保全にはより一層の配慮が必要と考えられる。

また、従来、自然公園としては考慮されなかったゴマフアザラシなど海獣類の生息地としての保全と、適切な観察の機会を何らかの形で考えることも、これからの自然公園として必要ではないか。

厚岸に塩湿地群落をできるだけ牡蛎島に復元すること、同じく厚岸に古くからの漁港として捕鯨を含めた海事・漁業博物館を設けること、霧多布湿原の一部、たとえば氷切沼などに観察用の木道を設けるなどが望ましい。

海岸段丘の草原については、適切な放牧など生物学的バランスの保持などの対策が続けられることが必要である。

この自然公園に限らないが、総じて公園内の標識、解説板などはまだまだ不備であり、かつデザイン・ポリシーに欠けている。その他の施設、設備についてもこれからは全体を通じて環境計画的な総合化が必要であろう。

きわめて優れた特徴を持つ自然公園であるから、これを更に効果的に演出することと、そのための戦略を考えること、そしてその表現のための戦術を編み出すことが重要である。

北海道委託調査

道立自然公園総合調査
(厚岸道立自然公園)報告書

昭和61年3月20日

受託者 社団法人北海道自然保護協会
札幌市中央区北1条西7丁目広井ビル

印刷 ㈱広報社印刷

(無断複製、転載を禁ず)